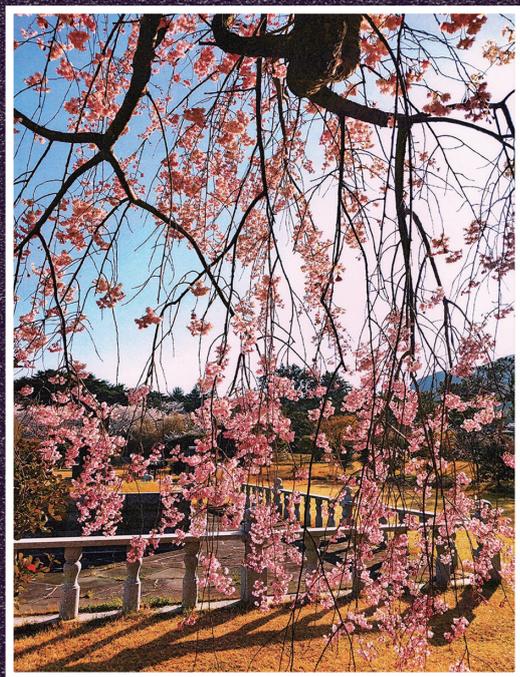


河正雄との交友録

編著 河 正雄



善  
盡  
美  
盡

私塾 清里 銀河塾

2023年

— 河正雄との交友録 —

# 善 盡 美 盡

編著 河 正 雄

私塾 清里 銀河塾

2023年

# ■ 目次

はじめに (河正雄)	
幸福とは何なのか	4
I 枝垂桜	
河正雄氏関連エッセイ (西木正明)	9
回想 (鈴木重憲)	14
「思いは言葉に、言葉は行動に」 (安部哲男)	16
「憧憬の像」と「秋桜」 (大信田齊)	20
書簡 (佐藤心一)	21
河正雄氏を語る (泉谷好子)	23
わらび座と河正雄 (山川龍巳)	25
縁一わが心の韓国・朝鮮 (茶谷十六)	26
姫観音像と憧憬の像 (熊谷里織、鬼川幸枝)	39
河正雄さんありがとう! (富樫康雄)	43
7回目の干支年に寄せて (工藤一紘)	45
II 野菊	
輪廻 (小澤龍一)	50
浅川巧と河正雄と「露堂々」 (澤谷滋子)	53
河正雄さんのこと (植松永雄)	55
禱りへの道 (千葉成夫)	56
出逢いから学ぶもの (上田雄三)	57
河正雄コレクション (中山二郎)	59
河正雄・人間愛の奉仕者 (尹 基)	62
7回目の干支年を迎えるに当たって (永野慎一郎)	64
河正雄さんについて思うこと (福田政夫)	66
巡り逢い (倉橋廣昌)	68
私と河正雄さんとの「在日」 (李洋秀)	70
出会いとあこがれ (菊地正志)	74
ハングル「四面石塔」と青木繁「海の幸」 (池田恵美子)	76
河正雄先生ご夫妻との不思議なご縁 (李修京)	77

### III 無窮花

推薦の言葉「根の深い木」(金宗圭)	81
光州市立美術館「平和の柿の木」を見て(秋圭昊)	84
河正雄先生と視覚障害者たちとの縁(金甲柱)	85
お金にならないことを探してする男(尹 鐸)	97
「お金がどういうものかご存じですか?」(尹 鶴)	99
愛を実践に移した巨人(張錫源)	100
そう言うあなた方は?(池炯源)	105
コムドリ奉仕会功労牌受賞の知らせを聞いて(鄭鍾培)	106
河正雄とメセナリーダーシップ(金忠烈)	107
感動の連続、河正雄路ツアー(金福順)	109
2人の縁が羨ましい(安敏錫)	110
巨匠李禹煥と天使河正雄の佳縁!(池英勲)	111
河正雄コレクションの性格と価値(金姫娘)	114
「故郷」作品集発行によせて(朴 哲)	115
渴くことのない感動の泉(金福基)	116

### IV 冬柏花

Prelude:因縁資本(許乘準)	121
人間の限界と時代を超越した愛を実践した人(程巳柱)	125
世界は一輪の花(朴星勇)	128
世界で最も尊敬する二人の父(李根焄)	130
河正雄という作品(チェ・ミンイム)	134
人が作品である(丁熙男)	137
河正雄先生の寄贈哲学と教訓(任喜星)	140
種を植える人(金姫娘)	142
霊岩郡立河正雄美術館・念願と祈りの種が芽生えたところ (ド・ヨンヒ)	145
東江河正雄・韓国の近代歴史、その暗い記憶の破片を抱く (パク・ギョンチョル、イ・ギョングン)	148
愛と希望の歌(シン・ジョンムン)	150
河正雄、音楽に込めて(イ・スンギュ)	152
光州のあしながおじさん(イ・ヨンギュ)	153
河正雄「たくさんの方が私と一緒にいて、私は幸せなんです」 (イ・ヨンギュ)	156
河正雄恩師と永遠に輝く一途な物語(朴容九)	158
河正雄先生との出会いを思いながら(月 佑)	162
祖国の文化を愛するメセナ精神が長く記憶されることを願う (キム・オクジョ)	163
私のメンター、河正雄(安敏錫)	167

### おわりに(河正雄)

叙勲・紺綬褒章を賜る	170
浅川伯教・巧兄弟記念公園竣工式を祝う	172
感謝のことば	174
あとがき	177

# はじめに

## 幸福とは何なのか

河正雄

2020年、誤解によるコミュニケーションの本質を追求する画家・江上越さんのインタビューを受けた。

「私の人生は人からの妬みや嫉み、社会からの差別、蔑視、偏見、友人からの背信や詐欺、国や組織からの阻害、弾劾など心休まる暇のない道を歩いた。ありとあらゆる事柄で無理解と障害が立ち塞がり、物事が真つ直ぐに進んだ試しがなかった。

人の世は全て損得と謀で生きることと理解はしたくないので、自分は善悪両面を併せ持つ人にはならないように生きようと頑張ってきた。

文化の違い、民族の違い、習慣の違い、境

涯の違い、時代の違い、年代の違い、老若男女の違い、先輩と後輩の違い等々、この世は価値観の違いだらけの齟齬(そご)、毀誉褒貶の世界なのだ。

この違いだらけの世界の中を“自分らしく”どう生きるかである。」と処世観を実直に述べた。

東京オリピック前年の1963年に私は結婚し、現金で家庭電化製品を購入した。その電機店主から、その現金を使いたいのと月賦で買ったことにして欲しいと頼まれ、名義と印鑑を貸したことで多額の負債を背負わされる詐欺に遭った。負債を返済するために、その電機店を引き受ける羽目に陥った。

そのころ、私は朝鮮総連川口支部に勤めており、一足の草鞋は履けないので、止む無く辞めなければならなくなり、委員長室で退職の話を済ませトイレに行った。

その時、委員長室で幹部達が「河正雄は韓国のスパイだ。これからは、この事務所に入るな。」と私を罵っている声が聴こえてしまった。

背筋が凍るような恐怖を感じた私はそれ

以降、今まで朝鮮総連の事務所に近づいたことはない。

これは電機店を経営していた時のことである。朝鮮総連のお得意さんから弟の嫁を紹介してもらえないかと頼まれた事がある。当人たちは意気投合して交際を始めたが後日、女性から断りが入り縁談は纏まらなかった。

ある朝、店のシャッターを開けると糞尿が店先に撒かれていた。弟が私の仲介が良くなかったために破談になったのだと、腹いせにやったようだとお得意さんから謝罪があった。

そして弟は間もなく肝硬変で亡くなったと知らされ、可哀そうだったという想いが今も残っている。

1980年に韓国民団川口支部に誘われて入団し、副団長を引き受けた。そして埼玉セマウル美術会を主催し、民団で絵の指導をした。

民団での文化事業として、活動が全国的に知られることになったが、幹部や一部の団員に「民団を利用して名を売り、絵を買わせることが目的である」と批判され、執拗に

中傷を浴びせられた。

その後、役員改選となり監察委員長に立候補、民団規約に従って手続きを済ませ、支部総会の投票日を迎えた。

総会で立候補の所信を述べる段階になったが、その時に議長が私の演説を止めた。総会を一時中断として幹部達が協議のためと言って一階に下りて行った。一階からは揉めているような大声が聴こえて来た。

一時間以上経って再開されると、河正雄の立候補は認めないという採択が成されて立候補を取り消された。何故、このような無法が罷り通るのか、その時は全く理解出来ず、私の声は圧殺されてしまった。

後に判明したことだが、私が監察委員長になると、それまで行われて来た馴れ合いの民団運営や幹部人事、民団活動の不浄を厳しく追及、改革するであろうという先入観が表向きの理由であった。

民団には規約がある。それを捻じ曲げてでも仕組んだ計略により、私を引き摺り落とし民団を私物化しようとする一部幹部達の行いであったのだ。それ以来、私は民団川口支部から距離を取り、関りを遠ざけた。

2018年9月5日以降、良識と品位、高い倫理性を保っている」と信じていた、韓国の公共放送光州KBSにて連日、私に対する数々の批判的、不名誉な放送がなされた。

「市民の血税を使って河正雄を神の様に奉っている。河正雄は光州市と強制的協約を結び、過重に榮譽を得ている。『表裏の顔を使い分ける二面二重の仮面を持つ河正雄』という内容の報道であった。

その放送後、光州や霊岩、ソウルなど国内外から連日「何事ですか」と心配する問い合わせがあった。

「抗議デモをする」「放送倫理調停委員会に告発する」「名誉棄損で訴えよ」「記者会見を開き反論せよ」、また「在日潰しではないか。潜在的な差別意識の表れではないか。」等々、慰労と激励を越えて穏やかならぬ飛躍した話まで出た。

そして彼らは異口同音、「全く恥ずかしい話だ。河さんに申し訳ない、許して欲しい」と同情と謝罪の言葉を数々かけられ、逆に戸惑った。

親の恥は子の恥、韓国の恥は在日の恥。同情され、謝罪し慰められる理由を捜してみたら心当たりはないフエイクニュースであ

った。

これまで韓国で「余りの複雑さと訳の判らなさ」に翻弄された時が幾度もあり精神を病んだ。防衛本能から確執すると泥沼の罠に嵌る。我慢を重ねると小さな不幸が起き、怒れば大きな不幸へと育ってしまう。

虫酸が走ったが辛抱の木に花が咲くまではと、忍の一字で耐えた。いつも世の中は正しさよりも判り易さを優先し、作為的な世論操作により正義が捏造される不条理なる現実を見て来た。

その間に、筋書きを描いて暗躍していた3名の名が私の耳に入ってきた。光州KBSを利用して世論を操作し、私の光州市立美術館名誉館長の肩書を失くす目的もあったようだ。

間違っても多くの人が共感すれば、それが真実になってしまう大衆心理の恐ろしさがある。光州KBSのフエイクニュースには正義の名に潜む悪意と毒気があり、権力の横暴と大衆の狂騒を作り上げる恐ろしさを感じた。

田沢湖畔に姫観音が建立されたのは1939（昭和14）年11月10日。私が生まれた

のは同年11月3日である。その姫観音像に刻まれている碑文の主旨は玉川の毒水が田沢湖に入り込んだ為、死滅した魚と湖神・辰子姫の霊を慰めるというものであった。

1981年1月2日、私は田沢湖町で行われた同期会で41歳の厄払い行事に参加し、その時から姫観音や戦前の徴用史実の調査を始めた。

その年に田沢湖町観光課は、荒れ果て放置された姫観音像の周りを整地し、姫観音の由来を解説した掲示板を掲げた。下記がその案内文である。

#### 姫観音像

いにしえ、辰子とよぶ村の乙女が、永遠にかわらぬ美しさと若さを保ちたいと大蔵山の観音に祈った。

満願の日、俄かに山は砕け水をたたえた精澄な湖が成りて女は蛇体に変じて湖の主になりたまふた。

それより村の人は、姫をあがめ、湖水の清浄を守り伝えて来た。

しかるに昭和十四年に東北地方振興のため、仙北平野の開拓と水力発電に田沢湖を活用する事になり、湖水が大き

な変化を受ける事になった。

ここにほろびゆく魚族と湖神辰子姫の霊を慰めるため浄財を集めて、姫観音を建立した。

みほとけよ、願おくは大いなる恵みを垂れたまわんことを。

昭和十四年十一月 槎湖仏教会 田沢湖町

それまで町史や観光案内書等の資料にも建立由来の記録は見当たらず、知られない秘められた観音様で、田沢湖観光の名所としても紹介されていなかった。

1985年から町の高橋福治観光課長ら有志による呼び掛けで、姫観音供養祭が執行される様になり、私は招待されて参席した。その開催動機は田沢湖に投身自殺者が余りにも多いので、その慰霊と訪れる観光客の安全を祈禱する為という理由であったので私は疑念を抱いた。

姫観音像碑文と掲示板の字句によると、姫観音建立の大事な主旨がぬけており、供養祭を観光に利用するための当て付けで、史実が隠されていると感ぜられたからだ。

姫観音が建立された歴史的背景を知る私

には、姫観音像に刻まれた文と掲示板の美文に私は納得する事が出来なかつたので補足するように要請したが、いまだに放置されたままで虚しい。

戦時下、1938年から40年にかけて田沢湖をダム湖とした国策によって行われた先達や田沢湖、生保内や夏瀬発電所の建設。それに係わる隧道掘削工事は、玉川と先達から二つの導水路や、田沢湖畔田子の木から生保内発電所への導水路が掘られ、2年間の突貫工事で進められた。

寒冷と過酷な労働、食糧不足と発破や落盤事故などで多数の犠牲者があつたという。その中には徴用法による強制労働に従事していた朝鮮人も含まれていた。

私は田沢寺に眠る朝鮮人無縁仏と、姫観音の建立趣旨書を発見(1991・6・21)した事により、姫観音は当時の工事犠牲者を慰霊するために建立された事を裏付ける史実が明らかになった。

1998年には先達発電所工事に関わる徴用者307名の名簿(1946年厚生省「朝鮮人労働者に関する調査」秋田県覚書)が公開された。

1990年、秋田県朝鮮人強制連行調査

団員である西成辰雄十文字町長が、その覚書を早や得ておりFAXでその資料を送って下さった。

その文書により、先達発電所で働いていた曹四鉉氏が、私の父母の故郷韓国全羅南道靈岩郡三湖里に生存している事を発見した。

証言を得る為に1991年3月2日〜5日、秋田県朝鮮人強制連行調査団(代表・野添憲治)と秋田テレビの伊藤玲子記者らを、後日に茶谷十六氏を引率した。その取材による放送などで史実が実証された。

そして夏瀬ダム発電所工事には徴用された李用鎮氏が横須賀市に住んでいる事も判明、1994年5月18日自宅に伺って生きた証言が得られた。その結果姫観音像に関わる建立主旨の疑問は大方解けた。私の告発が虚言であると村八分にあう苦痛を味わい精神を病んだが、事実である証明を公に出来た。

私は田沢湖町よい心の会(会長・佐藤勇一)を結成して、1990年より2015年までに田沢湖町民らと共に姫観音の慰霊祭、そして田沢湖の朝鮮人無縁仏供養会を2015年までに11回行って来た。

私の願いは姫観音前の掲示板解説を補追記し「姫観音は戦争中の発電所工事による犠牲者を慰霊する観音様である」旨の史実を明記して欲しい事だ。このままでは仏作って魂入れずでは霊は休まらない。その御霊を慰める心に、国や民族の違いなどはないと私は思う。

佐藤愛子さんが2022年、99歳になつて発表した著作『幸福とは何ぞや』の中で「不愉快なことや怒髪天をつくようなことがあつてこそ、人生は面白い」と書いている。その本を読み、私の人生は面白いことだらけで、結論としては幸福であつたのだと教えられた。

しかし下心と悪意ある人の如何に多いとか。悪い人の行いが、後々にまで尾を引いて時折、私は怒髪天を衝かされることがある。私は今だ、解脱に至っていないようである。

小学5、6年生時の担任であつた91歳になる鈴木重憲先生から、兄妹が今年3人亡くなつて淋しいという便りが届いた。そこで2022年11月19日、私は慰労の電話を

入れた。先生は「私が亡くなつたら河本君、駆け付けてくれよ。」と仰った。

私は「飛んで行きますよ。最近、生保内に所要があつて行き、駅で出迎えてくれた同級生の安部哲男先生が最近、地元で亡くなつた3人を報告してくれました。私の葬儀委員長をやると言つてくれていた親しい友人達も亡くなり、その報告に私はクラクラしてしまい、すぐにも自宅に帰りたい淋しい心境になりました。私も大病をしており、逆に先生が私の葬儀に駆け付けることもあり得る。それが今の私の心境です。」と応じた。

すると「あと1、2年は大丈夫と思うが、河本君の言う通り明日は判らないなあ。」と先生が笑つた。

恩師と今ある幸福を噛み締める最近である。

百歳になつた佐藤愛子さんが2023年10月10日、『思い出の屑籠』(中央公論社)を刊行した。昔のことは濃密に記憶しているといつて「全生涯で一番の幸福」と題した章で、最後にどうしても書きたかつたことを、穏やかな幼少期の思い出を回顧して書

いている。

私は100歳には達していないが全く同じ心境である。故郷のこと、父母や妹弟との営み、恩師と学友のことなど最近無性に懐かしく思い出される。

私もそんな穏やかな幼少期の思い出をよみがえらせた。全生涯で一番の幸福文をつづってみたい。

---

---

# 枝垂桜

河正雄氏関連エッセイ

西木正明

作家。1940年生まれ。神奈川県横浜市。

1988年 第99回直木賞。1995年

第14回新田次郎文学賞。2000年 第13

回柴田錬三郎賞受賞

―シベリアで思ったこと―

河正雄さんとわたしは、文字どおり鼻垂れ小僧のころからのつきあいだ。かれこれ40年以上行き来していることになる。あまりに長い間交わっているため、気分的には兄弟同然で、今さら彼についてなにか語れと言われても、さて何について話そうかと、迷ってしまうほどである。

少年時代からのあれこれについては、再三にわたってお話してきたので、今回はすこし別の角度から、わたしたちのつきあいについて書いてみようと思う。

ここ数年、わたしは毎年のようにロシアに足を向けている。たいていはテレビなど取材がらみの旅だ。この手の旅は、観光旅行

などの個人的な旅と異なり、うるおいや情緒にかけるうらみはあるが、反面仕事からみではあっても、見知らぬ多くの人々と出会えるという役得がある。

2年ほど前、極東シベリアのハバロフスクに行った時のこと、わたしは仕事の合間をぬって、町の中心部から少しはずれたところにある市場を覗いた。

あと1、2日で日本に帰るという日の昼下がり、5月も半ば近くなるのに、膚を刺すような冷たい風が、ようやく芽吹きはじめたドロナヤギの木の梢をふるわせていた。そこは吹きさらしの青空市場で、色とりどりの防寒着に身を包んだおばさんたちが、質素な机の上に商品をならべ、黙然と前を通り過ぎる客の姿を見つめていた。日本の市場のように、にぎやかに声をかけて客を呼び込もうとする者はいない。

聞こえてくるのは、頭上の梢をふるわせて吹き抜けて行く風の音ばかり。両手をコートポケットに入れ、背中を丸めて市場の中を一巡したわたしは、入口近くに売場をかまえている初老のおばさんに近づいて行った。彼女が並べているスカーフの素朴な模様が、なんとなく気になったからだ。

日本で留守を守っている妻や娘の土産に、2、3枚買って行く」と思い、無言のままたずんでいるおばさんの前に立った。おばさんが顔をあげた。まわりにたくさんいるロシア人とはちがう。日本のどこにでもいそうな顔つきのおばさんだった。

極東シベリアには、たくさんいる少数民族がいる。ブリヤート、ヤクート、ギリヤークなど、いずれも日本人と変わらぬ風貌の蒙古系民族だ。

彼女もそうした少数民族のひとりだと思つたわたしは、カタコトのロシア語で、「スカーフを買いたいんだけど」

と言つた。達者な日本語の返事が返つてきた。

「どれがいいの？」

驚き、かつ安心したわたしは、

「女房と娘の土産にしたいんだが、おばさんのおすすめは？」

と聞いた。彼女は深いしわをきざんだ丸顔をほころばせて、

「おくさんはこれ、お嬢ちゃんにはこれがいいわよ」

と、手際よくスカーフを選んでくれた。お金を払いながら、おばさんに声をかけた。

「おばさん、日本語がうまいね。まるで日本にいたことがあるみたいだ」

「みたいだ、じゃなくて、若いころあたしは日本で生活したんだよ。もともと本土ではなくて、終戦まで日本の領土だった樺太だけだね」

「えっ、じゃあ、おばさんは日本人？」

「いんや、あたしは朝鮮人だよ」

「あ、そうか。ごめん」

頭をかきながら、わたしは戦前、たくさん韓国、朝鮮人が酷寒の樺太に連れて行かれて、鉱業や漁業などのきつい労働に従事したことを、一瞬ではあるが忘れていた自分を恥じた。

「するとおばさんは韓国生まれかい？」

「いや、あたしの両親は韓国の生まれだけどあたしは樺太生まれ。敷香というホオーツク海に面した港町だよ」

「ああ、敷香ね」

くつたなくそう言つて、おばさんはわたしが買ったばかりのスカーフをロシア語の新聞紙で包んでくれている。

その手はたくましく節くれだち、あちこちにアカギレが出来ていた。彼女の歩んできた年月を物語る手であった。視線を感じ

たのか彼女はふと顔をあげてわたしを見てから、はにかんだような笑いを浮かべた。

「これでも若いときは、きれいな手をしていて、いつも褒められていたんだよ。ひとり息子を育て終えて、ふと気がついたら、こうなつとつた」

「そうか、息子さんがいるのか。彼といつしよに暮らしているの？」

「いや」

この時だけ、おばさんは心持ち上体をそらすようにして、誇らしげに言つた。

「息子はモスクワにいるよ。医者になって、大きな病院で働いている。毎月きちんと送金してくれるから、別にあたしは働く必要もないのだけれど、遊んでいてもしかたがないからね。元氣なうちは、働かなくちゃ。」

彼女が手渡してくれる新聞紙の包みを受け取りながら、わたしは突然なんの脈絡もなく友人の河正雄のことを思つた。

異境で子供を生み育てるといふことは、それを実際にやった者でなければわからない苦労が山のようにあるはずだ。まして戦前の日本と韓国の関係を考えれば、自分の意志に関わらず日本に移り住んで生活し、そこで子供を育てるといふことは想像を絶

する労苦の連続だったろう。

長いつきあいだが、わたしは河さんから、彼のご両親については、断片的にしか聞かされていない。お母さんがどれほど苦労されたかについて、さらりと語ってくれたことがあったが、苦労話らしい物はそれだけである。

しかしその話は、確実なリアリティをもって、わたしの中に根づいている。目の前でここに笑いながら息子の自慢話をする韓国人のおばさんを見ながら、わたしは河さんと彼のお母さんに思いをさせた。そして、彼のお母さんに、今の河さんの姿を見せてあげたいと思った。

きつと彼女も、眼の前にいるおばさんのように、心持ち上体をそらして、誇らしげに息子のことを語ったにちがいない。

この後日本に帰り、河さんに電話したが、あいにく彼は、韓国に出かけていて留守だった。だから、わたしがこの話を彼にするのは今回がはじめてである。

(河正雄編著『恨, 95』より 1995年)

― 人生の哀感と審美眼？

わたしと河正雄さんとの関わりは、中学生だった頃に遡る。共に今クニマスで話題の田沢湖をはさんだ、旧生保内村と旧西明寺村で幼少の頃をすごした。以来50数年、実に半世紀以上にわたって、兄弟のようなつきあいを続けてきた。

知り合ったきっかけは今風にいえば部活、つまりクラブ活動である。それぞれ絵画とスポーツが得意で、学校代表としてコンクールや競技会の場に臨み、切磋琢磨した仲間だ。

高校生になり、わたしは絵画から離れてスポーツ一本槍になってしまったが、河さんは初心を貫いて絵との関係を保ち続けた。それは社会人になり、事業に成功した現在も、変わることなく続いている。

今、事業に成功してなどと簡単に言ってしまったが、ここにいたるまでの彼の足跡は、まさに波瀾万丈である。いくつかの仕事に挑戦しては挫折し、その都度歯を食いしばって立ち上がってきた。

わたしはその経緯すべてを知るわけではないものの、いくつかの場面で忘れたい思い出を共有している。

あれは1970年すなわち昭和45年の晩

秋のことだったと記憶する。当時河さんは東京の六本木でしゃれたサパークラブ、すなわちレストランを兼ねたナイトクラブを経営していた。時代の最先端に行く客が集まる瀟洒な店で、常連客のひとりに、作家の三島由紀夫がいた。

当時わたしは『平凡パンチ』誌の記者で、取材の場として折にふれてこの店に出入りしていた。

11月初旬のあの夜、わたしは同僚の記者とふたりで河さんの店におもむき、三島さんと向き合っていた。当時三島さんは、畢生の大作と言われた『豊穡の海』を完成させたばかりで、わたしはその作品について取材したのだった。あの夜三島さんは上機嫌で、時折特長ある甲高い笑い声を上げながらインタビューに応じてくれた。

その約2週間後。わたしはフィンランドのヘルシンキで三島さんの自裁の報に接した。そんなこともあつてか、それから間もなく、河さんはこの店を閉じた。

この例にかぎらず、河さんはこれまでの人生を通じて、数えきれない人々の苦しみと悲しみ、その間のささやかな喜びと幸せなどを眼にしてきた。それが彼自身の人生

経験とあいまって、どれほど彼の心を鍛え上げたことか。

そしてそれが、人の世の森羅万象を受け入れ、彼の心象風景を作り上げ、絵に接する時の審美眼へと浄化していった。ゆえに今日の前にある多くの絵は、そうした彼の心根を反映したものだ、わたしは感じている。

『河正雄コレクション 故郷展』より  
2011年

―河正雄の存在感？

人間の記憶には二種類あって、時間の経過とともに薄れていく記憶と、逆に過去を埋めつくす沸々たる闇の中で、ますます輝きを強める光芒のような記憶がある。1955(昭和30)年夏の数日間のそれは、まさに後者である。

当時わたしは、秋田県の東端に近い山深い農村、西明寺(現西木)村立西明寺中学校3年生であった。この年の夏休み、松尾芭蕉の句、「象潟や雨に西施が合歡の花」で知られる名勝の地象潟で、あるイベントが開催された。ジュニア・レクリエーション大会と銘打たれたこの催しは、秋田県内の中学校

から各々1名の生徒代表を集め、一か所に合宿して親睦をはかりつつ、さまざまな事を学ぶという趣旨のものであった。

中学3年生という人生の中でもっとも多感な時期に、たとえ数日間という短い間とはいえ、寝食を共にして生活するのだから、そこで生まれる絆の浅からうはずがない。

こうして集まった少年少女たちの中で、ひとときわ目立つ大柄な少年がいた。大きな目玉と優しい笑顔が印象的であった。出会った瞬間から、河本正雄と名乗ったこの少年とわたしはウマがあった。

彼はわたしの出身地西明寺とは田沢湖をはさんで隣町にある、生保内中学校代表として象潟に来たのだった。今にして思うと、なぜ初対面の彼と、あれほどウマがあったのか良くわからない。

強いて理由をさがすとすれば、当時わたしたちがやっていたことに、共通点が多かったからかもしれない。

彼もわたしも陸上競技をやっていたし、絵画に興味にしていることも同じであった。自分のことを述べる場ではないことを承知の上で、あえて言わせていただけば、わたしの母方には絵描きが多く、祖父は明治から

大正にかけて、職業絵師として多少知られた存在であった。長い間森永ミルクキャラメルのシンボルであったエンゼルマークは、わたしの祖父の仕事である。

わたし自身はやがて絵の世界から遠ざかってしまったが、河本君との交友は変わることなく続けられた。わたしたちの友情は、もはやそうした共通の趣味などを介在させる必要がないほどまでに深まっていたのだ。

忘れられない思い出のひとつに、八幡平登山がある。たしか高校2年の夏だったと思うが、河本君とわたしは、共通の友人2名とともに、生保内駅近くの貯木場から林用軌道車の客となった。

危険が伴うので原則として一般人は乗せないのだが、河本君が然るべき筋に頼んで乗れるようにしてくれたのだ。

積乱雲が湧く夏空の下、ゆったりとした速度で走る林用軌道車の旅は、なかなか快適であった。

玉川ぞいの碧空に聳える男神山・女神山の鋭峰のたたずまいが、実に印象的であった。あの眺めも、玉川集落がダムの下に沈んだ現在、わたしたちの胸の中に残っているだけである。軌道車を降りてから長い歩行

の末にたどりついた玉川温泉で、野猿に洗面用具をさらわれたりしたのも、たまらなくなつかしい思い出だ。

いずれにしても、少年期から青年期にかけての河本君は、わたしにとって誰よりも気のおけない良き友であり、ウマのあう親友であった。彼はいつ会ってもここにこと楽しそうで、苦勞とは無縁の青春を送っているように、わたしには見えた。

そんなわたしの見方は、もちろん皮相的で浅はかだったのだが、そうとしか見えなほほど、河本君はいつもゆったりとにこやかであったのだ。

当時のわたしには、本書に河君が書いているような彼の苦難に思いをいたす知恵も知識もなく、ただただいい友といっしょにいるという思いがあるだけであった。いわばわたしは、無知という土俵にあぐらをかいて、河本君に甘えていたのである。

そんなわたしの無知に、鉄槌が下される日が来た。大学に入って間もない時、所属していたクラブの有志が、韓国を訪問することになった。現在のように海外旅行が自由な時代ではなく、韓国と日本の関係も、今よりはるかに微妙な時代だったから、わたし

たちは現地の予備知識を得るためにいろんな人に会った。

その中のひとり、ある韓国の新聞の特派員宅におじゃましました折りのことである。特派員氏はひととおり現地の事情について知識をさずけてくれた後、こんなことを言われた。

「最後に言っておきたいことがある。それは、向こうにいったら、言動に気をつけてほしいということだ。韓国の人々は、日本にいる日の人たちとちがって君たちに遠慮なんかしないぞ。

君たちがなげなく口にする言葉や行動の中に、時としてわれわれ韓国人の神経を逆撫でするものがある。君たちは在日韓国人の苦難に思いをいたしたことなどないだろうが、本国の同胞たちは、在日の苦難は自分の苦難と思っているからな」

反射的に、河本君の顔が脳裏に浮かんで来た。わたしは、わが親友の河本君が、在日韓国人二世であることは知っていた。彼の本名が、河本ではなく河であることも知っていた。しかし、わたしにとってそれはどうでもいいことであった。いっしょにいていつも快適な気分にしてくれる。

彼は、ほかに何人かいる親友たちと同じく、良い時間を共有する仲間以外のなものでもなかった。

その彼も、在日として苦難の時を過ごして来たというのか。ならば、それにまったく思いをいたさず、ただ彼とすす時間を楽しんできた自分は、なんとという愚か者だったか。

この時以来、わたしはしばらく、民族、あるいは国というものについて考えた。いったいそれは、個人と個人との関わりの中において、どんな役割を果たすのか、とも。

しかし、出て来た結論は、あまりにもあつけなく普通のものであった。彼が河本君であるうが河君であろうが、彼がわたしにとって得難い友であることにはなんの変わりもなく、国籍や民族などといった事後に登場して来た事情とは、まったく無関係である。

もしかしてわたしはここで日韓の文化の同一性とか、日本人のルーツの相当部分が韓国であることなどに触れて、河君とわたしの意識の連帯感を説明すべきなのかもしれない。でも、実はわたしにとっては、それらもどうでもいいことのように思える。

わたしは、少年時代の苦難をにこやかな笑顔でくるんだ河本君が好きだ。大人になって日韓両国を縦横に行き来し、さまざまな事業や人間の根源的問題に携わっている河君を尊敬する。

もちろん一個の日本人としては、韓国に対する日本の過去の歴史について恥もすれば、申し訳ないという気持ちもある。しかし、そうした気持ちすらも、河君の前では、それはそれとしてという気分になってしまふのは、少年時代から青春時代を共有した者同士の甘えの延長か。

河君の処女出版によせる献辞にはふさわしからぬ内輪話というか、交友譚になってしまったかもしれない。しかし、長年の友情にあれこれ理由づけをしようと思っても、所詮は無駄なことであった。要するに河正雄君は、わたしを含む友人たちにとって、それほど存在なのである。

(河正雄著『望郷・二つの祖国』より  
1993年)

## 回想

鈴木重憲

1930年生まれ。秋田県仙北市。生保内小学校5、6学年時担任教師。東大曲小学校長  
歴任

河君、こんにちは。お元気で過ごしての事  
と思います。

先日家で本の整理をしていたら、君の執筆した贈書がかなりの数になっていました。

君と私は教師と教え子との関係ではわずか数年でしたが、その後何十年もの交流の賜物がこの本に表れていると思いました。

私が60歳の定年で職を去って2年くらい後に、君が秋田県南校長会に招かれて講演したことを後輩の校長から聞きました。何を話されたのか分かりませんが、数人の校長から「大した人物だ」との褒め言葉を聞き、我が事のように嬉しくなったことを思い出しております。

よく「河さんはどんな子供でしたか」と問われることがありましたが、一言で言えば

「親孝行な子供」ですが、なみの孝行ではない孝行息子でしたね。家が貧しかったというところもあるでしょうが、自己犠牲して、自分がそれを意識していなかった事が大きいですね。

ある時、家庭訪問だったかどうか忘れましたが、誰かの家の近くまで行った時、偶然に君と出会いました。梅雨の頃でなかったでしょうが。曲がり角から突然馬の手綱をとった人が雨に打たれながら出てきたのです。気にも留めなかったのですが、いやに小さい人だなどと思ってよく見たら君だったのです。私にとって衝撃でした。あまりの衝撃のせい、今でもはつきり覚えているのは、その時の君の顔となぜかその曲がり角の景色だけでした。お父さんは馬車引き、つまり馬を使って荷を運ぶ仕事をしていた人でしたから、馬を引く事は慣れていたかも知れませんが、これほどまで手伝いを超えた仕事を君に、尊敬するような気持ちになりました。

尊敬といえども一つあります。家庭訪問をした時、お母さんが家におられました。何か私が話をすると、そばにいた君がすかさず何かお母さんに言っていました。朝

鮮語と思われるものであったので、「お母さんは日本語がわからないのだろうか」と思ったのですが、それはさておき、君が2カ国語を話すのを見て、驚くとともにさらに尊敬の気持ちが高まりました。

当時日本国内では、朝鮮人といえば日本人より一段下に見られる風潮がありました。しかしこの学級では（他の学級では分かりませんが）そんな事はなかったと思っています。学級でのリーダーシップをとっているのは君と安倍哲男君の2人だったので、多分バカになんかされていまいだらうなと思いつつも、こっそり「誰かにバカにされたりしていないか？」などと聞いたことがありますね。職員室の中でも、一部の教職員から朝鮮人を一段下に見ているような発言を聞く事があるので、ちよつと心配になったのです。もちろんそんな事はない、と否定してくれましたが。

あの頃は教職員の数が少なく、私は最高63人の学級を受け持った事があります。だから黒板の下近くまで机が並び、私は黒板の真下の狭いスペースを横歩きで歩くので「カニ歩き」と笑われていたものでした。職員の数が少ないと事務的な仕事も多くなる

わけで、当時は出張がかなり多くありました。そのため自分は教室を空けることになったのですが、教職員が少ないので代わりの先生が来るわけでもなく、一日中自習になる事が多かったと思います。出張の際は、事前にその対策をするなどして学習の準備がある程度行っていました。隣の学級の先生に自習時の監督をお願いするよりも、君と安倍君に話をして学級を任せるのが最も効果的でした。具体的にどんな具合にどんな口調で指示を出しているのか、出張に行っている自分も見たい、そんな風に思っていました。今の君の活動を見てみると、あの頃からその素質があったのだと私は思っています。

君は長男でしたね。下に弟や妹は何人いたんだっけ？ 朝登校するとき、一番小さい子をおんぶし、もう一人の手を握りながら毎日やってきましたね。お母さんが働きに出ているので、子守を言い使って連れて来たんでしょう。貧しかった日本ではまだ子育ての施設も殆どなかったもので、学校に弟たちを連れて来るというのは当時、当たり前のようでしたね。だから君以外にも連れて来る子がやはり何人かいましたね。そ

れでも当時は女の子が弟妹の世話をするのは分かるような気もするけど、おしめをする子を連れて来る男の子は君だけだったと思います。もし私だったら学校を休んで家で子守をしたんじゃないかと思うけど、そうじゃない君は、それだけ学校が好きだし勉強も好きだったんだなあと思いました。でも教室でおしめを替えるのだけはちよつと困りましたよ。休み時間の時の事なので私は教室から出ましたけど、この時は何か言って注意しましたね。どう言ったかは忘れただけだね。

私が退職するまで、何百人か何千人と直接受け持ち（担任）として毎日顔を合わせて生活しましたが、成人してからも「先生！」と言って声をかけてくれたり、家を訪ねてきてくれたりする子はたくさんいます。その度に教師冥利に尽きてありがたいなあ、教師をしてよかったなあと思う思います。

ある時、突然、君から電話が来ました。前置きなしにいきなり、「先生。私、先生を超えました」何のことか分からず、

「えっ？」  
と言うと、

「私、この度、韓国の朝鮮大学校美術学名誉博士になりました」

昔から子供は、親の仕事とか業績を見て育ち、親を越えようと努力します。親も子供が自分を越えることを望み、その達成を喜びます。それとはちょっと違うけれども、それと似たような感覚になったのを思い出しました。これも教師冥利に尽きることでですね。

書く事が好きな君は、何か出版するたびに送ってくれたり（たまに同じものを2回も送ったり）、奥さん共々拙宅を訪ねてくれたり、著名人をわざわざ連れて来てくれたりと、ありがたい事だらけです。数年前に韓国を訪問した際、隣で歩いた時に私の手を取ってずっと歩いてくれた時は、何とも言いようのないほどありがたく、君のことが身近に感じたものでした。数多くの教え子がいいますが、教え子と手を取って歩いたことは初めてで、こんなふうにしてもらったのは後にも先にも君だけです。

何度も言っている事ですが、君もすでに高齢者。くれぐれも体につけて毎日を

お過ごし下さい。奥様にもよろしくお伝えくださいね。ではまた。

そうそう、後で知ったことですが、この名誉博士になったのは2003年7月21日。奇しくもこの日は私の誕生日です。君が私に最高の贈り物をして下さったと思い、倍増の嬉しさとなりました。また2007年7月1日には、同大学校デザイン大学院の招聘客員教授に就任したと聞きました。無理せず活躍してくれることを願っています。

(2023年5月)

### 「思いは言葉に、言葉は行動に」

安部哲男

1941年生まれ。秋田県仙北市。元生保内小学校校長・仙北市教育委員会委員長歴任

#### 一 出会い

河正雄氏との出会いは、昭和27（1952）年4月、生保内小学校5年生のことであ

る。彼はいつも幼い弟と妹を連れて学校に來ていたので強く心に残っている。戦後の落ち着かない時代の頃なので、両親が土木作業員に従事していたので、幼い弟妹の面倒をみながら学校生活をしなければならなかった。

彼は授業中でも弟妹のおしっこやうんこのたびにおしめを取り換える健気な少年であった。私たちは、顔をしかめたり、「臭い臭い」と言ったりしながら勉強を続けていた。「河本はかわいいそうな奴」「立派だけど真似は出来そうもない」などと勝手に決めていた。男の子たちは、休み時間になるといつせいに外に飛び出し、河本のことなど頭になかった。女の子たちは、物珍しさもあって河本と一緒に幼い子供たちの世話をして楽しんでいた。そんなわけで、彼は男の子とは遊ばない変な奴ということになっていた。男の子と遊びたくても遊べない彼の事情を氣遣うことが出来るような子は一人もいなかった。

こんな暮らしの中で、彼のすばらしさを認め、励まし続けてくれたのが、担任の鈴木重憲先生であった。恵まれない環境にめげず弟妹の世話をし、さらに新聞配達をして

家計まで助ける彼の存在は、先生にとって  
は自慢の子供であったに違いない。これは  
後年河本から聞いた話であるが、新聞配達  
をするようになってからは、学用品はもち  
ろん遠足、修学旅行の費用一切を自分でま  
かなっていたそうである。

子供のころから次元の違う生き方ができ  
た稀有な存在であったことに驚くばかりで  
ある。

鈴木先生が、家庭訪問の日程を決めると  
き、河本家の都合のいい日を聞くと彼は「雨  
が降る日に来てください」という不思議な  
返事が返ってきたので、この子はいったい  
何を考えているかわからなかったと述懐す  
るのを聞いたことがある。よく聞いてみる  
と、雨が降らないと両親の土木作業は休  
みにならないからということだったそうであ  
る。

鈴木先生はこうも言っていた。

「自分が出張で学校を空けなければならな  
くなっても、2日間ぐらいは河本に任せて  
おけば何の心配もいらなかった。彼は勉強  
ができるし、指導力もあったし、なによりも  
統率力が優れていたの」と語っている。こ  
のように教師から見ても、明らかに他の子

とは次元の違う世界を生きている子供だっ  
たので、本当に頼もしい存在だったに違  
ない。

極貧ともいえる環境の中で、明るく前向  
きに生きてゆける資質は、いつ、どこで、ど  
のようにして身に付けることができたのだ  
ろうか。今でも私はそれがよくわからない。  
やはり傑出した才能と努力のたまものと思  
うしかない。

幼かった私たちからすれば、勉強は拔群  
だし、走れば一番だったし、絵を描けばいつ  
も入賞、それでいて威張ることもない不思  
議な少年というしかなかった。その不思議  
な少年が偉大な大人になるとはだれも想像  
できなかったと思うが、今になってみれば  
当然の帰結であったのかもしれない。

## 二 実現した夢の数々

高校卒業後、しばらく連絡の取れなかつ  
た河正雄と42歳の厄払いの同期会で再会す  
ることができた。明るく前向きな姿勢は変  
わることなく、同期生と歓談している姿を  
見て、あの不思議な少年がそのまま大人に  
なったのかなとうれしくなったことを覚え  
ている。彼とはこの後、40年以上にわたつ

て友人として親交を深めることができた。

そのことを私は大切な宝物だと思っている。  
彼は、自分を育ててくれた秋田に限りな  
い愛着と感謝の気持ちを長年にわたって美  
術品や絵画・図書の寄贈という形で伝え続  
けてきた。

その主なものを挙げてみる。

- ・田沢湖図書館へ長年にわたる図書および  
絵画の寄贈
- ・生保内小学校の中庭に「陽だまりの像」の  
寄贈と建立
- ・生保内中学校校庭に「憧憬」の寄贈と建立
- ・平福記念美術館における「故郷展」の開催  
並びに絵画の寄贈
- ・田沢湖御座の石に「ふるさと」の寄贈  
と建立

いずれの事業も彼の深い思いの結晶であ  
り、簡単に実現したものは一つもない。彼の  
夢の実現の困難な道ゆえに苦労の連続を見  
てきただけに思いの強さと深さ、何が何で  
もやり遂げる意志の強さに感嘆する。

自分の思いを伝えるおだやかな説得力、  
だれにでも自分の思いを直球勝負で訴える  
積極性、迷いもブレもない一貫性を知れば、  
多くの人は、彼の夢を応援したくなってし

まうのだと思う。

「ふるさとの碑」の建立の際は、様々な事情で建立する場所が二転三転したにもかかわらず、いいものはいいとこ所に場所を得るものと泰然自若として待つ心の余裕と様々な体験で培われた我慢強さが幸いし、結果として田沢湖で最も景色のいい御座の石神社のある場所に建立することができた。田沢湖図書館には「河正雄文庫」という一室がある。昭和61（1986）年2月、田沢湖町が、彼の長年にわたる図書の寄贈に感謝して創設したものである。

美術全集をはじめ、多岐にわたる貴重な蔵書がびっしりと並んでいる。本が読みたくても学校の図書に頼るしかなかった彼だからできたことかもしれないが、それにしても、これまで長い間毎年途切れることなく、寄贈し続けたことは驚くしかない。

#### 四 思いを紡ぐ

河正雄が蒔いた種がさまざまなところで発芽し、彼の思いを紡ぎはじめたいくつかの例を紹介したい。

生保内中学校佐川俊哉さんのことである。彼は、教職生活最後の2年間を、母校の校長

として勤務した。

河正雄の寄贈した「憧憬」の像に出会い、次のような文を残している。

「その少女像は、はるかに駒の峰を臨んで立っています。ふるさとの秀峰駒ヶ岳のように、より気高く、より美しく、より清らかなものにあこがれを持ち、未来に大きな夢を持ちながら、今この時を明るく生き抜いてほしいという願いが込められています」（2017年度『大曲仙北校長会紀要』より抜粋）

彼は、こんな気持ちで「憧憬」の像に向き合い、像を取り巻く子供たちの様子を十数枚の写真パネルにして学校に残し、教職を終えている。佐川さんの作成した写真集が河正雄に届けられた時の彼の笑顔が目に浮かぶ。寄贈した憧憬の像は、生保内中学校で見事に生きていることを実感した。

次は、「ふるさとの碑」のことである。

令和3（2021）年3月半ばころ、河正雄から「ふるさとの碑」の寄贈、建立について打診の電話があった。当初、建立予定地がクニマス館玄関口だったので市役所窓口として、千葉俊成・クニマス未来館長が担当することとなった。諸般の事情で建立地は、二

転三転したが、千葉さんはそのまま実務を担当してくれた。ようやく4月半ばに建立地は、御座の石に決まった時のことである。この日は季節外れのみぞれが降っていた。

建立予定地に河正雄、千葉さん、私の3人で訪れ、具体的な建立場所、方向、台座の位置、大きさ、高さ等々について詳細に検討した。みぞれ交じりの雨風の中のつらい作業だった。にもかかわらず河正雄と千葉さんは、1時間半も時間をかけて検討を重ねる、納得するまで話し合う二人の様子を見て、寒さをこらえて見ていた私は、彼ら2人の誠実な姿に打たれ、言葉が出なかった。世の中に何かを残すということは、すべてを忘れて取り組まなければできないことだということを目の当たりにすることができた。

このあと工事は順調に進み、10月28日、市長はじめたくさんの御来賓を迎えて、「ふるさとの碑」建立除幕式を迎えることができた。

その後、令和5（2023）年3月、千葉さんは、クニマス未来館館長を無事退職した。退職を祝って電話したときの彼のことがばである。

この後の「ふるさとの碑」のことは私に任

せてください。今から像の横の枝垂桜の剪定をする予定であるし、像の敷地周辺には曼珠沙華の球根を植えます。今後の整備は私がやりますから安心してください。

最後に、「田沢湖歴史再発見塾」のことである。

河正雄は、山梨県北杜市で「清里銀河塾」を立ち上げ、回を重ねること20回を越す。自分のために活動するのではなく、世のため人のために生きた「浅川巧」や「ポール・ラッシュ」の、無私の心を行動の基本理念として、顕彰している塾である。

「清里銀河塾」に近づきたいという思いで、平成28（2016）年7月、石神会館で「第1回田沢湖歴史再発見塾」を開催することができた。地域に貢献してくれた先人の歩みを振り返り、田沢湖に住んでいることに誇りと自信が持てる市民が一人でも多くなることを願って塾を開催してきた。河正雄の「清里銀河塾」と思いがつながる活動であると自負している。

コロナ禍のために2回の中断があったが、今年で第6回を迎えることになっている。これまでの活動の足跡を、令和5（2023）年5月に「田沢湖歴史再発見塾報告集」第1

巻として、上梓することができたことはおおきな収穫であった。

「田沢湖歴史再発見塾」の中心的メンバーで元角館中学校校長の佐藤心一さんは、河正雄の講演会を企画し、夢を持つことの大切さ、生涯の友を持つことすばらしさを生徒に伝えてもらっている。このたび河正雄について、次のようなメールを私に送ってくれた。

「安部先生から河正雄さんを紹介してもらうまでは、どういう方なのか全く知りませんでした。ご自身が過酷であるにもかかわらず、自分の学生時代のうらみつらみは一つもなく、ただひたすら、巡り合った恩師の先生方への尊敬、そして負の歴史を常に前向きの人生を変えていくというパワー、好きなことにひたすら打ち込むけれど、それは日本を愛し、母国を愛する気持ちから来ていると知りました。

二つの祖国を愛し続けてきたその生き方を尊敬しています。さらに清里銀河塾で次代の人間を育成し、社会に啓蒙する姿勢、つねに頭の下がることばかりでした。自分の根源はなんであるか、そのことを考えさせてくれた、そんな気がします。中学校の国語

の恩師山田百合子先生が『価値あるものに燃えよ』と常々お話していました。河先生の人生そのものが『価値あるものに燃えている』かのようです。今後とも益々のご活躍を祈念いたします。」

河正雄の蒔いた種が、着実に目を出し、育っていることを喜んでいる。

## 五 結び

河正雄との長い交流を通して学んだことは数え上げればきりが無いほどある。いま改めてふり返ってみると次のようなことが強く心に残っている。

「思いは言葉に、言葉は行動に」こんな言葉が浮かんでくる。

考えるだけならだれでもできるが、考えたなら何ができるか言葉で具体的に表して見なければ考えたことにはならない。言葉で表したら行動しなければ、考えたことも言葉で表したこともすべて無意味になってしまう。

これまで何事もあと一步を踏み出せないで終わってしまった自分を反省し、ハードルを越えなければ真に生きていることにはならないことを気づかせてくれたのは

河正雄である。その意味では私の人生の師でもある。

彼は、ふるさと秋田への熱い思いを次々と実践し、感謝の気持ちを伝えてきた。「世のため人のためになること」を自分の夢として語り、行動するようになれば、初めて人生が活気づくことを自らの生き方で教えてくれたことを感謝している。

## 「憧憬の像」と「秋桜」

大信田齊

1940年生まれ。秋田県大仙市。元生保内中学校長

憧憬の像は、本校第9期生河正雄氏から昭和61（1986）年11月に寄贈されたものであることは周知のとおりです。「憧憬」には、「ふるさとの秀峰駒が岳のように、よりけだかく、より美しく、より清らかなものにあこがれをもち、未来に大きな夢をいだ

きながら、今この時を明るく生きぬいてほしいと念願する河さんのお心が、この名にこめられております。」（「憧憬の像除幕式にあたって」より）

数年前、氏がフラツと本校を訪れた際、像の回りにコスモスが植栽されていないことですが、聞きなされた、という話を聞きました。当時の校長とで植えることが約束であったようです。なぜコスモスなのか？氏がコスモスに何故こだわるのか。そのルーツを探ってみました。

秋桜（コスモス）についての記述は、氏の著書『望郷 二つの祖国』の8ページに唯一あります。

それは、大阪での貧困の泥沼から抜け出せないでいる時、秋田（生保内）に住む母方の叔父さんの誘いを受け、行き詰まった生活から逃げ出すかのように、大阪から秋田に向かう途中での場面です。（昭和23年、小学校2年の時）

「明けがた、列車は温海の駅で長時間停車しました。息苦しく蒸せるような列車の窓から、私はホームに降り立ちました。そして、初秋のひんやりとした冷気を胸いっぱい吸い込みました。明けの明星の輝きと、ホーム

に繋がれていた子熊の可愛らしい顔が、不安を忘れさせてくれました。心がなごみ、救われるような気持ちを一時味わったのでした。そこは、日本海の潮騒が聞こえる静かな海辺の駅で、コスモスが朝露をふくんで風にそよいでいた可憐な美しさは、今もこの臉から消えませぬ。」（『望郷 二つの祖国』より）

コスモスは、キク科の一年草。メキシコが原産地で「砂漠の花」とも言われています。かなり乾燥に強く、養分が特別になくとも生育し、しなり強い特性をもっているように思えます。また、花言葉は「純潔」（「誕生花&花言葉」：主婦の友社）、「乙女の真心」（『365日相性花の本』：三五館）と表されています。

「河さんは、秋田工業高校を卒業後、上京されましたが、貧しさと過労で一時目が見えなくなるほどの辛酸をなめられ、就職先も転々と変えざるをえないありさまでありました。

しかし河さんは、不屈の心と誠心誠意仕事に打ち込むことよって、みごとにその苦境を乗り越えられ、現在は多方面で活躍なされております。」（憧憬の像除幕式に

あたって」より)

このように、氏の人生は筆舌の一言で表すことのできない艱難辛苦を乗り越えられて今日があるのです。

氏の人生とコスモスの原産地の状況や花言葉から推察するに、コスモスは厳しい自然環境にもめげず、それを嘆くこともなく、夢を抱き、碧空に清らかに、誇らかに咲いている様は、まさに「人」としてこうありたい願いが込められているように思えてなりません。

氏は「憧憬(あこがれ)」を抱くことは生きるエネルギーとなり、コスモスのような生き方を「憧憬(しょうけい)の像」に託しているように思えます。

このとらえかたで許されるのかどうかを確認するため、平成7(1995)年10月下旬、氏が「在目」の撮影で来町された折り、宿泊先を訪ねました。過密スケジュールのなか、都合つけて会ってください、約束の時間をオーバーして30分ほどお話しができました。

推察どおりであったことを確認できたこと。それに、氏の温かさ、心を大切にすること。それに触れることができ嬉しい限りでした。

それにしても、像の背面側のコスモスは生育が芳しくない。日当たりが弱いせいであるう。陽光というシャワーを十分に浴びないと元氣にならないのは、やはり砂漠の花の特性であろうか。

栽培管理も考慮に入れながら、像の周辺をもっとコスモスで一杯にすることが今後の課題です。

また、生徒も心のシャワーを浴びることによって、心身ともに健やかに成長することを暗示しているように思えてなりません。

「校章のカシワを学校の木とすれば、コマクサは町の花であるとともに学校の花であるが、学校の目指す理念からすれば、コスモスも学校の花と言えるのではなからうか。」

憧憬の像に巡り会えたことに感謝し、創立50周年を記念して憧憬の像にコスモスを捧げる。

(1997年、生保内中学校「学校だより」より)

## 書簡

佐藤心一

1956年生まれ。秋田県仙北市。元仙北市立角館中学校長。角館混成合唱団長

河正雄先生

拝啓

この度の第15回銀河塾では、一般受け入れが非常に厳しい中、簡単に私の参加を承認くださり、誠にありがとうございます。同室の倉橋様から伺ったところによると、一般受け入れが非常に厳しいものがある、あなたはどうやって参加したの？と尋ねられました。河先生から招待状をいただきました、とお話ししたら、納得されました。

銀河塾への私のイメージはおおよそ、予想が付いていたのですが、その予想も講座①の「浅川巧 道 白磁の人」で全く想像を超える深い衝撃と感動に襲われました。私の涙腺が壊れてしまったかと、思われるほどの涙、涙の連続、そして、時に嗚咽、それは激しいものでした。この涙と嗚咽の正体

を自分で考えてみるに、権力者の人を人とも思わない人権無視への怒り、それに抗うような浅川巧の博愛の精神、支配下の人々も同じ人間である、とした彼の生き方そのものへの尊敬の念、そのようなものではなかったかと思えます。日本人として、統治下にもかかわらず、このような人間がいたことに、誇りと安心を感じました。

私が銀河塾に来たことの目的は、この映画鑑賞でその大方が達成された、と思った瞬間、仲尾宏先生の「朝鮮通信史の歴史から学ぶ日韓関係の展望」の講座で、レジユメの一行から一行まで移るのに、掘り下げたお話の数々に、ユネスコ記憶遺産の当事者としての矜持と博学ぶりを見せられ、映画とは異なる知的興奮を覚えました。

懇親会には、北杜市教育委員会教育長さんから北杜市長さんまでご出席され、河先生もお話しされておりましたが、行政主導にまで高められた銀河塾の重要性、北杜市としての浅川兄弟記念館にかける意気込みを感じました。

翌日のポールラッシュ記念館、ポールラッシュがなぜ日本で骨を埋めようとしたのか、が分かったように、思います。そして、

河先生が21歳のときに、ポールラッシュ氏と直接お目にかかり、「先生、孤独でしょう。私も孤独なんです。」と意気投合され、美術（絵）が二人の間を取り持ったというお話など、その続きを拝聴したくなるようなエピソードでした。ここに、河先生の原点があるのかな、と勝手に想像しておりました。

浅川伯教、巧氏のお墓や生誕地訪問、さらに、記念館での澤谷館長様の講座などで、浅川伯教、巧を更に深く理解することになりました。

その前に、八ヶ岳、南アルプス、富士山を眺望できる橋の上に連れていただき、山国に住む私でさえ、絶景を味わうことができました。

銀河塾の基本精神「響き合う心」を体現し、河先生のいろいろな場でお話しされた、「次世代の若者の育成」がまさに、若者の心を育てているのだ、と実感いたしました。

仙北市に銀河塾の移動塾を、という河先生のご提言でしたが、田沢湖歴史再発見塾をベースに実現、継続できれば、と思った今回の初銀河塾体験でした。

最後に河先生からいただいた、『ちちははの思うことのみ』を帰りの電車の中で一気に読破しました。

さまざまな場面に感動しましたが、二つ述べさせていただきます。

一つは、闇米販売で東京から戻らぬお母様を単身上京して、留置所から連れて帰って来たこと。これは、心打たれました。お母様を思う河先生のお気持ち、びんびん伝わってきました。

今一つは、河先生の奥様が最後の最後に河先生のお母様からお礼の言葉をいただいた場面です。どれほどか、奥様は嬉しかったのだろう。ついに、愛が通じた、というところ。

河先生は、ご講演の中で常に、恩師の素晴らしさを具体的にお話しされます。私も「我以外皆師なり」の気持ちで過ごしてきましたが、河先生ほど恩師を永遠に大事に、そして、感謝の気持ちを表している方は他にいないのではないかと、常に感服しております。私も河先生の基本精神に近づくような生き方を今後模索していきたいです。

6月7日に、河先生と渡辺市長から依頼された北杜市特製のポールペン並びに今回の銀河塾のあらましについて、仙北市教育

委員会教育長熊谷徹氏と面会し、お渡しし

てきました。熊谷氏も『道―白磁の人―』の映画を見ており、その素晴らしさについて、絶賛しておりました。そして確かに、市長にボールペンを届けることを約束してくれました。

また、6月4日の早朝でしょうか、安部哲男先生から、今回の銀河塾についての内容、そして私が清里まで出かけたことの内容等を尋ねられる電話がありました。安部先生は数学の恩師で、校長を終えるまで、面倒を見ていただき、今も退職してからも声をかけていただき、面倒を見てもらっています。河先生と出会えたのも安部先生のおかげと思っております。

(2018年6月8日)

## 河正雄氏を語る

泉谷好子

1945年生 秋田県横手市。有限会社

イズミヤ印刷取締役会長

30年前、秋田県田沢湖畔のサンライズホテルで開催された「日米文化交流シンポジウム」で河正雄氏に初めてお目にかかり、著書『望郷―二つの祖国』(1993年)をいただき、深い感動を味わった。

河正雄氏は生まれ育った日本と母国韓国の両国を胸に、さまざまな葛藤を哲学に変え、宿命的な2人、浅川巧とポール・ラッシェ博士との出会いで、学び立ち上がり、自身も画家としてばかりではなく、画家らをも育て、著書も多い。更にメセナの福祉活動家として尊敬されている。そして、その研ぎ澄まされた感性でとらえる洞察力は、琴線に触れる彼の作品に表現され人々の共感をえている。

また美術収集家でもある河氏は、世界的な名画を始め、将来の名画になりうる作品をも韓日両国の美術館に数多く寄贈していることでも知られている。

河氏は講演会で、「コレクションの意味について、皆さんに考えていただきたい。そのコンセプトは『祈り』である。犠牲となった人々や虐げられ人々、社会の弱者、歴史の中

で名も無く、受難を受けた人々に向けられた人間への祈りである。」と語った。長い間、この言葉は私の心に残り、たびたび考えをめぐらしたものだ。あるとき、河正雄氏の画集を見ていた知人が何気なく「絵は、その人の人生そのものがそのまま描かれるのよね」と言った。ポツリ言ったその言葉が嬉しかった。彼女は、「○△□」のシリーズが好きなのだそうだ。

そして、河正雄氏の軌跡はまるで仏様の言われる「泥池の中から美しい蓮の花が咲く」が如く、今も変わらず世のため人のために活動されている活動には頭が下がる。

河氏が田沢湖畔に「祈りの美術館」を建てようと夢を抱いたのは、60年前のこと。当時観光客は年間200万人を越え、海外からも沢山訪れていた。町当局と4年に渡り交渉し、設計を重ね進めた。

しかし維持管理運営する財政の不足が理由で、宙に浮いてしまったのである。もしあの時、河正雄コレクションを収める美術館が建っていたなら、文化芸術意識の高まりに役立ってくれていただろうと残念に思う。弊社イズミヤ印刷が河正雄氏の著書出版するようになったのは、2006年から

で、これまで5冊出版させていただいた。表紙絵は全て河画伯による。

『祈りの美術』2006年…グラフィアページが34ページもあって、写真を見るだけでも美しく楽しい。春・夏・秋・冬と河氏とゆかりのある方々との出会いなどが書かれている。

『尋剣堂』(2008年)／『予響曲』(2014年)／『傘寿を迎え 露堂堂と生きる』(2018年)／『令和を迎え 仏光普照』(2019年)…河氏の歩みを何冊か出版して、記録の大事さをつくづく感じた。足跡を残すことは「日々一歩一歩」を書き残して行かなければならない。

昨年は『二つの祖国』の本を河さんから戴き、今年は河さんのクラス会に私も招かれて、深い感動を味わった。河さんは波瀾万丈のおいたちの中で、わが道を逸れなかったのは、人生の目標をきっちり持っていたからだと思う。

それは苦しくてもただ苦しいと憂え悲しむことやいやなことを言われてもむやみに憤慨することがなかったからだと思う。そして、一人ひとりの人間が心ひらいて語り合うことがいかに大切であるかを教えられ

た。

どの著書も心に響き、私の脳を活性化させるものだった。出版させていただいたご縁で、私が故意に見過ごしてきたことがどれだけあるのか気づくことも多々あり、知らずにご指導いただいていたことにたいして、感謝の気持ちでいっぱいである。

1999年11月11日に朝鮮人無縁仏の霊に捧げる「よい心の碑」建立記念追悼慰霊祭に参加したこと、2013年には、姉を誘って、光州市立美術館河正雄コレクションを訪ねたことが思い出された。

平成7(1995)年に初めて韓国へ言ったときの、つれづれなる思い出の文である。『河氏の御招待で国際美術展「境界を越えて」第1回光州ビエンナーレの祝祭行事として『わらび座 韓国公演記念ツアー』に参加したときのこと。夫は3年前に他界したが、夫婦で参加した最後の旅行らしい旅行だったと思う。

「すみません。私の夫がまだ乗っていないの。」と添乗員に青い顔をして言った私。「こちらの旦那さん、お手を上げてください」の

声に、後ろを振り向いたら、しっかり座っていた夫。「御主人様、奥様の側を離れてはいけませんよ。」と……バスの中は笑いの渦になり、私の顔は赤くなる。

キムチ料理がすっかり気に入ってしまった私。1日30種類の食品を簡単に摂取する調理に関心。肉に野菜を捲いて、味噌はちよつぱり辛くて。飽きの来ない料理にわれもまねたり。

高麗磁器に目をみはる。非のうちどころのない優雅な形態と独創的な象嵌技法による繊細巧緻な文様。芸道一筋に、千年の神祕を再現するような精魂傾けての手作り。娘に井戸茶碗を買ってやる夫、ロットテワールドの民族博物館は韓国人の生活の源を訪ね、その中に秘められた民族精神をみたような気がする。5千年の悠久な歴史と輝かしい文化遺産を分かり易く伝えようとしている。先祖の生活と文化の香りを、まさに後世に受け継いでいる。模型で再現されているところが見やすいし、スペースの関係からよく考えて作られている。

格別楽しいツアーで、夫と一緒に行ってよかったと、笑顔を出す。

## わらび座と河正雄

山川龍巳

1952年生まれ。仙北市。元わらび座社長

良い意味での宗教と文化芸術でしか人間は、もう救われないのではないか！これからは全ての考え方の基準を生命史と人類史に照らし合いながら判断すべきではないのかと思う。

わらび座は1951年、第2次世界大戦の傷跡の残っていた東京の西新宿で3人の小さなグループとして誕生した。

2年後の1953年に9名のパフォーマーが、民族芸能の宝庫と言われた秋田県仙北市の神代という地域に定着した。この劇団を率いたのは旧制大阪高校から東京大学に行き、最終的には東北大学の経済学部を卒業したベートーヴェン音楽の研究者、作曲家でもあった原太郎である。

彼が40年も前に私達の劇団活動に参加したての若者たちに良く語っていたのが「ア

クセサリーとしての文化芸術活動でなく、生活必需品としての文化芸術の創造を！」ということだった。

文化芸術は東京でなければ本物ではないと言われ続けていた時期に、生産活動のど真ん中から仕事の本質を目指したいと彼は考えたのである。この考えに基づく行動に対し、地動説を唱えた学者・哲学者になぞらえ「コペルニクスの発想と展開」と評論した文化人もいたほどである。

今や「生活必需品の文化」の創造から「生存の必需品としての文化」の創造の追求こそ重要な時代に入ったと思える。

わらび座は日本の北東北に位置し、雪国でもある秋田県にある。東京や仙台から新幹線「こまち」でくれば秋田県の玄関口であり2009年、韓国KBSで放送された「IRIS」のロケ地にもなった。すぐ近くには武家屋敷と桜で有名な角館がある。

現在10万平方メートルの敷地内に、客席650のわらび劇場を中心にホテル、温泉施設、世界の地ビールコンテストで金賞を6年連続受賞している田沢湖ビール、レストラン、ブルーベリーなどの農業生産なども展開している。このブルーベリージャム

は、ANAの国内線ファーストクラスに採用されている。わらび座は現在、社員2400名のアートカンパニーである。

わらび座は韓国との関係もかなり深い。1995年ソウルの「芸術の殿堂」と呼ばれるアートセンターで開催された「韓国国際舞踊フェスティバル・国際舞踊会議95」に日本代表として招待された。

それは「第1回光州ビエンナーレ」に日本代表で招待され、野外舞台で3日間5公演を行い、1万人の皆さんに観劇いただいたからだ。

このツアーの名誉団長河正雄氏（光州市立美術館名誉館長）は「光州市は文化と芸術を愛する文化的土壌と市民意識が溢れている韓国を代表とする芸郷の都市」で、わらび座が戦後初めて公演することの喜びを語っている。

また「光州広域市が父母の故郷で、第2の故郷」と語っている。彼はわらび座のあるまちで小学生から育った。6年生（1953年）の時、生保内小学校体育館での公演を見たことが、わらび座との縁であるという。

2002年、日韓国民交流年を記念して朝鮮通信使をモチーフにミュージカル「つ

「ばめ」が2004年にソウル、光州、釜山の3都市5公演開催された。

この舞台を準備した日本を代表する脚本家・演出家のジエムズ三木氏は「文を以て武に報いる尊い精神を持った朝鮮通信使に対する畏敬の念から、この作品を作ろうと思った。そして歴史から抹殺されてしまっている彼等のことをもつと知ってもらいたかった。」と語っている。

日本でも在日2世、3世の韓国の皆さんが「日本人の良心を困難に感じた舞台は初めて。」と語ってくれた。韓国と日本の懸け橋になった舞台であった。

20世紀の日本は貧しかったこともあり、人も金も東京一極集中の中央集権で国家運営が成されて来た。これは何も政治経済だけのことでなく、文化芸術も同じだったといえる。東京から来るものだけが、本物で素晴らしいと地方の人ほど考えていたのである。

私は九州長崎の出身であるが地方都市の誰もが10代の頃、「夢は東京にしかない」と思い込んでいた。

世界のお金持ちトップ62人の資産と、世界人口半分にも相当する下位36億人の資産

が同じという特別番組が日本でも評判になった。なんとという歪さであろうか。

利潤を求め、より遠く、より早くをキーワードに展開したグローバルイズムは貧困と分断を世界中にもたらした。日本も韓国も含めて、世界の先進国と言われている国々では、もう利潤の獲得の場がないのである。国益を守るために国境で守られていた、あらゆる規則、障壁が取り払われ自由に人も金も情報も拡大したが、もう行き着く所まで行ってしまった感さえある。

この歪さを乗り越える力を私たちは持たなければいけない。その重要な一つが、ローカルイズムであると確信している。66年前に東京で誕生したわらび座が東北秋田に定着し、66年間継続した力が今、全国の心ある人たちから注目されている。

日本では地方からの新しい価値創造を目指して「地方創生」が呼び掛けられている。地域主権の魂を謳い上げる劇団として、日本全国から大きな注目を浴びている。

この星が出来た時に国境はなかったわけ  
で、国境が出来てから争いが始まり、殺し合  
い、憎しみの連鎖は留まるところを知らな  
い。命がこんなに軽んじられる時代がいつ

まで続くのだろうか。

しかし人類はこれまで、度重なる氷河期や幾多の困難を乗り越え、夢や希望を繋いで来たではないか。人間の創造力はそんなに弱くも曖昧なものでもないと思う。

文化芸術の仕事が今一番しなければなら  
ないことは、その心音を高々と語ることで  
はないか。日本のローカルな秋田に居て伝  
統に学べば学ぶほど、先人たちのその想  
いを新しいセンスで歌い上げなければなら  
ないと強く思う。

### 縁—わが心の韓国・朝鮮

—河正雄さんとの出会いから—

茶谷十六

1941年生まれ。秋田県仙北市。歴史学者。秋田県歴史教育者協議会会長。2010年 秋田県文化功労者表彰。2023年 文部科学大臣 地域文化功労者表彰

一 出会いの始まり

河正雄さんと親交を結ぶようになってから、30年ちかい歳月が流れたことになる。ふりかえって、あらためてこの歳月の間、河さんと語り合い、一緒に行動し、そして河さんとの縁によってさまざまな人々との出会いをもつことがなんと多かつたことである。

日本と韓国で、そして秋田・東京・川口・金沢と所をかえながら、交友をかさねてきた。この間、私は、自らの来し方、行く末について、今日のあるべきことについて多くのことを考えさせられた。そして10代、20代の若き日にわが心のうちに熱く燃えていたものが、今あらためて熱く燃えさかろうとしているのを実感するのである。

それは、「わが心のうちなる韓国・朝鮮」といふべきものかもしれない。



1991年9月22日、田沢湖畔の姫観音前で、朝鮮人無縁仏の慰霊祭がとり行なわれた。

1939（昭和14）年に建立されたこの像は、従来生保内（おぼない）発電所のための玉川導水路の建設による毒水の流入によ

って死滅した魚と湖神たつこ姫の霊を慰めるために建立されたものと言われてきた。田沢寺（でんたくじ）に保存されていた「姫観音像建立趣意書」から、隧道工事に従事して犠牲となった朝鮮人労働者を含む工事関係者を慰霊する像であることが明らかにされたのは、つい1カ月前のことであった。

姫観音前での慰霊祭のあと、田沢寺の墓地にちょうど1年前に建立された「朝鮮人無縁仏慰霊碑」の前で法要がいと生まれ、引続いて田沢寺の仏前で直会（なおらい）が行なわれた。

この席で、私ははじめて河正雄さんと話をする機会をもった。

河さんとはじめて顔をあわせたのは、ちょうど1年前、1990年9月23日、田沢寺の境内に「朝鮮人無縁仏慰霊碑」が建立され、その供養祭が行なわれた際であった。その日、雨上りの墓地に、色鮮やかなチマ・チヨゴリの衣装を着けた女性たちの姿が目にした。駐日大韓民国大使館の公使が弔辞をささげ、「民団」と「総連」の在日団体代表がならんで焼香する姿が印象的であった。碑の正面には、こう刻まれていた。

「無窮花 ふるさとを田沢と呼ばん彼岸

花」

この銘文の筆者が河正雄氏であった。大柄で端正な顔立ちのこの人は、微笑がうつくしかった。

この人が、河正雄さんなのかと、私は思った。田沢湖（たざわこ）町立図書館の「河正雄文庫」に並べられた書物を見て目をみはった日のことが思い出された。哲学や美術についての貴重な書物がならび、韓国・朝鮮の歴史や文化に関する著作が南北の隔てなく集積されていた。私は、この図書寄贈者の見識に深い感銘をうけ、この文庫の愛用者となっていた。河さんが在日韓国人2世であることを、私は、この日はじめて知った。

異国の地で強制労働に従事させられ、その犠牲となった朝鮮人労働者の発掘とその慰霊に取組む韓国人2世河正雄という人、私は心惹かれた。その人の人生やその志についてゆっくりと話をきく機会をもちたいと思った。そう思いつづけて1年がすぎた。この日私は、20数年も前に教師をしていた頃の生徒の作文をはじめ、自分が韓国・朝鮮について書きためてきた文章のあれこれを風呂敷に包んで持参していた。

盃をくみかわしながらどんな話をしたの

か、ほとんど思い出せない。河さんが廻ってこられるのを待つうちに、盃をかさねてすっかり酔いが回ってしまっていたのだろう。とにかく私は韓国・朝鮮の歴史や文化が好きなのだということを知りかえし語ったように思う。河さんが幼い日にわらび座の歌や踊りをみたことがあり、今もなつかしい思い出になっていると言われたことだけはつきり記憶に残っている。

「秋田に定着して40年をへたわらび座をぜひ訪ねていただきたい」「東京へ出たときは川口の我が家へよってください」。こんな会話を交わしあって別れた。

なつかしい旧知にあつたような喜びでいっぱいになりながら、再会を誓ってかたい握手をかわした。

二 「アジア舞踊フェスティバル in 秋田」の中で

1993年8月、アジア舞踊フェスティバルがわらび座を主会場として秋田県下で開催され、インド・香港・中国とともに、韓国から二つの舞踊グループが出演することになった。

李丁姫女史のグループの作品は、朝鮮人

従軍慰安婦を取り上げた「タジマス岬」であるという。私は、わらび座国際部の是永幹夫（これなが・みきお）氏を通して、田沢湖姫観音像の存在を伝え、この像の前で韓国の歌・踊りを演じていただければ、地下の霊たちがどれほど喜んでくれるであろうとお願ひした。日ならずして返事があつた。姫観音にささげるための舞踊を創作して献じたということであつた。

フェスティバルの期間中、わらび劇場のロビーに河さん所蔵の絵画を展示して「韓国現代美術展」を開催できないだろうか。突然のこの途方もない申し出を、河さんは即座に快諾された。会場の下見から作品の輸送、展示までのいっさいを自ら陣頭指揮をしてやってくださり、劇場ロビーが美術館に生まれかわって、「韓国現代美術展」が実現した。

8月11日、田沢湖姫観音像の前で、朝鮮人無縁仏追悼慰霊祭が執り行なわれた。

台風襲来の予報が出されたこの日、空には黒雲が走り、田沢湖の水面がはげしく波打っていた。僧侶の読経と参列者一人一人の焼香のあとで、日韓両国の舞踊家による献舞が行なわれた。

純白のチマ・チョゴリに身をつつんだ李丁姫さんは、舞にさきだつて、韓国から持参した赤土を観音像のまわりにまいた。祖国の土にかえることのできなかった人々の魂への心をこめた散華であつた。

哀切きわまりない曲にあわせて、韓国の伝統舞踊サルプリが舞われた。観音の台座に体をすりよせて嘆き、湖面に身を乗り出してはるかな空を見上げる姿に胸うたれた。白い絹布サルプリがはげしく風になびいた。わらび座の安達真理（あだち・まり）さんが、鹿児島県川内市（せんだいし）につたわる盆踊り「想夫恋」をもとにした舞を舞った。「想夫恋」は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際にかりだされた兵士や軍夫の妻たちが、出征したまま帰らない夫を偲んで舞ったという言い伝えをもっている。

哀調をおびた胡弓の調べがむせぶように流れ、能（のう）の仕舞（しまい）のような緊迫した動きのなかに万感の想いをこめた舞が美しかった。

二人の舞がおわつたとたんに豪雨がやってきた。無縁仏たちの涙雨だと、参会者の誰かが一様に語り合った。

慰霊祭のあとの直会の席で、河正雄さん

は、韓国語と日本語の両方で次のような挨拶をした。

「本日は、大へん御多忙の中、また早朝より雨降る中での田沢湖姫観音像・田沢寺での朝鮮人無縁仏慰霊祭にご参列くださいましてまことに有難うございました。特に韓日両国の舞踊家が姫観音前で慰霊の舞を舞ってください、天国のみ仏様がどんなに喜んで涙してくださいっていることか。永遠に記録され、人々に記憶される心温まる記念すべき行事でありました。私たちは心新たにして日韓の友好親善を深め、交流すること、そして共に力をあわせて世界人類の平和と福祉向上のために寄与することをお互いに誓いまいましょう。舞を舞って慰霊してくださいました李丁姫さん、安達真理さん、法要を営んでくださいました槎湖(さこ)仏教会の各ご住職様方、本日もご参席くださいましたすべての皆様様に、心より感謝申し上げます。皆様方のご家庭の平安とご健勝をお祈りして謝辞といたします。カムサハムニダ」。

日韓両国の歴史の上でのもっとも不幸な時代に、東北秋田の僻村の人々が精一杯の良心の証として建立した姫観音像、半世紀

以上をへたいま、日韓友好の魂の交流の場として新たな輝きをはなとうとしている。

私は、そのこの意味の深さ重さを、しみじみとかみしめた。

### 三 舞姫―崔承喜のこと

高校2年生の時であったと記憶する。薄暗い図書室の片隅で、私は、机のうえにひろげた1冊の古ぼけた写真帳のページに目を通すにつけられたまま長い時間をすごしていた。

それは、見なれぬ朝鮮の舞姫の写真であった。純白の白い衣装を着け、腰に大きな鼓のような楽器をさげ、細いバチでそれをうちながら踊る朝鮮女性の舞い姿であった。私はその美しさに魅了された。手指から足の爪先にいたるまで、全体の流れるような姿態の優美さ、哀しいまでに澄んだ瞳の清純さ、かすかな微笑をたたえた口元の可憐さ、バチをにぎって鼓を打つ細い手指の美しさに心をうばわれた。

朝鮮という国家や民族についてまったく知識をもたず、かすかな嫌悪感さえ抱いていた私にとって、これは意外な体験であった。そして、この舞姫の不思議な美しさが、

強烈な印象として私の脳裏にやきつけられた。

大学の史学科にはいった直後の私に、朝鮮史の専攻を決意させたのは、ふとよみがえったこの舞姫の映像であった。私の心をとらえてはなさなかったあの舞姫の美しさを、そしてその美しさを生み出した朝鮮の文化や歴史を、心行くまで探求したいという衝動が、激しく私をかりたてたのであった。

専門の勉強をするようになって、私は、朝鮮民族の作り出して数多くの美しいもの、すぐれたものを知った。そして、そうしたすぐれた朝鮮の文化が日本文化の発達に大きな影響を与えていることを知った。広隆寺(こうりゅうじ)の弥勒菩薩(みろくぼさつ)の流れるような手指の動きや、法隆寺(ほうりゅうじ)の百済観音(くだらん)のかすかな微笑をふくんだ口元に、さらに高麗青磁の透徹した薄緑色の肌に、高校時代に見た舞姫の映像を見出だしたとき、それは私にとってたとえようのない驚きであり喜びであった。朝鮮史を専攻したことに、私は無常の幸福感を味わうのであった。

たった一枚の写真が高校時代の私の心を

魅了し、朝鮮史専攻に私をいざなってくれたこの舞姫が、崔承喜と呼ばれる朝鮮第一の女性舞踊家であるということを知ったのは、ずいぶん後のことであった。そして、彼女の数奇な生涯とその仕事の全貌にふれることができたのは、随分後のことである。

1995年1月、私は、ソウルの河正雄さんのアパートで、中央大学校教授鄭昞浩先生にお会いした。鄭先生は、『韓国の民俗舞踊』をはじめ多くの著書によって日本にもよく知られた韓国の芸能研究の第一人者であった。

話題が崔承喜におよんだとき、鄭先生の瞳がきらっと光った。そして、そこからすぐにタクシーで先生のご自宅に案内された。

日本と韓国の民俗芸能に関する図書が整然とならべられた書齋で、鄭先生は前年1994年末に出版されたばかりの高嶋雄三郎（たかしま・ゆうざぶろう）・鄭昞浩編著『世紀の美人舞踊家崔承喜』をしめして、1990年代に入って、韓国においても崔承喜についての紹介や研究が解禁となり、その仕事の再評価が始まっているとのことを熱烈に語られた。5月には、韓国で崔承喜についての本を出版する計画をすすめている

という。

「鄭先生がお書きになった書物をこれまでに読ませていただいて、その精緻な内容から、もっと謹厳な方だと想像していたのですが、先生は、すばらしいロマンチストですね」

私は、失礼をかえりみず率直な感想を申し上げた。

「いや、私は、若い時に崔承喜にすっかり惚れてしまったんですよ。」

老大家の頬がほんのりと赤くなった。

地下鉄景福宮駅でおりて、国立中央博物館の前まで送ってくださいました鄭先生の手をしっかりと握りながら、私は、30数年前に高校の図書室で見た古い写真帳のなかの崔承喜の舞い姿を思い出していた。

鄭昞浩著『踊る崔承喜』が出版されるとすぐに署名入りの御本をお送りいただいた。

その後、鄭昞浩先生が生涯をかけて集積された崔承喜関係の映像や資料が、河正雄さんの手を通して見事によりみがえり、光州市立美術館の河正雄コレクションとして収蔵されることとなった。「火花の如く風のように、舞姫崔承喜」のテーマで崔承喜誕生100周年記念展（会期2011年4月7日

（6月19日）が開催された。

四 李光洙と石川啄木

私の書棚のかたすみに長年来大切にしている古い詩集がある。金素雲訳『朝鮮詩集』（興風社）がそれだ。上・中・下の全3巻で刊行の予定が、上・中2巻が出ただけで下巻はついに出版されなかった。1943（昭和18）年にこのような書物が出されたこと自体奇跡とっていいだろう。

この中に、李光洙の詩がある。

歴史家

歴史家よ

きみの歴史は嘘っぱち。

われらの愛が誌されてない歴史

そんな歴史があるものか、

われらの愛の破綻が誌されてない歴史

そんな歴史は知れたことさ、嘘八百さ。

歴史家よ

きみの筆は追ひまはすー腹芸の茶番狂言や、からくりの外交を、

抱けれどきみは知るまい

たんぼの畦みち

牧場を吹く風のそよぎに  
まことの歴史のかくれてゐるのを。

歴史家よ

吾が子の習い覚えた片言を きみは書いたかね

おつむてんでん あんよは上手を 書いたかね

遊び疲れて寝入ってゐる無心の寝顔も入ってゐるかね

それのない歴史なら知れたことさ、嘘八百さ

高麗時代の地方制度をテーマとした卒業論文の執筆にとりかかっていた私にとって、李光洙のこの詩は、衝撃であった。豪華な背表紙に金文字の光る朝鮮総督府発行の『朝鮮史』全35冊を前にして、私は、何度もこの詩を朗誦した。

そして、高校3年の「日本史」の授業を思い出した。

担当の浅香年木(あさか・としき)先生が、黒板いっぱい到大書されたチョークの文字がくつきりと思ひ出された。

「現在の日本を愛するあたわざるもの

は、さらにいつそう真に日本を愛するものなるべし」

1910(明治43)年の「大逆事件」で、幸徳秋水達が処刑された日の日記に、詩人・石川啄木(いしかわ・たくぼく)が書き記した言葉だという。浅香先生は、さらに啄木の次の一首をしめされた。同年に行なわれた「日韓併合」に際して啄木がつくった和歌であるという。

「地図の上 朝鮮国に黒々と 墨を塗りつつ秋風をきく」

大逆事件と日韓併合、両国の人民にのしかかった汚辱の時代の幕開けを、文学者の鋭い感性が予感したものといえよう。

大学を卒業されて間もない浅香先生の精緻な授業は、生徒たちの知的好奇心を充分に満たしてくれた。3年生の3学期、受験勉強も追込みにはいって、自宅勉強と称して登校しない生徒も多くなる。そういう中で、浅香先生の「日本史」の授業だけをきくために、登校する生徒も少なくなかった。

浅香先生の授業は、一言一言が心にしみ

た。

60年安保闘争を目前にしたこの時期に、浅香先生が、啄木の言葉と和歌に託して語

りかけたことの真意は何だったのか、先生が早世された今、それを確かめる術はない。李光洙と石川啄木、韓国と日本の2人の詩人の言葉が、歴史を学ぶことの意味を、今もするどく問いかけている。

韓国・朝鮮の歴史を学ぼうとするとき、人々の愛と知性、喜びと悲しみを知ることこそ、その国、その民族を研究する日本人のもっとも大切なテーマだと思う。

河正雄著『望郷―二つの祖国』の中に次の一節がある。

「歴史家は、私の夢と希望を育て、まし導いてくれた詩である。いまも私の一番の理解者であり、熱く抱擁をして私の行く末を見守ってくれている。」

同じ年、1959(昭和34)年3月に高校を卒業した同世代であるにしろ、河さんと私が、李光洙の詩「歴史家」を、人生でもっとも感銘を受けた作品として大切にしていることは、不思議な縁というしかない。

五 ふるさとは 遠きにありて  
私の故郷は、金沢である。生まれたのは郊外の小村であるが、高校・大学のもっとも多感な時期を金沢ですごし、さらに教職にあ

った数年間を金沢に住んでいたから、金沢を郷里といっても、まんざら詐称ではない。

1983年の秋、日本歌謡学会の大会が、金沢で開催された。韓国の留学生金孝子(キム・ヒョジャ)さんにお会いしたのは、この時であった。金さんは、韓国光州市の出身で、当時東京大学に籍をおいて、日本の古典芸能である能楽(のうがく)の研究をしておられた。

金さんをはじめ数人の研究者たちを案内して夜の金沢を歩いた。20年ぶりで学生時代にかえった気分で、心が浮き立っていた。金さんが、金素雲の愛弟子であり、室生犀星(むろう・さいせい)の詩につよい愛着をもっておられることを知って、特別の親しさを感じた。

ふるさとは、遠きにありて思うもの

そして哀しく歌うもの

よしやうらぶれて、異土の乞食(かたい)となるとても、

かえるところにあるまじや

ひとり都の夕暮に

ふるさと思ひ涙ぐむ

その心もて

遠き都にかえらばや

遠き都にかえらばや

私は、犀星の詩を朗唱して、この詩がふるさと金沢への決別の歌であり、単なる望郷・愛郷の歌ではないことを力説した。

「あなたは、金沢の人でありながら、犀星のふるさを思い、ふるさを愛する心をそんなふうにしかり理解していませんか。犀星が、この金沢の町をどんなに愛していたか……」

金さんの目がきびしく光っていた。哀しいまでに澄んだ瞳が涙にうるんでいた。韓国の若き才媛の心の深さに思い至って、私は、わが不明を恥じるばかりであった。

北海道の森山弘毅(もりやま・こうき)氏が、柳宗悦(やなぎ・むねよし)の「失われんとする朝鮮建築のために」という文章の一節を朗唱した。

「光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫ろうとしている。お前がかつてこの世にいたという記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしている。どうしたらいいのであるか。私は想い惑っている。」

李氏朝鮮王朝の王宮景福宮の真正面に朝鮮総督府の巨大な庁舎が建設され、王宮の正門であった光化門が破壊されようとした時に、民芸運動の提唱者であった柳宗悦が敢然としてこれに抗議した文章である。

ひえびえと澄んだ夜の空気の中に、森山氏の力強い言葉がひびいた。国文学者森山氏の節操と、朝鮮文化に対する想いの深さがしみじみと伝わってきた。

夜空に浮かんだ金沢城(かなざわじょう)の城門、石川門(いしかわもん)の壁面の白さとともに、忘れがたい一夜であった。

1993年4月、初めて韓国を訪れた夜、私は、古いアドレスをたよりに慶州のホテルから金孝子さんあてに電話をした。「もしもし、金先生のお宅でしょうか」。受話器の向こうからは早口の韓国語が聞こえてくるばかりで、なんのことかさっぱりわからない。相手には、日本語はまったく通じないらしい。これはえらいことになってしまった。まったく韓国語を解しない私は、ただうろたえながら、「ヨボセヨ、ヨボセヨ、キムヒョジャソンセムニム ケシムニカ」をくりかえすばかりであった。相手の声はだんだん激しい罵声にかわっていった。

わきでこの様子を見ていた河さんが受話器をとって流暢な韓国語で話しはじめた。

ひとしきり話をして受話器をおくなり、河さんは思わず吹き出した。あとは二人で大笑いになった。金孝子さんはずっと以前に転居してしまつたらしく、現在の住人は、まったく心当てがないという。突然の日本語の電話に面食らつて、相手はカンカンになつて怒っているらしい。初めて韓国の地を踏んで早々とんだ失敗をしかしてしまつた。私は、河さんにむかつて、ただひたすら陳謝するしかなかった。

その後、間もなく不思議な巡り会わせで金孝子さんとお会いすることになった。金さんは、崔承喜研究の大先達・鄭炳浩先生が青年教師として赴任した光州高等女学校での教え子で、現在は韓国の日本文学研究会の会長であるという。数十年ぶりに再会した喜びを語り合うお二人の側で、私は人の世の縁の不思議さをしみじみと感じていた。

#### 六 夏瀬（なつせ）ダム―朝鮮飯場

暑い夏の日、河さんのシャツはしぼるような汗でびっしょりぬれていた。背丈をこえるような草を掻き分けながら、2人は、深

い溪流を見下ろす断崖のうへの杉林の中を歩きまわつた。

敗戦の色が日に日に濃くなつた1944（昭和19）年5月、朝鮮の釜山から下関に上陸して、鉄道を乗り継いで生保内（おぼない）線（現田沢湖（たざわこ）線）の神代（じんだい）駅に降りたつた朝鮮人の一団があつた。夏瀬ダム建設工事のために強制連行された朝鮮人徴用工達であつた。

およそ400人の人々は、朝鮮飯場と呼ばれた粗末なバラック建ての建物に収容されて、夏瀬（なつせ）ダム建設のための道路開削工事に従事させられた。深い溪谷に面した断崖の岩肌を削つて道路を作る工事は困難をきわめた。ダイナマイトによる発破作業中に事故の犠牲となつたものも少なくなかつたという。

神奈川県横須賀市に住む李用鎮さんは、19歳の年に強制連行されて神代駅に降ろされ、そこから真つすぐ夏瀬ダムの工事現場につれていかれた。仲間の事故を目のあたりにして、このままではいざれ殺されると逃亡をくわだてたが失敗した。みせしめのために殴る蹴るの暴行を受けた李さんは、肋骨を数本折る重傷をおい、生涯癒えるこ

とのない不具の体になつてしまつた。

1994年5月、連行された年からちょうど50年目に神代駅（じんだいえき）に立つた李さんと一緒に、かつてのトロツコ道を歩いたが、李さんが収容されていたという飯場のあとを探すことができなかった。

ちょうど半世紀も前、言葉もろくにわからぬ異国の地で、強制労働に従事した場所を確定することは不可能に近い。しかも李さんの体は、山中の山坂道を歩きまわるにはあまりに衰弱がひどい。

李さんの記憶は驚くほど正確であつた。その証言によつて、半世紀前にあつた夏瀬ダム工事現場での朝鮮人強制連行の実態が紛れもない事実として明らかになつた。

李さんの証言は、「朝日新聞」秋田版に、「夏瀬ダム強制連行の記録―徴用朝鮮人50年目の証言」として7回にわたつて大きく報道された。

朝日新聞社大曲通信局の横村出（よこむら・いずる）記者と2人で、この地域の土地にもっとも明るい佐藤隆（さとう・たかし）さんの案内で、ついに飯場の跡を確認することができた。

大きな炉の跡や下水溝など建物の痕跡が

くつきりと残されていた。400人の朝鮮人土工たちが起居したというこの場所は、土地の人たちから「朝鮮飯場」と呼ばれていたという。李さんたちが、炭焼きの農夫から握り飯をわけてもらったという炭焼き釜の跡もすぐ近くに点在していた。

この日、私は、河さんを案内して、再びこの場所に立ったのだ。草いきれの中から、人々の気配がさわさわと迫ってきて思わず鳥肌が立った。望郷の思いを胸に、苛酷な労働に従事させられた人々の痛恨の気持はいかばかりであったろう。河さんが茫然とたたずんだまま遠い空を仰いでいた。その眼差しの向こうに、碧緑色の玉川の水が音をたてて流れ、赤い岩肌をむきだしにした対岸の絶壁が、まぶしく光っていた。二人は言葉を失ったまま長い時間をすごしていた。

帰途、河さんがポツンと言われた。今度来るときは、きつと水と塩をお供えしてほしいと。

## 七 韓国―心の旅

1995年1月7日、私は2度目の韓国旅行に旅立った。

河正雄さんがオモニの先祖のお墓を整備してその完成の法要に出席するので一緒に行くときさそってくださったのだ。

河さんのオモニ金潤金さんは3歳の時に父親に先立たれて、その顔も憶えていない。たった一人の娘だったので、郷里の霊巖に父親の墓を作って祭ることが長年来の悲願であった。

河さんの祖父は低湿地の田んぼのなかに埋葬されており、雨の日には一面水浸しになっていた。オモニはそのことをとても気にして悲しんでいた。

10数年前、河さんは山麓の日当たりのよい場所に土地をもとめて、そこに祖父の墓を作り、祖父の縁戚の墓もすべてここに移すことにした。一族総出で土饅頭の墓づくりをした。その時の写真を見せていただいたことがあった。

この時につくった墓が長年月をへてくずれてきたので、あらためてつき固め、あわせて墓域全体の整備をするのだという。

先祖の祭祀を大切に韓国では、墓を作ることは最大の徳とされ、孝行とされている。母方の祖母とその一族の墓を整備するこ

とは、河さんにとって生涯の事業であり、オモニへの最大の孝行であろう。その場に招待されるとは、私にとっても生涯の至福といわなければならぬ。私は、感謝して御厚意に甘えさせていただくようお願いした。

成田からソウルへ、ソウルから光州へと飛行機を乗り継いで、光州で2泊、車で霊巖にむかった。

ソウルから光州へ、光州から霊巖へと近づくにつれて、日ごろ控えめで言葉数のおおくないオモニの口から流暢な韓国語が発せられ、それが時をへるにしたがって次第になめらかになっていった。顔の表情に生氣があふれ、瞳がキラキラと輝いた。

霊巖の朝、一面に濃い霧がかかっていた。迎えの車に乗って宿を出たのは午前10時すぎであった。外の空気は、痛いようにつめたかった。

霧がさけて月出山(ウォルチュルサン)の峰々が姿をあらわした。車をおりたオモニが墓地にむかって田の畔道を歩みながら、月出山の頂きにむかって手を合わせる。それは、一幅の水墨画を見るような光景であった。

墓地について驚いた。石材があちこちに

分散して置かれているが、工事はまだほとんど始まったばかりだ。たくさんの人たちが集まっているが、まだ仕事にとりかかってはいない。

河さんとオモニの到着を待って、これから作業が始まるのだという。

土饅頭のでっぺんに立った老人の指示で土饅頭の前に大きな台石がすえられ、見る見る祭壇が築かれていく。手ごろな木の棒と縄を使つて、墓石の位置と方角を決め、仕事の手順を的確にリードする。これが風水師と呼ばれる人であろうか。

一時間もたたないうちに工事は完了した。土饅頭のうえに新しい土が盛り上げられ、芝生とともにつき固められた。

「学生金海金公京鉉之墓」の墓碑がたち、石造りの祭壇がしつらえられた。祭壇には祭器に盛った供物が飾られ、祭祀がはじまった。

河さんが、自著『望郷―二つの祖国』と「平和教育読み物資料集 田沢湖姫観音」の2冊を供え、日本から持参した酒の口を切った。私は、この時のために持って来た湖宝焼（こほうやき）の盃を二つ差し出した。河さんがこの盃になみなみと酒をついで祭器の

うえに飾ってくださった。

河さんとオモニが、そして親族の人々が一人一人祭壇の前に進んで深々と頭を下げた。

月出山の頂きに太陽が輝いて、霧がすっかり晴れた空が紺碧に澄みわたっていた。オモニの顔に満ち足りた喜びの笑みがうかんだ。河さんの目がかすかに潤んでいた。

韓国語で語り合う人々と酒を酌みかわしながら、私は故郷の村の祭りの光景を思い出して心が和んだ。7年前に亡くなった故郷の母の面影が脳裏にうかんだ。

#### 八 田沢湖祈りの美術館

田沢湖畔に姫観音像がたっている場所は、玉川からの導水路によって導かれた水が田沢湖に流れこむ場所であり、かつてはここに、工事のための事務所や飯場がたち並んでいたところだ。

この土地に、「田沢湖 祈りの美術館」を建てたいという計画をきいたのは、ずいぶん前のことだ。

姫観音像のすぐ近くに土地を取得して、美術館を建設し、河さんが30年以上にわたって蒐集してきた在日韓国人・朝鮮人画家

たちの絵画を中心とする美術品を展示して、工事の犠牲となつて無念の死をとげた人々への慰霊のよすがとしたというのだ。

在日韓国人建築家伊丹潤氏による設計図は、韓国の古い石蔵をモチーフとして設計され、玄関の壁面を飾る陶板や、ステンドグラスの窓かざりもすでに出来上がっているという。河さんの書斎には、美術館正面に安置するための澤田政廣氏作の木彫の観音像が仮安置されていた。

「田沢湖祈りの美術館」、玄関にかかげる看板の文字は、最後の韓国皇太子李垠殿下妃李方子女史の揮毫になるものだ。ここに数百点の絵画・彫刻・陶磁器をはじめとする美術作品を収蔵・展示しようというのだ。

私は、この美術館建設に寄せる河さんの想いの深さと構想の雄大さに圧倒されるおもしろいであつた。

現代の世界各地で活躍する韓国・朝鮮人芸術家の作品をあつめたこの美術館が実現したら、日本ではもちろん唯一のものである、世界にもまれな施設となるであろう。そしてこの美術館建設にこめられた祈りは、ここを訪れる人々に大切なメッセージをおくり続けることであろう。

「田沢湖祈りの美術館」建設の計画は、河さんの懸命の努力にもかかわらず、ついに実現しなかった。地元の自治体当局者の無理解がその根本原因であった。

ここに収蔵される予定であった美術品の大半が、光州市立美術館の河正雄コレクションとして海を渡ることになったのである。

「田沢湖祈りの美術館」は、幻の夢でしかなかったであろうか。私は、それがいつの日か必ず実現するであろうことを信じたのである。

#### 九 わらび座、韓国公演

1996年、民族歌舞団わらび座は創立45周年を迎えた。1951年、朝鮮戦争のさなか、反戦・平和と民主主義の歌声として始まったわらび座の活動は、東北秋田の地に根を生やして、民族芸能の継承発展を重要な骨格として展開されてきた。

この数年来、ヨーロッパやアジアの国々での公演が繰り返し実現し、日本の民族芸能の芸術性が国際的な普遍性をもちうるというところに、私たちは新たな確信をにぎりなおした。

1993年3月の訪問以来、河さんはた

びたびわらび座の本部に立ち寄られるようになった。とくに同年8月に開催された「アジア国際舞踊フェスティバル」の際には、「韓国現代美術展」の展示作業もふくめて、一週間わらび座に滞在して、わらび座の現状を目のあたりにするとともに、多くの座員たちと直接ひざを交えて語り合った。

さまざまな人たちを案内してわらび座を訪ねられるたびに、わらび座の舞台や民族芸術研究所の仕事について、自分の身内のことのように誇らかに説明する河さんの姿を、私は微笑ましく、有り難く眺めてきた。

「つかれていても、わらび座に来ると元気が出るし、わらび座の人たちと話していると、勇気がわいてくる。わらび座は私のふるさとだし、私の誇りだ」

こんな言葉が、たびたび河さんの口から発せられるのを、私は胸の熱くなるような気持ちで聞いた。

わらび座の舞台をいつの日か韓国で上演したい。河さんと出会ってから、私はそのことを強く考えるようになった。河さんの故郷田沢湖町に本拠地をおき、河さんがこのように熱烈な愛情をそそいでくれるわらび座の舞台を、私が愛してやまない韓国人

たちに是非とも見てもらいたい。そういう思いが、顔をあわせるたびに強まっていた。韓国公演の夢が、二人の間でたびたび語り合われるようになった。

この年来の夢がついに実現することになった。しかも、戦後50年の1995年、7月のソウルと9月の光州で、2度にわたって行なわれることになった。

7月のアジア国際舞踊フェスティバルと、9月の第1回光州ビエンナーレ、二つの国際的な祭典への出演が実現した背景に、河さんのさまざまな尽力があったことは言うまでもない。

9月20日から2カ月間にわたって開催される光州ビエンナーレは、この年、韓国で行なわれる最大の国家的イベントの一つであった。

祖国光復50年、光州事件15年にあたる1995年を期して開催するこのイベントに寄せる韓国国民、とりわけ光州市民の想いはあつかった。

光州ビエンナーレ宣言文には、つぎのようにうたわれている。

「1995年、時代の曲がり角にあつて、光州ビエンナーレは新しい芸術の秩序のた

めに、錨を上げて出発をなす。光州、韓国そして世界の歪曲を主体的に克服し、芸術のすばらしさにあふれる和合の広場を実現するため、その機首を開かれた世界へと方向を変えている。

光州ビエンナーレは、西欧化より世界化に、画一性より多様性のために、芸術の集中的適応力を育てていくつもりである。芸術の在り方を、未来指向と現実認識に均等に適応し、伝統の価値を生き方と精神の中に探し出す文化運動として成熟させなければならぬ」

韓国第一の文化都市であり、つねに民主運動の拠点であった光州市から、民主的市民精神と芸術的伝統を骨格として、全世界に向けて発せられるメッセージは、格調高く気宇壮大だ。

日本の働く民衆が、生活の中で喜びや悲しみ、願いや祈りを、率直に表現してきた歌や踊り、豊富な民族芸能をもとにわらび座が生み出してきた舞台が、今日の韓国人々の心にどのように響くことだろう。私は、いくらかの不安をともしないながらも大きな期待と確信をもって公演の日を心待ちにした。

第1回光州ビエンナーレの野外舞台で行なわれたわらび座の公演は大成であった。出演した演技者全員が、山かげにひっそりと葬られていた「光州事件」の犠牲者のお墓に詣でて、金芝河作「焼けつく渴きで」を合唱した。芸郷・義郷としての光州市の精髓を深く心の底に銘じた場面であった。

わらび座ミュージカル「つばめ」(作・演出 ジェームス三木、時代考証茶谷十六)が、ソウルの国立劇場と共に、釜山市と光州市で上演されたのは、2001年3月のことであった。

#### 十 「李方子日記」のこと

李方子女史(1901—1989)は、父梨本宮守正と母伊都子の長女として誕生し、李王家最後の皇太子李垠殿下の妃となり、激動の時代を日韓の挟間に生きて、「流転の王妃」「悲劇の王女」などとも呼ばれている。この李方子女史の遺品684点が河正雄さんから駐日韓国大使館を通して韓国政府に寄贈されたのは、2008年12月のことであった。

資料の内容は、写真、手紙、日記など、これまでまったく未公開の貴重なものであ

た。河さんは、韓日近現代史を知る貴重な資料として、韓日で共同研究して一般公開したいとの意志を明確にして、寄贈された。

この貴重な遺品は、各国政府を通して国立古宮博物館に移管され、永久所蔵されることとなった。

この貴重な遺品のうち、日記、手紙類は、手書きの達筆で書かれているので、古文書解読の専門家である貴方にぜひとも解読の仕事を担当して欲しい、河さんから、こういう趣旨の電話をいただいたのは、仙台市のM女子大学で、芸能文化論の集中講義をしていた最中のことであった。大へん興味のあることなので、ぜひともやらせてほしいとの返事をした。ところが数日後、博物館には日本語の専門家がいたので必要がないと断ってきたことであった。

約1年後の2009年9月、再び連絡があつて、博物館のスタッフではとてもできないのでぜひとも御願いしたいとの依頼であった。しかも発表・公開の都合から、出来るだけ短期に遣り上げてほしいとのことであった。

間もなく資料のコピーが送られてきた。手紙33通、葉書124通、日記1冊、であ

る。

私は、全体を通覧して、その内容の貴重さに驚嘆した。特に日記は、1919（大正8）年のもの、李方子女史が満18歳で、李垠殿下との婚約中、1月25日に結婚式が予定されていた直前の21日に、急遽李太王の急死の報が入って、婚儀は中止、1年延期となり、3月5日に予定された李太王の国葬の直前、3月1日に、いわゆる「3・1独立運動」が起こる。まさにその年の日記なのだ。

2年前の8月3日、16歳の夏に、異国の王子との自分自身の婚約のことを新聞記事で知らされた彼女が、結婚への意志を固めた矢先の突然の延期を契機として、婚約者李垠殿下との理解と愛情を深めていく過程が、みずみずしい筆致で書き綴られている。

1月21日、車25台分の婚禮道具を運び込んだ直後に、李太王の急死を告げられた時の歎き、3月1日、朝鮮で起こった変事への心配、帰国した殿下が訪問してくるたびに心をときめかせる乙女心、清少納言の『枕草子』か、紫式部の『源氏物語』を彷彿されるような、美しい文躰と文字で書かれた日記文学の珠玉の一遍と言ってよいのではないか。読み進みながら私はそんなことを考え

た。

全体を拡大コピーして、右脇に赤ペンで解説文を筆写し、それをパソコンに打ち込んで活字化した。全文を筆写、入力するのにどれだけの日にちを要したことだったろう。出来上がったデータを国立古宮博物館へメールで送り届けた。

すぐに返信があった。博物館には、日本語に堪能な人材が多いが、送られた文章は誰もよく理解できないとのことであった。

学習院高等科の秀才であった彼女の日記は、まさに王朝文学のような名文で書かれていたのだ。私は、改めて現代日本文に翻訳して送り届けることになった。

朝鮮国の王子と、日本国の皇族の子女が、政治の大きな力によって結び付けられた中で、一人の若者と少女として、人間同士の愛情を育んでいく様子がみずみずしい表現で吐露されている。

婚儀が1年延期されて、人間的な信頼と愛情が深められたことが、お二人の人生にとって特別に重要な意味をもったのではなからうか。

李方子女史が、日本の敗戦、韓国の光復の後、さらにさらに激動の時代をのりこえて、

「韓国人として悔いなく」生きた、その原点がここにあったのかもしれない。

2011年11月22日から2012年11月31日まで、国立古宮博物館において、李垠・李方子女史の遺品資料を中心とする「河正雄寄贈展」が開催された。268ページに及ぶ精細な記念誌に、「李方子日記」の日本文と韓国文が全文並べて記載されたことは、何よりのよろこびであった。巻頭に、翻刻者として私の氏名が明記されていることは、何よりの光栄である。

日韓の共同研究によって、歴史観を豊かにし、日韓近現代史に新しい視点をという河正雄さんの提唱は始まったばかりである。これからの大いなる発展を期待したい。

#### 十一 韓国・朝鮮と私の「縁」

高校時代の崔承喜との出会い以来、私は、韓国・朝鮮の文化や芸術について、あついで懐と愛着を持ちつづけてきた。

私の心の底に、長年にわたって伏流水のように流れつづけてきたこの憧憬と愛着の心が、河さんとの出会いを通して、奔流となつてさかまきはじめた。

1995年1月16日、映画『風の丘を越

えて「西便利」の撮影監督・鄭一成カメラマンをともなつて、河さんが深い雪におおわれたわらび座本部を訪れた。オモニと3人での韓国への旅行から帰つてすぐ、十文字映画祭の韓国映画シンポジウムのゲストとして、鄭カメランを案内してこられたのだ。私は、先日ソウルでもとめてきたばかりの高麗青磁の茶碗で抹茶を点でて、揮毫をお願いした。河さんは、桐箱の蓋に「縁」の字を書いてくださった。私は、これを茶碗の銘とすることにした。

私は今、韓国・朝鮮と私、河さんと私との「縁」についてしみじみ考える。そして、自分自身が一人の日本人として、一人の人間としての生きることの意味について考える。一人の日本人としての矜持を保つために、いま私になさねばならないことがあまりに多い。

(2023年8月6日 稿了)

〈おことわり〉本稿は、2019年2月28日(木) 光州市立美術館分館ハ・ジョンウン美術館において開催された、「3・1独立運動及び臨時政府樹立100周年記念」特別展 オープニング

記念講演「縁―わが心の韓国・朝鮮―  
『花岡ものがたり』と「田沢湖姫観音」  
に寄せて―」に加筆、修正を加えたもの  
の一部です。

## 姫観音像と憧憬の像

秋田県仙北市立生保内中学校3年生

熊谷里織  
鬼川幸枝

### I 研究の動機

深く青く澄んだ湖、田沢湖にひときわ映える辰子像。湖畔にたたずむ3体の辰子像の関係を調べていた私たちに一つの記事が転がり込んできました。私たちは見出しのタイトルを見るなり、「これだ!」と歓声をあげました。

なぜなら、「発見、この町」のテーマのもと、夏休みの研究を始めたものの三体の像には全く関連性が無いことがわかり、困っていた時だったからです。「トンネル工事の

犠牲者を追悼」と書かれた新聞には、何と、私  
が調べていた姫観音像が載っており、この  
像が「玉川の水を田沢湖に導くトンネル工  
事の犠牲者の慰霊碑」でもあったと書いて  
ありました。

私たちがこの記事で一番興味をもったのは、当時たくさんの朝鮮人がこの工事で働いていたことと、犠牲になった朝鮮人の遺骨を捜し当てて故郷の土に返してあげようとしている河正雄(ハ・ジョンウン)さんという人物がいることでした。

### II 研究の方法

そこで、「どうして、あの姫観音像の秘密が今まで明かされなかったのか?」という疑問を解決することから、この研究を始めることにしました。そして、工事の概要と労働の実態、あわせて朝鮮人労働者の生活と河さんについても調べることにしました。

手がかりは新聞の記事一つだったので、とにかくその記事に載っている方たちから話を聞くこと、資料として残っているものがないか探すこと、実際の場所に行つて確かめること、さらに工事に携わっていた人達から話を伺う方法で研究を進めていきま

した。

### III 研究内容

#### 一 姫観音像の秘密―建立趣意書から

生保内発電所工事で犠牲になった朝鮮人労働者無縁仏が眠っている場所を確かめるために、私たちは田沢寺に出かけました。そこで驚いたことに姫観音像の秘密が書かれている「姫観音像建立趣意書」を見せていただくことができたのです。

趣意書には、「この工事は、新東亜建設と東北地方発展のために必要なことなのだから水が入り、苦難を受けようとも辰子姫には我慢してもらわなければならない。」という意味のことが書かれていました。

この本文からは、「姫観音像は強酸性の水の導入で死滅した魚と湖神・辰子姫の霊を慰めるための像である」ことしかわかりません。

秘密を明かにしているのは、この後の附言の部分です。「開眼式を行うに際しては、各会社の従業員関係者にして、その職に殉じ、貴き犠牲となりたるものの追悼慰霊の弔会式をも施行してその冥福を祈らんとするを：」。この一文で「姫観音像は導水路工

事の犠牲者の慰霊碑である」ことがはっきりしました。

次に疑問に感じたのは、なぜ、こんな大切なことを本文に書かなかったのか？なぜ、いままで明かさずにいたのか？ということでした。それについて、和尚さんは、「当時、国策として行われた工事に関しては、何も言えなかつた。何か言おうものなら非国民と非難された時代だつた。趣意書にしても隠していたのではない。周りにどんな影響を与えるか気づかつていた。」と話してくれました。

この工事が行われていた期間は、日中戦争が始まり、太平洋戦争に突入していく時代であり、軍国主義のもと、戦争を遂行していくためには、人の心や体が犠牲にされようと何とも言えぬ時代でした。

そのことを思えば、あのひそかに書かれた一文には特別の重みがあります。河さんは、これを読んで「地元の人々の良心がにじみでている。あの当時としては、精一杯の表現だつたにちがいない。」と涙を流したそうです。もの言えぬ時代であっても書かないではいられないほど、地元の人たちの心をかきたてる悲惨な出来事があつたのです。

導水管を通って玉川の水が田沢湖に流されてからは、この湖にしか生息しない種類の魚達が湖の底に沈むように次々に消えていったのです。実は、この工事の計画が明らかにされた時、生保内村の村長でもあり、漁業組合長でもあつた鬼川村長を先頭に檜木内、西明寺、田沢村の村長達が毒水を田沢湖に流さないようにと政府に陳情に行ったそうです。

しかし、「今、この国家の一大事に政府の方針に逆らう者は、非国民だ」と非難され、従うしかなかつたそうです。

実は、この趣意書の他にもう一通、下書きとして書かれた趣意書があつたのです。それには、「水」の前に「毒」が挿入され、確かに「毒水」と書いていたのです。清書の段階では、その「毒」が消されてしまいました。が、心の内では、「どうして毒水をこの聖なる湖に入れたのか！」と抗議したかつたに違いありません。

陳情に行つても聞き入れてもらえず、毒水が田沢湖に入るのを黙認するしかなかつた。そして次々に魚が消えてゆく湖を毎日眺めていた漁民達の心はどんなだつたでしょう。きっと田沢湖の命が奪われてしま

ったと感じ、申し訳なさと怒りでいっばいだったと思います。毒水が入れられて間もない昭和14年5月に姫観音像の建立が計画されたのもこういう訳だと思えます。

## 二 生保内発電所建設について

### ① 姫観音像建立のもう一つの理由

姫観音像を建立させたもう一つの理由は附言に書いてあるように工事犠牲者が出たことでした。しかし、今もってその数も名前も明らかにはされておりません。「姫観音と朝鮮人強制労働」について十年間も研究を続けているわらび座の茶谷さんから私たちは、いろいろ教えて頂きましたが、この方ですえ工事の様子や労働の実態、犠牲者の数についてはよくわからないそうです。

なぜなら、工事の記録が全く残っていないし、地元の人達に聞いてもなかなか話してくれないからだそうです。

話されない程、悲惨な出来事があったに違いないという茶谷さんの話を聞いて、地元の私たちにだったら話してもらえるかもしれないと思ひ、聞き取り調査を行いました。

### ② 工事の概要と労働の実態

生保内発電所は、ダムをもたない発電所

として有名です。それは、田沢湖を貯水池として利用したからです。発電に使用された水は、玉川と先達川から二つの導水路を通じて田沢湖に補給され、また田子の木取水口から生保内発電所まで導かれるしくみでした。

この大仕事をわずか二年間で仕上げたのですから、まさに超スピードの工事だったと言えるでしょう。当時は働き盛りの男性が大陸に出兵しているため、労働者が不足し、必要人数4千名に対し千名程しか集まらなかったそうです。したがって、老人や女性14、15才の少年まで働きました。

昼夜2交代制で1時間労働、昼休みは1時間、弁当は飯場から届けられました。このころは、おかずは少しでしたが、御飯はびつしり詰まっていたそうです。

仕事は、ひたすらトンネルを掘ることでしたが、資材を運ぶにもいかだや馬車、トロツコを使い、トンネルを掘るにしても、電動の削岩機もなく、手作業で行いました。

トンネルは両はじから掘られ、一番危険なダイナマイトの装着は朝鮮人が専門に行い、地元の人は削られた土砂を2人でトロツコを押し、外に運び、女性はそれを捨てる

仕事を受け持ったそうです。

トンネルの直径は約6メートルあり、上下2段に2台のトロツコが、上の段はコンクリート、下の段は土砂と速いテンポで移動し責任者の見張りの中仕事を進めていきました。仕事は、冬になっても続けられ、まさに突貫工事でした。賃金は危険な仕事程高く、女性は男性の約半分だったそうです。

落盤事故で最初に亡くなった方は、太田町出身の鈴木与太郎さんでした。朝鮮人の人たちも怪我をして病院に運ばれる人もいました。死んだ方については、身柄を引き取ってもらい、身元不明の方は、東源寺に埋葬してもらったようです。東源寺の無縁仏の土まんじゅうから3、4体の白骨が発見されたものの、過去帳には朝鮮人の名前が1名も載っていないそうです。

しかし、田沢寺にはたくさん朝鮮人の名前が記されており、身元不明の朝鮮人は半島人と記されています。

田子の木の工事現場は、西松組や大倉組が受持ち、飯場も朝鮮人の組頭の名をとって山田飯場や安達飯場と呼ばれていました。けんかをするとか追放されるなど朝鮮人間の秩序は保たれていたそうです。

けれども、借金をして逃げていく朝鮮人も中にはおり、そんな時には警察に連絡し、生保内や角館の駅でつかまえてもらったそうです。

田子の木からは、朝鮮人の男性を好きになり、猛反対を押し切って結婚し、朝鮮に渡った女性が2人おるそうです。それ程、朝鮮人の男性は目立って体ががっちりしていて、頭も良かったそうです。

私たちは、河さんの自伝である『望郷—二つの祖国』という本を読みました。一部を紹介します。

「叔父は、朝鮮人労働者現場監督の任にあたったようだが、自分の力では同胞をたすけることすら出来なかった当時を振り返り、かわいそうであった。無念であった。と悔悟するかのようになくなった同胞の名を呼んで涙するのであった。」

どんなかわいそうな出来事、無念な出来事があった朝鮮人の方たちは死んでいったのでしょうか。私達が調べた田子の木工事現場でも確かに1人の日本人が亡くなり、数

名の朝鮮人の死傷者が出たことがわかりました。しかし、何人の朝鮮人の方が亡くなったのかまではわかりません。

河さんの叔父さんが同胞の名を呼びながら20本指を折ったというのですから、少なくとも20人以上の方が亡くなっていることになります。

私たちは、この事をもっとしつかり知りたと思います。なぜなら、そうしなければ、日本の国の犠牲になった朝鮮の方たちに申し訳ないからです。日本の植民地にされ、土地を取り上げられ、朝鮮人の方は名前も言葉も教育も日本人になることを強制されました。

従軍「慰安婦」問題が社会問題になっていますが、それだけではありません。鉱山の多い秋田県には朝鮮人の強制労働や強制連行者も多かったと聞きます。生保内に強制行の事実があったかまではわかりませんが、生保内のどこかに眠っている朝鮮人の遺骨を見つけたし、故郷の土に返してやるのがせめてもの償いではないでしょうか。

私たちは今、姫観音近くの湖水に玉川の水を導いたトンネル工事や昭和18年から始まった先達発電所工事についても調べてお

ります。先達発電所工事現場には、30名程の朝鮮人が、5組の飯場に住んでいたそうです。

この頃は食糧事情が悪化し、米どころか芋でも食べられればいい方で、栄養失調で黄疸にかかり、朝鮮人労働者は生死の極限状態にあったそうです。しかし、肝心の工事の様子については、まだよくわかりません。

### 三 募金帳から

田沢寺には、趣意書に賛同し、募金してくれた方々200余名の名が記されている募金帳があります。陳情に出かけた4村の村長さんを先頭漁民の方々また工事関係会社の名前もあり、多額の寄付金が納められておりました。

犠牲者を出してしまったことへの謝罪の意味も込められていたのでしょうか。しかし、河さんは、この行為を「困難な社会情勢の下、地元の人々や関係者の良心の発露だ。」と言っています。

### 四 日本人も朝鮮人も同じ人間

田沢寺の小高い丘には、河さんを中心とした「田沢湖町良い心の会」が建てた朝鮮人無縁仏の慰霊碑がありました。「ふるさとを田沢と呼ばん彼岸花」。河さんの筆のこの碑

文の下に一体、何人の朝鮮人の方が眠っているのでしょうか。

諷意書を書いた先代の住職は、「朝鮮人であろうと日本人であろうと同じ人間。死ねばみな仏。」と言って無縁仏を手厚く供養し、姫観音の前でもお経をあげることを持続していたそうです。

#### IV この研究を通して感じること

##### 姫観音像と憧憬の像

姫観音小さい頃から何気なく見てきたこの像を改めて見てみると、本当にきれいな穏やかな顔をしています。

石は、超一級の真鶴石、作者超一流の彫刻師九代目、八柳五兵衛氏。像そのものが立派な芸術品ですが、そればかりではありません。地元の人言葉にしなくても、この像が工事犠牲者の慰霊碑であることは、誰もが知っていたそうです。

傍を通る度に像の前で黙し、祈りを捧げてきたそうです。この像には、こうした地域の人々のやさしさ、思いやりが込められているのです。

8月11日、30人余りの韓国の方々とお柳氏の奥様をお迎えし、この像の前で、法要と

日韓舞踊家による追悼舞踊が行われました。はっと思ったのは、李丁姫さんが韓国からわざわざ持ってきた土を像の周りにまいたことです。そして像に手を触れ、語りかけるように踊ったことです。

あの「サプリの舞」には、韓国の土になれなかった人たちの無念、悲しみが表現されており、その悲しみが今も薄れることがないことを教えてくれました。台風襲来の最中、激しく降る雨とともに強烈な感動を覚ええました。

私たちの生保内小中学校には、尊敬する河さんから寄贈されたステキな像があります。それは「ひだまりの像」といい、二つの像は兄弟です。

河さんは、「苦しいことや辛いことがあった時、そつとこの像に話しかけて欲しい。」と言っています。「若い日の夢や希望に向かって歩んで。」と語りかけています。

河さんの両親は当時、現場監督をしていた叔父の林さんを頼ってこの生保内に来て、先達の工事現場で働いていたそうです。河さんも高校卒業まで生保内で暮らしました。物質的には何一つめぐまれず、つらく切ない時代だったそうですが、友達や先生方の

愛情に恵まれ、育った生保内は「もうひとつの故郷」として大切にしているそうです。

姫観音像―それは戦時体制のものと言えぬ時代、心ない人の冷たい差別があった時代であろうと、人間の命の尊さには変わりがないと思う心がつくり出したもの。そして、憧憬の像はこの心をまっすぐに受けとめる澄んだ心の象徴。姫観音と憧憬の像が、私たちにはこの像が重なり合って見えます。

(1994年11月発行 秋田県教職員組合 平和教育推進委員会 平和教育読み物資料集 第3集より)

#### 河正雄さんありがとう！

富樫康雄

1935年生まれ。秋田県大館市。花岡の地。日中不再戦友好碑を守る会代表。交流の会団長

手元に「韓国・歴史文化交流旅行通信(N

o. 1 (No. 62) という分厚い冊子がある。タイトルにあるように私達秋田県大館在住の20名余が3回の韓国訪問と2回の韓国からの訪問団を迎えた際の記録集であり、学習資料集でもある。1号あたりB4判2、3枚だから分厚くもなる。その主テーマの一部だけ覗いてみると

天安の独立記念館／花岡事件と七ツ館／慶州ナザレ園／白磁の人浅川巧／光州と民主化闘争5・18／珍島犬と秋田犬／李舜臣と朝鮮水軍／秀吉と朝鮮侵略／崔承喜とサムルノリ／朝鮮通信使 等々（順不同）  
となっている。いつ何度、読み返しても興味が尽きない事柄が並んでいる。

私達が住む大館には花岡鉦山があった。戦時中、朝鮮人や中国人の強制連行、強制労働の典型と言われる花岡事件という大きな負の歴史もあった。

私達は花岡事件で犠牲になった朝鮮人と中国人、約450人の慰霊追悼活動を中心に先輩から引き継ぎながら1951年から続けている。

その活動の中で連作木版画「花岡ものがたり」57点は大きな役割を果たしている。たまたま「花岡ものがたり」が河正雄さんの

眼に止まり、河正雄さんによって、その物語性は勿論、木版画の持つ芸術性も高く評価され、私達も認識を新たにしたい。

早速、日版協の会員を中心に刷り上げた5組の「花岡ものがたり」がデビューした。大館市内のショッピングモールの展示場の5日間の展示会が盛会の内に幕を下ろした。その後、1組は大館市博物館、もう1組は河正雄さんが名誉館長をされている光州市立美術館で展示され、日・韓それぞれの市民に語り掛けている、

河正雄さんの“二つの祖国のかけ橋”に「花岡ものがたり」が役立っていることに私達は誇りに思っている。

古代からの「歴史文化交流」を未来に向けて確信を持ってこれからも歩んでいきたい。

河正雄様

本当に何から何までお世話下さりありがとうございます。どんなにか心強く頼りにしていたか今更改めて思い知った次第です。

ソウルに向かう新幹線の話も河さんの存在の大きさが如何に大きいか、その人を、人の心を惹き付ける人間性の素晴らしさが

中心でした。

光州での一日もまた充実した疲れを吹き飛ばす素敵なものでした。「5・18」、「花岡ものがたり」、「つばめ」に共通する平和、人権民主主義、友好交流は何とも言えない“つながり”があると団員の全員がしっかりと確認出来たと思いますし「花岡ものがたり展」セレモニーも強いインパクトを与えたようです。私もしばらくぶりで緊張感をもって臨みました。

今、メモ風に時間を追って纏めているところですが、実にたくさんの方にお会いし、お世話になり、これぞ現代の民間通信使の役割をちよつぱり果たせたかなと自負しております。

現在ある国際交流、日韓交流の制度を活用すべく申請しています。金の助成はともかく、こうした交流の実績を広く市民、県民に知っていただくことが大切と考えています。

「近くて遠い隣国」から真に「近くて近い」にしなければ、そのために私達はこれで終わりにしてはならないというのが帰途の話にもなりました。

(2004年5月16日の書簡)

## 7 回目の干支年に寄せて

工藤一紘

1944年生まれ。秋田県秋田市。秋田県多喜二祭実行委員長。日本民主主義文学会参画

敬愛する河正雄（ハ・ジョンウン）さんから第54回秋田県多喜二祭へのメッセージ「秋田県多喜二祭に寄せて・3・1運動100周年」をいただいたのは2019年2月16日のことでした。その中で河正雄さんは私との出会いを克明に振り返っておられますが、私には昨日のような気がします。

河さんは7歳のときに東大阪市森河内で終戦を迎えられています。その後高卒までの十代を秋田の田沢湖町で過ごされました。県立秋田工業高校機械科に入学しますが、秋田市までの片道約70キロを、皆勤賞受賞の日々のごとく通われています。そういう河さんの青春期に私は強い関心を抱きますが、本稿は「河正雄と秋田県多喜二祭」を軸に書かせていただきます。

秋田はプロレタリア作家・小林多喜二の

生誕地で知られています。秋田では多喜二への顕彰活動を1962年から、ほぼ休まず続けています。そのことについて河正雄さんは「崇高なる善行」との高い評価で励ましてくれました。

### 一、河正雄さんとの出会い

河正雄さんと私との出会いは友人・茶谷十六氏が秋田県多喜二祭を受賞された2001年2月18日のことです。（茶谷氏は秋田県多喜二祭直後の2月28日に渡韓。3・1独立運動及び臨時政府樹立100周年記念行事で光州市立美術館分館河正雄美術館にて講演。演題は「縁—わが心の韓国・朝鮮—『花岡ものがたり』と『田沢湖姫観音』に寄せて—でした）

河さんは初対面の私への自己紹介として、自らの口元の歯を指さし「ハー」と、大きな声で河正雄（ハ・ジョンウン）であると、いたずらっぽい表情で印象付けてくれたことを思い出します。サービス精神旺盛の河さんは、相手の立場を瞬時に把握して、平易で簡明なやり方で意思疎通をされる人であると、その後長く付き合ってみて実感させられることです。

第54回秋田県多喜二祭の記念講演をされた方は、文芸評論家の松澤信祐氏でした。テーマは「新世紀に輝く小林多喜二—秋田の小林多喜二の文学に触れて—」。今考えると、松澤氏の講演テーマは私たちを強く結んでくれたように思います。

松澤氏は多喜二の本格的作家生涯は5年に満たない短いものであったこと。「反戦」をテーマとした晩年の代表作。満州事変勃発（1931年9月）直後に発表された「沼尻村」は「日本帝国主義戦争の準備と闘え」との「赤旗」（日本共産党機関紙）の呼びかけに応えたものであったこと。次の「工場細胞」は当時の最も「資本主義化」された「近代の」工場を取り扱った作品であったこと。最後の「党生活者」は戦争前夜の困難な時期、少しもめげることなく、革命の未来を信じて献身的に生きる共産党員の男女の姿が活写したものであると話されたのです。松澤氏の記念講演は、中国への侵略戦争から世界大戦へと続く、1930年代の緊迫した時代を切り取ったものでした。

2023年の現在の日本の政治情勢は、自民公明の政権党による大軍拡が進行し、それとどう抗うかのせめぎあいの中での

日々です。日本ではマスコミ(「徹子の部屋」)などでも1930年代を想起する「新たな戦前」と危惧されています。

私と河正雄さんをさらに深く結んだのは、この年(2001年9月25日)、河正雄さんを当時勤務していた秋田和洋女子高校(現秋田令和高校)にお招きし、3学年の三つのクラス(3H・2G・1H)でお話をいただいたことでした。同校は今日でも国際交流を教育の柱に、特殊ある教育を推進しているユニーク高校で知られています。

翌年(2002年)から韓国の「坪村(びんちよん)経営高等学校」と姉妹提携を結び、今日に至る20年を超える交流を続けるようになりませんが、その起爆剤となったのかもしれない。

実は私の在職中のことですが、同校にはインターアクトクラブが活動していて国際交流を盛んにおこなっておりまして。インターアクトとはインター(国際)とアクト(交流)を結んだ奉仕と国際理解のクラブで、郷土芸能部と共同で秋田県の無形民俗文化財や秋田民謡を取り組んでいました。

生徒たちが三味線や猿倉人形をもって韓国へ渡ったのは2002(平成14)年の1

月でした。同年8月には、県国際交流協会の主催する青少年交流事業として高校生11名でハンガリー公演をしています。首都ブタペストと地方都市のエゲルに移動しての文化交流が繰り返されたのです。

その1年前の夏(2001年)、秋田県で開催されたワールドゲームズではNHK国際放送(ラジオ)を通じて、世界96カ国に猿倉人形芝居「貫徹坊さん傘踊り」と秋田民謡を英語バージョンで発信しています。

この日(9月25日)河正雄さんがどういうお話をされ、生徒たちがどう反応したか。記録や感想文が手元ないので、つまびらかにできませんが、河さんと生徒たちの間にはすでに共同のステージが広がっていたように思います。さらに河さんには語るべきテーマがたくさんあったということですが、一つは河さん自身も制作に関わり、出演もされたドキュメンタリー映画「在日」です。この映画は私も鑑賞した4時間に及ぶ長編です。記録映画ですが芸術性豊かな傑作でした。

第1部は戦後50年の歴史編。映像と証言で綴る解放50年の在日同胞の苦難の歩みです。「優れたドキュメントは優れたフィクシ

ョン」の例え通り、苦難に満ちた戦後半世紀に及ぶ在日朝鮮人の歴史と存在を重層的に描いた映画でした。

第2部は在日を象徴する人間編ドキュメント。戦後の闇市、パチンコの景品買いに生きる1世の女性。先祖の地韓国と、生まれ育った秋田県田沢湖町の、二つの故郷を愛する2世の河正雄。在日ブルース、「清河への道」を歌う2世の新井英一が登場します。

「在日」の人たちにとって映画は、自身を写す鏡であり「道しるべ」になったように感じられました。こうした豊かなバックボーンを背に語る河さんの瞳を生徒たちは食い入るように見つめていましたが、私はしみじみとその結び目を眺めていたように思います。

二、「祈りの美術館」「花岡ものがたり」を結んだもの

1919年3月1日の「3・1独立運動」から100年目にあたる2019年の年。韓国の光州市立美術館分館河正雄美術館にて「3・1運動及び臨時政府樹立百周年記念河正雄コレクション展」(会期2019年3月1日〜4月24日)が催されました。中で

も大館の「花岡ものがたり」版画作品57点は注目されました。

「花岡ものがたり」は1945(昭和20)年6月30日に起きた花岡事件を題材に物語詩と木版画によって創作されたものです。

鈴木義雄氏(日中友好協会秋田県連合会会員)が企画、詩を喜田説治氏が、原画を新居広治氏が制作。滝平二郎氏と牧大介氏の協力を得て木刻し、1951(昭和26)年に完成。版画集「花岡ものがたり」として出版されました。

1998年、42年ぶりに大館花岡を訪ねた河さんに対して、「花岡の地 日中不再戦友好碑を守る会」の奥村昭五、富樫康雄先生が紹介してくれたものでした。版画57枚の連作の中に「たたかった朝鮮のひとがた」「朝鮮人」という作品があったのですが、それを河さんが見逃さなかったのです。

河さんは私へのメッセージの中に「戦時中、陰険且つ悪質な非人間的扱いを受けた中国、朝鮮俘虜人を慰安する鎮魂歌です。忌まわしい戦争の反省を明らかにし『再び戦争は起こさせない』と誓った日本人の良心を昇華させた芸術的価値ある作品ともいえます」と書いています。

私が強く注目したのは版画を前に河さんの胸に去来したのが韓国の光州事件であったことです。もちろん河さんは光州市立美術館河正雄コレクションとして版画集「花岡ものがたり」を収蔵し、そこで公開したいとお二人に寄贈の申し入れをされたのです。願いは叶い、「花岡ものがたり」は韓国民が等しく連帯を共有する友好の絆となり、河正雄コレクションの核の一つとなったのでした。

私たちが光州市立美術館を訪ねたのは2008年9月のことです。25日から5日間の日程で34名が参加して実施した「韓国民主化運動の足跡を訪ねる旅」でした。この旅は多喜二祭実行委員会の事業として企画されたものでした。

慶州から釜山を経由した私たちツアー一行は、9月26日夜10時過ぎ光州(クアンジュ)に入りました。

1980年、5月18日の光州。軍事政権に対する市民・学生の民主的な蜂起であった光州事件。2万5千余名による韓国軍に包囲され戦場化した状況の中で、多くの市民、学生が死傷したのですが、その傷ましい惨状が蘇りました。北朝鮮との非正規戦遂

行のための特別の訓練を受けた空挺部隊の投入。空挺部隊の残忍な鎮圧作戦が展開されている中「光州を忘れないで、私たちが忘れないでください」と街宣して回った若い女性の声私の耳元で響きます。血の海となった駅前広場。機動隊や空挺部隊が手当たり次第に殴打し、服を剥ぎ取り下着一枚にしてトラックに押し込まれた406人の行方不明者のことも忘れられません。実は「光州事件」について、多喜二国際シンポジウムのため英国オックスフォードへ旅立たれる直前の茶谷十六夫妻から強い勧めがあつて、盛岡市の映画館で上映された『光州5・18』を観賞したことがどんなに役立ったか計り知れない。

それにしても、軍事政権に対する市民・学生の民主的な蜂起であった「光州事件」と、過酷な労働や虐待に対する中国人労働者の一斉蜂起であった「花岡事件」が、河さんの中でしっかりと結ばれているところに私は深い感動を覚えました。

さて、光州市立美術館河正雄コレクションに収納されている数多の美術品は、どのような経緯で収集されたのでしょうか。

河さんの在日同胞美術家が描いた絵の収

集は1964年から始まっています。第2次世界大戦中、戦争遂行の為に強制的に動員され、殉難した朝鮮人の霊を慰める田沢湖畔に「祈りの美術館」を建立する為です。この行動に対して人々は「在日作家の作品収集はゴミを集めているようなもの」と中傷したのです。無名の在日作家の作品は価値がないとの評価だったのです。

しかし河さんはこれにはめげず、これらの作品は、その時代を生きた芸術家の魂と祈りのメッセージそのものであるとの信念を貫き通したのです。田沢湖畔での「祈りの美術館」構想は日韓条約の戦後補償問題(慰安婦・強制連行等)が外交問題となり挫折しますが、やがて、光州市立美術館河正雄コレクションの所蔵美術品として現れます。

20世紀の戦争の時代を証言した芸術作品は人類共通の文化遺産として蘇ったのです。この筋書きの中で私が感動するのは、「20世紀の戦争の時代を証言し描かれた芸術作品は「祈り」を記憶に留める文化遺産である」との河さんの先見の目です。芸術的「価値」以上に、「時代の証言」に「価値」を見出す「目」です。そのプロセスに「祈りの記憶」をおいていることです。この発想が「河正雄

コレクション」として蘇ることを、河さん自身が予想したでしょうか。私はここに歴史の大きなうねりを感じます。

三、田沢湖姫観音像開眼80周年記念法要と河正雄さん

2020年 第55回秋田県多喜二祭・多喜二祭賞授賞団体として「田沢湖姫観音像開眼80周年記念法会実行委員会(代表熊谷雄一郎)」が受賞されました。その業績に次のような記載があります

1939(昭和14年11月10日)に建立開眼された田沢湖姫漢音像を巡って東北進行政策のもとに進められた生保内発電所工事と玉川毒水流入とクニマス絶滅住民反対運動朝鮮人強制労働等の事実を糾明し、昨年11月10日に開眼80周年記念法要の実施、日韓友好の運動を推進した功績を高く評価されてよい

2019年は田沢湖姫観音像開眼80周年の年、同実行委員会の発意で記念の法要が執行されたのは11月10日のことでした。

田沢湖姫観音像開眼80周年記念法要の事業は、日中戦争から太平洋戦争に至る日本の歴史のもつとも不幸な時代に、とても困難な状況の中で、郷土の先達たちが姫観音像に込めた願いと祈りを改めてかみしめたものでした。

多数の工事犠牲者の冥福を祈るとともに、田沢湖が豊かな生命の湖水としてよみがえり、日本と韓国・朝鮮の友好・親善が深まり、世界の平和が未永く発展することを願うの事業でした。今日の日韓友好の困難な局面を切り開き新たな国際交流の礎としたとの願いも込められています。

戦時下、1938年から40年にかけて田沢湖はダム湖とした国策によって進められました。寒冷と過酷な労働、食糧不足と発破や落盤事故などで多数の犠牲者がありましたが、その中には徴用法による強制労働に従事していた朝鮮人も含まれていたのです。その歴史を戦前から辿ると次のようになります。

生保内発電所建設工事は、東北地方を食糧生産と軍需産業の一大基地に作り替えようという「東北振興政策」の一環として立案された国策事業でした。1938(昭和13)

年2月の着工から40（昭和15）年1月の運転開始までわずか2年間という、文字通りの突貫工事でした。

1937（昭和12）年7月の盧溝橋事件以来、中国への侵略戦争は泥沼化し、多くの若者たちが戦場に駆り出され労働力の決定的な不足の中、多くの朝鮮人労働者が動員されてこの危険な作業に従事させられたのです。

当時田沢湖には、固有種の淡水魚クニマス（国鱒）が生息しており、湖岸の住民たちは、クニマスの漁獲と販売を生業としていました。古来「玉川毒水」として恐れられていた玉川からの強酸性水の流入によって豊富な魚資源が絶滅することを憂えた湖岸の住民たちは、工事計画の変更を求めて陳情運動を展開しましたが、「富国強兵」の名の下に一蹴され、毒水の流入とともに神秘の湖は死の湖と化してしまったのです。

1939（昭和14）年に建立されたこの像は、従来生保内発電所のための玉川導水路の建設による毒水の流入によって死滅した魚と湖神たつこ姫の霊を慰めるために建立されたものといわれてきたのです。

ところが1991年6月21日、田沢寺（で

んたくじ）に「姫観音像建立趣意書」が保存されていたことがわかりました。保存されていた「趣意書」によって姫観音は発電所建設工事で犠牲となった工事関係者の追悼と慰霊がもつとも大切な目的であった事がわかったのです。その年の9月22日、このことを記念して田沢湖畔の姫観音前で、朝鮮人無縁仏の慰霊祭がとり行なわれました。

姫観音像は、玉川導水路の取水口のすぐ近く、かつて工事関係者たちが寝起きした飯場のあった場所に建てられました。「姫観音像建立趣意書」によれば、姫観音像は、田沢寺・東源寺・東林寺・安楽寺の4寺の和尚が発願主となり、生保内村・田沢村・松木内村・西明寺村4村の村長初め各村の小学校長・郵便局長ほか有志の人々が発起人となって、工事関係各会社や地域住民から寄せられた浄財によって建立されたのです。

「姫観音像建立趣意書」の発見には河さんのひらめきが介在しています。河さんは「碑文と掲示板の字句から考察すると、姫観音建立の主旨を取り違えているのではないか」との疑念を抱きます。田沢湖に投身自殺者が余りにも多いので、その慰霊と訪れる観光客の安全を祈禱する為という理由では納

得できなかったのです。

そして、姫観音の建立された歴史的背景を調べ、納得できる建立趣意書を発見したいと考えるようになりました。

そこには河さんの姫観音像への深い思いがあるように思います。その証拠に河さんは慰霊祭以降、2015年までに田沢湖町の皆さんと共に姫観音の慰霊祭と田沢湖の朝鮮人無縁仏供養会を11回行っています。

1991年には「田沢湖町よい心の会」が結成されました。田沢寺には「よい心の碑」が建立され、慰霊碑には河正雄さんの一句「ふるさとを 田沢と呼ばん ひがんばな」が刻まれています。

河正雄さんは私へのメッセージの中で「日韓両国の歴史の上でのもつとも不幸な時代に、東北秋田の僻村の人々が精一杯の良心の証として建立した姫観音像、半世紀以上を経たいま、日韓友好の魂の交流の場として新たな輝きをはなとうとしている。私は、そのことの意味の深さ重さを、しみじみとかみしめた」と書かれています。

河正雄さんのスケール大きな把握力だとしみじみ思います。

# 野菊

## 輪廻

小澤 龍一

1940年生まれ。山梨県北杜市。映画『道―白磁の人―』製作委員会事務局長。山梨県博物館協議会委員長歴任

―浅川巧の精神を継承する「清里銀河塾」―  
「桃の木の下に道が出来る」のは至極当然である。しかし、未踏の地に道が誕生するのはごくまれであり、未踏の地では羅針盤を失い迷路に陥りがちである。

在日の河正雄氏を知ったのは、日韓、「在日」の三者で浅川巧を主人公とした『道―白磁の人―』映画製作に歩みだした頃であった。翌年、韓国を訪問する機会に恵まれ光州市立美術館を訪れた。

そこで出会った「在日」作家の作品は、正視するにはよほどの覚悟が求められる。「叫ぶ」ことも許されない、光を失った闇、この闇を生み出した時代を絵筆とキャンパスに託した作品群。人の目に曝されるなど毛頭考えていない筆の動き。

新しいジャンルと云うより歴史の証である。植民地時代の傷跡は、未だ軋むような音をたて世界各国で癒されることなく疼いている。

浅川巧の生きた時代は、植民地支配の楔が心に打ちこまれた時代である。浅川巧自身、必然的に植民地支配の側の一人であり、一方支配する側のおぞましさに心が引き裂かれる日々であった。

浅川巧の心の救いは、支配される庶民の日常雑器とそれを生み出した民族の魂に触れることであり、荒涼とした原野に緑を取り戻すことであった。しかもその養苗は、その土地の固有種の復元であり、その信念は“自然法に帰せ”の一言に尽きる。先進国と発展途上国、経済格差、核の有無等の対立が現代を混濁状態に追い込んでいる。浅川巧の歩んだ道こそが現在求められている。

清里銀河塾は河氏の私塾として2005年誕生した。この塾は日韓の次代を担う若者が浅川巧生誕の地で学び、国際人としてのどのように歩むのかを問う、次代に伝承する塾である。

塾では歴史認識を前提に新たなパラダイムが議論された。韓国の学生は過去を教訓

に未来志向を語り、日本の学生は、過去の事実に戸惑う傾向が垣間見えた。それは過去を疎んじてきた日本の弱さでもある。

議論の後は新たな友情が芽生えていた。

私は銀河塾の継続が日韓の新たな関係を構築する一つの道筋となるのではないかと2006年から参加させていた。

参加しての私見を差し挟むならば、参加する日本側は平和主義者であり、日韓の齟齬に心を痛めてきた人々である。

一方、徴兵制のある韓国の学生は、日本の平和主義者を、「嫌戦主義者」と思う節がある。敗戦直前の原爆投下等の被害意識が日本人の戦争への嫌悪とつながっている点を汲み取っている。韓国の学生が抱く、この感性は重要である。

この平和主義⇨嫌戦主義から、国際社会の新たなパラダイムへ昇華するには、闇の中で叫びをも圧殺された歴史、その根源を掘り下げねばならない。

その銀河塾の再開が決定した。「浅川伯教・巧兄弟資料館」と「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」の協力も得た。再開に向けて準備を整えねばならない。多くの方々の力添えが欠かせない。再開に向けてご指導ご参加を

お願いしたい。

— 天空を超えた縁（大村智先生と日中の関係） —

一生は流れに浮かぶ枯葉の如く土に帰す。その条理過程で、普遍的価値を後世に残すことは大海の芥子粒にも満たない。

2015年、ノーベル賞の季節を迎えた。想えば、1995年、天野建さんと「山梨県教育ビジョン」について語り合った。

知事は山梨の自然環境保全・科学技術発展・誰もが学べる生涯学習・県立博物館構想、それ等を通し、県民のアイデンティティー（精神的拠り所）確立、を物静かに語った。科学技術発展では、大村智先生のノーベル賞受賞を心待ちにしていると述べた。

あれから20年、ストックホルムから吉報が届けられた。瞬く間に世界中に、像の足のように腫れ、失明する難病を救済した先生の業績が伝わった。国中が歓喜に沸く中、私はソウルに向かう最終便に乗っていた。金浦空港からソウル市、日本のバブル期以上の建設ラッシュ、いつもながらの渋滞である。



在日二世の河正雄氏は、50数年前、清里に別荘を構えた。以来、浅川巧・ポール・ラッシュ博士を顕彰した。

「浅川伯教・巧兄弟資料館」建設時、韓国の人間国宝、池順鐸作の青磁・白磁の大壺を寄贈した。「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」設立後、河正雄氏の支援で様々な催しが行われた。それ等催しは、人々に潤いを齎した。その一方、日韓に横たわる齟齬は年々重くなっていた。そのほとんどは、歴史認識に対する無知が原因であった。

それを解きほぐすためにも、日韓共催で映画製作の歩みが始まった。浅川巧を主人公に、日韓共催の映画『道く白磁の人』製作七年の道のりは、齟齬と向き合う歳月であった。韓国の製作委員会との共有認識を深めるため、河正雄氏が相談役を引き受けた。日本側の筆頭よびかけ人は大村智先生、副筆頭に15代薩摩焼沈壽官さんが就任した。司馬遼太郎は、14代沈壽官を主人公に「故郷忘れがたく候」で、秀吉の時代の拉致から360年を経た沈壽官家の生き様を紹介した。ちなみに大村先生の家の床の間には、黒薩摩の大壺が座っている。

玄関に「富士に桜」の片岡球子画家の大作、

黒薩摩の壺に、活けられた大ぶりの梅の枝  
共々出迎える。

◇

河正雄氏は、不動産で財を成すまで苦難の道のりを歩んできた。修学旅行に行くお金で田沢湖町から、夜行列車に乗り上野国立博物館のゴッホ展を鑑賞した。「芸術は民族も国境も超える力がある」と胸に刻んだ。

成した財で雨露を凌ぎながら画布に向き合う在日画家を支援した。さらに、美術品のコレクションをし、それら作品を韓国の美術館に寄贈した。河正雄氏は光州ビエンナーレの呼びかけ人、光州市立美術館の名誉館長である。

明治時代を代表する洋画家青木繁は、疾風怒涛の波乱に満ちた29歳の人生。

代表作に「海の幸」がある。1904（明治36）年、館山の布良に滞在し白馬会に出品した作品。太平洋から押し寄せる荒波、武士の出の実家も、近代化の波で破産状態。房総の漁師は、寄せる波にもめげず、昔ながらの漁で幸にめぐりあう。逞しい肉体、苦汁を胸に秘めた漁師の姿。「海の幸」の作品は後世に残った。が、青木繁が滞在、制作した家は、朽ち果てようとしていた。地元の有志が

保存運動に奔走した。

大村先生も、河正雄氏もこの呼びかけに  
応え、「海の幸」のブロンズのレリーフを寄  
贈、地元の期待に応えた。

お二人からこの事を伺ったわけではない。  
ソウルで偶然、呼びかけ人の方から伺った。  
光州市立美術館も、河正雄氏の寄贈あつて  
成された仕事。

光州市立美術館を観覧すれば、氏が寄贈  
した作品が語り掛ける。無言の叫び！閉塞  
した闇からの擬視！希望を託す一条の淡い  
色彩。それら作品と対座するには、己の心胆  
が試される。

その氏が、2006年から清里清泉寮を  
会場に「清里銀河塾」を開校した。浅川巧・  
ポール・ラッシュ博士の精神を学び、国際人  
養成の「種まき」塾。東アジアの留学生と地  
元の学生が交流、浅川巧・ポール・ラッシュ  
の生き様を学ぶ。氏は著名になるにつれ、北  
杜市での活動が困難となった。

映画製作を終えた直後、塾長を託された。  
塾長代行ならと引き受けた。韓国から学  
者・高校生・文化人も参加。未来を見据え昼  
夜の語り、耳を傾け、貴重な時間を共有した。  
そのことが契機となり、「ソウル世界市民学

校」の開塾式に「清里銀河塾」塾長代行とし  
て招かれた。

午後8時30分、到着したホテルに河正雄  
氏を始め韓国の関係者が待っていた。部屋  
に荷物を置き、隣接する居酒屋で歓迎会。乾  
杯と同時に、大村智先生のノーベル賞受賞  
を皆で悦びあつた。

河正雄氏は、「小澤さんは、大学で大村智  
先生の後輩」と紹介した。途端に明日の挨拶  
は大村先生の業績を語って！と、催促が飛  
ぶ。私は韓国語が話せないと固辞した。翻訳  
者を付、明日までに翻訳・印刷も大丈夫と携  
帯で段取りが進む。皆は盛り上がり、私は促  
されるまま箸もつけず、翻訳者と共にホテ  
ルに戻った。

韓国の新聞も一面トップで大村智先生の  
紹介記事。笑顔の大村智先生の人柄が頭を  
よぎる。機内に持ち込んだ新聞も、大村先生  
一色だった。この歓喜は、世界の最貧国、奴  
隷として新大陸に送られた西アフリカ、中  
南米、東南アジアで苦しむオンコセルカ症  
撲滅への共感である。その難病2億人を救  
った業績、国境を超えソウルでも歓喜に包  
まれている。

国境・民族等、人類が生み出した対立要素

を超え、研究成果と科学の恩恵。しかも地球の循環システム、万物死して土に帰る過程で、微生物が担う役割と、難病特効の相関を紐解く研究。微生物の構造を解き明かし、人類を救済しただけではない。輪廻を土台に、自然の循環のメカニズムを私達に問いかけた。

死して土に帰る過程で、微生物が果たす、地球上の生態系維持の源泉、その根源の大切さを改めて学ぶ。

大村智先生は、その輪廻の大切さを万人に示した。

## 浅川巧と河正雄と「露堂々」

澤谷滋子

1953年生まれ。山梨県北杜市。浅川伯教・

巧兄弟資料館 元館長／学芸員

### ■和菓子「露堂々」

老舗和菓子店の可愛いらしい“まあるい”

干菓子に、ふっと眼が惹かれた。正確にいうと、その菓子の「銘」に、惹かれた。

……河正雄先生に、この干菓子、お持ちしなければ！

和三盆の砂糖でできた“まあるい”直径1センチほどの干菓子。その銘板には、「露堂々」と記されていたのである。

◇

「露堂々」。……真理は目の前にはつきりと現れている、あるがままの自然の姿で現れている。……それがあなたに見えるか、と問う、禅の言葉。

この言葉は、日帝強占期に朝鮮半島で暮らした日本人、浅川巧（あさかわ たくみ。1891～1931）が亡くなった時、親交のあった安倍能成（元京城帝国大学教授、哲学者。）が、巧の人間性を評して使った言葉である。山梨県に生まれ、日本統治下の朝鮮半島で、40年間の生涯を閉じた浅川巧。1931年に巧が亡くなった時、「官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく」「その人間の力だけで」「露堂々と生き抜いていた」と、巧を追悼した。この追悼文は、後年「人間の力」という題で安倍能成の単行本『青丘雑記』に収録された。

日韓基本条約締結後の1964年、ソウル特別市忠憂里にある浅川巧の墓所が、韓国と日本の人たちでの手で修復され、巧は少しずつ戦後の人びとの知るところとなっていた。そして、1996年、ソウル特別市在住金成鎮氏が50年にわたって保管してくださっていた巧直筆の日記が、故郷高根町に、次のような手紙が添えられて寄贈された。

「…（略）…日本の植民地政策のもと、朝鮮民族に対して温情をそぐことも日本の官憲にいらまれた時代に、韓国人を心から愛してくださった巧先生は、泥の池に先出た一輪の白い蓮の花である。その崇高な人類愛の精神は先生を知る韓国人の心の中に永遠に生き続けることを信じて疑わない。日本国山梨県高根町 御中」

これをきっかけに、巧の生き方を日韓の記憶に留めるべく、資料館の建設へと話は発展していった。

### ■浅川伯教・巧兄弟資料館と河先生

山梨県北杜市高根町にある市立浅川伯教・巧兄弟資料館の学芸員に私が異動したのは、2008年のことである。資料館は、

2001年に設立されていた。

設立当時、「学芸員を置いて“研究・調査を行う資料館”にする」という条件付きで資料を寄贈した人が、設立後の市の運営を知り、「博物館法に則った資料館にしないのなら寄贈資料を全て引き揚げる」と2007年、市長に直接申し入れたらしい。そこで、北杜市郷土資料館で学芸員をしていた私に兼任辞令が出たのであった。

赴任して、さっそく所蔵資料登録台帳の作成にかかった。

浅川巧が朝鮮半島で興味を持ち、敬意を払い、愛情をいだいた「朝鮮の工芸品」が、実に多く寄贈されていた。100点近くあった。同一者の寄贈である。更に、兄浅川伯教の朝鮮陶磁の陶片収集に同行した、韓国京畿道の人間文化財・沈順鐸氏のみごとな白磁や青磁の作品の寄贈もあった。どれも、この資料館になくはない貴重な資料である。その寄贈者名を見ると、すべて、「埼玉県川口市 河正雄氏」とあった。

浅川兄弟の資料館設立に並々ならぬ期待を寄せて2001年の資料館開館に貢献していた人が河正雄氏であると知ったのは、その時である。寄贈条件を守らないなら資

料は引き揚げる、と北杜市長に直接談判したのは、河氏だったのである。

資料館勤務になってから、誘われて、「私塾・清里銀河塾」という高根町清里の清泉寮で毎年開かれていた勉強会のような催事に参加した。河氏が数年前に始めた私塾だそう。浅川巧を知るための会だという。日本人・韓国人・在日韓国朝鮮人、多くの分野の方が30〜40人参加していた。奥様も主催者として、心温まる手料理をふるまわれていた。

#### ■河先生と浅川巧との出会い

河氏と浅川巧との出会いは、御著書『日々一步一步』（2016年刊）に詳しい。

氏は21歳のとき、迷いの頂点に在ったという。差別が蔓延する日本社会で生き残る自信を失っていたという。失意のなか、目的地もなく旅に出た。蒸気機関車は山梨県高根町の清里駅に停まった。

高根町？　そこで思い出し、再会したが、秋田県の高校時代に安倍能成の著書『青丘雑記』で読んでいた「浅川巧」だった。失意の氏は、巧の故郷高根町に偶然降り立ったのだった。「官位にも学歴にも権勢にも富

貴にもよることなく」「その人間力だけで」「露堂々と生き抜いていった」と安倍能成が紹介していた浅川巧の故郷であることを、そのとき知ったのだという。

浅川巧とは、1941年、山梨県の今の高根町から朝鮮半島に渡り、朝鮮の緑化に尽力した林業技術者（植林・造林の技術を開発する人）である。かつ、兄伯教の影響で、朝鮮の工芸品の魅力にとりつかれ、日本の進出によってその美が破壊され、消えゆくことを憂い、集め、記録し、その作り手である朝鮮の人・自然・文化に敬意と愛情を限りなく抱いた人物である。京畿道清涼里で40歳で亡くなった時、多くの朝鮮の人がその死を嘆き悲しんだと言われる人物。

河氏は、「浅川巧を知れば知るほど、日韓両国が必ず知っておくべき人物だと思つた」、「国、民族、宗教等、人間を区切る壁に拘らなかつた人、ひたすら一人の人間として他人を抱え、異文化を愛した人、彼は心から国際親善を実践したヒューマニストであった」と御著書『日々一步一步』で述べている。

■「露堂々」で粗茶を喫す

ところで、「露堂々」。

「明歴々露堂々(めいれきれきろどうどう)」が原典の禅語で、「歴々と明らかに、堂々と露(あら)わる」の意味。「明らかにはつきりあらわられていて、少しも覆い隠すところがない」。つまり、この言葉は、「目の前」にある大切なものに、曇りのない目で気づくことができるか?と問いかける。

2022年、世界中のコロナ禍のなか、浅川伯教・巧兄弟資料館の前庭に、河先生は兄弟のレリーフ像を寄贈してくださいました。その銘板に先生は、「露堂々」と刻まれた。

差別が蔓延する日本社会で失意のなか旅に出るといふ21歳を経験した河先生の、これまでの様々な文化活動と生きていらした道に、私は尊敬の念を抱く。

資料館を退職して5年になる。在職中、河先生とふたり、資料館事務室の粗茶で、見つけたばかりの“まあい”干菓子「露堂々」を口にした日のことが思い起こされる。そして、資料館に赴任した当初、土地の人から「よそ者に何が分かるか」と言われたことを愚痴った時の、私を見つめる先生の、笑みが忘れられない。

## 河正雄さんのハト

植松永雄

1940年生まれ。山梨県甲府市。書家(号・峽山)

河さんは1939(昭和14)年11月3日生れの今年84歳である。私は15年4月26月生れなので1年先輩の兄貴である。

こう書けば実には格好のいい兄弟分のように思われるが、本当はそんなに気安いものではない。知人と言っても瞬間思い出してもらえない存在か、友人と言えば烏滸がましくて、そんな資格があるのだろうかここ数日間は忸怩たる思いで過していた。

河さんとは畏友小澤龍一さんの紹介で今日に到っている。2010年2月の「書業五十年展」から始まる。展覧会が終って1週間程のある日、小澤さんと突然訪ねられ会場以外の作品があったら拝見したいとのことだった。

展覧会後の1週間は何となく気が抜けた様な日々であったので、変なことを言う人

だなというぐらいに思っていた。恰度近くの家の中に保管していたものを拝見していただいた。作品集を企画していたので、その原稿を依頼する数人に下見をしていたのだ。河さんが選んだのは、その下見にも会場にも展示されなかった「吾」字2点をコレクションされた。

どう考えてもおかしい。この人は「おかしいのではないか」と思った。数日後出入りの表具屋に頼み、その作品は私の手元から離れた。このことは後程すぐ解ったのだが、高名なコレクター河正雄氏であった。

その後日は梅の花の便りを聴くとは言え外は肌寒く、玄関の鍵も締っていたのか、案内役の小澤君は同級生の誼もあってか、河さんと南の庭から入って来たのだった。

家内はオロオロとし、お茶の準備もそこそこでお茶菓子があつたのか無かつたのか、居間の炬燵の上での話をした。

帰りかけに手帳の切れ端しに書いた文章を河さんから依頼され何とも奇妙な1日が終った玄関先の梅の花の一輪が咲きはじめた春の1日であった

何日か経ったある日、切れ端しの文章を確認してみた。「施人慎勿念受施慎勿忘」(人

に施しては慎んで念うことなかれ、施しを受けては慎んで忘るることなかれ)で崔子玉の座右銘であった。

早速、半切に筆をあててみた。何となく上手くない。今度は全紙を開く、漢字の字句を訓読みで説明しようかと考える。様式も形式も決まらず、ひとまず休止としようか。

それから又ああも、こうもと書いてみたが上手くない。むしゃくしゃした気持ちがおさまるまで一旦休止しよう。然し再開してみても、またもや上手くない。

むしゃくしゃとは違う別の気持ちに襲われた。何となく気が重い。又休む。2、3カ月のリズムで繰り返し繰り返し、重い時間が流れた。

1年が瞬く間に過ぎ去ってしまった。2年目のある時、崔子玉のことばを高僧空海が書いていることを知り、その部分をコピーしてみた。躍動する空海の行書体を観るにつけ、到底自分の力ではどうにもならない作品であることが判った。

えらいことを引き受けてしまったという後悔の気持ちが出てきた。書いては思い、思うては書き、2年目の歳月もたちまち過ぎ去

ってしまった。

3年目のある日、河さんから電話が入った。「お願いした作品が出来ないならば他の人にお願ひする他ない。」とのことであった。シヨックであった。

咄嗟に私は言い訳をした。ことばの意味の凄さに圧倒され、然かも空海の書を連想すれば力負けし、なかなか仕上りませんが、もうしばらくお待ち願えませんかと泣きを入れたものだった。

人のお世話をすれば、ありがたいの一言も欲しくなったりもするが、自分がお世話になっても、その恩を忘れてしまったりするの、その事の戒めのことばと思えばうっかり易々ことばを書いてはいけないと3年目にしてようやく気がついたのである。

空海が書した部分は「人の短を問うなかれ、己の長を説くなかれ」と続いているのであった。誰だつてうっかりすれば人の悪口を言ったりもし、自分の自慢話をしたりするものだ。

それから2年、足掛け5年の歳月をかけた作品が仕上がったのであった。

最初は字の重なり、施、慎、勿に苦しみ、最後はことばの意味の重大さに悩まされた、

正に難産の作であった。

5年間という時間をかけたわりには仕上りはいま一歩というところではあるが、私にとつては記念すべき作品である。寒い2月のある日、手帳の切れ端を渡してくれた河さんは、その後いくつもの宿題を果し、今日まで私を育ててくれた大恩人です。いくつもの旅の機会を与えて下さり、いくつもの試練を乗り越えるうちに、河さんへの尊敬の念は、友からいつしか先生に変つて行くのでした。先生に感謝いたします。

(2023年6月2日)

## 禱りへの道

千葉成夫

1946年生まれ。埼玉県和光市。東京国立近代美術館学芸員(1975―2001年)。中部大学教授 歴任(2001―2017年)

もともと記憶力があまり良くないたちの

僕は、ことし喜寿を越えてそれに磨きがかかってしまっている。乏しい記憶と当時のメモをひっくり返しながら、河正雄さんとの関りを想い起してみよう。

まず思い出すのは、河さんのおかげで幾度も光州に招かれて講演をしたことだ。それは僕にとつて、在日と韓国の美術家についての調査を広め、深めていく機会となった。例えば、古くは1999年11月の「河正雄コレクション」と在日の意味―祈祷の美術展を祈念して」であり、新しくは2017年8月の「戦争直後のリアリズム―日本と在日の画家」展である。1999年の時(もう四半世紀も前か!)は夕食の後、夜半までカラオケで興じたのを思い出す。確か河さん夫人や、お祝いで日本から駆け付けた彫刻家の高田悟さんも一緒だった。

僕の講演は、僕自身の韓国と在日に対する関心の根の話から始めて、全和風から文承根にわたる在日一世から三世の状況を概観し、在日の「意味」についても、竹田青嗣を引用しながら、触れてみたものだった。2017年の方はシンポジウムのための発表で、河正雄コレクションによる「宋英玉作品展」記念の催しだった。これらが僕の韓国と

在日の美術に対する理解を深めてくれたと言っている。

周知のように河さんは自身のコレクションを韓国および日本のさまざまな所に寄贈してきている。僕は、その寄贈式にも幾度か招かれた。河さんの自宅および光州においてである。河さんのコレクションとその意義について幾度か書いてきているとはいえ、そういう式典に参列することは、僕にとつては望外のことだった。

例えば2001年12月。河さんの6回目の寄贈の式典に際して、「生きる」としての作品収集河正雄の作品収集活動」という講演をした。彼にとつて美術作品の収集は、「趣味」というようなものではなく、「生きる」とそのものに繋がる行為にほかならない、そういうことを話した。彼のコレクションの「広がり」を象徴する一例として舞踏家の「崔承喜」の資料類のことにも触れたのである。

東京から光州への直行便はないのでソウル(金浦空港)を経由するわけだが、帰りにソウルに1〜2泊することも可能で、調査には有益だった。ちなみにこの時は「リウム美術館10周年記念展」や「金浩得」

個展などを見て帰国した。いま思い返せば、それは大きかった。1回の渡航がいわば2回分の効果をもたらしてくれたからである。

河さんは画家になりたかったのだが、事情がそれを許さなかった。そして彼は芸術家を、特に様々な「不退」のもとに置かれている芸術家をサポートすることに自身の道を見出した。それが彼の「禱り」であり、彼が美術の中核だと考えている事である。ふと、光州の夜の酒の席で聞こえた韓国語が浮かぶ―「サルダボミョン……」。

## 出逢いから学ぶもの

上田雄三

1951年生まれ。神奈川県横浜市。キュレーター。ギャラリーQオーナー

河正雄氏との出逢いはギャラリーQで開催された文承根(1947-1982)の追悼展(1984年7月16日〜21日)の時だった。光

州市立美術館にも河正雄コレクションされている文承根は日本名を藤野登と言い、在日韓国人3世であった。1971年までは日本名を名乗り関西を中心に具体のグループと一緒に活動していたが、1982年胆嚢癌により34歳で死去。私は当時、郭仁植から文承根を紹介されており、私は生前一緒にグループ展を開いたこともあった。その後、文承根が亡くなり追悼展をギャラリ―Qで開催することになり、その時に郭仁植から河正雄氏が紹介された。

河正雄氏は文承根の作品を丁寧の一つ一つ鑑賞し、涙を流し、感動していたことを記憶する。河正雄氏も在日韓国人であり、文承根と面識はなかったにしろ、在日韓国人として、何か通じるものがあったのだろう。私は在日韓国人のアーティストの知人が多くいる、郭仁植を初め、李禹煥、伊丹潤(庾東龍 ○尹동용)、林芳文、高山登等と共に酒を飲み芸術論を交わしたことがあるので、河正雄氏との出会いもごく自然に親しくなった。

その後、私は河正雄氏と交流が始まり、光州市立美術館での「韓日現代美術50年の礎―郭仁植の世界展(河正雄コレクション)」

(2002年3月28日〜6月29日)でも、キレーションに関わり、一緒にする機会に恵まれた。河正雄氏は私財を擲って支援をするアートコレクターであり、篤志家であるが、まだ世に知られていないアーティストを支援し、社会の接点を広げていく活動をしているが、その活動は決して容易ではないことを知っている。

まだ無名なアーティストは必ずしも、社会的にも認知され、評価されているわけではないので、不安もあるかもしれないが、コレクターである河正雄氏は自身の直感と経験を持って、真贋を見極める。時にはそのアーティストの人生観や考えを深く共鳴して、作品を鑑賞している。

光の当たらない闇に、創造の世界に入り込むことで、見える光となつて、闇の世界を照らし、世界を正しく評価、理解することが求められる。輝く光は深い闇の経験がなければ、真に光を見極めることはできない。文承根のように日本に生まれ、日本で育った在日韓国人という立場は決して軽いものではない、重くのしかかるかのように、時には歩むことさえ困難な時もある。

河正雄氏も同じく、重くのしかかる経験

に耐えてきたに違いないことから文承根の作品に涙を見せたのも想像に難くない。アーティストが生きていくうえでどんな国でも容易くはないことはもちろんのことである。文承根だけではなく、日本で生まれ、日本に住んでいる在日韓国人のアーティストたちは、二つの祖国で生まれたアイデンティティが決して一つになることはないが、二つの祖国を重ね合わせ、二つの視点で、アートを通して世界を知る、生きることの証として作品を制作していることも事実だろう。

そのアーティストの生きた証拠を丹念に収集する河正雄氏の意志は私たちの想像を遥かに凌ぐものだ。歴史という大きなドラマは、小さな名も無いドラマからも始まることを誰もが知っていても、実際そのドラマをつなげていくことも大変な努力が必要なのだ。

河正雄氏にはこうしたアーティストの氣質もあることから、多くの作品を収集していくうえで、作品を見る確かな目を、自身で努力し経験を積んでいる。もの派で知られる李禹煥もその一人であり、欧米諸国の主要な美術館で展覧会が開かれ、評価がな

されたことは河正雄氏による支援の賜と言  
って過言ではないだろう。

アートコレクターは多くの場面で決して  
評価されることはなく、時にコレクション  
された作品がアートマーケットで、高値で  
取引され、投資の対象となつて、アートコレ  
クターは資産家として誤解されることも多  
くある。フランスの実業家フランソワ・ピノ  
ーは世界有数の現代アート収集家としても  
知られているが、資本力によるところが多  
い。

確かに作品をコレクションするにあつ  
て資本力には必要ではあるが、作品の創造的  
価値はアートマーケットで評価されるので  
はなく、その国の歴史として必要とされ、社  
会に還元できる、哲学的な背景がその作品  
の評価と言われるべきであるだろう。

河正雄氏のコレクションはむしろこうし  
た資本力からのコレクションではなく、自  
身の歩みの歴史を、あるいは二つの祖国の  
経験の痕跡をコレクションすることで、日  
本と韓国、つまり二つの祖国の壮大な美術  
史を記すうえで重要で役割を果たしている  
と私は思う。

私たちが住む韓国と日本の芸術の環境は

あまりにも欧米主義に陥っていて、西洋の  
美術を崇めすぎている中で、河正雄氏のコ  
レクションは私たち、自らの歴史を知るう  
えでもっと評価されるべきであるだろう。

(2003年6月2日)

### 河正雄 (Ha Jung-Woong) コレクション

中山二郎

現代美術家。1961年生まれ。東京都東村山市。

■見るアーティストでありコレクション  
するアーティストである河正雄 (Ha Jung-  
Woong)

第二次世界大戦の後、日本にも、韓国にも  
アメリカの文化が急激に入つて来たことは  
一般にもよく知られている。

それは外の目からは明らかだが、日本や  
韓国の内部の現代の人達からは、意外にも、  
あまり見えていない。何故ならば彼らから  
は、自国が「近代化」したと見えているだけ

で、それがアメリカ化であるという見方は  
されていないからだ。だから日本や韓国で  
のアメリカ化は、何のためらいもなく加速  
されてしまったということがある。

日本と韓国の社会の中でのアメリカ化す  
る流れに対抗したものは、伝統を守り、とて  
も保守的に表面的にだけ伝統を守り続ける  
という流れだった。多くの人は、この選択以  
外の対抗方法は、考えつくこともできなかつたのである。

また、日本と韓国が表面的にだけ保守的  
に自分の文化を継承して自国の特殊性を主  
張して対立し合っていくような力は、むしろ、  
この地域を支配するアメリカとしては、  
都合の良い力でもあったということもある  
だろう。だから表面的な保守性は、むしろ権  
力からも奨励もされてきたし、これからも  
その流れは続くであろう。

しかし、極々一部で、極東アジアの表面的  
な伝統をただ守るのではなく、その根底に  
ある思想の再解読を試み、極東アジアの文  
化を継承しながらも進歩させようとした流  
れがあった。

そういう試みができた人達を見てみると、

明らかに在日韓国(朝鮮)人の芸術家に多い。美術では、具体的には、仙厓による禅画や、枯山水などの元にある哲学などとの関係が指摘できるものがある。

その流れは、例えば70年代の芸術学派「もの派」の基本的な流れとして顕在化した。

もの派は、60年代から70年代初頭に展開した日本出身の多くの日本人のグループだったが、重要な理論的支柱は、在日韓国人であった李禹煥(Lee Ufan 1936-)だった。

そのLee Ufanに影響を与えてきたのは、20歳年配で、やはり在日作家の、郭仁植(Quick In-sik 1916-1989)。

その両者に強い影響を受けてきたが夭折した、文承根(Moon Seung-geun 1947-1982)。また抽象絵画家として独自に日本の画壇に影響した孫雅由(Son Ah-yoo 1949-2002)といった在日の朝鮮半島出身在日の芸術家の人達だった。

在日韓国・朝鮮人らは、表面的には他の日本人達との違いなど全く分からない。しかし日本人から差別を受け、韓国の韓国人からも差別的な扱いをされてきた。彼らが差別されてきてしまった理由の一つは、皆が

隙さえあれば少しでもアメリカ化を進めようとして努力しているか、伝統文化の《表層だけ》を必死に守ろうとしているかのどちらかの社会の中、彼らだけが全くそれらとは違った、むしろ普通の日本人や韓国人達が自分らから切り離したい、あるいは忘れたいと思っていた美観や思考方法の方向に彼らが向かっていたからということもあつたからではないだろうか？

二つのアジアの文化の中に身を置いていることで、文化の存在に対して敏感となつた彼らだけがその方向に向くことができた。それを別の言い方をすれば、戦後、日本の伝統文化の神髄を最も守つたのは日本人ではなく、在日韓国・朝鮮の人達だったということになる。日本ばかりでなく、もう少し広く見れば極東アジア地域の文化を一番守つたのは、結果的に彼らであったと言えるのではないだろうか。

世界中、アメリカ化によって自分らの伝統の影響を薄めて行く流れが強い中、そうではない方法で、自らのアイデンティティを守る為に自分らの文化伝統の歴史を深く読みながら新しい世界観を作つて行こうと

した美術の試み。それをコレクションしてきたのも、また在日の韓国人・朝鮮人だった。河正雄(Ha Jung-Woong)の膨大な美術コレクションは在日韓国人の作家に限つたものではなく、日本をはじめ、世界の多くの作家の作品をコレクションしてきた。

しかしとりわけ、当時、ほとんど誰もコレクションをすることに興味も持たない様な在日作家のこういった興味深い優れた作品をコレクションしてきたのだ。

河正雄(Ha Jung-Woong)コレクションを常設展示するために日本の秋田県の田沢湖で公立美術館を建設することが決まっていたが、日本の政治的な理由で、不可能となつてしまい、現在は、彼のコレクションの多くは韓国の複数の公立美術館へ寄付された。

その河正雄(Ha Jung-Woong)のコレクションを所蔵した韓国の八つの公立美術館が光州市立美術館を中心にネットワークをつくり、韓国の今の美術の発展に強く影響している。現在、アジア圏の中でも韓国の現代美術に活気があるのは、こういった背景が大きく影響しているからだと思われる。

パリのギメ美術館での河正雄コレクター

により蒐集された作品と、日本の禅の絵画家、仙厓などの作品との関係と、その意味を見せる展覧会を開くことは大変に有意義だと確信します。

◇

以上の文は、2016年12月29日に書いた文でした。

今回、この上の文にさらに書き足して良いということになったので、少し自由にこの文を書き足させてもらうことにしました。実は上の文は、河正雄さんのコレクションの展覧会をパリの美術館で開けるかもしれないという話があり、その準備の為に、ヨーロッパ向けに説明を書いたものでした。

しかし私の知らない所で、その展覧会の話は無くなってしまい、2023年4月、河さんが私に電話して来るまで、どのようにこの件が終わったのかも知らないままで居ました。

今回、聞いてみると、1億円のお金を用意しろと言われて、それはできないとなり、展覧会の話は断ち切れになったのだそうです。

21世紀になってからの世界の美術とは、

20世紀よりも、そういうお金の部分で多くのも物が動かされている美術という風に見えなくもありません。大きな有名な美術館が展示をしたかどうかが美術史を作ってしまうので、このような構造で美術史が書かれてしまうことは現代の美術のとても残念で心配な部分だと感じています。

そういう動きの裏にあるのは、大美術館の展示での作品やその作家の価値を変えることで、それを投資として美術界を動かす人達の力が世界で強くなってしまったということがあります。

河さんの美術コレクションは、そういった投資目的とは無関係であることは、そのコレクションの内容を見るとはつきりとわかります。とても興味を引く部分は、絵画や彫刻などのコレクターがどのように現代美術をコレクションをするようになったのかという部分です。多くの人達が理解しなかったものをコレクションしてきた訳で、その時代としてはとても先進性があったコレクターだということがあります。

もし投資が目的だったら、その様なものはコレクションはしなかったでしょう。多くの日本の絵画や彫刻のコレクターは、現

代美術の流れについて来れなかったのに、河さんは後の時代から見ると、しっかりと流れを押さえて来ていたことがわかります。過去の図録を見ると、いろいろな種類のもがあります。1万点を超えるコレクションがあるのだから、当たり前なのかもしれませんが、その中をさらに見て行くと、河さんはコレクションをしながら学んでいたのだと思わせられます。できればそれぞれの作品を、いつ購入したのかの日付けも知りたいと思わせられました。

良く見てみると、その時代の社会との関係も象徴するような作品が多く見られます。政治に対する民主主義の動きなどが、しっかりとコレクションに入っていました。

時代の人間社会のあり方に河さんが敏感だったから、その視点から追って行くことで、素材も、表現方法も、その保存方法さえもそれまでの絵画や彫刻とは全く違って来たオブジェなどの現代美術の作品でもコレクションして行くようになったのだらうと私には思わせられました。

現代美術というものは、戦争と平和と民主主義にとっても強く関係しているものだということがあります。それは例えば、ロシア

の構造主義やダダイスムやシュールレアリスム、ネオダダ、ポップアート、具体、もの派、などそれぞれの動きが起つことは、すべてそういう時代背景と関係しています。

第二次世界大戦以降の冷戦から、東アジアで起きているほとんどのことはそれぞれの国の中で見え方が違ったり、特に日本などでは人々の意識にあまり上がって来ることも珍しかったりもするのですが、実はすべては今も続く朝鮮戦争レジームの中での影響で起きていることです。すべてのこの地域の我々は、その中で生きているのです。

河さんは、そういう中に生きた作家らと自分の経験としてのその時代という意識の軸がぶれることなく持ち続けられていたから、世の中が解りにくい変化が多い中でも、いろいろなものとしてバリエーションのある現代美術作品も時代に合わせて重要なものをコレクションしつづけられたのだと思います。

もともと美術というものは静止していて動かないものです。現代美術になって、風とか電気とかで見た目が動くものが出て来ても、他の芸術との違いがあるのは、その根底の軸足がしっかりと動かないことが評価さ

れる傾向のある分野の芸術だということだと思います。

作品を作った来た美術作家らは時代の証人であり、そこには何ものも比較にならない重要な歴史価値がそれぞれの作品の中に入り込んでいる訳ですが、作品をコレクションして来た人もまた、重要な歴史の証人として存在するし、その人の一生を通じてそれを表現してきたということなのです。

そのようなことから、河正雄コレクションには決してこの先もずっと忘れてはいけない精神というものが入っているということです。世界の多くの美術が、例え今後、変な方向に動きだして、みんなどこを漂流しているのかも判らない時代に入ってしまったとしても、ここには動かない軸足というものが残っているのです。

そしてその動かない軸足というものは、まるで、李禹煥(Go Ufan)らの作品のあり方にも呼応していて、ある重要な一点を、しっかりと強い軸として存在させると、その点が当然に大事なのですが、不思議なことに、その点の置かれたその外側全部の空間の重要性が見えてくるというものなのです。

(2023年7月22日)

## 河正雄・人間愛の奉仕者

尹 基 (Tauchi Motoji)

1942年生まれ。大阪府和泉市。ソーシャルワーカー。社会福祉法人 共生福祉財団会長。社会福祉法人「こころの家族」理事長

人間として生まれて、美術品1〜2点寄付するのも珍しいことが、河正雄コレクションは1万2千余点の美術作品群の寄贈。到低まねできるものではない。

世俗的な「利害関係」にこだわる気持ちがなく、自然そのもので何とも言えないさりりとした味に圧倒された。

河正雄先生は、在日韓国人で、差別や偏見、環境を乗り越え、ご自分の独特な世界を構築した巨木であり真珠である。環境、習慣の違いを忍耐と信念と哲学で、昇華した河正雄先生を神は大切に生かされた。恩寵ではないだろうか。

見渡せば、木も花も草もそれぞれ自然に従い生きている。

死がやって来ればそれも自然である。

人間の運命を考えてみると、春・生まれて、夏・成長して、そして、真夏には舞台の上り、秋・木の葉が落ちて、やがて冬・雪が降り、終わりの幕を迎える。

それを悟るか、悟らないか。悟れない人は世俗の悩みから抜け出せない。悟ってしまえば死も恐くない。悔しさも何もない。

時の流れを啞然と眺めるだけだ。自然を眺めて、静かに笑ってみる。

これが河正雄先生ではないだろうか。

時には、「利益」が河正雄先生に多く集まったことでしょう。しかし、人のため、世のため、故郷のため、すべてを二つの祖国に捧げたに違いない。

時代は変わり、新しい世代が次から次へと出てきて歳月は流れていく。

頼りないと思っていた若者たちが一人前になって堂々と活躍している。

まだだよ、と思っていた後輩も主人公となり、はるか前方に行く。

私も年を取ったな、老人になったんだなと感ずる。

この寂しさを耐えるには他人を愛することだ。

私は、故郷の家の日々のサービスの開発

を研究している。

「韓国と日本の文化を融合して生き延びる福祉から楽しく安心して暮らせる文化福祉の創造」

2025年、目前に迫る超高齢社会を乗り切る道はここにあると信じる。人間はいつまでも生きれる動物ではない。必ず限りがある。ただ、その最後は安らかであるべきだ。



河正雄兄、秋はみのりの季節です。

2023年11月3日、結婚60年を光州の友人たちがお祝いされるとい話を聞いて、私も嬉しい。

日本では、河正雄兄と尹昌子様にもう一度ウエディングドレスを着ていただいて、老春を励ます会をしたいと思う。

ソーシャルワーカーの私とも長く交流している河正雄兄は、自然そのもので何とも言えないさりりとした味に圧倒される。世俗的な「利害関係」にこだわる気持ちがない。

河正雄兄は困っている人の心を読み、奉仕する天才だ。高慢さが匂わない。大きな度量のかただ。

26歳で320人の共生園の子どもたちの

運命を背負うことになった私は、棄て子一時保護所から高齢者施設まで、いわゆる、揺りかごから墓場までの福祉を展開している。河正雄兄に会ったのは、40歳で東京に来て、子どもたちを支援する「海外児童心の里親運動」を展開していた頃だ。

そして、在日コリアンの孤独死を新聞で知った。遺骨は福祉事務所のロッカーに預けられているという。この人は、どんなに寂しかったことだろう。大きなショックを受けた。

日本にも老人ホームはあったが、戦前、徴兵、徴用工、学徒兵などで日本に住むことになった人々の中には故郷へ帰れず、高齢になっても行くところがなくて困っていた。

1984年、「ふるさとで暮らすように、文化に配慮した老人ホームづくりを」と、私は朝日新聞の論壇に訴えた。それが契機で在日韓国老人ホームを作る会が発足し、多くの善意が集まって、1989年、キムチと梅干しのある老人ホーム「故郷の家」が大阪・堺にできた。

1992年には、日本テレビの「知ってるつもり」の関口宏さんが韓国孤児の母と慕われた母、尹鶴子(田内千鶴子)を番組で取

り上げ、映画『愛の黙示録』を日韓合作で制作することになり、日本映画韓国上映許可第1号となった。

2001年、阪神淡路大震災で被害の大きかった神戸市長田区に「故郷の家・神戸」が完成した。河正雄兄は、震災で苦しんだ高齢者の心が安らげればと版画20点を寄贈して下さった。

2009年、160名収容の「故郷の家・京都」ができて、河正雄兄に相談した。

「それなら、一人一人が大事だから160点の作品をかけることにしましょう」と寄贈した。そうして「河正雄ギャラリー」が生まれた。

故郷の家が有名になった理由はもう一つある。福祉は文化だ。

夢・自立・文化を目指す故郷の家には、「河正雄のギャラリー」と韓国文学界の巨星「韓雲史文化ホール」が京都にあるからだ。

韓雲史さんは映画「赤マフラー」、「北と南」の歌、小説「玄界灘は知っている」、新しい村作りの歌「豊かに暮らしてみましよう」がある。

2016年、河正雄兄は「故郷の家・東京」が竣工した折りにも素敵な絵と写真を持つ

て来て下さった。

故郷の家は5年後40周年を迎え、共生園は100周年を迎える。私の大きな夢は、韓国と日本の文化を融合して、世界一の介護（療養）サービスを開発し提供することだ。人間の命には限りがある。ただ、その最後は安らかであるべきだ。私が故郷の家で学んだ最高の哲学である。

河正雄メセナ（文化・芸術の支援）の精神と分かち合う心の美学の実践は、人間の幸せな社会貢献すると確信する。

これは人間世界の明日につながる道でもある。

## 7 回目の千支年を迎えるに当たって

永野慎一郎

1939年生まれ。東京都杉並区。大東文化  
大学名誉教授。NPO法人アジア政経アカデ  
ミー理事長歴任

気が付いてみたらいつの間にかこの歳になってしまいました。私も同じ年齢です。河正雄先生とは同年齢であることから、親近感があり、いろいろなところで、一緒に仕事をすることもありました。

私が大学を定年退職して設立したNPO法人東アジア政経アカデミーの理事として協力していただきました。また、学校法人金井学園・秀林外語専門学校（現在の専門学校デジタル&ランゲージ秀林）の理事として理事会の会議や入学式、卒業式など学校の行事などではしばしばお会いする機会がありました。高齢なので、お互いに健康に注意しましょうと話し合ってきたところです。

『韓国の経済発展と在日韓国企業人の役割』（永野慎一郎編、岩波書店、2010年1月）に「美術品を収集して祖国の文化事業に貢献」と題して、河正雄先生に関して執筆しましたが、原稿執筆に当たり、埼玉県川口市の自宅にお邪魔したことがあります。質素な生活ぶりが印象に残っています。

河正雄先生は、少年時代を秋田県田沢湖町（現在の秋田県仙北市）で過ごしたことか、田沢湖を故郷としています。一方では、在日という特殊な事情があり、父母の故郷

である韓国全羅(チヨルラ)南道(ナムド)霊(ヨン)岩郡(アムグン)も故郷なのです。

尹昌子(ユンチャンジヤ)夫人と二人が川口市で始めた電気店が繁盛して事業に成功し、経済的に余裕ができると、在日画家の全和風(チヨンフアファン)と出会ったことが契機に、在日コリアン画家の絵画コレクションとなります。在日コリアン画家たちが売れない時代に、彼らの作品をコレクションして各地で展示会を開き、好評を博しました。その結果、作家の価値も上がるようになったのです。また、若手画家たちの作品の展示会を開催し、彼らを育成することにも情熱を注ぎました。

河正雄先生は在日コリアン画家たちの作品だけでなく、ピカソ、ルオー、シャガールなど世界的な巨匠の作品も収集し、光州市立美術館を始め、韓国主要都市の美術館、日本の美術館などに数多くの美術品を寄贈されました。光州市立美術館だけでも、2018年まで2603点の美術品を寄贈しています。

故郷の霊岩には、霊岩郡立河正雄美術館が建立され、河正雄コレクションが所蔵されています。2007年に750余点の美

術品を寄贈したことから、霊岩郡が霊岩郡立河正雄美術館を建立したとのことです。霊岩郡にはその後も寄贈が増え、2023年までに4572点寄贈しています。

2012年9月、「故郷」をメインテーマに開館記念展が霊岩で開かれました。私も記念式典に参加させていただきました。真夏にもかかわらず、内外からの来客でごった返していたことを思い出します。

河正雄先生は、霊岩郡立河正雄美術館に寄贈する作品を終戦直後に移住し、高等学校卒業まで青春時代を過ごした故郷の仙北市立角館町平福記念美術館で、2011年2月7日～3月27日まで「故郷」展と名付けて展示会を開催していました。雪国の秋田で行なわれた記念式典に、私も東京から駆け付けました。また「故郷」展は同年5月10日～14日、東京の駐日韓国大使館韓国文化院ギャラリーにおいても開催されました。「寄贈は金持ちだけがすることではない。気持ちや労働・知識も寄贈できる。小さなものでも自分が持つ能力と才能を社会のために活用すればいい」

河正雄先生は「私の人生は苦悩と苦痛の連続でしたが、公共の利益のために生きる

ことは、決して損でも、人生の無駄でもない  
と自信を持って言えます」と語ったことが  
あります。

(2023年5月25日記)

※永野慎一郎編『韓国の経済発展と  
在日韓国企業人の役割』の文化・スポー  
ツによる貢献の項に「光州市立美術館  
との関わり」に記した一文である。

河正雄の故郷光州(全羅南道の中心都市)  
との関わりは、光州日報社・金宗太社長の紹  
介で画家呉之湖に知り合ってからである。

呉之湖は著名な画家であるだけでなく、  
南道文化会館を設立するなど文化活動にも  
熱心で、光州の文化的発展のために多大な  
貢献をした文化人であった。二人は意気投  
合した。河正雄は呉之湖の温かい人格に触  
れ、自分の志への確信を深めた。呉之湖は1  
982年に77歳で亡くなった。

1992年、光州市立美術館が完成した  
ので、見に来ないかと呉之湖の息子で画家  
の呉承潤から誘われた。光州市立美術館は  
韓国初の地方美術館で、近代的な設備を誇  
る美術館であった。しかし、館内には所蔵作

品が150点にも満たず、閑散とした寂しい風景であった。呉承潤は切り出した。

「ご覧の通り、この美術館は設備だけは完璧だが、中身がありません。河さんのコレクションの中から1、2点寄贈してもらえたら有難い。厚かましいお願いですが。光州の文化的発展に力を貸していただけませんか」

「引き受けましょう」と河正雄は即座に回答し、自分のコレクションの中から全和風、郭徳俊、郭仁植、文承根、宋英玉、李禹煥の6人の在日作家の計212点を光州市立美術館に寄贈した。93年には「河正雄コレクション」を記念する特別室が開設された。

「在日の文化を守り伝えること。在日同胞の生き様を本国の人たちにきちんと伝え、理解させること」。これが河正雄の夢でもあった。その夢の第一歩が光州市で花開いたのである。

河正雄に会うまで呉之湖は在日僑胞に対する印象が良くなかったが、「河正雄を見て在日僑胞への認識を改める」と言われたのでショックを受けざるをえなかった。

本国での在日同胞に対する見方があまりにも偏見と蔑視に満ちていることを改めて思い知らされた。河正雄はその時、「しっか

りしなければ駄目だ」とみずから言い聞かせ、在日として生きてきた者、生きる者のプライドを本国の人々に伝えることの大切さを強く感じた。在日2世として生きる河正雄の大きな転機であった。

### 河正雄さんについて思うこと

福田政夫

1943年生まれ。社会運動家 NPO法人  
「もくれんの家」

■河正雄さんとの出会い―八木ケ谷妙子について

私が河正雄さんと出会ってから約20数年が経ちましたが、河正雄さんのことを語る場合、八木ケ谷妙子という方と河正雄さんとの出会いについて話さずに語ることはできません。お二人の出会いの契機となったのは、2003年8月に東京で開催された関東大震災80周年集会でした。この集会で

河正雄さんは記念講演をされたのですが、集会終了時にこの集会に参加していた八木ケ谷妙子が河さんに声をかけ、これを契機に河正雄さんと八木ケ谷妙子さんとの交流が始まりました。そしてその関係から、八木ケ谷妙子と関係のあった私も河さんと知りあうことができました。



八木ケ谷妙子は当時すでに88才の高齢でしたが、まったくお元気でかくしゃくとしており、当時私も深く関わっていた設立したばかりのNPO法人「共に生きる国際交流と福祉の家」(通称「もくれんの家」)の理事長として活躍していました。このNPO法人は、私を含め茅原まりなど十数人の仲間がいました。

理事長の八木ケ谷妙子は、1923年9月の関東大震災時の朝鮮人虐殺を目撃した方でした。小学校の帰り道、千葉の自宅近くで木に縄でくくりつけられた一人の朝鮮人の青年が、村人たちに囲まれ虐殺される現場を目撃したのです。彼女は、大ショックを受け、泣いて家に帰りました。そしてその時虐殺されようとしていた青年の悲しみと怒りの表情が目には焼きつき、生涯消えること

はありませんでした。そしてそれがその後の彼女の生き方や思想に大きな影響を与え原点となったのです。

その後大人になって教師をやりながら、日本の朝鮮と中国に対する差別と戦争を憎み続けました。教師を退職した後も、日本の戦争犯罪の反省と謝罪を強く訴え、二度と同じ過ちを繰り返さないための活動を中心にすえた活動をおこなっていました。国際交流を柱にしたNPOを立ち上げたのもそのためでした。

特に晩年になってから、朝鮮、中国などに対する排外主義勢力の台頭によって、関東大震災時の朝鮮人虐殺や中国侵略戦争の時の南京大虐殺について、「それはデマで、そんな事実はなかった」と否定する御用学者や保守勢力の宣伝に怒りと危機感をいだきました。そして虐殺現場を目撃した証人として、様々な場で発言をしてきました。彼女の証言は、新聞やテレビなどマスコミでも何度もとりあげられ報道されました。

◇

そういう方でしたので、河正雄さんと八木ケ谷妙子の思想と理念は共通するもので、この記念講演での出会いを契機に、八木ケ

谷妙子、そしてまた私たちNPOのメンバーと河正雄さんとの交流が始まりました。

この河正雄さんとの交流で私たちが河正雄さんから教えられたこと、学んだことはあまりにも多い。その中から以下二つについて絞って述べたいと思います。

#### ■韓国訪問

一つは、河正雄さんの招待を受け、八木ケ谷妙子を団長として何度も韓国を訪問したことです。この訪問で河さんが名誉館長を務める光州市立美術館をはじめ、盲人協会の設立など、河正雄さんが尽力して創られた施設が深く根をおろして感謝されているところが多くあることを知り、河さんの韓国での活躍とその功績の大きさを知り感銘させられました。

そうした見学の中で、特に私にとって極めて衝撃的だった見学は、1985年5月の光州民衆蜂起の闘いの資料館と墓地の見学でした。すさまじい弾圧に屈せず闘い抜かれた光州の民衆蜂起の偉大さは言葉に表現出来ない感動与えてくれるものでした。

そしてこの血の弾圧の中で闘われた光州市民の蜂起的闘いによって、その後の韓国

の民主化への道がかちとられたのだということを知りました。そして素晴らしいと思ったことは、この闘いを韓国の人々が誇りとし、国を動かし、立派な歴史資料館と戦士たちの墓地を造り、人々にしっかりと伝え続けていることです。私たちが見学している時も、たくさんの若い学生たちがバスを連ねてここに見学に訪れていました。

#### ■清里銀河塾への参加で学んだこと

二つ目は、河正雄さんが始めた私塾・清里銀河塾への参加である。

この銀河塾に八木ケ谷妙子を先頭に、私も茅原まりなどNPOのメンバーたちも何人も参加させてもらいました。そしてこの銀河塾で多くのことを学びました。

とりわけ重要だったのは、この塾で浅川巧のことを知り学んだことです。

私はそれまで浅川巧について知りませんでした。浅川巧は山梨県北杜市の生まれで、朝鮮差別が激しかった朝鮮併合後の1914年に兄の伯教のいる植民地朝鮮にわたり、朝鮮総督府の林業試験場に勤務しながらはげ山の多い朝鮮の山を緑化するために多大な尽力をされた方です。浅川は日本の朝鮮

差別に憤りをもちながら、朝鮮の人々と深くまじわり、朝鮮人との友好と朝鮮文化の普及に多大な貢献をなした人物でした。河正雄さんは清里銀河塾の講演で以下のよう

に語っています。

「私は在日二世です。日本での戦前戦後の生活は父母はもちろんのこと多くの在日同胞は言葉では言い尽くせぬ辛苦の歴史でありました。その歴史は、……現在も同じであります。私は在日で生きるための哲学を教えられたのが高校時代知った浅川巧の生き方でありました。それは『人間の価値』……その生きる姿、考え方であり、日々の行い、営みであります。浅川巧は韓国の山河や歴史と文化を大きく深いところで見つめていた。浅川巧は国や民族を乗り越えた『共生』を考えていた人でありました」



この河正雄さんの言葉は、八木ヶ谷妙子の理念とも完全に重なるものでした。河正雄さんはこの浅川巧の思想と人格・生き方、すなわち『人間の価値』ということを広く人々に知って学んでもらうために、浅川巧の故郷である山梨県の清里で銀河塾を開いたのです。

またこの銀河塾でアメリカ人牧師のポール・ラッシュ（1897年～1979年）のことも学びました。この方も1923年の関東大震災で破壊されたYMCAの再建のために来日し、清里に住んで戦後の日本の農村の復興に尽力された方でした。この方とも河正雄さんは若いとき訪れた清里で偶然に劇的な出会いをしたのです。

さらに4世紀頃、日本に初めて漢字を伝えてくれた王仁博士についても学びました。王仁博士は河正雄さんの父母の故郷の出身の学者で、漢字と共に、たくさんの方々が技術をもちも一緒につれてきて同行し、水田を初め様々な文化と技術を同時に日本に伝えたこと。

そういう深い交流が日本と朝鮮半島の間で行われていたすばらしい歴史をこの銀河塾で学びました。

まさに奇しくも同じような思想と理念を持った（王仁博士）（浅川巧）（ポール・ラッシュ）、そしてまた日本人としての（八木ヶ谷妙子）が、河正雄さんという人物によって見事に一本の糸につながられたのです。

#### ■最後に

私も今年5月で80歳を迎えました。この80年間多くの人との出会いがあり交流がありました。しかしその中でなんとと言っても河正雄さんは最高の方でした。こういう方と出会い交流できたことは私の最高の喜びであり財産です。その幸運を深く感じながら「響き合う心」をもって残りの人生を歩みたいと思っています。

#### 巡り逢い

倉橋廣昌

1940年生まれ。静岡県熱海市。フリーライター

私は60年安保世代です。1960年日米安全保障条約改定をめぐって日本国中が国民的大騒動に遭遇しました。太平洋戦争の惨禍を二度と繰り返すまいと、当時、勤労学生でしたが群馬県桐生市の市街をフランスデモで充滿した経験があります。戦後民主

主義を体感した原点です。

その後、1980年光州事件で韓国に驚嘆しました。日本による植民地支配に無自覚でしたが隣国への視点開眼です。

1999年埼玉県日高市の聖天院で埼玉韓国教育院によるハンゲル学習が企画されるのを契機に参加して、在日韓人歴史資料館で韓国現代史を学び、在日韓国・朝鮮の人々と知己をえました。

2011年、資料館事務次長・研究員だった羅基台さんの司会で、韓国文化院において河正雄さんの文化勲章受勲記念講演「私と韓国美術との出会い」があり、講演記録のテープ起しを申し出たのが河正雄さんとの最初の巡り合いです。

その後、何回かの訪韓を経験して、2015年無謀にも訪韓企画「河正雄路を訪ねる旅」を進めたのですが、朝鮮籍の在日韓国・朝鮮の方のビザ取得不可を知らず、また訪韓当日に私自身が奇病を患い惨憺たる旅でした。河正雄・尹昌子夫妻に救われて無事故で帰国できたものの、自らの無謀を悔やみました。

5・18光州事件顕彰集会へのフィードバックを通じて韓国現代史を理解し、済州

4・3事件顕彰集会にも足を伸ばしました。訪韓は26回になります。

国内では清里銀河塾に参加し、浅川伯教・巧兄弟資料館やポール・ラツシュを知りました。河正雄さんを通じて「思えば遠くに来たものだ」と実感しています。

元々、イタリアのウツファイ美術館やメキシコ壁画運動のシュケイロス、洪成潭さんの5月連作版画に関心があったので、河正雄さんの祈りの美術とは異なるが、美術への執着が共通項といえるのでしよう。

※倉橋廣昌氏2013年1月3日の書簡。

早々の年賀有難うございます。日本という国が激動期を迎えているようです。混迷政治と同時に犯罪社会が跋扈して萎縮経済も重層しています。ツクヅク考えてみると近隣諸国に与えた侵略戦争を総括せず親米隷従政策は人としての矜持を蝕んでいます。

憲法前文に謳われた「国際社会における名誉ある地位を占める」人間でありたいものです。

私といえば、日中韓共同歴史教科書を再読しながら、在日の方々の交流を深めています。朝鮮通信使パレードや朝鮮高校無償化に関わっていると、在日韓国人の生き様を通して日本人の理不尽や人権感覚の希薄を思い知らされます。

さりとて昨今の気候激変に自分の身体が追従しなくなった不甲斐無さを思い、老いを切実に実感しています。皆様の慈無いご健勝を祈念します。

追伸

河正雄さんの上半期計画によると、年初来、相変わらず超多忙のスケジュールに驚嘆しています。健康は神から賜った賜物です、ご自愛ください。

シケイロスやベン・シャーンなど、そのレパートリーの広さに、河正雄さんの視野に共鳴する次第です。

昨年7月7日北杜市でおこなわれた、映画『道―白磁の人―』公開記念・浅川巧シンポジウムのテープお起しを、浅川伯教・巧兄弟資料館の澤谷滋子さんのご許可で12月中旬より始めています。基調講演の姜尚中さん始め、夫々パネリストが専門家揃いな

で、特殊な語彙の復元に苦慮しています。テープおこしがある程度まとまったら、確認のお問合せをしたいと思いますので、その節はご援助願います。

また、河正雄・編著『尋劍堂』を入手し拝読させていただいております。これによると、冒頭の中見出し「尋劍堂から」（2頁から120頁）が河正雄さんの遍歴と理解できます。河正雄に関心を寄せる第三者としては、コレクターを目指した河正雄さんの生き様を知りたいものです。公表して支障がない範囲で「自分史」を記録されることを切望する次第です。

2013・1・3 河正雄さま

## 私と河正雄さんとの「在日」

李洋秀（イー・ヤンス）

1951年生まれ。千葉県船橋市。韓国語通

訳・翻訳

―映画『在日』とKBSテレビの「在日の花・コレクター河正雄」―

戦後50年の1995年、呉徳洙（オ・ドクス）監督（郷里が河さんと同じ秋田県）の映画『在日』が封切られたが、その「歴史篇」と「人物篇」の両方で活躍したのが河正雄さんだった。映画は冒頭、植民地時代の残骸、朝鮮の王宮景福宮を取り壊す祝賀式典に、在日を代表して参加した河正雄さんの姿から始まる。

筆者がKBS（韓国放送公社）の日本側コーディネーターの仕事をするようになり、「河正雄さんの特集番組を作る」と光州総局から言われた時、私は映画『在日』の制作に関わっていたことが、とても役に立った。

番組はドキュメンタリー「在日の花・コレクター河正雄」という題で2008年4月放映されたが、撮影は河さん所縁の地として生家のあった大阪放出、育った秋田の生保内小中学校と工業高校や田沢湖の姫観音、自宅の埼玉県東川口どころか、両親が初めて日本の地を踏んだ下関港の倉庫群、そして「トンコル（糞の谷）」と呼ばれる貧民街、広島島の原爆ドーム、京都の竜安寺と天龍寺

や市立美術館、清里の清泉寮、山梨県北杜市の浅川伯教・巧兄弟資料館、埼玉日高の高麗神社と聖天院、美術評論家針生一郎氏の自宅、東京枝川の朝鮮部落や秀林日本語学校等、河さん縁りの全国各地に及んだ。季節柄、田沢湖と清里で大雪に遭い、慌ててタイヤにチェーンを巻いたり、観音像に積もった雪を払うどころか、像へ接近するだけでも大仕事だった。

ところが、それが逆に功を奏したのか、イ・ビョンホン、キム・テヒ、TOP出演のドラマ「アイリス」制作にあたり、「雪国」秋田のロケ地を探していたスタッフの眼に留まった。他にも北海道、新潟等の候補地上ったが、河さんのドキュメンタリーが深い印象を与えたようだ。ドラマは2009年10月から20話がKBSで放映され30%を超す視聴率を上げ、日本でもTBSテレビが全国放映した。また多くの韓国人ファンが秋田に殺到したおかげで、週2回のソウル・秋田直行便が毎日運航に変わった。秋田県観光課の担当者が大喜びしたのは言うまでもない。

そして人気沸騰の様子を知らせようとKBSは「雪国で会った日本―秋田」という番

組を作り、2010年1月放送した。「在日の花」の時は日本全国の取材だったが、今回は秋田だけだった。「アイリス」のロケで使った玉川ダムと温泉、男鹿のなまはげ、横手のかまくらと日本酒「天の戸」醸造、大館のハチ公像。乳頭温泉の混浴シーンはタオルを使っているので放送に問題なかった。

―「たつこ像」と「姫観音」―

田沢湖畔に立つ「たつこ像」は「美貌を永遠に望んだ辰子が龍と化した」という伝説を元に、彫刻家の舟越保武が1968年4月に完成させた黄金のブロンズ像が有名で、田沢湖観光の目玉になっている。

しかし田沢湖には「死滅した魚と湖神・辰子姫の霊を慰めるため」と台座に碑文がある、1939年11月建立の「姫観音」像が別にある。しかしその「建立趣意書」にあるように、像は「死滅した魚の霊を慰めるため」だけではなく、「ダム導水路建設工事の犠牲となった朝鮮人労働者を慰霊するため」だった像の「建立趣旨書」を発見したのは、他ならぬ河正雄さんだった。河さんは1990年田沢寺に慰霊碑、99年には「よい心の碑」を建立し、追悼慰霊祭を続けている。

河さんは既に1980年には田沢湖畔の白浜に美術館建用地を3000坪購入し、85年9月5日には李方子妃から「田沢湖祈りの美術館」の命名揮毫を賜り、著名な設計家伊丹潤に「田沢湖祈りの美術館」の設計を依頼し、87年田沢湖町議会で「田沢湖祈りの美術館」構想の説明まで済んでいたのに、92年町から美術館計画破棄の通告を受けたのは、上の真相究明に対する自治体側の仕返しかと思われた。

しかしドラマ「アイリス」で使われたのは黄金の「たつこ像」だけで、「姫観音」は無視された。「雪国で会った日本」でも「姫観音」は扱われなかった。「花岡平和記念館」も案内したのだが、やはり編集で外されてしまった。客寄せの「観光目的」と歴史正義を直視する旅行を両立させることは、本当に困難だ。

―大倉集古館に置かれた利川の五重石塔―  
韓国の皇帝高宗を武力で脅し強制併合した日本は、朝鮮王朝の王宮景福宮を取り壊す。撤去工事を担当した大倉組(現、大成建設)は、「資善堂」(王子の学習場)を解体して、1914年東京赤坂にある大倉喜八郎の私

邸に移設し、さらに1917年集古館へ移築して「朝鮮館」とする。

大倉は資善堂の前を飾るために、平壤停車場前の八角七層石塔を欲しがったが、総督府総務局から「平壤停車場前の石塔は1908年鉄道敷設時よりその地にあるから誰もが知っていて、他所に移すのは適当でない」と断られる。しかし代りに「朝鮮物産共進会」に展示中だった利川の五重石塔を勧められ、平壤栗里寺址の八角七層石塔と共に、1918年11月移設される。しかし「資善堂」は、1923年の関東大震災で焼失してしまう。

だが栗里寺址と利川の石塔は焼け残り、集古館の中庭に展示された。日韓会談で韓国側は、大倉集古館の栗里寺址石塔と利川石塔、根津美術館の浮屠の返還を要求する。日本側松下隆章美術工芸課長は1965年3月20日の「文化財小委員会に関する打合せ会」で、「韓国側リストにある大倉集古館の石塔、根津美術館の石塔は立派なもので、話をしてみれば(大倉や根津は)韓国に贈与してもよいというかも知れない」と無責任な発言をする。筆者は開示された外交文書を手にも、直接集古館の担当者に訊ねたこと

があるが、全く初耳のようだった。

焼け跡に残された資善堂の礎石は返還され、1995年サムソン文化財団が資善堂の再建に利用しようと試みたが、一度火災に遭った礎石は耐久力が落ち再利用は不可能だった。

2010年6月には返還を求める市民運動が利川で起き、市長が10万9017名の署名を手渡したが、大倉側は逆に韓国国立中央博物館所蔵の横山大観の絵『静寂』（推定価3億円?）を交換条件に提示して来た。その交渉の仲介交渉を河さんに頼んだのだが、大倉側は頑として河さんの諮問結果を聞き入れようとせず、門前払いする態度は道義的に暴力的ですらあった。

#### ―北朝鮮帰国事業―

帰国事業の先頭に立って推進した日本側の担当者、日赤の井上外事部長は、「厄介な朝鮮人を日本から一掃することに利益を持つ。」と公言して憚らなかつた。法務省入管の鶴岡次長は「日本の治安上朝鮮人が一人でもいなくなることを希望する」と本音を明かした。勝野局長も「少しでも多く日本から去ることは日本の望むところである」と

いう確固とした日本政府の排他的な態度を示した。

吉永小百合が初めて主演した日活映画「キューポラのある街」が1962年4月封切られた。「キューポラ」とは何なのか知る人は余りいなかったが、川口に多くあった。

鋳物工場の煙突のことと、筆者も映画を観て初めて知った。また川口で撮影に協力したのも、他ならぬ河さんだったと言うから、世の中狭いものだ。映画は帰国事業を礼賛して止まない。河さんも1961年には単独「帰国」を、一度は決心したと言う。

筆者も同じ年の6月末、まだ10歳だったが父の暴力から逃れようと日本人の母とふたり、北朝鮮に帰国するため新潟の日赤センターまで入った経験を持つ。

だが結果は悲惨で、北朝鮮側から「受入れ拒否」され追い返されてしまった。北朝鮮側の言い分は、「夫が同行しない日本人妻と子だけの帰国は認めない。帰国事業は移民ではない。」結果、総連は(同年)7月に入り、日本人妻の帰還抑制に組織の方針を転換する。

筆者が16歳になった1967年7月、単

独帰国できる歳に達した筆者に向って高校の担任は「帰国しなくても良いから申請書だけ書け」と言った。「申請だけなら」と申請書を出したところ、数日後、告げられた結論は、「お前は使いものになりそうだが母親は駄目だ、流れている血が卑しい。社会主義祖国の懐に抱かれたかったら母親を捨てろ」だった。この瞬間、北朝鮮は永遠に私の祖国でなくなった。

72年3月金日成の還暦祝いに「人間の贈り物」として、「オートバイ隊」200人が北朝鮮に渡る。その中には朝鮮大学の4年に在学中だった愛知の高校時代の同級生も数人含まれていた。結果的にはその年から「祖国訪問団」や修学旅行が始まるのだから、何のための「地獄への片道切符」か、開いた口が塞がらなかった。

#### ―伊勢湾台風と画家曹良奎―

曹良奎(チヨ・ヤングユ)を知る人は少ない。1928年慶尚南道の晋州で生れた彼は、釜山の国民学校で教師をしながら南労党に入って活動し、警察に追われて48年日本に密航する。枝川町の朝鮮学校で教鞭を執った後、1960年10月北朝鮮に渡る。

そんな曹良奎に憧れて、河さんも「天国のような北朝鮮に行き絵の勉強をしようと、総連の事務所を尋ねた」という。

河さんが伊勢湾台風で、荒川の氾濫で被害に遭っていたとは知らなかった。愛知県に住んでいた筆者は、夕方から停電になってガスも水道も止まり暗闇の中、深夜1時過ぎまで親子三人で震えながら玄関のガラス戸を押えていたのを、昨日のように憶えている。風速は50メートルを超え、家の前のアカシヤの木が真横に曲がって寝かされままた一晩を過ごした。名古屋では港が決壊して流木が飛び交い、5000人が即死した。

伊勢湾台風と小松川事件が帰国運動を後押ししたのは事実だろう。事件の犯人李珍宇が無実で冤罪だったという説は、今も根強い。明日は死刑になる身で、朝鮮語の勉強を始めたと言った筆者は、朝鮮学校への転校を決意した。

河さんが曹良奎の絵を探しているというので、かつて教え子だった李吉純(イ・ギルスン)氏から、恩師曹良奎の想い出を聞いた。彼は高円寺で「カンカラ」という居酒屋を経営していて、以前立ち寄ったことがあり、筆

者とも面識があった。

「先生としては、最低だった。小学校2年生の私たちを突然東京湾の浜辺に連れて行き、空を画け」と命じる。「雲一つない空を仰いだ私たちが、絵にできる材料など、何もなかった」と、今も憤慨は治まらないようだった。だが「天才的な芸術家は、人を教えるのが下手」というのは、よく聞く話だ。本人は何の苦労もなくできてしまうので、弟子ができて苦勞しているのを見ても、なぜできないのか理解できないのだ。

そんな曹良奎は帰国後、雑誌「朝鮮美術」1967年2月号を最後に、姿を消してしまふ。吉純氏から貰った東京朝鮮第二初級学校の「創立60周年記念集」に「歴代教員名簿」があるが、そこに曹良奎の名はない。

これは河さんも注目し研究している、有名な舞踊家崔承喜(チェ・スンヒ)についても同じことが言える。筆者は愛知の朝鮮学校に小5から高校卒業まで8年間も通い、それも舞踊部の伴奏ばかりしていた吹奏楽部にいたのに、崔承喜の名前聞いたことは、一度もなかった。1967年に「政治的粛清」され69年8月生涯を終えたと伝わるが、確証する術もない。

また韓国側から見れば、曹良奎も、崔承喜も、祖国を裏切った反逆者だ。名誉回復は遅々として進まない。河さんがコレクションで紹介しなければ、韓国で曹良奎の名を知る人は、今もいないだろう。

— 日本政府の民族教育弾圧に加担した韓国政府 —

ここまで書くと、北朝鮮内部での粛清や強制収容所送りばかり批判しているかのように見えるのだが、在日の97%は韓国に故郷を置く。だが李承晩から朴正熙、全斗煥と続く歴代軍事政権は、在日の教育や人権に無関心だった。日本政府が朝鮮学校を嫌うのは、正しくないし、美しくもないが、反日だから気に喰わない、邪魔者扱いしたい「心情」程度は理解できる。だが日本の民族教育弾圧に加担する韓国政府に対しては、まったく理解できない。日本の民族差別を容認するような韓国政府の正体性は、どこにあるのか？

1948年小学校52校(児童数6297人)、中学校2校(生徒数242人)数えた民団系の学校は、58年には4校に減った。結果、日本の小学校へ通う在日児童が9万2

483人いたのに、総連系の学校へは9113人、民団系は601人という有り様に落ち込んだ。秋田に住んでいた河さんも、愛知の筆者も民団系の学校へ通える環境は皆無だった。

65年の日韓法的地位協定で与えられた永住権は、退去強制とセットの不安定な永住権だった。71年1月に締切られた「協定永住権」の取得者は3万1441人で、全在日61万4202人の55%に過ぎなかった。

河さんは73年9月両親と共に韓国の故郷を訪問したし、80年には民団川口支部の副団長に就任している。ここら辺の環境は、筆者とはだいぶ異なる。

筆者は1歳で、母と共に無国籍、無戸籍になった。そして満3歳にして、外国人登録を申請しなかった罪で、名古屋入管から一人「退去強制」の対象とされた。刑事罰は7歳、13歳にも続く。筆者が戸籍を整理して韓国旅券を初めて手にできたのは、1995年のことだ。民団にはまだ、一度も加盟したことがない。

河さんは戦後間もなく朝連の小学校へ1年だけ通い、残りは全て日本の公立学校だったので、朝鮮語の習得はスムーズな筈が

ない。その点、筆者は民族学校へ通い続けたおかげで、韓国語の苦労はなく、河さんの原稿を翻訳などで手伝っている。

国家や政治を離れて、日韓交流は民間次元でできると、河さんは自ら証明している。

他にも弥勒信仰や河さんの故郷靈岩(ヨンアム)を訪ねた話や東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構韓国学研究所での講演を手伝った話等、まだまだ書き足りないことが多い。そんな河さんの数多い活動の中で、少しながらも助けになることがあることを誇りに思い、ここに筆を置く。

## 出会いとあこがれ

菊地正志

1958年生まれ。埼玉県さいたま市。埼玉新聞社記者、ジャーナリスト

■20年前、講演会の取材で出会う

私が河正雄さんと最初に出会ったのは2003年3月。ちょうど20年前のことです。河正雄さんが『韓国と日本、二つの祖国を生きる』を出版した翌年で、同名のテーマで講演会の講師を依頼(埼玉新聞社主催)したのがきっかけでした。

新聞社の上司から「韓国・光州市立美術館名誉館長」という肩書を聞き、「なぜ光州市立美術館の名誉館長が埼玉に在るのだろうか」と素朴な疑問を持ちながら、川口の自宅を訪れたことを覚えています。今から考えると顔から火が出るような恥ずかしい話ですが、当時は河正雄さんについて何も知らず、まったく予備知識を持たないままの取材でした。



講演会の会場は、新聞社の裏庭にあった粗末なプレハブでした。参加人数も20人弱だったと思います。そんな劣悪な環境の中でも、河正雄さんは真剣に、熱く語ってくださいました。

「日本と韓国、愛する二つの祖国の懸け橋になり、真に兄弟の関係を結ばなくてはならない。地域の発展に貢献し、日本とともに生きていきたいと願っている。私たちが在日

のことをもつと知り、伝えてほしい」と。

◇

当時の取材ノートを取り出し、あらためて読み直しました。

「1939年11月3日 東大阪市生まれ。秋田、田沢湖町生保内で育つ。1959年、埼玉県に」という河正雄さんのプロフィールから始まり、「9月5日に（聖天院で）施餓鬼。慰霊をしながら友好を。人間の崇高な思想」「次の世代の若者に心のメッセージを伝えたい」と続き、最後は「8月に講演会。30日と31日」で終わっていました。

大学ノートはB5判。鉛筆で書かれました。9頁まで書いたところで用意したノートがなくなり、最後は裏表紙にまではみ出してメモが書かれていました。今から考えると、ノートが足りなくなつたのは、そんなにたくさんのお話が聞けるとは考えていなかったのでしょう。あらためて見直した20年前の取材ノートからは、今も変わらない、河正雄さんの熱い想いと表現力豊かな語り口がよみがえってくるように感じました。

■語り尽くせぬたくさんの思い出

河正雄さんとの思い出は何頁あっても、簡単には語り尽くせません。

新聞社の仕事では、日中戦争(南京事件)を記録した今村写真帳や李垠親王・李方子妃殿下の遺品寄贈、霊岩郡立河正雄美術館オープンなどの場を直接取材する機会に恵まれました。清里銀河塾にも毎年のように参加させていただき、各界で活躍する素晴らしい方々との出会いと交流の場をつくっていただき、今につながる貴重な「財産」となっています。

◇

2020年の夏からは、『河正雄コレクション資料集』の編集者という身に余る大役を仰せつかり、試行錯誤と悪戦苦闘を繰り返しながら、河正雄さんのお力を借りて、これまで第8号まで発行することが出来ました。資料集の編集という作業を通じて、河正雄さんが歩んできた80余年の実り多い人生の一端を学ぶチャンスを与えていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

「他人を光で照らせば、その光は照らした人にもはね返ってくる」。そう教え、導いてくれた河正雄さんの言葉を心に刻んでいま

す。

■浅川巧に学んだ露堂堂の人間力  
河正雄さんの魅力は、何といっても露堂堂と生きる人間力だと思います。

原点の一つが、秋田県で過ごした高校時代に本を通して出会った浅川巧です。日本の植民地支配下にあった朝鮮に生きて、朝鮮の山と民芸に身を捧げ、朝鮮の人から愛され、「朝鮮の土」となった日本人であり、民族や国境を超えた稀有な「地球人」だったのでしよう。

安倍能成著『青丘雑記』の「浅川巧さんを惜む」の中には、次のように書かれています。ご存じの方が多いとは思いますが、あらためて紹介します。

「巧さんのような正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れた独立自由な、官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間だけの力によって露堂堂(禅語、何一つかくすことなく堂々とあらわれるさま)と生きぬいていった。こういう人はよい人というばかりでなくえらい人である。

る。人間の生活を頼もしくする。人類にとつて人間の道を正しく勇敢に踏んだ人の損失ぐらい、本当の損失はない」

河正雄さん自身も著書の中でたびたび、「安倍能成をしてかく言わしめた浅川巧は今も私の心に普遍的価値として生きている」と記しています。「弱者を見過ごせない清貧な人、右手で行った善行を左手に知らしめない行為は常に朝鮮の人々にとけこもうとする彼の人格がさせたことだ」とも書いています。

浅川巧へのあこがれを抱き、露堂堂の間力をひらすら追い求め、今日まで「忘己利他」の美しい心で人生を生きぬき、芸術的な感動と幸福の心を分かちあう生活を実践し続けてきた河正雄さん。河正雄さんが浅川巧にあこがれたように、私は河正雄さんの人間力にあこがれ、人生の師として敬愛の念を抱き、「ほんの少しでも河正雄さんに学び、近づきたい」とひそやかにそう願っています。

(2023年5月25日記)

## ハンブル「四面石塔」と青木繁「海の幸」

池田恵美子

1961年生まれ。NPO法人安房文化遺産フォーラム共同代表。千葉館山市

私たちが住む千葉県館山市には、アジア太平洋戦争の遺跡や「噫従軍慰安婦」の碑をはじめ、海を通じて人びとが交流・共生した痕跡などが多く存在しています。高校の世界史教員であった愛沢伸雄さんが、地域教材を活かした平和学習の実践にはじまり、文化財保存運動とまちづくり活動に発展し、NPO法人安房文化遺産フォーラムが生まれました。多様な歴史文化遺産を「館山まるごと博物館」ととらえて、教育支援やまちづくり・国際交流を進めています。

河正雄さんとの出会いは2005年3月のこと、NPO会員で秋田出身の富樫研二さんから高校時代の友人として紹介されました。河さんは私たちの活動にとっても共感してくださり、それから20年近く親交を深

めてまいりました。

館山の大巖院というお寺にある「四面石塔」は、東西南北の各面に和風漢字・朝鮮ハンブル・中国篆字・印度梵字で「南無阿弥陀仏」と刻まれています。ハンブルは、世宗王が創成した東国正韻式といい、現在の韓国では使われていない古い文字です。

建立された1624年は、豊臣秀吉の朝鮮侵略(壬辰・丁酉倭乱)で拉致した朝鮮人を徳川幕府が送還する朝鮮通信使兼刷還事業の第3回目がおこなわれた年であり、また三十三回忌にあたります。戦没者供養と平和祈願をこめたものと推察され、日韓交流の象徴的な史跡として私たちは大事にしてきました。

石塔建立者の雄誉靈巖上人は、後に江戸靈巖寺を創建し、京都知恩院の中興の祖となる高僧です。奇しくも河家の故郷は韓国靈岩郡であり、同じ名であることに深い縁を感じられたようです。

また、明治の画家・青木繁は館山の小谷家住宅に滞在した1904年夏、日本初的重要文化財となる名画『海の幸』を描きました。NPO会員の彫刻家・船田正廣さんが同寸大の塑像『刻画・海の幸』を3年がかりで完

成させたのは、ちょうど百年目にあたる年でした。その後、全国的美術関係者の方々とともに「青木繁『海の幸』誕生の家と記念碑を保存する会」を発足する際、河さんにも発起人となっていたいただきました。

河さんが美術メセナを始めた当時、全和風の記念画集の美術評論をブリヂストン美術館の嘉門安雄館長にお願いしたという縁で、同館所蔵の『海の幸』を鑑賞し、とても感動したそうです。生命力あふれた躍動感と労働者の喜びは、在日一世として苦勞した親の姿に重なったといえます。「小谷家住宅の保存修復が進んだときには、『刻画・海の幸』をブロンズにして館山と光州市立美術館に置きたいね」とおっしゃっていました。

2015年は第19回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会を開催し、河さんに基調講演をお願いしました。久しぶりに館山を訪れた河さんは、敬慕する船田さんが大病を患っていると知り、とても心を痛めました。小谷家住宅の保存基金も4000万円近く集まり、翌春には青木繁「海の幸」記念館の開館が決まっていました。

そこで河さんは、戦後70年・日韓国交正

常化50周年にあたり理事長を務めていらした財団法人秀林文化財団の記念事業として、ブロンズ『刻画・海の幸』を作品にし、河正雄コレクションとして次の5カ所（千葉県館山市・青木繁「海の幸」記念館 ▽福岡県久留米市・青木繁旧居 ▽韓国ソウル・秀林文化財団金熙秀記念アートセンター ▽韓国光州市立美術館分館河正雄美術館 ▽韓国霊岩郡立河正雄美術館）に寄贈設置されました。

このご英断は、日韓文化交流の架け橋であるとともに、盟友の彫刻家・船田正廣さんを顕彰する意義深いメセナであったことはい言うまでもありません。2022年に逝去された船田さんは、「多くの人の手で撫でられたブロンズは、百年後の未来にも美しく輝きます」と生前よく語っていました。皆さん、どうぞブロンズをかわいがって撫でてください。

## 河正雄先生ご夫妻との不思議なご縁

李 修京

1963年生韓国生まれ。東京在住。東京学芸大学教授、Korea研究室代表

英語で、*near miss*、という言葉がある。日本語の使い方は英語の、異常接近、から転じて、すれ違うこと、を意味する場合があるが、そのすれ違いに、悔しい、惜しい、という意味を加えて使うことも多々ある。私が河正雄先生ご夫妻、とりわけ河先生について思う時、この、ニアミス、という言葉が真っ先に頭に浮かぶ。、会えそう、で会えずに、いたこと、惜しさ、が心の中でどこかにずっとあったことだろう。しかし、今になってみれば、時間はかかったものの、河先生ご夫妻に出会えたことで私は、長年研究し続けている「在日コリアン」の1、2世の中から、芸術・文化、活動を通して「在日コミュニティと日本、そして母国」を繋いで来られた文化人と、その文化人を支え続ける家族の力について確認するこ

とができたこと、非常にうれしく思っている。

在日38年目を迎える筆者はその長年のほとんどを大学とかかわって生きている。専門は歴史社会学であるが、近現代史の中でもW W I (第一次世界大戦)の前後に人類が築いてきた文明を破壊する戦争に対し、世界の文化人たちが理性をもって国際社会の平和のために反戦を訴えたクラルテ (Clarke, 光は万人のものだという平等意識・人々に戦争の不条理を自覚させることが知識人の社会的役割だという意識)運動が行われた。当時の時代背景や人物らを研究してきた。この運動はフランスの作家であったアンリ・バルビュスを中心に、ロマン・ロランやアナトール・フランス、B・ラッセルから画家のパブロ・ピカソやアンリ・マチスに藤田嗣治らを含む世界中の錚々たる文化人が参加した国際反戦文化運動であった。つまり、戦争暴力のない平和社会を求める文化人が国境を越えて立ち上がるという国際主義文化運動であった。その趣旨はパリに留学中であった小牧近江によって日本に伝わり、東京のアテネフランセに通っていた植民地

朝鮮からの留学生・金基鎮によって朝鮮の青年層に大きく影響を与えた。その研究過程で私は当時の国際社会のうねりに刺激される多くの文化人の活動について知ることができたのであり、加藤周一、小田切秀雄、日高六郎、西川長夫、鶴見俊輔、安斎育郎ら日本の思想家、文学者や平和研究者として知られる知性に直接指導を受ける機会に恵まれた。当然、在日文化人の動きにも関心を抱き、また上記の先生たちから在日の歴史やビハインドストーリーなどを多く聴きながら様々な在日の研究にも携わった。しかし、初期在日の方々には生活の安定が優先されたせいか、政治思想活動や経済活動などを展開する傾向であり、美術を含む文化芸術を通して母国と居住地の日本をつなぐ文化人は多くはなかった。文化活動の中では文学作品を通して個々人の能力と存在感を示す作家はいたものの、在日の芸術性を顕わにした美術作品の存在が広く知られることはなかったと言っても過言ではない。幼い時から絵を画いたり、欧米の美術館巡りをしてきた私が歯がゆさを感じていた時、ある先生から河正雄先生が在日の作品を収集し、それらの寄贈や美術館での展示会を

続けておられるという話を聞いたのである。砂漠でのオアシスの発見と言うべきだろうか。イギリス滞在中にその情報を聞き、東京に戻ってきた時、ちょうど茶谷十六先生らのご招待で秋田に行く機会を得たので、茶谷先生ご夫妻のご案内で河先生のコレクションのある大館の美術館に立ち寄ることができた。2011年2月の秋田は大雪に見舞われたが、その情景とも重なり、力強く、悲しそうな色のコントラストさえも感じ取られ、どこかで自分らの歴史や自分探しが根底にある作品ばかり(その視線から視たのかも知れないが)に目を奪われ感動を受けたことをいまだに鮮烈に覚えている。河正雄先生の地道なこれらの活動はきっと大きな歴史記録に繋がるだろうと思ったら吹雪すらもなんだが暖かく感じられたものである。

その後、河先生を意識しつつも、首都圏での様々な社会行事、例えば学校法人金井学園創立30周年記念会や在日知人の傘寿祝い会などで一緒に過ごすものの、いつも個別的な話を交わす機会はなく、ニアミス状態が続いたのである。私も普段激務に追わ

れる身であったため、河先生の様々なご活動情報は知りながらも、すれ違いばかりであったので、時間の余裕もない私にとってここまでの縁かも知れないと思った時、全南大学からの招待講演で韓国に行った際、中小企業紙の取材記者や現地の写真家の朴哲氏のご案内で霊岩周辺を回ることになりました。その際、素敵な松林やきれいに整備された韓屋の町並みの美しさとともに、霊岩郡立河正雄美術館<sup>6</sup>が眼に入ったのである。そういえばその数日前にも全南大学の友人らと寸暇を割いて光州市立美術館の河正雄美術館と在日同胞の作品について触れながら在日青年たちの記録を行った河先生のことを語ったばかりで、王仁博士が日本に向かって出発した歴史の地・霊岩でまた、河先生の美術館に立ち寄るなんて、不思議さを感じた。

在日社会でこのように芸術作品を通して現地とコミュニティ（在日青年層の歴史記録を含む）と母国・故郷を繋ぎ続ける人物がいらつしやることは、美術をこよなく愛する私の自負心になった。だが、その後も河先生とはすれ違えばかりの日々が続いた。と

ころが、お会いしているいろいろと伺いたいところが多かった私の気持ちを通じたのか、その契機が来たのは COVID-19 による社会の異様な雰囲気の中からであった。科研プロジェクトで約一カ月程度北海道の在日近代史関連の調査を終えての帰路で青森港に車を下した際、10年前に田沢湖周辺を案内してくださった茶谷十六先生ご夫妻を思い出し、共同研究者たちを説得し、秋田への夜の山道を走ったのである。夜中に迎えて下さった茶谷先生との再会後、翌日は田沢湖の姫観音や玉川導水路など、戦時中の朝鮮人労働者関連の歴史的史跡の一部を確認し、河先生が2021年11月3日に平和を願って建立した田沢湖の、ふるさとの碑<sup>7</sup>と、平和の群像<sup>8</sup>を撮影して東京に戻った。そして、韓国の大学からの依頼で、日本各地の朝鮮人労働者強制連行の痕跡とそれらを記憶する市民力について、今回の研究出張で得た資料も生かして、184ページをまとめた（近代日本の帝国主義への歩みと戦後平和志向の市民力―市民たちの朝鮮人労働者記録と追悼<sup>9</sup>『在日コリアン社会の形成と時代的表象』ソウル、博文社、2022年）。北海道各地の痕跡から沖繩や奄美、知覧や

万世、北九州各炭鉱跡、山口長生炭鉱、長野松代などを整理しながら秋田の花岡事件や生保内発電所なども一通り紹介したのである。しかし、日本語での秋田、特に姫観音の建立趣意書を田澤寺で見たことがあった私としてはそれらをもう少し当時の歴史と絡めて私なりに記述し、在日同胞と韓国人と日本人が協力して記憶作業（追悼式など）を行うことに対する未来志向的意見を提示したかったのである。

普段いろんな仕事に追われ、圧倒的に少ない睡眠で生きている私だが、期末の最中、少しアウトラインを書いたものの、詳細を確認する必要があったため、姫観音建立趣意書の掲載とその発見者である河正雄先生に思い切って連絡を試みた。すると、大変喜んで下さり、すれ違うのではなく直接お会いすることになったのである。大学院授業のために山口から見えた権五定先生（教育学専門）とともに川口市のお宅に伺ったのが2022年11月14日。河先生の存在を知ってから20年のすれ違いから対面になった日である。そして、直接、いろんな話をお伺いすることができた日。それまでもやもや

としていた様々なことが確認できたため、実にさわやかな気持ちになった日であった。

河先生のご承諾による趣意書の掲載や多様な情報・資料を頂き、論文は「秋田に散在する負の歴史の痕跡」(『東京学芸大学紀要』74集)というタイトルで2023年1月に発行された。それを機に河先生ご夫妻と直接連絡することが増えたのであり、同年6月5日には「多文化共生とダイバシティ―..在日韓国朝鮮文化と多様性について」というタイトルで在日の文化芸術活動と日本との繋がりを内容にした公開講演会を開催することになった。本学の学生だけではなく、元東京入国管理局長の水上洋一郎氏や富山から河先生のご講演を聴きにいられた方々もいた。河先生をずっと見守っていらつしやるお連れ合い様もご一緒の講演会は盛況で、終了後は研究室で少し休まれるようにしたが、どうしてもお連れ合い様の腕が不自然に見えた。ちょうど私も頸椎神経痛で左腕が使えず通院中であつたため、気になって何度もうかがうと、国分寺駅でタクシーを待っている間、倒れて腕を痛めたという。河先生は早く帰宅し、翌日にかかりつけの病院に行けばよいのだと遠慮して

いらつしやつたが、もしものことがあつてはならないと思ひ周辺の救急病院を検索し、無理やり病院にお連れした。授業と会議続きのため、お迎えに行けなかつたから……という申し訳なささと責任感を感じている私に強く遠慮していらつしやるお二人を、強引に病院へお連れした結果、手首が折れたということと緊急処置となつた。不幸中の幸いといえ、専門医が当直医であつたこと、そして、多摩総合病院の医療人の親切さが不安に駆られておられるお二人に安心感を与えたことであつた。待ち時間の間、「河先生もこの前東京大学で倒れてまだ傷が治っていない状況ですから、お二人とも絶対健康最優先で倒れないようにしてくださいね！」と言ひ続けた。人は強いところもあるが、年齢をとると骨はもろくなつてくる。私の母も生前は骨粗鬆症で骨が折れて入院をしていた。河先生ご夫妻も決して油断できない状態だけに、私はいつの間にか口うるさい存在になつていた。夜の12時頃に処置を終えて帰られるお二人のあの姿は脳裏に焼き付いており、一生忘れることはないだろう。

お連れ合い様の入院とギブスで、叙勲の日も河先生おひとりでお席なさつた。生まれて育つた日本で、文芸活動を通して国家間の交流を導いて来られた「在日」として叙勲を受けたことは、大きな名誉そのものである。マイノリティとして未だに排他的行為をする人が少なくないこの日本で、一生をかけての努力が報われて叙勲を受けるその場にどれほど生涯を支え合つてきた二人で出席したかつたのだろう。それを思うと、すれ違いのままがよかつたかも知れないと何度も思つた。幸いにお連れ合い様の快復も良く、前向きに考えて下さる様子である。とはいへ、河先生ご夫妻には申し訳なさでいづばいである。この記憶をご縁の記録として残すことに胸は痛むが、それもいつか我々が歩んできた歴史であつたと笑つて下さるお二人との大事なご縁を今後も大切にしていきたいと思う。

# 無窮花

## 推薦の言葉 「根の深い木」

金宗圭

1939年生まれ。ソウル広域市在住。文化遺産国民信託理事長

日本で生まれ育った著者であるが、彼の根は父母の故郷韓国の霊岩(ヨンアム)から始まった。故郷から遠く離れ習慣も異なる日本で、彼は父母から受け継いだ韓国人としてのDNAをそっくり引き継いでいた。

長い歳月を苦しみに耐え、絶望に負けず、決して挫折しない強靱さ、それらは彼自身もいまだ悟ってはいないが、隠し得ることのできない韓国人という自尊心に起因することが大きいと考える。この本は自分を産んでくれた父母への恩返しであり、自身の根である祖国への感謝、そして現在の自分を育ててくれた恩師教育の現場で出会った先生方への感謝の心を込めて書かれたものである。

両親の故郷であり、自分の根である霊岩(ヨンアム)は百済王仁博士が日本へ文化

(千字文と五経)を伝えた出発点である。彼は1500余年の間、韓日善隣の美しい話を現在へよみがえらせようと辛苦をなめながらも努力してきた。

故郷の霊岩(ヨンアム)にある王仁博士遺跡に桜を植え、美術館を設立し、昨年には東京・上野公園内の人目にもふれない場所にある、さらに手続きに難しさのある王仁博士の記念碑を新しく建てるなど、王仁博士から始まった韓日の明るい歴史であり希望の歴史を復元するために心血を注いでいる。

河正雄は日本で生まれ育ち、日本の学校で学び育った(彼が育った秋田には朝鮮学校がなかった)。彼の明るく賢い性格ゆえかどうかわからないが、当時日本で生きていた多くの朝鮮人が辛酸をなめなければならなかった「チョウセンジン」差別をほとんど体験せずに育ったといえる。

この本では小学校から高等学校の卒業まで、彼に教え、導いてくれた恩師へまつわるエピソードと回顧が記されており、この事実を証している。

河正雄のエッセイにはどのような理念もイデオロギーも持たず、童心のような純粋な世界から始まり、彼が社会人として成長

するまで、そして彼が社会人となって恩師一人ひとりの足跡をたどり、感謝しつつ恩に報いようとする姿に深い感動が迫ってくる。

これとあわせて、今日の学校が学問と知識の習得によって、正しい人間の価値観形成のための全人的教育の場ではなく、世相を教えるという名目のもとにイデオロギーを注ぎ込み、まるでこの世を生き抜くための知識習得スキルを教える場と化している。子弟間の「道」どころか、師匠と弟子という貴い価値さえ失っている。そのような時代に模範となる真の指標をこの本は与えてくれる。

偶然にも、彼と私は同じ年である。日帝時代末(1939年)に彼は大阪で生まれ、私は木浦で生まれた。当時、大阪は日本の近代化の中心地であり、木浦は湖南穀倉地帯(全羅道)の軸の一つであって、釜山に劣らず日本の近代文化が入ってくる栄えた都市だった。幼かったが日帝末期を経験し、経済的に窮乏にひんしたことも妙に一致する。

小中高の時代、私は兄がたてた書店にひそかに暮らし、彼は絵に対してあれこれと思いをめぐらしていた。もしかするとこれ

は貧しいという束縛から抜け出したいという渴望だったかもしれない。

私は読書に幸いを感じ、彼は絵を描くことに幸いを感じた。その時はわからなかったが、これが後の日に、文化界と美術界にその時代を代表する足跡を残すことになる栄養成分となった。

出版業で始まり博物館を作り生涯を文化界に所属して暮らす私のように、彼も20代で挫折のどん底から抜け出し、事業で儲けたお金で在日の画家たちを支援し、彼らの作品をコレクションして、故国への憧憬を生涯の仕事として生きてきた。

もちろん多くの人々が文化財を買い、絵画を買うなどするが、これは文化的な観点よりも一種の財産増殖の概念としてみるこ

とが一般的である。そのような事実には照らしてみても、河正雄のコレクションの祖国への寄贈はずばぬけて大きな意味をもってくる。

現代、もの派の先駆者として世界美術界の巨匠とされている李禹煥は、河正雄のパリ展後援から彼の活動が開始されたと最近明らかにした。これは現在、韓国近代化の中で最高の作家として認められているキム・

ファンギのモダリズム作品がアメリカでの生活で形成されたように、河正雄によって李禹煥という同胞の作家がヨーロッパに進出し、今日の世界美術界の巨匠としてひときわ高くそびえる呼び水となっていると思える。

このように画家としての道を歩んできたが、民族差別により日本の画壇から注目されなかった在日韓国人作家たちを支援し、バラックで雨にぬれ、カビが生えているような作品を1点、2点と集めて故国に寄贈してきた彼の眼力とこだわりを敬意を表す。

さらに、文化都市光州という名前にふさわしくない巨大なだけの建物だった光州市立美術館に2500点に及ぶ作品を寄贈し、世界的に注目を集める光州ビエンナーレ開催の面目を保ち、美術館としての姿を發揮する場所とした。

続いて、釜山、大田、大邱、浦項、済州島などの公共美術館と各大学に至るまで、地方の美術の活性化のために最善を尽くしてきた。最近では、ソウル洪陵にある金熙秀記念秀林アートセンターに河正雄ギャラリーを作り、自身のコレクションを寄贈し名実

共に文化空間を育てている。

「人に施しては慎みて念ふ勿れ、施しを受けては慎みて忘るる勿れ(施人慎勿念 受施慎勿忘)」、「人に施したことは忘れ、人から受けたことは忘れてはならない」。偶然にも、私と同じ座右の銘をもつ彼は、後漢時代の崔子玉「座右銘」に対して、欠けることない人生を生きてきた。

彼の数多のコレクション寄贈と本の中に登場する恩師に関するストーリーは「与えることと報いること」という今日の物欲と利己に疲れ少しの余裕ももてない人間への貴重な手本となっている。

縁とは本当に妙なものだ。私たちは日常生活の中で数えきれないほどの縁と出会う。全ての縁は最初の出会いから始まる。すれちがうだけの縁があり、ずっと続く縁もある。

数年前のある日の朝だった。2009年11月、国立古宮博物館から始まった「英親王と李方子妃の遺品寄贈式」に博物館協会会長として来賓祝辞を述べたときだった。

半生涯にわたり、「出版」と「文化」を手がかりに生きてきた私の目には、彼の寄贈は新聞記事の1面トップのように貴重に思

えた。

このように彼に触れ「一度は会わなければならぬ人」と心の中に抱いたまま何年もの歳月が流れていった。初めて会ったのは2011年9月5日、韓国プレスセンターで開催された浅川巧フォーラムだった。私は常に忙しく、同じく彼も韓日間を行ったり来たりで忙しく生活していたので、彼との出会いをどうすれば実現するのかと長い間、胸の内を持ち続けてきたゆえに実現したのかもしれない。

人との縁、世の中の事情、全てのことが入り交じり、人との縁から始まるものだ。「袖振り合うのも多少の縁」という言葉があるが、喜寿(77歳)を越え人生を振り返ると、人を引き合わせることほど大変なことはなかったと思う。

良い縁となれば申し分ないが、悪縁となればその責任は自分にあるとでもいうようにブーメランのように戻ってくるものだからである。

1年12カ月、年がら年中、数多くの招待状が送られてくる。その中に誰かの役にたつなら、どの行事にでも知人を招き共にすることで生きがいとしたいと思う。浅川巧

フォーラム会場に韓日友好の架け橋として邁進した盧治煥氏が招かれ、河正雄を引き合わせた。

盧治煥氏は在日画家の作品を収集して寄贈した河正雄の存在を知っており、私のように河正雄に会うことを切に願ってきた人であった。その縁は今回の河正雄の自伝エッセイ「両親への書状」の企画制作へと結ばれていくことになった。

類は友を呼ぶ(類類相從)、人生の道連れとは一方的に与えることでも受けることでもない、お互いがお互いの助けとなる関係となる時、その縁は持続して美しい実を結ぶものである。縁とは実を結ぶことも重要であるが、どのようにして育て引き継いでいくことが本当に大切なことなのである。宝石とは自ら輝くものではない、宝石研磨師の手によって光を放ち価値をえるものである。

元々、このエッセイは2年前に河正雄の喜寿に合わせて天国の両親に宛てた短編の人生報告書であった。そのことを見落とさず、彼と恩師を結びあわせる話を引っ張りだして、韓日を理解する重要な資料としての価値をこの本に与えた盧治煥氏の鋭い眼

力と腕前にも賛辞を贈る。手は合わせてこそ音がする。人類の歴史とは人と人との出会いの歴史である。

「知るほどに見えてくる」とはこのことである。親と子の道理、師匠と弟子の道理、さらには海峡を挟んだ韓国と日本のお互いを理解し合える踏み石として、この本は一つの時代の記録であると同時に、一人の人間と家族の人生の歴史を盛り込んでいる人類史的な記録としての相当な価値を持っており、あわせて人生の立派な教科書としての鑑となっている。

(河正雄先生の健康と百歳画業を祈願して、2017年 春たけなわの中で)

### 光州市立美術館「平和の柿の木」を見て

秋圭晃

元駐イギリス大使、駐日公使(韓日未来フォーラム代表)

「若松三郎の生涯」を読みながら、私はふと光州市立美術館の「日本産」柿の木の運命を浮かべた。この本の主人公である「若松」という人物は、1900年代初期から韓国で26年間外交官として、また内務官僚として在職しながら、改良種綿花(米国陸地綿)そして天日塩を普及する、歴史的な貢献をした人物である。

もとより自国である日本の利益のためのことが優先である。しかし結果的に韓国の産業に寄与し、韓国人の皮膚(服)と食生活に大きい影響を与えた、この篤実な「クリスチャン」を現在の私たちはどのように考えるべきなのか。彼は日本に帰国してから在日韓国人の苦衷を訴え続けたり、そして帝国土主義時代に日本の警察の強圧でがらんとした韓国人の教会に、母国語(韓国語)の礼拝が響き渡るようにしてくれた。この篤実な「クリスチャン」をどう評価すればよいだろうか。

光州市立美術館の木立には今、「平和の柿の木」一本が青々とした柿をたわわに実らせて突っ立っている。今年樹齢15年になる、遠く長崎から持って来て植えた柿の木である。柿の花が咲きこぼれた今年の春、10数

年前、これを植えた河正雄名誉館長(在日韓国人 秀林文化財団理事長)は感懐に耽って、この柿の木を撮影し周りの人に見せた。

この柿の木には諸訳がある。1945年長崎に原子爆弾が落ちたとき、原爆はすべての生物と構造物を破壊してしまった。しかし1年後、被爆中心地の廃虚の場にたった1本、この柿の木の母木から葉と花が咲き、実ったということである。人間に「生命の偉大な力」と「平和の大切さ」を教えてくれた柿の木であった。

日本が生んだ世界的な設置美術家「宮島達男」(1999年ヴェニスビエンナーレ大賞受賞者)は、世界隅々にこの柿の木を植えて「生命と平和、核武器拡散反対」運動を広げることに先立っている。今まで24ヶ国の美術館の広場に植えて来たという。河正雄は1998年、偶然この柿の木の諸訳を背景とした平和と反核、生命運動を知ることになった。その時、河正雄は2000年第3回光州ビエンナーレの運営委員になった。

たまたまビエンナーレのタイトルが「芸術と人権」であった。そこで河正雄は柿の木を象徴とした、国際プロジェクトに共に参加しようとして提案した。そうして長崎の柿の

木の苗木をやつと貰つて光州に植えた。

ところがなんと、数カ月過ぎた頃に誰かが根ごと引き抜かれてしまった。河正雄は再び植えた。そうしたら今度は鋭い刃物で切られ枯れてしまった。河正雄はこの柿の木を試練から、在日同胞である自分の運命を考えた。

そしてまた3本目を植えたという。踏まれ抜かれて、切られる辛い運命！ そのように涙を堪えながら植えた3本目の柿の木が今は簡単に抜くことも、誰にも簡単に切り捨てることも出来ない立派な木になった。

平和の柿の木は今活着し、秋になると豊かな熟柿を実らせるはずである。河正雄はこう言う。「たとえ日本の長崎の悲劇を象徴する柿の木であつても、このことを通して、戦争と侵略を起こし原爆という災いをもたらした、人間の愚かさが繰り返さないように、そして日本でも韓国でも根を抜かれたまま、第三国の境界人として生きて行く、在日韓国人の悲しい運命と粘り強い生命力を、平和と和解そして生命の偉大さを反芻することをしてほしい」と念願する。

(2015年8月15日 成均館大学研究室にて)

## 河正雄先生と視覚障害者たちとの縁

金甲柱

1960年生まれ。光州広域市。光州広域市視覚障害者連合会長(2013~2017年)

一、河正雄先生にお会いして

私は大学3年生だった1982年に網膜色素変性症によつて失明しました。失明による苦しみもありましたが、まだ若い青年の時分だったこともあり、先の人生が真っ暗になってしまった気分でした。そのような中で運命的に、当時の全南盲人協会、現在の光州視覚障害者連合会のことを知人の紹介で知りました。

失明という、そして視覚障害者という重荷を年若い身で背負いながら、すでに鬼籍に入られた黄永雄、ハン・ギョンス、金寿慶、ホ・ジェス先輩、崔二基、尹在松、張永喆、朴贊圭らに会い、視覚障害者としての新しい道を探ることになったのです。

協会に足しげく通いながら、協会での仕事をいろいろと手伝うようになりました。

旅行に出かけた時や、デモや各種のイベントに参加した時も、友人たちと共に力を合わせてきました。そのような中で、在日韓国人である河正雄先生にお会いすることになりました。

私の記憶によると、1984年頃だったと思います。あるイベント会場で先生と挨拶を交わす機会があり、「大学在学中に失明した者です」と自己紹介をすると、「まだ若いのに大変な目にあわれましたね」とおっしゃいつつ「自分の道を探していくことが重要です」と語って下さり、私の境遇に関心を寄せて下さいました。これは後になってからわかったことですが、河先生は協会とは何の関係もなく、たまたま身体の不調で協会の黄秀雄会長から按摩の施術を受けていた時に、会長から「視覚障害者協会に協力して下さい」とお願いされ、それで関係を持つようになられたそうです。

以後も、イベントの際や先生が韓国にいらつしやつた際などに時々お目にかかることがありましたが、ひととき私に目をかけて下さり、温かい関心を寄せて下さいました。

そんな中で「視覚障害者協会の会館が必

要だ」と当時の会長を中心に要求の声を上げていた時、河先生が「それなら、あなた方はあなた方の『巢』である会館を作るために、どのような努力をするつもりなのですか？」とお尋ねになりました。「あなた方が会館設立のために自ら努力をなさるのであれば、私も協力を惜しみません」と。私は、言うなれば縁もゆかりもない、道でたまたま出会ったような視覚障害者に自立の大切さを教えて下さり、更には「努力をするなら協力を惜しまない」という河先生のその言葉が深く胸に刺さりました。今でも、先生のそのお言葉と精神が、私の人生を照らす灯明となつています。

二、全国初となる光州広域市視覚障害者会館を設立

1980年代に韓国は目覚ましく発展しましたが、社会福祉の面における発展には厳しいものがありました。そんな頃、障害者全体ではなく、視覚障害者のためだけの会館を造るなどということは、まったく想像もできない、夢のような話でした。

それにもかかわらず、黄秀雄会長をはじめとして、全ての会員が自分たちのための

会館を造ることを望みました。そのために一日限定の喫茶店やタオル販売、按摩施術による収入から一定の金額を貯めながら夢を追い続けました。これは河先生の「あなた方は会館を造るために、どのような努力をするつもりなのですか？」という問いかけに対する答えとして、視覚障害者たち一人ひとりが最善の努力を尽くした結果でした。そのようにして200万ウォンほどの資金を集めて河先生にお伝えしたところ、先生はいたく感動され、会館を造るために協力をして下さることになりました。

河先生は日本でスポンサーを募り、光州地域の美術関係者たちと共にチャリティ目的の展示会を行って1986年に6800万ウォンを集めました。河先生自身が3千527万543ウォンを寄付されて現在の視覚連合会が位置している南区社洞の19―4番地に168坪の土地を購入しました。そして光州市と東光州JC、河先生が募って下さった日本のスポンサーたちと力を合わせる形で、1989年に地上2階、地下1階の延床面積130坪余りの韓国初となる視覚障害者会館が建立されるに至りました。会員全員が喜び、河先生をはじめ、光州市や

東光州JC、日本のスポンサーたちに感謝の気持ちを伝えました。

ところで、このように韓国の視覚障害者の奇跡を成し遂げた歴史には良い面だけではありませんでした。最初に敷地を用意してから会館が建てられるまで、視覚障害者たちをはじめ、さまざまな方の尽力がありました。中でも一番大きな役割を果たして下さったのは河先生です。それなのに会館の入口に河先生の功勞について顕彰されているものは何一つなく、代わりにすべてが終わりかけた頃に手を出してきた東光州JCの顕彰碑が建てられることになりました。顔を立てることが得意なボランティア団体の特性を理解していかないわけではありませんが、これでは主客転倒もいところではないか、と心が痛みました。

河先生は「力を尽くして下さった皆様に感謝の気持ちを表現しなくてはなりません。これは未来の歴史になります」と、記録の意味と公正について語って下さいました。このようにして、光州視覚障害者の会館を建立するという宿願の事業が、河先生の尽力で成し遂げられたのです。



いを今でも覚えております。私自身もやはり、河先生のこのような生き方を見習いたいと思いました。

#### 五、「日々一歩」出版記念会を開催

私は2013年8月に紆余曲折の末に光州広域市視覚連合会長に就任しました。河先生はとても喜んで下さり、若くて経験豊富な会長の方のさらなる発展を願う、とおっしゃって更なる力を与えて下さいました。

2014年に河先生が『日々一歩』という著書が出版されました。私はその本に接して祝賀の気持ちを抱くと同時に、先生の精神を世の中に広く知ってもらうために2014年11月5日、5・18記念文化センターで「河正雄エッセイ出版記念会」を開催しました。尹壯鉉光州市長(当時)、金宗才院長、姜連均画家をはじめとする美術関係者、そして視覚障害者たちと共に祝いました。河先生は挨拶の言葉の中で、誰もこのような祝いの席を設けてくれなかった中で、身体の不自由な視覚障害者たちが祝ってくれたことに感動したと述べて下さり、涙まで流して下さったことを私はよく覚えています。

#### 六、光州市立美術館分館河正雄美術館の 開館

私は視覚障害者関連で河先生とお目にかかりましたが、その流れで地域社会の美術関係の方々との出会いがあり、先生が韓国に1万2千点余りの絵画を寄贈し、その中の2600点余りを光州市立美術館に寄贈されたことを自然と知るに至りました。それだけではなく、光州市立美術館が青年作家を発掘する「河正雄青年作家招待展『光』展」を毎年開催するための基盤をお作りになりました。

河先生は私に、ドイツのフランクフルト聖堂の壁画を撮った写真を下さいました。その画はイエス・キリストが十字架を背負わされてゴルゴダの丘を歩かされているもので、ローマ兵士がイエス・キリストを鞭打ちながら連れて行く様子を、見て見ぬふりをする元老たち、そして泣きながら悲しんでいる人々の姿を表している壁画です。

河先生はその壁画を見ただけで日本に帰国されたのですが、壁画のことが頭から離れず、写真を撮るためにまたドイツへ行き、撮影してこられたとのことです。河先生は、今の世の中はこの壁画と同じであり、今後

どのようなことが起きてもこれと同じような状況が起こり得るので失望してはいけな、とお話しされ、この壁画の写真を下さったのです。河先生は1枚の絵画が人の心と世の中を変えることができると信じていらつしやう、絵は人生であり歴史である、と考えていらつしやうしました。

このように我々の社会で大きな役割を果たして下さった方ですから、河先生の精神を称えて受け継いでいかななくてはならないと考えて、河正雄美術館の建立を強く主張いたしました。光州市長や美術関係者の方々にお会いした時はもちろん、一般の方にお会いした時でも「河正雄美術館を作らなければならぬ」と広報して回りました。

そんな気持ちがあ天に届いたのか、旧全羅南道の道知事公館を河正雄美術館として改装して開館することになりました。寄贈された絵画を展示し、河先生の精神を多様に発揮させるには少し狭い空間かもしれない、という気持ちもありましたが、河先生の精神を活かすことができる根拠地ができたということに大きな意味があり、私も限りない喜びと共に河先生にお祝いを申し上げます。

その時に開館の準備をしながら河正雄美術館ができるまでの意味と希望を込めた映像を制作したのですが、美術関係者でもなく、大きな力もない私が映像制作に携わったのです。その河正雄美術館の広報映像には私の希望のメッセージが込められたインタビューが収録されています。

河正雄美術館の開館式は2017年3月3日に行われました。河正雄美術館の存在が世の中の灯明となる期待をしていた私に、ここでまた別の奇跡が起きました。

それは何の力もない私に開館式の祝辞の依頼がきたことです。常識ではちよつと考へられないことですが、河先生は何も問題はないと話されました。市長や議長、関係公務員たち、数多くの美術関係者、韓国や日本の知人たちなど、数百名の祝賀客すべてがそれなりに有力な方々であったにもかかわらず、この私に祝辞を述べる機会を与えて下さったのです。祝辞は市長と議長、主役である河正雄先生、美術関係者である黄栄性前館長、そして私が述べることになりました。

私は祝辞の中で、この私に機会を与えて下さったことに感謝を述べると同時に、「河

正雄美術館の規模は小さくとも、多様な展示を通して世に残る世界的な美術館にならなくてはなりません」と述べました。

七、河先生の喜寿記念講演会と『日々一歩』を讀んでの金甲柱の献詩と洪銅義の書による屏風の贈呈

「日々一歩」を（日本語訳）

金甲柱

貴方はここに立っておられます。

陽の光のように、眩しく輝いています。

以前も今もこれからも、永遠にそこに、

そのままの姿で立っておられます。

誰も知らず汽車に乗り、東京に向かった足取りが、

あれ程描きたかった貴方の身悶えが、

光の街を越え、果てしなく照らして行きます。

見知らぬ青い、あの遠い国日本に向かって、

碧空を飛ぶ力強い翼に沿って、

母の国、希望の世に飛び立ちます。

ある画家の筆先から、ある匠の指先を

経て、ある野次馬の口を通じて、遙か遠

くに広がります。

手足を縛られ言葉まで奪われた時代に、あの恨めしい「朝鮮人」という束縛の中でも、

厳冬雪寒、隠れていた花の芽のように、貴方は生命を育んで来られました。

皆が自身の未来のみを描いていた時も、隣人の涙が川の水となって流れる時も、イエスが道を失った一匹の羊を探したように、その足取りは終りがありませんでした。

道に沿って行けば、次の道につながるように、貴方の暖かい差しのべた手にしたがって、

世の中がひとつひとつ開かれて行きます。

日々一歩ずつ日記を書き残すように、中川伊作が盲人の群れを率いて飛び石の橋を渡るように

中島昭二郎が花の村を作ったように、貴方の愛で花を咲かせていきます。

日々一歩ずつ、また一歩ずつ、夜空の星のように

貴方も、私たちも、世の中も、積み上げ

られて行くでしょう。

村の老人がまく種のように、幼な子たちの童話のように

握りあつた恋人の暖かい手のように

貴方がそのようになさつたように、私たち皆が共に交わる、幸せな国を創つて行きます。

日々一歩ずつ、またそのように一歩ずつ

日々一歩ずつ、歩いて行きます。

(書Ⅱ中虚(チュンホ)書藝研究

院 洪銅義(ホン・ドンウイ)(2

015年冬、雪の降る佳い日に記す)

1998年に河先生の還暦に合わせて光州市立美術館主催で雲岩洞のプリンスホテルで祝賀会を開きました。数多くの絵画の寄贈と人々の精神を救済する運動による労苦のおかげか、数百名もの祝賀客が集まりました。私も気持ちばかりの贈り物を手に、河先生へのお祝いのために末席で食事をしました。河先生は私を見つけて下さった

て、幸福な事業を行っていますか、とお訊ねになり、成功を祈る言葉を贈って下さいました。私は今でも、幸福な事業家になる、というお言葉を大切にしています。

時が流れ、私が光州視覚障害者連合会長の在任中に河先生が喜寿を迎えることになりました。私は美術関係者と市庁関係者、そして河先生を尊敬する知人たちと先生の喜寿を記念する祝賀の席を設け、喜寿をきっかけに先生の精神を受け継いでいくための河正雄財団を設立しようと提案しました。

しかし、全員が快い反応を示してくれず、だるうと思っていたものの実際には賛否両論で、もつとも賛同してくれると考えていた美術関係者による反対の声が大きくなってシヨックを受けました。大規模な会を開催する意味を見出せなくなったために、視覚連合会のレベルで祝賀会を開くことに決定したのであります。

まず、『日々一歩』を読んで河先生の出版記念会の時に書いた私の詩を屏風にして贈ろうと考え、日頃から河先生と親しくされていた書家の鶴亭先生を前もって訪ね、字を書いていただくことを快諾していただきました。

しかし、いざその時になって鶴亭先生の元を書を受け取りに伺いましたところ、先生はガンの闘病中で字を書くことが出来なくなってしまうました。時間が過ぎ、代わりの人を探しましたが、窮すれば通ず、とはよく言ったもので、光州市庁の都市再生課の姜権先輩が自身も河先生を尊敬しているとし、鶴亭先生の弟子である洪銅義書芸家を紹介して下さい、洪先生はむしろ光栄だと喜んで文字を書いて下さいました。

そして2015年12月17日、光州市庁の大会議室で視覚障害者たちの文芸発表会である第1回「ナレヤ(나래야)」のイベントで視覚障害者たちと後援者600人余りが集まった席で河先生の喜寿講演を拝聴した後、私が書いた詩を紆余曲折の末に洪銅義先生が書き写して下さいた屏風をお贈りすることができました。

喜寿講演は、ご自身の生きてきた人生の話と、禅の言葉である「明歴歴、露堂堂」、すなわち世の中のあらゆることは歴々と明らかで堂々と露わになっている、という内容でした。河先生の大きな業績にもかかわらず、誰も関心を持っていなかった先生の喜寿祝賀会を開き、贈り物までして、何かを

やったぞ、という考えで嬉しく思っていました。

そして5年の歳月が過ぎたある日、河先生とお電話で話をしていた時に先生の評伝を書くというお話をしたので、屏風の話を持ち出してみたところ、先生はまったく覚えていらっしやいませんでした。

私はとても驚いて、喜寿記念講演のこと、鶴亭先生に字を書いていただけなかったので弟子であるホン先生の字でお贈りしたことで、贈呈式の写真もあることをお話ししましたが、河先生は何も記憶していらっしやいませんでした。それだったら、あれほど苦労して制作した意味は、そしてあの大きな屏風はどこに行ったのでしょうか？ 残念なことに、関係者すべてが屏風の行方を記憶しておらず、喜寿祝賀会での贈り物の屏風は跡形もなく消えてなくなってしまうたです。

もどかしかったものの、これといった名案もなく、契約書を2部作成し、お互いが1部ずつ保管するような感覚で、私が書いた詩を先生にお贈りする際に私も1部を持っていなければならないと考えて、表具をするのではなく、私自身も別に1部を保有し

ていたのです。それを先生に差し上げる形で収まりました。残念ではありましたが、幸いでした。

(※金甲柱会長の献詩の屏風、河正雄先生の喜寿祝賀会に寄せて。)

八、KBS光州放送が河先生を非難

世の中はさまざまなことがあります。イエス・キリストがガリラヤで捨てられたように、世の中は義理堅い恩人を裏切ることが多いのです。

私が視覚障害者連合会の会長としての任期を終え、光州広域市の障害者総合支援センターの常任理事を務めていた2018年のあの日、KBS光州放送のニュースが河先生による絵画寄贈の光州広域市との協約は個人の私欲であるのに、光州広域市が過度な厚遇をしたことは間違いであり、原点から見直さなければならぬ、と報道しました。崇高な先生の意志に反するニュース報道が連日のように流されていました。

悪意と作為を持った一部の人々の間違った判断と無知なる軽薄さ、そして記者たち

の傲慢な英雄気取りの行為が善なる偉人を埋葬していたのです。恩人に対し光州がこんなことをしてもいいのだろうか？ 怒りがこみあげてきました。美術関係者をはじめ、心ある人々が蜂の群れのように蜂起して戦うと思っていました。数人を除き、全員が沈黙を貫きました。これは先生をもう一度殺す沈黙だと私は思い、辛く感じました。

私は視覚障害者たちと一緒にKBS光州放送局の前で抗議集会を行うつもりでした。しかし河先生の相手の策略にはまってはならないとの引き留めと、視覚障害者連合会の会員たちの同意を取りまとめることができなかったために実行には至りませんでした。

できたことは、李庸燮光州広域市長、田東平霊岩郡郡守、そして関係する方々に対して呼びかけを行い、光州MBCのコラムとKBSの視聴者ご意見箱に意見を投稿することだけでした。正義と真実が潰された現場で、苦しんでいる河先生と凱旋將軍のように意気揚々のKBS記者と加害者たちがオーバーラップし、私の姿は限りなく小さ

く見えました。もしかすると、先生が何年か前に私に下さった写真の壁画、イエス・キリストがゴルゴダへ引きずられていくあの壁画の主人公に、私たちはなっていたのかも知れません。

※光州MBCコラム ― 称賛する社会を作りましょう―

イソップ寓話で旅人の服を脱がせたのは荒い風ではなく暖かい光でした。

称賛は鯨をも踊らせると言います。

皆さんは日常の中でどれだけ褒めることを探し、褒めることを実行していますか？

周辺では称賛に値することが絶え間なく起きているのに、日に一度でも褒めることをしなければ、「知れば知るほど物事をよく見ることができるといふことわざのように、生活の中にある良い点を見ることができないということになります。

残念なことに、間違えたことを先に見ても、残念な心が先行してしまい、良いことが見えなくなってしまうのです。

アレクサンダー大王の肖像画を描くために大王の元を訪れた当代の有名な画家は、大王の顔にある大きな切り傷を見てどうし

たらいいのか苦心した末に、大王を机の上に腰掛けさせて頰杖をつかせてその傷を隠した後、名作を完成させたと言われています。

私は35年前に在日韓国人である河正雄先生にお会いしました。

絵の収集で光州にいらっしゃった際に身体が調子が悪くなり、視覚障害者の黄英雄氏から按摩の施術を受けることになりました。そして、初対面だった黄英雄氏と施術中に話をしたことをきっかけに、光州の視覚障害者たちの宿願であった会館の敷地を用意して下さいました。そのようにして始まった縁で毎年お会いすることになり、先生の精神を知ることになりました。先生は何事もまず自らやらなければならぬこと、健康な精神と正しい歴史認識、そして共に協力し合う社会を作らなければならぬこと、と常におっしゃっていました。

先生は画家になることが夢でしたが叶えることができず、勉強がよくできましたが韓国人の名前を変えなかったという理由で就職もできなかったそうです。それで、日雇い労働者から始め、いろいろな仕事を通してお金を貯めて夢であった画家になる代わ

りに絵の収集を始めたそうです。絵の中には歴史と精神、そして人生が詰まっています。絵を通じて世の中の幸せを作っていくことができると考えていらっしゃいました。

そのようにしてお金を貯め絵を収集して恋しい故国に1万2千余点もの絵を寄贈し、その中の2600余点を光州市立美術館に寄贈して下さいました。1992年の開館初期の光州市立美術館は所蔵品がなく、一部の展示室を閉鎖しているという空虚な状況でしたが、先生の25年間で7回続いた寄贈のおかげで今では全国の市立美術館の中でもっとも水準の高い美術館になりました。それだけではなく、先生は日本による占領期に日本に徴用されて名もなく死んでいった5千人余りの韓国人の名簿を探し、毎年慰霊祭を行っていて、本来であれば国がしなければならぬことを奇跡のように行ってきたのです。

しかし、一部の否定的な人々と某放送局は光州広域市は協約を間違えていた、過度な待遇をしている、偶像化しているなど、先生の高貴なメセナ精神を称賛して広く伝えるどころか、魔女狩りのごとく先生を傷つけることに熱を上げています。本当に情け

ない限りです。

光州ができてから今まで、河正雄先生ほど多くの寄付を行った人を私は見たことも聞いたこともありません。視覚障害者たちの基盤を作って下さり、名もなく死んでいった魂を慰霊し、青年画家たちを支援し、1万余点の絵を寄贈する方を、どのようにより優遇して称賛する社会を、互いに協力し合う共同体を作っていくのかを考えなければならぬ時です。桁違いに寛大な寄付者の名譽をこのように毀損し、その胸に釘を打ち付けるのであれば、一体誰が寄付などをしようとしようか。

水原には朴智星の道路が、大邱には歌手の金光石の通りがあります。彼らはそれぞれの特技を通して世の中に利益を与え、それによって優遇されたのです。光州の金大中コンベンションセンターについても同様です。

社会に対して記念すべき業績があるなら、誰であれ相応の待遇を受け、後世の手柄となるようにするべきです。憎しみは憎しみしか生み出しません。善行を絶えず見つけ、好循環による温かいコミュニティを作らなくてはなりません。今日もまた、称賛するこ

とを見つけられる一日になりますことを願っております。

(—2018年10月17日 光州MBC  
ラジオコラム放送)

九、河正雄先生、光州広域市視覚障害者連合会名誉会長に推戴

私は連合会長に在任している間、河正雄先生の哲学と実践に多くのアイデアを与えられました。普段から先生は歴史意識と自立と記録、そして未来に対する変化を作っていたらっしゃいました。あるいは、絶えることのない革新の連続、という考えすら頭をよぎります。

その中の一つが光州視覚連合会の40年史を作ったことでした。職員たちに、その間の資料を集めるように言い、黄英雄会長や魯柄淑会長といった歴代の会長など、連合会に關係のあった方々に手持ちの資料や口述、そして連合会の歴史に記す価値のある素材等を探すように要求しました。視覚障害者の特性上、写真を撮ったり、記録することへの関心が少ないために、資料収集は困難を極めました。

私は河正雄先生にも視覚障害者の歴史を

編纂することをお伝えし、視覚連合会と関連する資料の提供をお願いしました。河先生は本当に重要な仕事だとおっしゃって喜んで下さり、数十年に渡って集めていらった資料などを整理して送って下さいました。私はあらためて長い時間の流れの中で、河先生が当事者よりさらに正確な記録を持つていらったことを恥ずかしく思うと同時にそのありがたさを痛感いたしました。

このように河先生が精神的、物質的そして歴史的にも光州の視覚障害者たちとの間に深い縁と熱情をお持ち下さったこと、これをどのように永久的な形でとどめることができるか苦心した結果、河先生を光州広域市視覚障害者連合会の名誉会長に推戴することに意を共にしました。

虎は皮を残して、人は名前を残すように、誰でも意味があることを成し遂げれば、それに適した名譽と待遇を与えられるというのはもともと基本的なことだと思っています。

すべての会員が満場一致で同意し、2017年10月、第38回白杖の日に合わせて河

正雄先生を名誉会長に推戴いたしました。河先生は名誉会長に推戴されたことを非常に喜んで下さり、私もやはり、意味のある仕事を成し遂げたことを嬉しく思いました。

十、『暗闇の中の光』社会的協同組合」組合員として参加

私は常日頃から障害者の社会参加と職業の開発に多くの関心を抱いていました。私自身もやはり按摩の資格を取得しましたが、按摩よりも新しい道を探して事業をする事になりました。そうしながら、視覚障害者たちに合った新しい職業とは何であるかを考えてきましたところ、偶然に「暗闇の中の対話」に接することになりました。

暗闇の中の対話とは、光を遮断して何も見えない暗黒の環境を作り、その空間で視覚障害者たちが参加者を案内し、暗闇の中でさまざまな体験を提供するものです。私は、まさにこれだ、視覚障害者が自ら誰の助けを受けずに暗闇の中で案内者になることができ、体験者たちは視覚を奪われた状態でさまざまな経験をしながら、視覚に対する理解と人生を振り返ることができる良い事業になると思いました。

最初は私が稼いだお金でやろうと思ったのですが、思う通りにいかず、志を同じくする方々と協力し合わなければならぬと思いついて、2017年に非営利法人『暗闇の中の光』社会的協同組合」を設立して組合員を募集する一方、光州共同募金会と連合募金をもすることにしました。

河先生が光州にいらっしゃったある日、私に電話を下さって会って下さいました。そしてどのようにしてご存じになったのか、体験館の建立後援金を下さって「必ず意志を成し遂げて下さい」と呼び掛け、励まして下さいました。先生もまた組合員の中の一、人、という立場でいらっしゃいましたが、私にとっては意味のある大きな力でした。

先生はいつもこのように、必要なことに関心をお持ちになって下さり、参加を実践して下さいました。後に暗闇の体験館を作ることができましたら、体験館の中に河正雄記念室を作り、目で見ることができない暗闇の空間の中に先生の音声と彫刻など、聴覚と触覚のみを使う美術鑑賞室を作らなければ、とも考えています。

(ここまでは金甲柱による文。次は黄ソングオン会長の文です。)

十一、黄ソングオン会長、河正雄先生の功  
労碑を建てる。高潔なる意志を称え！

黄ソングオン会長（社団法人 光州広  
域市視覚障害者連合会第15～16代  
2009～2013年）

河正雄博士の立派な精神を心に刻み、未  
永く記憶に残したいと思えます。

視覚障害者たちにも空に浮かぶ澄んだ雲  
を見たいという夢があります。

しかしながら、夢を広げるまでの険しい  
過程については筆舌に尽くしがたいものが  
あります。

黄ソングオン光州広域市視覚障害者連合  
会長は第15代、第16代会長として連合会を  
率いてきながら、河正雄博士の大きな助け  
を得て視覚障害者たちの巣である光州視覚  
障害者連合会福祉館をついに建立するに至  
り、その崇高な志を岩に刻み永遠に称賛し  
たいと思えます。

黄ソングオン会長は2009年1月1日  
に第15代会長として就任すると「光州広域  
市視覚障害者たちと共に進む福祉、見つけ

ていく福祉！」をスローガンに掲げました。

このような夢を実現させるべく光州広域市視覚障害者福祉館建設用地を工面して下さった在日韓国人河正雄博士の崇高な志を込めた功労碑を建てる意志を明らかにしました。このプロセスは専任会長と光州広域市視覚障害者連合会の会員たちの積極的な協力と参加があったからこそ可能でした。霊岩が故郷である河正雄博士は以前から光州を訪れ、光州の視覚障害者たちが適切なオフィスもなく困難を極めているという話を聞き、1982年より「巢作り」ために寄付を始めて下さいました。

時には日本で作品展を開いて用意した私財を寄付し、時には日本の青年作家たちと共に展示会を開いて募金運動をして、2008年まで光州広域市南区社洞19―4番地に視覚障害者たちの施設用地として貴重な土地650・7平米を購入できるよう、あらゆる後援を惜しみませんでした。

在日韓国人が韓国人に代わって堂々と成功したことも特筆すべきことであるのに、故郷を忘れず、故郷の視覚障害者たちが一つの建物に集まり一団となってその膨らんだ夢を耕す基盤を用意して下さいました、その

崇高な志を忘れることができません。

黄ソングオン会長は、光州視覚障害者たちの宿願であった事業を成し遂げることができるように物心両面で支援して下さいました河正雄博士の立派な心に報いて功労碑を建立しました。

建立諮問委員には黄英雄、黄ソングオン前会長を迎え、推進委員は黄ソングオン会長、パク・ジス理事、ユン・グアンヒョン事務局長、キム・サンソプ課長、張永喆チーム長、パン・ソングヨン室長で構成され、功労碑建立のための1次～3次推進委員会を開催し、具体的な実行に着手しました。

功労碑建立に伴う予算計画や日程等は黄英雄、キム・ソングジュン両前会長に諮問を受け、功労碑製作は河正雄博士の業績をもつともよく知っている鄭允台朝鮮大学美術大学長の素晴らしい作品で遂に建立するに至りました。

功労碑建立にかかった予算の3千万ウォンを集めることは、黄ソングオン会長をはじめとする視覚障害者連合会の会員たちの涙なしでは語れない募金運動と協力があつたからこそ可能であったことをここに明らかにいたします。

特に、光州広域市東区錦南路近隣公園で

2009年6月24日午前10時から午後10時までバザーを開き、光州市民の参加と協力による収益金800万ウォンを確保した会員たちの誠意を忘れることはできません。河正雄博士の崇高なる故郷を愛する精神と視覚障害者連合会の会員たちの切なる真心が込められた功労碑がついに完成し、2009年8月12日、社団法人光州視覚障害者連合会（光州広域市南区社洞19―4番地）に建立され、その志を末永く称えたいと思います。

光州視覚障害者連合会は真つ暗な世の中を愛の光で明るく照らす河正雄博士のありがたい魂を忘れることはありません。

2009年8月12日

社団法人 光州広域市視覚障害者連合会  
ファン・ソングオン会長他会員一同

十二、特別な縁、惜しい離別

世の中を生きて来ると、思いもよらないことに会おうことが多い。私が河正雄先生に出会ったのも、光州広域市視覚障害者連合会長を歴任したのも、河正雄先生の『日々、一步一步』という本を読んで出版記念会を

開き、その意義を贅える詩文を書くことになったのも、その詩文を屏風にしてプレゼントしたのに紛失したことも、余分にその作品を所蔵していたので、やっと再びプレゼントできたこと等々、すべての過程が日常、思いもよらなかった奇跡のような縁につながるが多い。

私はこのように特別な縁から、私の人生の痕跡として残したかった私の所蔵品と、惜しくも別れることになった。

何という話だろう！ 私は1983年に、初めて河正雄先生にお目にかかることになり、河正雄先生の人生が私の人生の灯台となり、今まで尊敬する先生として位置を占めている。私は2013年8月、光州広域市視覚障害者連合会長に就任することになったが、ちょうど河正雄先生が『日々一歩』という自伝的エッセイを出版する頃だった。私はそのニュースに接して2014年11月5日、出版記念会を開催した。そして私は、その本を読み感じた思いを、「河正雄先生の『日々一歩』を読んで」という題で詩文を書くことになった。下手で拙筆だが、河正雄先生の人生を、感じたまま素朴に描いたと思ひ、自分なりに嬉しかったし、書いた勢

いで記録に残したいという欲が生じた。それで普段から河正雄先生と縁を持っておられるハンゲル書道の大家鶴亭(李敦興)先生を訪ね、詩文を書いて欲しい頼んだところ、快く応じて下さり嬉しかった。

私はすぐに自分が書いた詩文を送り、時間を待たずに連絡すると、鶴亭先生が癌に罹り筆を執れないということだった。良い解決方法がなくなり、それなりに有名だというハンゲル書道家を探し、事情を話すと快く詩文を書いてくれると言われたが、謝礼を思ったより多く要求され、困難な状況になった。

そんなある日、市役所のカン・グオン書記官がこの消息を聞いて、「自身も河正雄先生を尊敬する」と言い、友人の書道家中虚・洪銅義先生を紹介してくれた。洪先生にこれまでの経緯を話すと、洪作家も「河先生を尊敬する」と言い、そして「自分が鶴亭先生の高弟として、鶴亭先生が自分にくれたプレゼント」と言い、快く応じてくれ新しい縁を結ぶこととなった。

私は「時間がないので、早く書いてほしい」と催促したが、「詩文が長くて練習しなければならぬから、催促しないで欲しい」と言

われた。やきもきしながら時を過ぎ、詩文の書を受けとった時、「是非私も書を一点所蔵したいので、もう一点書いて欲しい」と要請すると、快く応じて下さった。私は本当に私が創った詩を作品に作って、河正雄先生と私が一点ずつ所蔵し、私の人生の1頁として永く大事に保管するという思いで、限りなく嬉しかった。

そしてその年の冬、白い雪が懐かしい日、視覚障害者の祝祭、第1回「翼よ」の行事の場での河先生の喜寿記念講演の時に、河正雄先生の「日々一歩」を読みあげ、屏風をばつと開いてプレゼントして差し上げた。実に忘れられない、喜ばしい瞬間だった。

その後、私は視覚障害者連合会長職を離れ、また多くの歳月が流れた。2021年初めのある日、河正雄先生から「あなたが書いた私の評伝を載せたいので、私にあなたと関係する記録や写真、そして文を補充して欲しい」と言われた。私は「そうする」と約束をし、以前の屏風の話を出し「その評伝に入れたい」と要請すると、河正雄先生は「屏風について記憶にない」と言われた。私はびっくりして、「講演の時、プレゼントして差し上げた」と、贈呈した屏風が広げられ

た前で、河正雄先生が講演されている姿を説明した。幸い河正雄先生がその写真を持っていて、屏風を思い出されたが、問題はその屏風を受け取っていないということだ。どうなったのだろうか！金の指輪のように、小さくて誰かが簡単に持って行けたり、部屋の片隅に埋もれて探せない物でもないのに、あの大きな六幅の屏風が消え去るとは…。

私が視覚障害者連合会と河正雄美術館の担当職員に「どういうことか」と問い質すと、皆が上の空だけを仰ぎ見る。真に奇異なことが起きたのだ。

横150センチ、縦35センチ、高さ25センチの大きな屏風が、第1回「翼よ」の行事が終わった後、河正雄先生が持っていたと思いついていたのだが、受理されていなかったのだ。

7年も過ぎ、今や行方も分からない、あの貴重なプレゼントをどうするべきか！誰が所蔵しているだろうという漠然とした推測と、こんなことがあり得るのか！という思いに茫然自失、虚しいことこの上なかった。

幸い私が余分に表具にしなかった書を所

蔵していたので、惜しい別れであるが河正雄先生に差し上げることができた。予想のできないことだったが、このようにしてでも再び差し上げられることは特別な縁だが、河正雄先生と私が共に所蔵したかった夢は、惜しい別れとして残ることになった。

再度、詩文書を差し上げる約束をした後の2022年6月、3年ぶりに河先生が光州を訪問することになった。

それで約束通り、『日々一歩一歩』を読んだ私の詩文の書を、再びプレゼントすることになった。先生は感動され詩文書を広げられた。そして最後の6枚目に、洪銅義先生の落款がないのを見つけて、「すぐに洪先生に落款を貰いに行こう」と言われた。「一枚一枚の全てが、大切な記念品」と重要視された。

洪先生に連絡すると、「こんな縁もあるのか」と大きく喜ばれた。「日頃から河正雄先生とお目にかかりたかったが、詩文を書くことになっただけでも光栄なのに、奇跡的に落款が捺されてなく、今日初めて直接お会いできるとは。こんな縁がどこにあるのか」と嬉しがった。『日々一歩一歩』の出版記念会から始まり、記念の詩文を屏風

にした縁が、『日々一歩一歩』を書いた著者と記念の詩文を書いた私と書道家が一堂に集まった、このような縁もあるのだな」と喜び、「泥棒のおかげだね」という河先生のお言葉が、余韻として響いて来る。真に特別な縁であり、惜しい別れであった。

(2022年7月15日記述)

(暗闇の中の光、社会的協同組合 理事  
長 金甲柱(キム・ガプチュン))

お金にもならないことを探してする男

尹 鐸

元韓国文化院長。駐日韓国大使館公使歴任

河正雄氏に初めてお会いしたのは、1983年3月、私が駐日韓国大使館文化院長として就任して間もない頃であった。

その華麗な東京の雰囲気とは全くかけ離れた第一印象であった。ジャンパーを羽織り運動靴を履いて、顔立ちも韓国の農村でよ

く見かけるようなセマウル運動指導者の雰  
囲気であった。

何をしている人なのか興味湧き職員に  
聞いてみたところ、美術が趣味で、韓国文化  
院で国内外美術作品を展覧会を一つ残らず  
調べて鑑賞したり、気に入った作品がある  
時は作家と特別に交渉して購入する場合も  
度々あると言う。

在日同胞2世、当時40歳、初印象では莫  
大な財産を持っているように見えない若  
い人が、美術作品を購入・収集するという事  
が在日韓国人の間では珍しい事である為、  
大きな関心を持って河正雄氏に接すること  
になった。

在日同胞2世としては韓国語もなかなか  
流暢に話し、夫人も同胞2世で堅実な家庭  
を築いていることを知った。数カ月後「蕨」  
にあった河氏宅に招待され、美術収蔵品を  
鑑賞できる機会があった。在日同胞画家の  
作品はもちろん、国内作家の作品、そして世  
界的に有名な作家など数百点を所有してい  
ることに驚かざるを得なかった。

特に在日同胞画家全和風先生の全作品を  
収蔵し、数億ウォンを費やして韓国に全作  
品を躊躇なく紹介する情熱を持っている人

である。

故に私は河氏に失礼とは承知で尋ねた。

「若い人がお金にもならない美術品を収集  
してどうするのか。」

躊躇なく河氏は『私が生まれた故郷「秋田」  
に美術館を建て在日同胞の画家達の作品を  
永久に保存することによって、民族の矜持  
を高めるのに努めていきたい』ということ  
であった。

実に素晴らしい人であると判断し、それ  
以来河氏とは格別な関係を結んでいる。

そしてある日深刻な表情で私を訪ね、「良  
いことを一つしました。全羅道光州に盲人  
会館を建てると決心し、直ちに着工するよ  
うにしました。」。その2年後には光州で盲  
人会館建立竣工式を行ったとまた改めて誇  
らしく訪ねて来た。

河正雄氏は在日同胞の主力企業である  
「パチンコ」業に携わっている訳でもなく、  
自力で小規模の不動産賃貸業を営んで、築  
いた財産でこのような素晴らしい奉仕活動  
をする人物であるということに一層大きな  
意義があると言える。

在日同胞達の間でただひとつ存在してい  
た在日韓国人文化芸術協会でも、首席幹事

として犠牲的な奉仕を惜しまず、全ての文  
化事業で常に先頭に立って在日韓国人青年  
達を指導したりもした。その実績は私の丸  
7年間の駐日大使館に勤務していた間だけ  
でもひとつひとつ列挙できないくらい多い。  
従って別名をひとつ付けてあげると、本  
人もそんなに嫌がっている様子もないよう  
なので紹介することにする。

「お金にもならないことを探してする男」  
そのような彼が今回祖国のために何かし  
たいと、ソウルの東崇洞文化路にビル「21」  
を建て美術館を運営するという。

もう河氏の年齢も50になろうとしている。  
河氏の卓越した手腕で韓国美術界に新しい  
風を起こすであろうと確信し、大きな発展  
を期待してやまない。

しかし彼はまた「お金にもならないこと  
を探してする男」という別名だけは免じる  
ことができないのは明らかであるようだし、  
私はそれが嬉しいのかどうかはわからない  
のである。

(1992年記)

「お金がどういものかご存知ですか？」

尹鶴

ソウル特別市。弁護士。「月間読者 Reader」発行人

「お金がどういものかご存知ですか？」  
数日前、東京で初めて会った彼の質問に私は答えなかった。

ニュアンスから察して、この人こそお金の本質を本当に知っていると感じたからだ。今日私は埼玉に住んでいる彼に会いに、いや彼のお金に会いに行く。

ひよっとしたら彼の不揃いに生えた歯を見に行くことになるのかもしれない。

幼い頃、貧しい農夫がくれるお小遣いを断わり米窯を急いで背負い逃げようとして、ひっくり返り前歯がいくつか折れたが、歯医者に行くお金がなくてその折れた歯をぎゅっと指で突っ込んだと言って見せてくれた。

◇

ハ・ジョンウン！

日本の秋田県で高校を卒業し東京に上京してきたが、寝るところも食べるものもなかった彼は、電気器具製造会社によく就職し、夜間は日本デザインスクールに通った。

学費を除いてひと月2000円で暮らさなければならなかった彼は栄養失調になった。

そんな彼が1万2千点にも及ぶものすごい数の美術品を世に贈り出した。

千鏡子、朴栖甫、草間弥生、シャガール、ジョアン、ミロなど、世界的な傑作を自分が生まれた国でもない韓国の美術館等に寄贈した。

彼はどうやって財を築き、天文学的価値の絵を買い、そしてなぜそれを寄贈したのか。

視力の損傷で職を失った彼は朝鮮総連を訪ね、薄給の総務を引き受けることになった。貧しくて学べなかった同胞たちは名前も書けなかった。彼は同胞たちの手となり足となって走り回った。

彼は本当に賢い人だった。  
賢い人とは「勉強ができる人」ではなく

「人を尊重する人」ではないだろうか。

結婚の祝儀金で家電製品を買いに行った彼に店主が頼み事をした。

「今日もらった代金を店の不渡りを防ぐのに当てさせてほしい。代わりに私が月賦で返して行く」という。

気の毒な事情で承諾してしまったが、月賦金の請求書が彼のところに次々と来た。詐欺に遭ったのだ。

しかし、その詐欺のおかげで彼は莫大なお金を稼ぐことになった。

店主に抗議すると店を譲るから借金のかたにしてくれと言った。

彼が借金だらけの店を引き継いだといううわさが広まり、子供たちの婚禮道具を準備しようとする同胞たちが次々と訪ねて来た。

朝鮮総連での彼の献身的な親切が報われ始めたのだ。

傾いていた店が代理店に昇格し、後にはエレベーターまで納品する大きな会社に成長した。

◇

そんな中、彼に不治の病が襲った。京都の

竜安寺住職を病氣見舞いした際に「あなたは両手いっぱい宝物をぎゅっと握りしめていますね。片方の手に握ったなら、片方の手のは離さない。」と言った。

片手を空けていれば転んでもその片手で地面に着き身を守ることができ、更にもっといいものが近づくと思え、握めるということだった。

それ以来、彼はお金が入ると片手だけで握り、もう片方の手は広げて人を助けるのに惜しみなく使った。病氣も消えて、広げた片方の手にはいつもっと大きな何かが握られている。人のために買ってあげた、見捨てられていた土地までも、後に数十倍に価値となり巨富になった。

◇

当時無名の李禹煥氏がヨーロッパに行くために500万円が必要だと言った時、彼はあっさり700万円を渡した。無事にヨーロッパの展示を成功させた李禹煥が絵13点を送ってきた。

今では1点当たり数十億ウォンの絵だそう。

そのようにして、画家たちが自分のように貧しいことを理由に美術を諦めなくても

良いように支えているうちに、1万2千点の絵が集まっていた。

彼は高価な絵をタンスの奥にしまい込んでおいた。

絵を握りしめた片手を大きく広げて、大切にしていた高価な美術品を父母の故国大韓民国の美術館に全て寄贈した。

しかし人々は、他に高価な作品は家に隠しておいたものだろうと怪しんだそう。

人間とはもともとそういうものだと思つたように笑ってみせながらも、彼は希望を捨てなかった。

良いものを見ていけば、良いものを知る目が養われるのではないかと、人がより美しく生きて欲しいという彼の本音が垣間見えるようであった。

◇

数千億ウォンの財産を差し出すほど富を築いたにもかかわらず、30代の時から住んでいた所に未だに住んでいるという彼の家を私は訪問する。折れた歯を揃えることもできるが、その不揃いな歯こそ人生の誇りだという彼に会いに行くのだ。

それだけお金というものをよく知ってい

る人がこの世にどれだけいるだろうか。

大統領になつてもなお強大な権力を両手いっぱい握りしめようとして、すべてを失つてしまう情けない人たちは1人や2人ではない。

両手に握りしめた金も権力も片手だけでは大きく広げて離すことができるなら！

なかなか打ち明けなかった話を長い間聞いてくれてありがとう、明るく笑っていた88歳の彼にまたすぐにも会いたい。

埼玉！

30代の彼も80代の彼も住んでいるその家、場所で私はまた何を見て聞いて感じたのであろうか。

### 愛を実践に移した巨人 河正雄

張錫源

1952年生まれ。仁川広域市。光州ビエンナーレ芸術監督。美術評論家。全南大学教授。

1957年、上野の東京国立博物館で開催された日本初のヴィセント・バン・ゴッホの展示が見たくて、修学旅行に行く為に毎月貯めていたお金をはたいて、夜汽車に乗った青年河正雄。

彼は朝鮮人として受けた差別と貧困と苦悩を乗り越えて立ち上がり、ビジネスを成功させて美術作品を収集し、韓国の光州市立美術館に続いて、国内外の美術館に1万2千点余りを寄贈した。

数日前電話で、2017年に心臓の手術を受け、いつ死んでもおかしくないとなった、生きている間に交際のあった方々の記憶を文に残したいと言っていた。

彼の声は生気にあふれていたが、心臓病はいつまた発作が起きるかわからないという心配事も言っていた。

私と河正雄先生とのご縁は、1995年、第1回光州ビエンナーレ特別展「文人画と東洋精神」のキュレーターとなり、その準備に携わる過程で始まった。

当時私はアジア圏の現代水墨画の展示形

態を紐解くため、関連する国々を訪問して作家達に接触を試みていた。

そして東京国立近代美術館から近代巨匠の作品をお借りする為に河正雄先生に会いホテルを確保した。2級ホテルではあったが費用は決して安くはなかった。

翌日、美術館に向く為に同伴の学芸員と会議中、彼が滞在中のホテルを尋ねて来た。そこで私に対する信用度を測るようだった。

円滑に協議が進んでいたところ河先生がホテル室内を見て「ほら、らんない。少しお金がかかっても良いホテルを取りなさいと言ったでしょう。」とおっしゃってケラケラと笑った。

次は京都の日本画家畠中光享先生に会いに行かなければならなかった。中国で私は美術関係の本を買い集め、香港、台湾、シンガポール、マレーシアを経由し、日本に着く頃には物凄い重さになり、キャスターのついたカバン二つがパンパンになり、これ以上どうしようもない状況になっていた。

しかし我々は、その荷物を持って東京から京都に移動しない訳にはいかなかった。新幹線の乗り場に続く道のりは、階段の多

い長い道程で、電車を利用する多くの人々の間をぬって進むのには、重い荷物を持った我々にとっては非常に大変な事であった。我々は二つずつ重い荷物を手分けして急ぎ乗り場に移動した。

河正雄先生もご自身とは全く関係のない我々の重い荷物を運びながら、案内役まで請け負っていた。

私は一番大きくて重いカバンを持っていった為にいつも遅れ気味であった。その時に河正雄先生が近づいて来て、私を手助けしてくれながらこの様に言った。

「張先生は、仕事は教授しか出来そうにありませんね。肉体労働は無理な様ですね。」この言葉は私の気分を少々害するものだったが、時間が経てば経つほど納得のいくものであった。

教授としての仕事や、言葉や文章や絵によるデスクワークは出来そうだが、この様な力を要する仕事は私を混沌に貶めるものであった。

辛うじて電車に乗り込み、落ち着いた所で私は先の彼の言葉を借りて言った。

「東京に来て死にそうでした。」  
彼はケラケラと笑い、この様に言った。

「その重い荷物が全てお金だと考えてごらんなさい。そうすれば幸せではないですか？ 重たいほど嬉しくないですか？」

この言葉の中に河正雄の真実が込められていた。苦勞をむしる幸せの条件として受け止める河正雄式の処世感。人生克服の意思。(この部分は本人の文章「無等日報」1995年5月28日付引用)

全南大で30年間勤めた後、全羅北道立美術館館長職に応募し、2014年8月末からその職に就く事になった。

私が重点的に取り組んできた目標の一つが毎年「アジア現代美術展」を開催する事であった。

その時、河正雄先生を諮問委員として招請する事となり、日本美術界との繋ぎ、協力をお願いしたいと要請した。

河正雄先生は福岡アジア美術館の黒田雷児学芸室長に連絡をし、その美術館で開催してきたアジア現代美術トリエンナーレの図録全部を送って来た。

アジア全般の現代美術の流れの傾向を易しく理解できる素晴らしい資料であった。しかし私が目指すアジア現代美術の方向と福岡のものとの間には違いがあった。

私が注目したのは、アジアの現代的原動力と伝統に基づいた潜在力であった。アジアは急激に変貌を遂げながら、新しい世界の中心地に飛躍していたからだ。

河正雄先生は全羅北道立美術館に随時訪問し、全北日報のインタビューを受けた。その新聞全面には彼が生きて来た道程とメセナ運動、作品寄贈、人生などに関する記事が記載紹介された。

私が就任する以前に、彼が寄贈した在日作家孫雅由の作品200余点が既に収蔵庫に納められていた。

ある時、そのまま別れるのも淋しくて、全州での韓国建築が有名な韓定食の料亭で最上級のコース料理を振る舞う事にした。奥様の尹昌子さんも同行した。

私は、この席で出来ればもう少し作品の寄贈が可能であろうかと尋ねた。その時は彼は何も答えずにソウルに向かった。

数カ月後、河正雄先生からの電話を受けた。在日韓国人作家文承根の版画6点を送ったので寄贈手続きをして欲しいというものだった。

私は、作品を既に送った後で電話で知ら

せる彼の方針に感銘を受けた。彼は先に実践し、寄贈の意思を示すのだ。そして自分が何を寄贈出来るか熟考する為、その時は返答せずにそのまま日本に帰ったのである。そして、食事中に聞いた話を忘れずに覚えていて実行に移したのだった。

◇

河正雄先生の芸術に対する情熱は高く評価するに値する。彼は画家になりたかったが、家庭の経済的事情で諦めなければならなかったという思いが、在日同胞作家達を先ず持って収集する事に繋がった。その後コレクションの範囲が多様化し、マリイ・ローランサンやアンディ・ウオホールなど、国際的な作品も収集し幅を広げていった。

特に在日韓国人の作家達、名前を挙げれば、全和風、郭仁植、李禹煥などの作品は、排他的な日本で経験した在日同胞達の貧しい生活と恨が込められており、また日本の現代美術を主導するパイオニア的作品性が含まれている事は、芸術に対する彼の関心と先見を垣間見る事が出来る。

彼は事業家として成功を収め、他のコレクションとは比べる事の出来ない内容を形成させた。そして収集したコレクションの

大部分を韓国の各国公立美術館に寄贈してきた。

彼にとって芸術は生を浄めるものであり、時代的精神そのものである。一番大切に収集して来た作品を惜しみなく韓国に贈ったのは母国に対する愛、まるで自身の体を切り離し捧げるように献身的な愛を見せてくれたのだ。

一番困難な逆境を経験した者が愛の意味を誰よりも判っている。全和鳳が描いた半跏思惟像の様に、苦悩を超越した優雅な姿、比較が出来ない愛を念頭に置いて彼の事を記憶に留めたいと思う。



「無知を打破し 真の価値を見出してこそ芸術の都市／河正雄先生 膨大な重要作品 光州に寄贈／特別な意味持つ寄贈に値する礼遇を受けるべき／一般的なルールによって寄贈の価値や意味を評価するのは不可能」

2018年9月19日、光州KBSニュースでは、光州市立美術館河正雄寄贈関連契約、寄贈者優遇などを問題視する内容を報

道した。同じ時間帯のニュースでは、連日まるで意図的であるかのように河正雄氏を非難している最中であった。光州市立美術館のホームページにはこれに対応して、河正雄氏の他に類を見ない寄贈の価値を尊重する文章が掲載された。

何が問題なのか。河正雄氏は光州広域市庁の切実な要求に応じて寄贈を始め、それは寄贈という期待を超えるものだった。光州市立美術館のホームページには、河正雄氏の寄贈関連記事をこのようにあげている。

特に光州市立美術館において、1993年の美術作品212点の寄贈をはじめとして、1999年471点、2003年118点、2010年357点、2012年80点、2014年221点の計2523点の寄贈がありました。

光州市立美術館寄贈作品の中には、全和鳳(チョンファファン)、李禹煥(イウファン)、郭徳俊(カクトクチュン)、郭仁植(カクインシク)、文承根(ムンスンゲン)、孫雅由(ソンアユ)等の主要な在日作家達の作品と、ピカソ、シャガール、ダリ、ルオー、アンディウオー

ル、ジョアン・ミロ、ベンシャーン等海外の有名作家の作品及び、朴栖甫(パクソボ)、金昌烈(キムチャンヨル)、呉承潤(オスンユン)、洪性潭(ホンソンダム)等、韓国代表作家達の作品が網羅されています。

これらの寄贈の内容は、そのボリュームに驚くだけでなくその内容においても、在日作家の重要作品と国内外の作家のレベルの高い作品が網羅されているという点において画期的である。これにより光州市立美術館は、在日作家の最も優れた作品を収蔵するという特徴を持つようになっただけでなく、国内外の重要作品を備えた競争力のある美術館に成長した。

これに対する感謝の印として、光州市立美術館分館として河正雄美術館が存在し、河正雄氏の要請で青年作家招待展「光」展を開催している。また、光州市立美術館名誉館長という称号と、美術館の近くの道路に「河正雄路」という名前を与えられている。

他の寄贈者との公平性や一般の寄贈関連契約に照らし合わせた時に、寄贈者河正雄氏に対する待遇は特別なものと言える。

しかし、特別な意味を持つ寄贈はそれにふさわしい契約・待遇をするのが当然である。正規放送のニュースを通じて複数回にわたり批判する問題について、河正雄氏本人は心を痛めながらも、対外的には毅然と対処したと伺っている。自分が命のように大事にしている作品の中でもとりわけ重要な作品を光州に捧げながら、その光州発のニュースで不正契約・不正待遇という名目で、数回にわたり批判された。

どういうことだろうか。定義といっても一般的な定義は無意味なことを……。一般的なルールに合わせて寄贈の価値と意味を評価することは無理であるということが、なぜ理解できないのだろうか。

志を抱き、自分の身ひとつで自力で成功し、貧困から這い上がって好きな絵を買い、1万点を超える作品を国内の複数の美術館に寄贈した。故国はあまり念頭になかったが、両親の希望で故郷を訪問し、それ以来メセナ運動や作品寄贈など緊密な関係を結んでいる。

2015年全羅北道都立美術館在職時、アジアの現代美術を展開していた時、彼は

美術館を訪れ、「この美術館はチャン先生を待っていたようです。おめでとうございませす。」と言い、帰国後に文承根（ムンスングン）の版画6点を送って来た。また、作品の到着後電話でその意味を伝えてくれた。

河正雄先生の寄贈の背景には、芸術と祖国への愛、人生を歩みながら巡り合う様々な縁に対する格別の愛情、耐えがたい苦難を経験する人々に対する関心などがある。単純に物量的な寄贈よりも、その背景に込められた人間の温かさが感じられる。

子供の頃から絵に類稀な才能があった彼は、高校時代に美術教師の関心と指導で才能を発揮することになるが、貧困のために画家になる夢を諦めなければならなかった。彼の母親は彼の目の前で彼が描いた絵を破いてしまい、画具を清流に投げ捨ててしまった。

一番好きだった画家ゴッホの東京展覧会を観るために、「体調不良のため旅行をすることができない」と言い訳をして高校3年生の卒業旅行をキャンセルし、返金されたお金で上野行き夜行列車に乗って嬉しかった少年河正雄は、JR奥羽本線の蒸気機関車は彼の青春の鼓動そのものだったと話し

た。

過去はもう戻ってこない。人生は一瞬の夢のようなものだ。河正雄氏はビジネスで成功し美術品の収集などで夢を叶えた。自分の夢を実現化させた芸術作品を故国に寄贈してきた。それは契約条件などという次元を超え、自分の最も重要なものを祖国に捧げた形だった。ポピュリズムが広がる韓国の政治状況や文化芸術界の在り方は芸術の真の価値やその意味について鈍感である。何でもかんでも平等という観点で均等化して見ようとする、融通性・柔軟性を欠く姿勢をとるのが常だ。

文化芸術の真の価値を見出せない人々の戯言に対して、放送も世論もきちんと線引きができない。ただ洗練されていないという理由で無関心の中で自殺に追い込まれたゴッホの人生のように、それは大衆的な無知を顕にする。

いつの時代も類似している。しかしそのような無知を打破し、真の価値を掘り下げて、その力を高めることができる社会こそ、芸術の都市の名にふさわしいことを忘れてはならない。それはACCを10建てることよりも偉大な力になるだろう。

(チャンソグオン 美術評論家) … 2020年6月26日「全南毎日」寄稿

そう言うあなた方は？

池炯源

言論人。文化月刊誌「文化通」発行人

1カ月前、日本に居住している靈巖出身の在日2世、河正雄先生から、文化通(근화통)に1通のメールが届いた。

いくつもの簡潔な文章でまとめられているメールは、彼が生涯心に抱いて生きてきた座右の銘である「明歴歴 露堂堂」についての事に始まり、10月30日に下された韓国最高裁判所の新日本製鉄住友金属に徴用された韓国人4名に対する損害賠償の判決に関する事まで、ご自身の考えを明らかにする内容であった。

「明歴歴 露堂堂」とは老子の教えで、ありのまま全ての事が真理であり、大きな志

は一切隠すことなく露れる、という意味である。従って、正直にありのまま堂々と生きようと努力してきたと言った。

メールの最後の部分には、9月に光州地域放送局で企画取材として報道された、美術品の寄贈に関するご自身の立場も一言加えられていた。

「強制協約を結び、分不相応に名誉を受けているというが、どの行政がなんの根拠も無しに過大な名誉を与えるのか？ 法的に何の問題があつて何を持って強制と言うのか？ 実例を挙げて答えて頂きたい。」

在日韓国人河正雄先生は、生涯かけて集めた美術品と資料1万点余りを韓国の公共美術館に寄贈してきたメセナ運動家である。

光州市立美術館に2536点、靈巖河正雄美術館に3690点を寄贈し、全国の国立美術館や日本の京都市立美術館など数多くの場所に寄贈した。寄贈作品の中には、世界的巨匠の作品も相当数含まれている。

美術品の寄贈だけでなく、光州盲人福祉会館建立、5・18聖地に200本のケヤキの木を植樹、そして広島原爆地から生き残った柿の木を仲外公園に植樹など、数多くの活動をしてきた。

彼は長年に渡る善行とメセナ運動で、光州市やソウル、釜山、日本の山梨県北杜市の名誉市民となる名誉を受け、韓国政府から国民勳章冬椿章と宝冠文化勳章を受賞されたことがある。

河正雄先生がメセナ運動家であるという事実は広く知られているが、彼がどのような人物であり、何故長い間美術品を収集してきたかについてはよく知られていない。

そこには実に切ないエピソードが隠されていた。

彼は日本の国策事業労働者の息子として大阪府東大阪市に生まれ、秋田で育った。幼い頃から絵が好きで、美術の勉強がしたかった。

しかし、母親が闇米の仕事までしてやつと生計を立てている境遇にあり、工業高校に進学して学び、栄養失調で失明の危機にも見舞われた。

高校を卒業し、中小企業の設計員として働きながら、幾度か自殺しようと考えたり、帰国船に乗って北朝鮮に渡ろうかと思つたこともあつた。

思いがけず電気屋を営むこととなり、東京オリピックをチャンスに生かして、よ

うやく貧しさから抜け出すことができた。

彼が買った絵に「盲目の群れ」がある。盲人達が盲人を先導している絵なのであるが、彼自身が置かれている立場が感じられ、その絵を買って家に飾った。

そして、在日韓国人として全和風、李快大(이쾌대)など、在日朝鮮人の画家達の絵に関心を持ち、後には日本のモノ派画家に大きく寄与した慶南出身の李禹煥の絵に魅了され、深い関係を築いた。李禹煥はその後世界的な作家に成長した。

1970年代初め、父母と共に故郷靈巖を訪れ、故国の厳しい状況を目の当たりにして、手当たり次第祖国の為に活動のイニシアチブを取った。

一番最初に始めた仕事は、光州に盲人福祉会館を建て、視覚障害者達が自立することが出来るように支援することであった。

これをきっかけに光州地域の画家達との縁を持ち、彼らの作品の収集にもかなりの関心を持つようになった。

10年ほど前、靈巖郡立美術館の起工式が終わった後、三湖朝鮮ホテルで開かれた記念式で、彼は「私が寄贈しようという意思を持っていても、家族が反対すれば実現でき

ませんでした。家族が賛成してくれてありがたく思います。」と挨拶した。実に謙遜した姿であった。

そのような彼が故郷で波紋に巻き込まれた。例え波紋を起こした要素というものがあつたとしても、40年間収集した高価な美術品を寄贈した人物が袋叩きにあつたのである。

放送は情報提供をもとに綿密に取材報道されたのであろうか。「河正雄美術館」という名前をつけたことさえ良く言わない人々……：そういう人達は世の中の為に何か一つでも見返りを期待せずに差し出したことがあるのだろうか。

光州市は数年前、寄贈博物館の建立の為に、寄贈運動に力を入れたことがあつたが、寄贈者を見つけることができずに事業を終了した。

個人で博物館を建てるのが困難な所蔵者達が光州市に寄贈すれば、所蔵者の名前のついた部屋を設け永久展示するという計画であつた。これで我々の地域から寄贈という言葉は消えてしまうようだ。

光州市が遅れて「美術作品寄贈ガイドライン」を発表したが、寄贈の文化が再び花開

く気配もなく寂しさを覚える。

(2018年 文化誌「通」より)

コムドリ奉仕会功労牌受賞の知らせを  
聞いて

鄭鍾培

詩人。1958年生まれ。ソウル特別市

人は

耳で聞き

目で見て

世の中を把握するが

世の中の出来事は

聞くことが出来なかつたり

見ることが出来ないその裏側に

より深い河の流れがあり

その背景と神祕が隠れている。

人とぶつかり合い

困難な事も

過ぎてしまえば

自分の耳や目をごまかすことが出来るし  
先入観で錯覚していたことだと気付く

汲み出しても、汲み出しても

あるもの全て汲み出しても渴く愛は

奇跡ではなく

一日一日、日常的な日々が

正常的に落ち着く時熱く寄せる。

誰もが人らしく扱われ、尊重し

それぞれ人格と与えられた使命の意識で

足りないものを補う素朴な世の中は

はるかかなたに存在するのではなく

まさに今日

我々の心の中に

今まさに完全に花開きました。

河正雄理事長の光州との最初の縁は、

今から40年前

視覚障害者達の憩いの場所を設けたことか

ら始まりました。

視覚障害者達の講演の後

あるタクシー運転手との小さな縁で

視障害者のための文化芸術奉仕の

光州広域市 コムドリ奉仕会が動き始めた

今年40周年記念の行事

河正雄理事長に功労杯を授与する。

コムドリ奉仕会 朴容九(パクヨング)会長

の

熱烈な奉仕活動の本質には家族の献身的な

支え

特にムン・ヤンレ女史のたゆみない激励と

応援があるのだということ

朴会長は何度も強調する。

朴会長の今日がある一番大切な恩人として

昨会長はいついかなる場合も河正雄理事長

を

誇らしげに恩人と呼ぶ

金大中大統領時代青瓦台で全国奉仕者代表

としてあいさつした際

河正雄理事長を恩師だと称えた。

河理事長は言葉を尽くして功労牌を辞退

した。大きな手術の後であることから授

賞式に出席することは難しいとも言った。

奉仕会の切なる依頼で老体を引きずって、

御夫人の尹昌子女史と供に忙しいスケジュ

ールを切り詰めて、全力を尽くして授賞式

において下さるといふ。これまで以上に活

発な活動をなされることを祈ります。

## 河正雄とメセナリーダーシップ

金忠烈

朝鮮大学校社会科学教授。光州広域市在住。

河正雄先生。

私は4月25日の朝鮮大学講演で先生に初

めてお会いしました。1274年、ダンテが

フィレンツェのアルノ川のヴェッキオ橋で

ベアトリーチェに一目惚れしたように、私

もその日先生に一目惚れしてしまいました。

まるで先生は、2500年前クセノフォ

ンが最高のリーダーとして仰いだキエロス

の転生ではないかと夢想的な創造をしてみ

ました。

河先生との出会いがスパークのように簡

潔で強烈に胸の奥まで響いたのは、先生の

メセナリーダーシップが謙遜で暖かい人間

性や、誰でも抱えられる包容力を持ってい

たからでした。

先生、5月9日は大韓民国のリーダーを

決定する日であります。3年前のセオル号

事件以降、いまだにその事件の真相を明ら

かにする事も出来ていません。

また、若くて尊い霊たちに償えぬまま、2500年前のアテナのように我が国は意見が両分され混乱から切り抜けないアポリア時代におちています。

リーダーになろうとする人たちは自分だけが危機の大韓民国を救えると主張しています。しかし彼らは献身や犠牲よりも国民の上に立とうとしているし、自分の権力を制限したり、自分の財産を社会に還元したりして国家の利益を高めようとする候補は少ない様です。

全てのリーダーたちが国民から票を得る為にポピュリズムの甘言だけを与えている今日の現実がギリシヤ時代のアポリアだと思われるのは私だけの錯覚でしょうか。

大韓民国のリーダーたちが権力、金、名譽に向かつて走る時、先生は何故プラトンの君主論のリーダーのように権力のない低い所に向かつて歩んでいるのですか。

日本での厳しい差別の中で、日本と韓国の境界のディアスポラとして生きて来た先生は、血と汗で築き上げた人生の全てを祖国と分かち合っています。

先生、BC431年、パルテノン神殿の前

であったアテネ市民へのペリクレスの演説が、今日私の胸に揺動しています。彼は真のリーダーの条件として、見た事をありのままに説明出来る深い洞察力や見識、個人の利益より共同体の利益を考えて実践する力、誰にも負けない愛国心、国民の為に財産も投げ打つ精神が必要だと訴えました。

その深い洞察力や見識、共同体の利益の為の実践、愛国心、金に拘らない現在のペリクレスは誰ですか。いつもリスクを抱えている世の中で、運命と幸運の女神を迎えて(Fortuna)進取的な男性力を持つて(Virtue)自分の観点で世界を広く望み(Necessitas)それを実践的な理性と知性に昇華させた(Prudenza)リーダーは誰でしょうか。

先生、正祖が抱いた「戸戸富實、人人和樂」の価値観を持った、そういう大統領を欲するのは私たちの欲張りでしょうか。たとえ大統領当選者がその夢を全て実現させないとしても、シジフォス神話の主人公のように日々一歩一歩「戸戸富實人人和樂」を実践する事はリーダーの基本の責務ではないでしょうか。

私は「ファウスト」の名句のように「公共の善を為に世の中を疾走するように生きて

来た。世は努力する者に応じるのだ」と叫び、常に国民と疎通する指導者が大韓民国の大統領に当選される事を願っています。

河正雄先生、先生は多くの人々の夢の為に、ピカソ、シャガール、ムンク、李禹煥等の作品（1万点以上）を寄贈したのでしよう。恐らく多くの人々がその卓越な絵を見て、インスピレーションを受けたり、会話をしたりすると思います。彼らは夢を抱きながら想像と魂の響きを通して、彼らが描けなかった自分だけの素朴な内面の絵を描けるので、先生の寄贈の精神がより美しく見えます。

「河正雄の心は絵を描く画家のようだから、この世の中で描けない絵はない」先生のような方が私たちのそばにいらす事に感謝します。

大統領選挙を控えて、改めて真の指導者というのは何なのか深く考えております。世の富を熱く愛し、時にはそれをさりげなく捨てられるあなた、空ける事の意味を知るあなたを尊敬します。

〔全南日報〕(2017.5.8) 「無等日報」(2017.5.9) 寄稿文

## 感動の連続、河正雄路ツアー

金福順

1964年生まれ。ソウル特別市在住。旅行

ガイド

旅行代理店の仕事に就いてから20余年、仕事上多くの人と多くの事柄を経験したが、今回のような感動とやりがいを感じたことはない。観光客が不便なく十分な旅行をすることができるよう案内と世話に最善を尽くすのが私の使命だが、河正雄路ツアーは、私には恵みであり、祝福であった。

今回のツアーの主人公である河正雄先生は在日美術コレクターであり、光州市立美術館名誉館長でもある。先生は山梨県北杜市で毎年「私塾清里銀河塾」を開催しているが、この私塾に参加した倉橋廣昌先生が、より多くの人々に河正雄先生の平和と愛の実践を、直接見たり聞いたりする機会を作ろうとツアーを企画した。

今回のツアー参加者は、日本国内で世界

平和や人権問題に尽力している人や朝鮮人徴用者追悼に関わる方など様々な分野の方々。ツアーの最初から最後まで情熱が注がれる河先生と尹昌子夫人の行き届いたお世話を受け印象深かった。去る5月17日から20日までの3泊4日、全羅南道光州と霊岩の随所に漂う、河正雄先生が歩まれてきた経験や逸話を、まるでドラマを見るように体験することができた。

はじめに5・18光州民主抗争運動35周年行事である前夜祭と記念式典に参席し、墓地に献花参拝し遺跡を巡りました。ツアーの時期に決めたのは、普段から平和と人権運動に深い関心を持っている倉橋先生の深い配慮と考えられた。

「私が光州を愛する理由は、光州の痛みを少しでも癒したいからです」。これは河正雄先生の人生のアイデンティティーでもある。光州民衆抗争運動のリーダーとして尊敬を受ける全南大学の呉在一教授が光州の遺跡を、まるで過去の現場にいるような気がするように、生き生きと案内してくれました。

ところが、光州市立美術館に向かったバスが道を間違え、光州視覚障碍者福祉会館

の前を通過した。河先生の案内で、寄り道をして福祉会館の建物の外観だけでも見ていこうと下車をした。その瞬間、感動の場面が演出された。松葉杖をついて福祉会館を出てきた視覚障碍者の女性が河先生の声を聞いて駆け寄り、先生の手を握って「河先生は、私たちの恩人です」と涙を浮かべて喜び、深感謝を表していた。そして建物の中から、人々がどつと溢れ出てきて「河先生がいらっしゃった！」と喜ぶ、感動的な様子をみた。

訪問予定にはなかったが、ここで河先生の別の姿を発見した。河先生の父親が故郷訪問を切望し、河先生は光州初めて訪問したその後に、文化芸術都市を標榜した企画の不如意を知って、光州に美術館のコンテナを生かそうと邁進しているときに倒れ、マッサージ氏と出会ったことが縁となった。視覚障碍者の自発的な参加を促し、施設建設のため河先生が寄付を募り、大韓民国初の州に障碍者福祉会館が設立されたものであった。こじんまりとした建物や記念碑に、河先生の者に対する愛の心を読むことができた。

光州市立美術館も同じだった。華やかな建物を建てたが美術品が150点余りしか

なかった。美術館の機能を生かし作品を充実させたのは河先生だった。現在、光州市立美術館所蔵品の70%近くが河正雄コレクションである。河先生の寄贈は全国の公立美術館に広がり総計1万点に達する。

翌19日は木浦共生園を訪問した。日本植民地時代の1928年、孤児の世話をしようとして尹浩伝道師がいた施設である。1938年、彼と結婚し田内千鶴子(尹鶴子)女史が博愛の精神で孤児の世話をした。現在まで5000余人がここを巣立って行った。

6・25戦争(朝鮮戦争)中に夫が行方不明となり、一人で子供らを守った田内千鶴子夫人の愛が共生のあちこちに漂っていた。河先生は30年前から共生園を後援してこられた。

最後に河先生の故郷である全羅南道霊岩に造成された王仁博士遺蹟、霊岩陶器博物館、霊岩郡立河正雄美術館を見学した。神霊なる月出山が一望できる霊岩鳩林里の中心地に河正雄個人のコレクションだけで公立の美術館が建設された。

韓国初の事例に、日を追うごとに訪問者が増えている。霊岩をはじめ、光州、釜山、大邱、浦項、大田、済州、全羅北道など地方

美術館に寄贈された河正雄コレクションは、在日二世の目で見た近現代の歴史のアートで示している。ただ見る美術だけではなく。文章を読んで、歴史を学ぶことで、これらの美術コレクションを通して忘れ去り生きてきた、自分と家族と周辺の故郷を見て回る、タイムマシンのような河正雄コレクションの意味を、完全に体感することができ

る。  
霊岩郡立河正雄美術館の建設コンセプトのように、ウサギの天使が月の女神か受けた手紙を地球に届けると、地球からは鳥(ハト)がお月さまにその返事を伝えるにいく。

ウサギの天使と鳩を通じ、お月様と地球人の愛と平和の分かち合いの精神を、平和と人権のメッセンジャーになろうとしている。  
河正雄先生のアイデンティティーが込められているという気がした。光州市では河先生のメセナと崇高な志を称えるために、光州市仲外公園内の光州市立美術館と、光州ビエンナーレ館を結ぶ中央道路を「河正雄路」と命名。また、故郷である全羅南道霊岩の鳩林里上臺浦(百濟時代、王仁博士が日本に向けて出発したところとして知られる港)から郡立河正雄美術館への道を「河正雄

路」と命名され顕彰されていた。

河先生のコレクションである美術は、過去の歴史の真実を捜し出し、痛みを治癒する。平和を渴望する美術のカテゴリーだけではなく、美しい心と愛の分ちあいである。幸福と平和を作る鮮やかな現場を、私たちは今回のツアーで見ていることができた。このツアーで私は、いまだに幸せの余韻に浸っている。

(2015年 「KOREA TODAY」 8月号より)

## 2人の縁が羨ましい

安敏錫

1966年生まれ。ソウル特別市在住。韓国5選国会議員

誇らしい韓国人、在日韓国人巨富であり美術コレクターである東江河正雄先生と、美術界の世界的巨匠李禹煥画伯様の美しく

感動的な縁をご紹介致します。

東江は1939年東大阪で生まれて、李禹煥画伯は1936年生まれでソウル大に通り50年代後半に日本留学しました。

1980年、この画伯を特集した美術誌『みづゑ』が発刊されたことを知った東江は、出版社に連絡して残本500冊を全て買い取りました。

そして東江は日本マスコミと美術界の関係者達にその特集誌を送り、無名の韓国出身画家を日本に広く知らせました。この時まで2人の出会いは成り立たなかったのです。

1982年初め、ヨーロッパ展示会を準備中だった李禹煥画伯が2年前出版された特集誌が必要となり東江に電話しました。その時が2人の最初の出会いとなり東江は画伯に残っている特集誌20冊を贈ってあげました。

1986年初めて会うこととなり、画伯がヨーロッパ展示会の費用を大きく心配されていることを知ると、すぐに全額を支援すること、3カ月間のヨーロッパ滞在費と活動費など含め当時の金額で700万円を約束しました。40年前に巨額の展示費用等

を純粹に手伝った東江の民族愛は小説の主人公とも同じものです。

東江の助けでヨーロッパ展示会は盛況裏に終わりました。ヨーロッパでの展示会がきっかけとして、李禹煥画伯は世界的作家階級に駆け上がり、作品価値は世界的に火が点き高水準で評価されました。画伯は日本に戻って東江に感謝の表明として12点の作品とプレゼントして作品1点を加えました。

12点は展示会支援に対する恩返しで、もう1点は20冊の特集誌を譲られたことに対する恩返しでした。李禹煥画伯が恩義を大事にされたことが素晴らしいですね。

更に凄いのは以後東江は李禹煥画伯の作品13点全てを光州市立美術館に寄贈しました。東江は光州市立美術館に2603点の作品を寄贈したことを始めとし、彼が一生収集した作品の大部分を祖国に捧げました。光州市立美術館、霊岩郡立河正雄美術館には彼が寄贈した作品が多く展示されています。

2人の純粹な民族間友情を尊敬します。お互いに尊敬し合う2人の縁が羨ましいです。ありがとうございます。長く元気でいら

してください。



※「2人の縁」は東江河正雄先生に直接聞いた内容を整理しました。

※河正雄先生インタビューが4月10日（13:00～13:25分）KBS 1TV「文化スケッチ・美しき固執 コレクター河正雄」で放送されました。機会あれば多くの方々に視聴願います。

（2023年4月10日 安敏錫議員フェイスブック掲載文）

### 巨匠李禹煥と天使河正雄の佳縁！

池英勳 (치영훈) チイヨンフン

東亜日報論説委員。ソウル特別市

「初めての出会いで信頼し展示費用の大金700万円相当支援」

河正雄先生は、30年余りの間に合計1万2千点余りの絵画を、国公立美術館9箇所

などに何の条件も無しに寄付した。靈巖郡立河正雄美術館、光州・浦項・大田・釜山市立美術館、全北道立美術館などにである。2603点の絵を光州市立美術館には無条件で8回に渡り寄贈した。

その意義を称え、光州市立美術館は、道知事官舎を常緑美術館として運営していたが生まれ変わり、その名称を「河正雄美術館」とした。いや、たった一つだけ条件があった。青年作家発掘のための“光”展開催を提案し、関心を高めて欲しいという事だけであった。

そのような絵画メセナ天使を、芸郷“光”の都市は心から接遇し、称え感謝の意を表した。

光州市立美術館開館30周年記念特別展の時であった。「種、芽吹き」(The Seeds Sprout)展は、河正雄コレクションで埋め尽くされた。1993年の最初の寄贈品212点のうち85点が選ばれて展示された。

最近、私は卯年の2人、人生の先輩である男性を心に迎え入れた。文化遺産国民信託

理事長金宗圭(김종규)さんの計らいで、同じ卯年のもう1人の先輩を迎え入れた。

「日韓両国の悲しみの歴史の中で在日韓国人として生まれ生きて来た私の内面、心持ち、精神状態が、まさに私のコレクション」だという河正雄である。

その河正雄先生は世界的な名声を持つ李禹煥画伯と深い縁を持つ。李禹煥は慶南咸安(함안)生まれで、1956年ソウル大学美術大学に入学した。その直後、入学3ヶ月後に渡日、日本大学哲学科を卒業した。アバングヤルドムーブメントであるモノ派理論と実践を主導した。「存在と関係」に対する探求精神で輝いた。

それをはじめとして循環と反復の東洋哲学が際立つ。実行の節制美(絶妙な感覚でバランスが取れた美)、厳格な芸術魂、深い思惟体系を描き出す。今やアメリカ、ヨーロッパ、中国、日本など、世界中から脚光を浴びている。

国際ギャラリーで李禹煥展が開催されて

いる(5月28日まで無料)。86歳の作家が韓国、日本、フランスを拠点にしている。いや、全世界を舞台に縦横無尽に活躍しているという方がしつくりくるであろう。

彼は韓国戦争が終わった数年後にソウル大学に入っている。すぐに辞めて日本の大学に行き、専攻も哲学に変えてしまう。実に多様な作家の生き様である。

画家であり彫刻家であり、設置美術家でもある李禹煥作家。

彼は美術を始めとして芸術評論にも見識がある。しつかりした哲学的土台で、1960年代の「モノ派」理論家として名声を高めた。

物事をありのままに在るべき所に置き、優れた観察力と頼もしい底力を示した。物事と空間・位置・状況・関係に接近する未加工のままのものを芸術言語として活用する。それこそがまさに、モノ派が指向する芸術思潮の核心である。

1970年代日本の美術界に大きな流れとして定着した。モノ派が指向した流れは

韓国にも大きな影響を与えた。最高峰の作家である。彼の作品だけを見せる個人展は珍しい。

2009年李禹煥個人展（国際ギャラリー）以来15年ぶりである。1980年以降最近までの作品である彫刻6点、ドローイング4点が展示された。1968年「関係項（Relatum）」シリーズと軌を同じとする彫刻が主役。自然の象徴である石と、産業化を代表する鉄板を主に用いた。

6年前、韓国詩人協会会長チェドンホ（최동호）氏が、直島（香川県）を訪れている。桂冠詩人シンダルジャ（신달자）・イグンベ（이근배）は前後して詩人協会会長を務めた。高麗大学名誉教授として芸術院の会員であったチェドンホ氏は、詩人協会会長の重いバトンを当時引き継いでいる。

2人の桂冠詩人をはじめとして40人余りの市民達に混じって、筆者と弟のヒャンサン（형산）も文化芸術が息づく直島に向かった。安藤忠雄と李禹煥は文化芸術で復活した直島の主役達である。カボチャ作家として人気のある草間彌生も主役のうちの1人

である。

今回の李禹煥展に出品した「キス」というサブタイトルの新作は、冷たい二つの石が熱いキスを交わしているように置かれている。これらを囲む二つの鎖も重なり、より神秘性を増している。

シリーズ「対話（ダイアログ）」を連想させる作品もある。施設を周ると大きな点と簡潔な線で構成されたドローイングがあった。

さて、河正雄と李禹煥の佳縁に話を戻そう。2人の夫婦の百年佳約のように、結ばれた縁が実に美しい。李禹煥がパリビエンナーレの時だったか出品のために訪れることになった。手が埃まみれになっていた実に困窮していた時期であった。

『在日同胞事業者としてまさに地位を築き始めた河正雄に要請した。顔も知らないし、面識も無い彼に経費を少し補填して欲しいと申し入れた。誰なのかと尋ねた後、河正雄は大金（700万円相当）を快諾してく

れた。』お金を支援したという念書や借用書も作成せずにである。そのまま布施をするように代価を求めず支援したのである。

実に2人の息が合って素晴らしいではないか。その後李禹煥の作品の価値は羽が生えて羽ばたくように高騰した。その高価な絵を恩人である河正雄に快く謝礼として贈ったりもした。

霊巖郡立河正雄美術館や光州市立美術館などに数億ウォン相当の李禹煥の作品が多数展示されている理由が、そういった経緯なのである。2人の巨匠の友情。李禹煥の方が河正雄よりも3歳上なので、李禹煥巨匠に先ず熱い拍手を送りたい。

そして河正雄先生にも拍手喝采を送りたい。  
（モーニングフオーカス 文化&ライフ  
2023年4月19日）

## 河正雄コレクションの性格と価値

金姫娘

1971年生まれ。光州広域市。光州市立美術館学芸研究士。光州市立美術館分館河正雄美術館長

河正雄は1990年代の初めから現在まで、韓国と日本の美術館や大学機関に1万2千点以上の美術品や資料を寄贈している。一個人のメセナ運動としては、国内外に例を見ない。特筆すべき点として河正雄コレクションは特定の収集方向を持っており、そこには滅私奉公の倫理意識、河正雄という一個人の人生哲学が盛られているという点である。

河正雄コレクションの特徴は大きく分けて三つある。一つ目は、時代と人間の生活を記録した「歴史の証言としての美術」だ。二つ目は、社会的、政治的に不遇な立場におかれ疎外された者、歴史の渦の中で悲痛な犠牲になった者らに感謝する「祈禱の美術」。

三つ目は、芸術活動の究極的な目標であり、同時に役目でもある、人に「幸福を与える美術」である。

河正雄コレクションは、日韓の近現代史の激動の中で形成された在日作家達の作品の収集に始まり、それが核心となっている。これらの作品には在日韓国人が経験した民族的な「恨(ハン)」や苦痛、絶望、死そしてこれらを慰労するための「祈禱」と「鎮魂」が込められており、美術が社会的な機能を遂行することにより、在日韓国人の歴史的な苦痛を理解する重要な証言であり、資料になっている。

また韓国美術史の中で光を当てられることのなかった在日作家たちを故国に知らせ、研究資料として活用出来るようにしたという点で、美術史的な意義を持つ。コレクション内の外国作家や韓国作家の作品も、抑圧された現実への告発や抵抗、自由と平等への渴望と、挫折や葛藤を乗り越えようとする希望のメッセージを内包しているという点で共通している。

このように河正雄コレクションには時代と現実に対する証言としての美術であると

同時に、痛みと絶望を乗り越えようとする祈禱の美術であり、希望と幸福に彩られた人間の生を渴求するメッセージが込められているのである。

河正雄コレクションは、光州市立美術館の所蔵品の62%を占めており、これは見かけ以上に大きな意味を持っている。

1980年5月の民衆抗争が起きた光州という場所、韓国現代史の苦痛を象徴する、民主・人権・平和の都市光州と、河正雄コレクションとの絆は運命的なものである。時間と空間は異なっても、1980年代の抑圧された韓国の政治的現実の中で光州が受けた受難、そして異邦人として在日韓国人が経験しなければならなかった挫折、更には世界中に存在する疎外された者等の舍痛は、共通の痛みとして理解することが出来るだろう。

河正雄コレクションは個人の救いを越え、戦争やすべての抑圧・貧困がなくなり、平和と愛の到来を祈るといふ、遠大な哲学的意味を含んでいる。これは在日韓国人の「人権」から始まり、韓半島の「平和統一」と、河正雄の二つの祖国である韓国と日本の「共存」

を祈るメッセージであり、「光州の5月精神」  
とも通じる哲学である。

河正雄コレクションは、光州、在日韓国人、  
不遇な者の痛みと悲哀への理解と治癒を通  
じ、鬱憤を愛に昇華させることで、人権思想  
の伸張、人類の平和と正義の実現を訴える  
メッセージを送っているのだ。

### 「故郷」作品集発行によせて

朴哲

1953年生まれ。全羅南道靈岩郡在住。写  
真家。韓国写真協会員

私は去る2007年4月9日から4月27  
日までの18日間、東江・河正雄先生の案内  
で東江先生の故郷である秋田県をはじめ、  
メセナ精神の産室である山梨県北杜市清里、  
生涯のくつろぎの場である埼玉県川口市な  
ど、日本での生活の軌跡を撮影した。

始め、先生から霊岩郡立河正雄美術館の

建設を控え、資料準備のために18日間の日  
程で日本での活動資料を撮影できるかとい  
う要請を受けた時、何をそんなに撮影する  
資料がたくさんあるのだろうかと思つたが、  
日本での日程がスタートしてからは私の考  
えは完全にはずれた。

東江・河正雄先生が70年余り生きてきた  
自然風景と文化、歴史、伝統、業績、そして  
先生が出会った大切な人々と家の書齋にあ  
る活動資料らに接触しながら、私は林の中  
で道に迷つたような感じがした。言論に露  
出した彼の活動は一部に過ぎず、彼の人生  
は様々な主題が複合的にかままつており、  
彼の軌跡を簡単に整理することはできな  
かつた。

結局、先生の日本での人生ストーリーを  
追つて、日程を延長しながら早朝から日が  
暮れる夕方まで撮影したにもかかわらず、  
その丘の向こう側の気になる世界をカメラ  
にすべてを収めることができなかつた。

一言で言えば、見れば見るほど深く入り  
込む人生ドキュメンタリーの最後の場面を  
見ることができずに帰ってきたのである。  
もしかすると、そうだったのも当然のこと  
なのかもしれない。先生の生涯はひとり

すべて理解するにはとても手に負えない世  
界である。

東江先生には二つの祖国と二つの故郷が  
ある。両親が生まれた韓国の故郷と自身が  
生まれた日本の故郷を先生はこれをつつと  
見る。先生が2才の時、お母さんに連れられ  
て2年余りの間暮した霊岩だが、韓国の霊  
岩から日本の秋田につながっている生命の  
木の根は、この霊岩から日本に渡り古代に  
文化の花を咲かせた王仁博士の歴史の木の  
根のように深く伸びている。

東江先生はこの大地に足をつけて生きて  
はいるが、宇宙から地球を眺める心の目を  
持っている。そのように統合された存在の  
根源を見つめる目で自身の根を認識し、そ  
こに関係したすべてのものをとても大切に  
思う。

激烈な利己主義の文明時代にメセナ精神  
を実践している東江先生と彼の志に賛同す  
る家族の生きざまもまた、このような開か  
れた心から始まったものだと確信している。

東江先生は、ややもすると消えていつて  
しまう可能性のあつた、日本での韓国近代  
美術史を保存しただけでなく、日韓間の葛  
藤の歴史の渦に巻きこまれず、平和と愛と

自由を祈る希望の灯を照らしてきた。何よりも彼はそのようなユートピアの理論を提示するのではなく、生活の実践によってその理論を説明している。

ここに収録された作品は、東江先生の故郷の風景であり、今日の東江先生を育てた生命の畑である。この作品を通して、善良で真実で暖かい氣勢を発散する東江先生の世界観と夢とその無限の想像力がどこから来るのかを、多少ながら理解する契機になればと思う。

## 渴くことのない感動の泉

金福基

1960年生まれ。ソウル特別市。美術評論家。美術月刊誌「art」主幹・社長

河正雄先生

私は彼をそのように呼ぶ。私が彼を先生と呼ぶ理由が幾つかある。実際に彼の職業

を示す適切な単語が見当たらない事と、活動の範囲が広大であり、行動範囲もまた広くて深い為、そんな彼に相応しい呼び方が思い浮かばないのがその理由である。

ほとんどの人は彼を「河社長」と呼んでいる。彼が事業家であるために付けられる呼び名である。しかし私はあえて「先生」という呼称にこだわっている。従って私は今でもそのように呼んでいる。

「先生」、文字通りでいうと人生の先輩、従って常に人生の教えと靈魂の啓発を与える者を示す。その意味で先生と呼ぶに相応しい人を挙げると言われれば、私は躊躇なく河正雄と言う。

私は美術記者である。絵を描くのが好きで、画家になりたいと思い美術大学に進学した。社会に足を踏み入れた後に、仮に創作からは一步外れたとはいえ、美術というカテゴリーの中で生きながら、穏全に美術の為に考え、感じ、このように生きている。これからの人生もここから大きく逸脱するのではないだろう。

このような私の美術的人生で、河正雄は間違いなく私の先生である。したがって我々は根本的に美術という紐の先に縛られ

ている関係であると言える。

彼は私の人生において教えを与えてくれ、「真のビジョン」というトピックで私に新しい気付きを与えてくれた。いや、もしかするとそれは美術の世界を一息に超える正しい生き様としての方向提示であり、人生の堅実な哲学だったかもしれない。いずれにせよそれは私に常に熱い感動として位置していることは明らかである。

■ 在日同胞という苦しみの生の前で

1983年5月上旬、在日同胞作家の元老画家、全和鳳を取材した際、京都を訪れた事があった。私にとって初めての日本訪問である。河先生に初めて会ったのもこの時である。振り返ってみるとその出会いは運命的なものであった。

私はその3文字の名前だけ覚えていた全和鳳画伯を見直すことになったのは、果川の国立現代美術館で偶然閲覧した《全和鳳画集》であった。豪華でぶ厚いこの画集には、1930年代から1980年代に至るまで作家の全生涯にかけて制作した代表作150余点と、日本の美術評論家達が書いた作品論、そして故国と日本での紆余曲折の

生の足跡を見せる様々な資料と記録が掲載されていた。この画集が1982年全和風画業50周年を記念、文芸振興院で開催された大規模招待展に焦点を置いて発刊されたということとその時になって初めて確認した。

しかも私の興味を更にそそったのは、全和風画伯の展示や画集発刊など国内にこの画家の価値を本格的に紹介した張本人が一人の在日同胞実業家だったという事実。この画集の一番最後にこの在日同胞の淡々とした心境を吐露した〈望郷〉という文章が掲載されていた。それは日本で生活しているもう一人の韓国人の生き様の片鱗がそのまま表現されていた。



当時の取材ノートを開いてみると、河正雄という人物に関する新聞記事一枚と彼の電話番号があった。「事業家、全和風画伯のスポンサー、コレクター」日本を後にしながら私が準備した河正雄の予備知識はせいぜいこの程度であった。裕福な在日同胞実業家。しかし、「金胞」或いは「糞胞」と揶揄したい根拠のない心情に襲われたりもした。結局それまでこの同胞実業家の存在を意図

して過小評価しようとしていたのだ。

しかし問題は全和風画伯であった。京都で全和風画伯の取材が始まった。この時から色々な問題が勃発した。先ず全画伯は80代の高齢でありかつ補聴器をつけていて、取材は非常に困難をきたした。弱り目に祟り目で初めて日本を訪れた私はその生活に適応できず辛い日々を送っていた。特に決定的なことには私が『全和風画集』で見た彼の代表作は殆ど見る事が出来なかった。あれこれと失望する事ばかりであった。私は東京に行かなければならなかった。取材を成功させるために全画伯の代表作品を所有しているという河正雄氏に会わなければならなかった。

5月の東京、ゴールデンウィーク中ということで都内の殆どのホテルは満室。夜10時頃私は東京駅の人波の中で、迷子の子供のようにどっちの方向に進むべきなのか分からず彷徨いながら、ポケットの中にある電話番号に頼りたい気持ち振り払う事が出来なかった。そして急遽川口市の河正雄氏のお宅に向かう事になった。電話を通じて伝わって来る彼の温かい配慮が私をそこに導いていった。

私達はこうして出会った。そしてその初日の夜、私達はまるで長年の友人同士のように深夜3時過ぎまで美術を語り合った。ひよっとすると大切な事はその時に一度に全て話し尽くした感じである。従って深夜遅くまで語り合ったその対話の中で今でも私の頭の中にくっきりと刻み込まれている事がある。

彼は言った。  
「今日のような日を20年間待っていません。いつか私の考えを理解してそれを故国に広めてくれる若い後輩が私の元に訪れて来ると…」  
私も言った。

「先生の哲学を是非ともしっかりと大切にして下さい。そしてこのように価値のある事は色々な人に、特に祖国に広く知らせなければなりません。自叙伝のような形式で…」

夜が明けると同時に我々の対話がまた始まった。食事の時間も忘れて、全和風との出逢い、コレクションの哲学、生の目標などを聞く事が出来た。不思議な事に彼と会話を交わせば交わすほど、まるで狂信者が教主の説教を聞くように彼にどんどん引き込ま

れていくのだ。全和風の作品はもちろん、郭仁植、李禹煥、郭徳俊、文承根、そして宋英玉など、同胞画家達の多くの作品に触れる事が出来た。

一言で言うと、河正雄コレクションはまさに彼の自画像である。それは日帝植民地と南北分断固着化の犠牲になった在日同胞という生の痛みが投影されていた。または在日同胞の人間史、その苦痛と運命、悲しみと喜びを凝縮していた。そしてその歴史を温存することを収集家河正雄は人生の課題として捉え、黙々と推進していた。

どれだけ嬉しく頼もしいことであろうか。河先生との出逢い。日本取材の大きな収穫であった。その日から今まで私は10数回東京の取材で、彼がすでに預言者のように提示していた同胞画家達の生涯と作品世界をひとつひとつ追跡している。もちろん彼のコレクションも誌上で紹介した事がある。その一方でコレクターとコレクション、或いはメセナに関する文章を月刊美術に発表したこともある。

河先生との出逢いと対話、その中で私は美術家として新しい美術観を形成する事が出来た。そのうち最も重要なのは同胞社会

と同胞画家達に対する新しい照明である。真実の目覚めである。

現在海外同胞の数はおよそ500万人、日本、中国、旧ソ連など、彼らが住んでいる国家の体制と理念はそれぞれ異なるが、全てが韓半島を取り巻く列強達の亀裂の中で我々の民族が強いられた受難の産物である。近現代史の痛み象徴である。

私は在日同胞画家以外にも中国延邊朝鮮族自治州の元老、石熙満画伯との出逢いで、社会主義体制の中でも民族の同質性を綿々と守ってきた切ない同胞愛と長い断絶の壁を痛切に実感した。またソビエト連邦の解体と共に凍土の地に住んでいる韓人社会の実情に触れ、ウズベキスタン共和国の首都タシケントで活動している韓人美術博士ニコライ朴を国内に招待したりもした。

それだけではない。イデオロギーの対立と同じ民族間での戦争の悲劇で北に渡った画家達に対する私の関心と研究成果も、桎梏の民族史を凝縮しているのではないだろうか。

私は同胞画家達の生涯と彼らの生き様が投影された美術作品を通じて、民族と歴史、生と美術の粘り強い繋がりをはっきりと確

認した。そして民族的立場でこれらを私達の懐に包んでおかなければならないという美術的当位性と課題に開眼したのである。実に幸いなことである。美術家を通して民族史にアプローチしていくものである。まさにこのことを河先生はコレクターとして20年前から実践して来たのである。

■我が子のような作品を寄贈しながら

素晴らしい美術作品はどの時代のどの様式であるにしろ、芸術家の世界観が反映されるべきだと私は頑なに信じている。素晴らしいコレクションというのと同様である。コレクターは美術作品がどのような場所でのような人にどのようなメッセージを与える事ができるかに対する哲学と理念が無ければならない。河正雄コレクションはその財貨的価値よりコレクション全体に貫流する哲学があるという点が我々を感動させるのである。

河先生は初めて自身のコレクションを幼い自分の子供のように誇らしげに一点一点広げて見せながら、このような言葉をふと呟いた。

「何の条件無しで韓国の公共団体に寄贈

する準備が出来ています。」

自分の分身とも言えるコレクションである。しかし彼はこの言葉を結局約束通り実践に移す勇氣を見せた。彼は1993年7月に在日同胞画家達の宝石のような作品212点を光州市立美術館に惜しげもなく寄贈した。望郷と報恩のメッセージを送ったのである。無条件で文化支援活動で社会に貢献する事が美しい生の原点であると信じ、いわゆるメセナ精神を実践したのである。

彼はこのように言った。

「私は光州市立美術館に寄贈した作品を決してお金で換算したくない。純粹な芸術的情熱を持った次の世代に、私の素朴でありながら大切なメッセージを伝える作品であるというだけである。公共美術館に入るコレクションは元々社会的特性を帯びているものであると私は理解している。」

その通りである。

彼は大企業家ではない。ごく普通の一般人である。しかし一市民もメセナに参加し社会に貢献する事ができるという事実を固く信じている。そのような役割の重要性を文化芸術を愛する祖国の全ての人々に強調しているのである。それは明らかに価値の

ある教訓である。

光州市立美術館の作品の寄贈に先立って、私は美術館関係者と共に川口の河先生のお宅を訪問した。

寄贈作品の分類、運送準備、その他関係書類作成などに我々は丸2日間その作業にだけ没頭した。作品を一点一点包装する度に家族の表情は複雑であった。沈んだ雰囲気の家の中に漂っていた。そしてついに誰も予想できなかった212点の作品を差し出して寄贈書類に判を押した。

「作品をどうかよろしくお願いします。」彼が言ったのはこれだけだった。河先生の目には涙が滲んでいた。車鐘甲美術館長も涙ぐんでいた。生涯かけて守ってきた我が子のような貴重な作品を送り出すという、言葉では言い表せないような肅然とした場であった。そこで私がかかる言葉は何ひとつ無かった。

美術関係者が去った後、我々は祭りの後の打ち上げパーティーのようにささやかな酒席をもうけた。河先生の頭の中は作品の心配で一杯だった。娘を嫁に出す日の心情とでも表現できるであろう。

家事を上手くやりこなせるだろうか、嫁

ぎ先でのこれからの暮らしをあれこれ考えてみる……どんな手段を使っても埋めることのできないであろう河先生の空虚感であった。涙で一晩中枕を濡らしたであろう。光州市立美術館河正雄コレクションの歴史の最初のページに私はこのように携わっていた。

#### ■ 渇くことない感動の泉

河正雄先生に出会ってから何年もしないうちに私は「河正雄一代記」を執筆みようという恐れを知らない(?)提案をした。しかし私は未だにその約束を果たせないでいる。正直に言うが、それは全面的に私の怠慢と拙い文章力のためである。しかし彼の美術人生はまだ旺盛な「現在進行形」で突き進んでいて、言うなればドラマチックなファイナーレの幕を下ろす時間まであまりにも長く残っているという感じがする。恥ずかしながら私の軽率さに対する弁明である。

河正雄先生の生き様、私との美術を通じた交流を話したが、事実美術人生とまた違う彼の生き様がむしろ私にはより興味深い。私は彼の故郷靈巖と光州、そして日本の故郷秋田にまた違う感動で何度か訪問したことがある。

人間河正雄、彼の情緒と気質はまた別の機会に話すべき題材である。例えば彼は日本に住んでいるが韓国人であり、韓国人であるが日本人に近い部分もあり、或いは両方から全て排斥されている宿命の立場に立たされている。このような在日同胞の歴史的立場で自身の存在をどのように確認していきながら世界観を確立してきたのかという問題は、私には大きな課題として残っている。彼の生き様の重要な部分を占める盲人福祉事業、メセナ活動を漠然とした愛国主義とはまた異なる次元、例えばヒューマニズムというより広い観点から紐解いていくべきであろう。

河先生は常に私の先を猛スピードで走っている。彼の実体(精神)にどれだけ近づいていっているか考える時、彼はいつも再び幽霊のように遙か先に立っているのである。もしかするとこれまで私が知っていると思いついていた彼に対する知識も、そしてまさに今この文章を書いている瞬間までも私は「木を見て森を見る事ができない」誤謬を犯しているのかもしれない。問題は目に見える木の幹や枝、そして葉や蕾ではなく、木の中を流れる水脈、そして土の中で深く根

付いている太い根、その慈養の源泉は一体何なのであるのかという事なのだ。

河正雄先生、私の渴くことのない感動の泉。彼の前で私は数年経った今でもなお、自分の至らなさやその挫折と呆気なさに胸を叩きながら泣かなければならないかもしれない。しかしその苦痛と挫折が襲ってきたとしても私は彼のマニアのように河正雄研究に臨んでいかなければならないであろう。その没頭は実に魅力的である。これが生き甲斐なのである。彼の水彩画のように澄んで透明な…。

河正雄先生、彼と共にいる時、私は本当に幸福であった。

(2001年 金福基著「祈祷の美術」より)

# 冬柏花

## Prelude : 因縁資本

許乘準

光州教育大学校総長

因縁の時間だけで言えば、河正雄先生（以下、河正雄）との因縁は、おそらく筆者が一番短いだろう。もちろん、縁を時間だけで計ることはできない。縁にも量と質があるからだ。時間が縁の量なら、強度や密度は縁の質である。いずれにせよ、筆者は河正雄について多くのことを知らない。それでも河正雄の人生と哲学を簡潔にでもまとめようという無謀なことをしようと思った理由は、長くない時間に行われた河正雄との縁の強さと密度がそれだけ大きかったからだ。まるで、河正雄が松倉紹英僧侶に出会ったように。

読者の理解のために、因縁資本という用語についての説明が必要であろう。因縁は日常的な用語では「人と人との関係」を意味するが、仏教用語では「因」は原因、「縁」は条件を意味する。因はある結果の直接的

な原因であり、縁は間接的な原因である。人間が行うすべてのことは、因と縁で形成された結果である。これを因縁果法と言おう。

ここでは、この二つの意味をすべて含む用語として使用する。実際、因は自分が蒔いた種であり、縁はこの種が成長するのに影響を与える他人や環境であるため、縁には日常的な人間関係の意味と仏教的な原因・結果の意味が両方含まれている。

資本と縁はどんな関係があるのだろうか？ 資本主義社会において、資本と商品は最高の価値を持つ。もちろん、商品は資本で買えるので、資本がより価値があるとされる。しかし、ある程度の資本では買えない商品の場合には、商品が資本よりも価値がある場合もある。いずれにせよ、現実的に資本主義社会では、資本と商品は人間の価値を超えている風潮が蔓延している。

河正雄は資本主義社会で最高の価値を持つ資本で商品（作品）を買い、その作品で多くの縁を買った。結局、縁という資本が彼に残った。有限な資本と商品で決して消えない縁という無形の資本を得たのだ。無形の資本だから消えない。普通の人なら、損をすなわち商売だと言うだろう。しかし、河正雄の立

場では成功した交換であり、幸せな結果だった。このような意味で、河正雄の人生を因縁資本という用語で表現した。この本に収録された縁が彼の資本である。

個人的にハ・ジョンウンイズム (Ha Jungwonism, 河正雄主義) という用語の使用は非常に負担である。一個人の名前に主義 (ism) をつけて人生と哲学を整理するというのは簡単なことではないからだ。もちろん筆者がそのような能力を持っているわけでもない。このような理由で前奏曲 (prelude) という但し書きをつけた。この文章がハ・ジョンウンイズムの始まりを告げる程度の意味があることを示している。もちろん、当事者である河正雄にとってもこの用語が負担になるかもしれない。事前に了解を求めなかった。

しかし、哲学的な論文ではなく、エッセイ (essay) 形式の軽い文章であり、主義は自分ではなく他人がつけることができる用語であるという点で、寛大にご理解いただけることと思う。

#### Prelude 1

河正雄の人生と哲学を振り返ると、存在

論的に「無」は存在しないというベルグソン (Henri-Louis Bergson, 1859-1941) の主張が思い出される。

人々は記憶と期待をするときに「ない」と考えるようになる。ある対象が自分にあるという記憶があり、その対象がずっとあるだろうという期待をするとき、その対象がなくなると、ないことを認識するようになるという意味だ。「無」を認識するとき、人々は喪失感や痛みを経験する。例えば、財布を開けたら、さっきまであったお金がなくなっていた場合、なくなったことに戸惑ったり、苦しくなったりする。これは「財布にお金がある」という記憶があり、「財布にお金があるはず」という期待があったからだと言える。

しかし、記憶と期待のどちらかがなければ、状況は変わってくる。「財布にお金がある」という記憶がなかったり、「財布にお金があるだろう」という期待がなければ、慌てたり悲しんだりする理由はない。原理的には、「あること」と「あるだろう」という考えから抜け出せば、「ない」という考えをする必要がなくなる。つまり、ないことの喪失感や苦痛から解放される。ベルグソンが「無

は存在しない」という主張を通して言いたいのは、「無」という考えから離れ、私たちの生活を苦しめる煩惱と妄執から自由になるということだ。

ベルグソンの主張のように、河正雄にも「無」は存在しない。このような哲学により、河正雄は多くの自分の資本と作品を他人に寄付してきた。資本と作品が自分にあるのが他人にあるのが、そのまま残るからだ。つまり、資本と作品が自分から離れても「ない」と考えないので、それによる喪失感と苦痛を経験する必要がない。河正雄はそうして現代社会の最高価値である資本と商品への執着から脱却した。

突き詰めれば、ないという意識もあるという意識も同じ執着である。つまり「自分のものがない」という考えと同様に、「自分のものがある」という考えも執着ということだ。例えば、自分が大切にしているものを他人に与えてから、今度は「自分のものがない」という煩惱に陥っても執着であり、まだ他人に「自分のものがある」という執着に陥っても執着となる。このような執着は、他人に自分のものを与える行為を不可能にする。自分のものがないという喪失感のため

に与えることができず、自分のものがあそこにあるという所有意識のために与えても与えたことにならない。このような執着により、もし与えることになったとしても、報酬を期待するようになる。

つまり、普通の人たちは「自分のもの」を与える代わりに「他のもの」を必ず所有しようとするのだ。

河正雄はこのような煩惱と執着から脱却した人である。彼の世界は「ない」ではなく「ある」で満ちている。自分にあるものであれ、他人にあるものであれ、いつもそこにあるからだ。誰のもとにあるかは重要ではない。ただ必要なものにとあればいい。だから彼には「ない」はなく、「ある」だけが存在する。だからと言って、ハ・ジョンウンが「ある」に執着するという意味ではない。もし「ある」に執着していたら、彼はそれほど大切な自分のものを他人に寄付することができなかった。「ない」という考えに執着しないということは、すでに「ある」という考えがなくなつたことを意味する。

河正雄はこのような哲学により、お金や作品を寄付する際、いかなる条件や報酬を期待しない。条件や報酬を期待すると、寄贈

の意味が色あせるだけでなく、真の寄贈ではないという事実を知っているからだ。実際、1993年に光州市立美術館に初めて寄贈した後、2012年の5回目の寄贈に至るまで、河正雄が要求したことは何もない。ただ、恵まれない青年作家が創作活動しやすいように育成する「ハ・ジョンウン青年作家招待展」を作ってほしいというのが条件といえるかもしれない。しかし、これも河正雄自身ではなく、他人のための条件だった。条件さえも寄付だった。

こうして河正雄は、仏(Buddha)が強調した無住相布施を実践した。私たちはこのような「ある」と「ない」の執着から抜け出し、悟りを開いた者を仏(Buddha)と呼ぶ。

#### Prelude 2

河正雄が仏の人生を生きてきた背景には、彼をそのような人生に導いた縁がある。河正雄が最初に収集した作品が、全和鳳(ジョン・ファファン、1909-1996作家)の「弥勒菩薩」である。全和鳳は出家修行の経験がある在日韓国人1世の画家である。河正雄は然出会った「弥勒菩薩」の作品と縁を結び、探しあてた結果、「弥勒菩薩」の作者である

全和鳳とも縁を結んだ。(弥勒菩薩)からの慰めと全和鳳の芸術世界と人柄に感銘を受けた河正雄は、人生の転機を迎える。画家になる夢の代わりにコレクターの道を歩むことになったのだ。

コレクターの道を歩む中で、寄贈を通じて空っぽの哲学を実践したきっかけも、偶然の縁に出会ってからだ。河正雄は、日本の著名な版画家であり陶芸家である中川伊作の勧めで松倉紹英僧侶と出会う。6年に亘り、原因不明の病気に苦しんでいた時だった。僧侶は河正雄を見るなり「片手を空にしなさい。両手とも宝物をいっぱい持っていますね。」と言い、最後には「最後の瞬間には残りの手も空になるでしょう。空っぽの手です。そうしたら完全な自由です」という教えを伝える。このときから彼は寄贈の生活、つまり空っぽの哲学を実践するようになる。空にして初めて多くの縁を満たすことができる。

仏教では、すべての衆生に仏性があるという。来生は悟りによって自分にある仏性を発現し、仏になることができる。河正雄は自分が出会った縁から悟りを得て自分の仏性を見つめる。それによって仏の道を歩む

ことになる。

仏の核心的な教えは無常である。無常は諸行無常の略で、「形成されたすべてのものは消滅する」、「永遠のもの、または絶対的なものはない」という教えである。しかし、無常から虚しさを感じるなら、無常の教えを正しく理解していい結果だ。自分や世界が無常であるという事実を正しく知った際、私たちは自分や世界をもつと愛するようになる。結局、無常の教えも慈悲という愛を実践する人生を生きなさいという意味だ。

仏の心は、悲しい他者に出会おうと悲しくなり、嬉しい他者に出会おうと喜ぶ。解脱した者は無上の虚無感に陥って煩惱を消し去り、慈悲の心を持つようになる。だから、仏は必然的に利他の道を歩むしかない。

慈悲と愛は「自身」から離れて「他者」と接触しなければできない。そのために河正雄は多くの他者と縁を結ぶ。他者との縁を通して、彼は自分自身を常に新しくしていく。彼は大切な縁を通して悟りを得て、縁を結み続けることで自分の悟りを伝える。

縁は自身に固執すれば結ばれない。縁の中に自身があるだけで、単独で存在する自身はない。これを仏教では諸法無我という。

「すべての法には自己が存在しない」という教えである。自分の自己を主張すると、他者が見えなくなる。他者が見えなければ、他者との関係を結ぶことができない。「自身という自己」が別に存在し、それが永遠に続くという執着は、慈悲と愛の敵である。

すべての存在は永遠でもなく、瞬間的でもない。これがすべての存在の実相である。結局、私を含む存在は、永遠という一方の極端と瞬間というもう一方の極端の間に存在する。これが中道である。中道に立つと、永遠に執着することもなく、瞬間に虚しくなることもない。中道に立つことは、慈悲と愛の道に立つことである。

人間は永遠のものをたくさん作り、それに執着してきた。魂、天国、イデア、本質などなど。不変の本質が存在するという考えが執着を生む。永遠に執着するのは、無常や無我を回避しようとする人間の弱い意志に起因する。

無常を回避するもう一つの方法は、子供やお金に執着することである。だから多くの人は自分が所有したお金を子供に相続し、自分の血が永遠に続くと思っている。河正雄は自分の財産を子供に譲る代わりに社会

に還元した。無常と無我にきちんと向き合った結果だ。

### Prelude 3

河正雄は自らの人生の主人として生きてきた。自らの人生の主人にならなければ、いくら年を取っても大人ではない。この意味で、彼はこの時代の真の大人である。

いくつかの事例を挙げてみよう。中学校の3年間、担任として自分を教えた松本正典先生から「他人と世の中のために良いことをする立派な人間になるだろう」という言葉を聞いたとき、彼は慢心せず、アドバイスと祝福の言葉として受け止める。叔父の心変わりにショックを受けたとき、約束の大切さを知り、一度した約束は必ず守ろうと決意する。特別支援学校の生徒たちと電車で登下校する際、笑顔をやささない彼らを見て、笑っていれば幸せが訪れるのだと考える。小学生の頃、お世話になった祖母に、余裕ができたら2倍3倍にして返す母親を見て、恩は決して忘れてはいけないという教えを受け、後の事業の重要な指針とする。この他にも事例はたくさんある。河正雄はこのように、彼が経験したすべてのことを

生きた勉強とした。

すべてのことを自分に役立つ教えとして解釈し、自分のものにして実践したのだ。これこそまさに主人となった人生ではなからうか。

主として生きる人生は手段と目的が一致する。ヨハン・ホイジン (JohnHuijinga, 1872-1945) は労働と遊びを区別する。彼によると、手段と目的が一致すれば「遊び」であり、逆に手段と目的が一致しなければ「労働」である。だから、河正雄にとって人生は遊びであり、だからこそ、そんなに楽しく生きていくのかもしれない。

#### 因縁資本

河正雄は縁の金持ちだ。どの資本家よりも金持ちだ。価値を計ることのできない、限りなく貴重な縁を持つ金持ちの中の金持ちだ。彼は自分の人生の主人として貴重な縁に出会い、その縁を通して悟りを得た。彼は悟りにとどまらず、悟りを行動で実践してきた。その過程で彼はまた、数多くの貴重な縁を作った。

この本には、その大切な縁が伝える河正雄との物語が収録されている。今、私たちが

すべきことがある。河正雄が縁を通して悟りを得て仏の人生を歩んできたように、私たちも河正雄を通して悟りを得てその道を歩まなければならない。これが彼が私たちに与えた課題であり、お金では買えない貴重なプレゼントだ。私たちにっては河正雄自体が贈物である。

#### 人間の限界と時代を超越した愛を実践した人

程巳柱

元ヘッテ・タイガース社長

東江河正雄氏との縁は、私が1968年からヘッテ製菓に勤務することになり、1973年春に当時は先行していた日本の先進技術導入のため、日本駐在員として派遣勤務をすることから始まりました。

今のようSNSや携帯電話が普及する前でしたが、見知らぬ異国で血気盛んな時

代でした。東京から更に遠い東北の青森県八戸市に住む遠い親戚の結婚式に出席することになり、その場で東江河正雄氏を紹介されました。私より3歳ほど年上でしたが、知らない土地で出会った縁だからか、私も好感が持てましたし、お互いに合うところが多かったようです。

東京に戻った後、東江は週末になると私を御自宅に招待してくれ、尹昌子夫人が作ってくれた美味しい家庭料理の御馳走をいただきながら、いろいろな話をしました。おそらく、他国で一人苦労している故郷の国の青年を慰める心と故郷を懐かしむ気持ちからだったのではないのでしょうか。私もその心配りにとても感謝しました。

その年の12月、短い駐在員派遣期間を終えて韓国に帰国する頃、私は東江に韓国をぜひ訪ねてほしいと誘いました。彼も快く承諾し、1974年初めに韓国で再会しました。50年に及ぶ縁の本格的な始まりでした。

彼は韓国に来るとまず、自分の故郷である霊岩を訪れ、放置されていた先祖の墓を整備しました。自分のルーツである先祖の墓を参拝する前に最初に整備することで、

これをきっかけに改めて、彼は誰よりも自分のルーツと故郷を大切に作る人だと思えました。

東江は幼少期から画家を夢見ていましたが、その日食べるものにも困っていた時代に両親は当然反対し、その夢を諦めざるを得ませんでした。夢を諦める代わりに、東江はビジネスで成功し、幼少期に果たせなかった美術を後援するという新しい夢を持ったそうです。在日コリアンの青年にとつて、日本社会はそれほど優しくなかったでしょう。

それでも新しい夢に向かって、韓国よりも数十倍、数百倍の努力をしたと思います。ある程度事業が軌道に乗った後、東江は夢を実践します。経済的に困難な画家を後援し、美術作品を購入し、様々な支援を惜しみませんでした。この過程で東江は現在、世界的にも脚光を浴びている李禹煥画伯も後援し、その過程で複数の絵画を所蔵したそうです。そのような目利きが羨ましいですが、温かい心があるからこそ良い才能も光るようです。

東江が保有する数々の美術作品は財産としての価値だけでも膨大ですが、東江が汗

水流して収集したことだけあって、その作品に対する愛着は東江の人生と同じかそれ以上でしょう。

1992年に光州市立美術館がオープンしました。1990年代の全羅南道光州は今もそうですが、産業基盤が非常に脆弱な地域です。産業基盤がしっかりしていれば、税収も確保され、文化芸術に対する地方政の支援が活性化されますが、いろいろと不足している光州市では、霊岩出身の在日コリアン美術コレクターの評判を聞き、光州市立美術館にいくつかの作品の寄贈を依頼することになります。

祖国と故郷への愛情、そして命より大切な美術作品がより多くのを受け、活かされるために、東江は難しい決断を下します。最初の発端は数点の作品の寄贈依頼でしたが、1993年の最初の寄贈時に主要な在日作家の作品212点を寄贈しました。これを皮切りに2018年まで2603点の作品を寄贈し、光州、釜山、浦項、大田、全羅北道立美術館、霊岩郡などに1万点を超える作品を寄贈しました。

私は東江のディアスポラ精神とメセナ活動に大きく感動し、また感激し、微力ながら

役に立ちたいと思い、寄贈の過程で走り回りながら多くの努力をしました。

今でこそ寄贈が日常化されましたが、当時は美術品の寄贈とこれに対する協約書、そして寄贈者に対する礼儀などがまだまだ未熟でした。財産としての価値だけでも膨大で、また東江の分身のような作品だったので、私なりに多くの努力をしましたが、寄贈後、時間が経つにつれて寄贈者に対する寄贈先の待遇は私の観点からは残念な部分がありました。

それでも東江は寄贈活動を止めませんでした。本当に呆れて、やるせない気持ちになることすらありましたが、東江の真心を知っているのです、私も応援し続けています。

寄贈だけでなく、作家たちには財政的な支援も重要です。作家の作品を世に発表できる展示が重要であることを東江は良く知っていたので、韓国の作家らの作品を展示する画廊を大学路に設けて運営していました。

さて、東江の幾つかの逸話もぜひ紹介したいと思います。東江は日本にある日本統治時代に建てられた田沢湖をダムとする発電所(1938-1940年)の建設に動員された朝

鮮人労働者の犠牲について知りました。

東江は当時の現場を知る親戚の証言と、近くの曹洞宗の住職を何度も訪ねた結果、当時現場で強制労働により亡くなった朝鮮人を追悼するために作られた「姫観音像」の真実を明らかにします。東江の努力で日本の朝日新聞など様々な世論に紹介されることで、埋もれかけた真実が明らかになり、これをきっかけに田沢湖地域の田沢寺に朝鮮人無縁仏慰霊碑が建立されました。

1982年、東江が日本と韓国で在日作家全和風の巡回展をしていた中で、光州南道芸術会館で展示を行うことになりました。

この時、過労で倒れるほど体調が悪くなり、宿泊先のホテルで視覚障害者のマッサージ師である黄英雄氏の助けを借りることになりました。マッサージを受けながらいろいろな話をするうちに、視覚障害者たちの厳しい事情を知ったそうです。

彼らが本当に望んでいるのは、社会で生活者の一員として生きていくための教育、マッサージ技術などを習得することであり、そのためには会館の建設が優先されるべきであるということでした。東江は思い切った、地上4階の視覚障害者会館の建設に必

要な費用を寄付しました。政府でもできないことでした。

東江は一生懸命生きる人々の声にいつも耳を傾け、助けを与えることにやりがいを感じていました。自分では到底できないことを楽しそうに行う東江を見ながら、私も最善を尽くして東江を助けようと改めて決意しました。

東江が文化芸術分野で目覚ましく活動したため、秀林文化財団の創立者である金熙秀総長（中央大学総長）の後継で、2012年2月に秀林文化財団の第2代理事長に就任しました。

東江が私と一緒に働くことを勧めたので、私も微力ながら力を貸したいと思い、理事を務めました。東江は在任当時、秀林文化財団に舞踊家崔承姫さんの映像、写真などの資料を寄贈し、展覧会を開催し、財団の建物のリフォームや多方面で活動した後、退任しました。

また、東江は大韓帝国の最後の皇太子である英親王の妻、李方子妃の遺品を国立古宮博物館に寄贈しました。

東江は祖国への寄付だけでなく、韓国に貢献した日本人に対する記念事業も行いま

した。浅川巧（1891-1931）は林業家で民芸学者でもあり、日本統治時代に無分別な開発で荒廃した朝鮮の山をバランスよく発展させるために大きな役割を果たしたと言われています。

そして、陶磁器に並々ならぬ関心を持った兄の浅川伯数の意向に共感し、陶芸家と一緒に韓国各地の陶磁器窯を訪れ、埋もれかけていた高麗青磁と朝鮮白磁を収集し、これを朝鮮政府に寄贈した人物です。

東江はこの二人の日本人兄弟を記念するために日本の清里に記念館の建立を支援し、韓国の池順鐸の陶磁器も寄贈するなど、韓国と日本を超えて活躍し、日本との国際関係改善にも大きな役割を果たしました。

少し思い出すだけでも、東江は自分の利益を全く考えず、韓国美術発展のために自身の分身とも言える作品を寄贈しただけでなく、時間と情熱、金銭的な支援を惜しみませんでした。

このような東江の献身に感銘を受けたのは私だけではありませんでした。ヘッテ野球団のキム・ソンハン元監督もメセナ精神に感動し、東江が光州に泊まるたびにいつも自費で花輪を送っていました。

東江と縁を持つてから、私は企業家として、また韓国プロ野球界の歴史にそれなりに役割を果たしました。企業家として常に投資に対する効率を追求していた立場であったため、東江の行動はいつも私に大きな響きを与え、自分自身を振り返るきっかけとなり、私も最善を尽くして東江の活動を支援しました。

80代半ばになろうとする東江ですが、健康が許す限り毎年、光州市立美術館の河正雄青年作家招待“光”展に参加し、青年作家たちを応援したいそうです。今年の春も光州と霊岩河正雄美術館の展示に参加しました。

未来を担う青年作家の展示は、韓国美術の発展に非常に重要な部分です。東江のようなメセナ活動が後世にも受け継がれ、広がり続けることを心から願っています。自分が生まれた訳でもない祖国に何の条件もなく自分の財産と生涯のコレクション、そして彼の情熱と努力を注ぎ込むことは、果たして人間として可能なことなのだろうかと思うと、東江を心から尊敬し、また彼と一緒に過ごせた数多くの時間は本当に私にとって幸運だったと思います。

「顔が先に思い浮かべば会いたい人、名前が先に思い浮かべば忘れられない人」という言葉がありますが、東江河正雄氏は私にとって顔と名前がいつも私の裏から離れない、心から大切な人です。

どうか御夫婦がこれからも健康で幸せであることを心から願っています。

### 世界は一輪の花

朴星勇

KBS光州放送総局編集制作局長

河正雄先生（以下、「河先生」）について短い文章を書こうとして、考えに耽ってしまった。なぜなら誰に宛てた文章なのか明確にしないと、一人よがりな話になってしまいうからだ。2007年に取材のために連絡を取り、最初は一般的なある種の好奇心で河先生にお会いした。「どれだけ作品を寄贈されたのか？ 公益事業なのか、それと

も一種の社会事業なのだろうか？」などというものだ。そんな私の浅はかな偏見はすぐに打ち砕かれたが、世の中には一部の熱烈な崇拜に正比例して、一部の誤解や憶測も点在していた。先生も故国で多くのやりがいを感じた分、同時に言いようのない悔恨もあつたことだろう。

2023年の春、当初、河先生の健康上の問題で不可能とされていた韓国訪問が小さな奇跡のように実現した時、私は会うなり挨拶もろくにせず、具合はいかがですかと急かすようにお尋ねした。すると先生はカバンを開けて、毎食飲まなければならぬ名前も知れないたくさんの錠剤や目薬などを見せながら、他人事のように笑った。

そして片方のズボンを捲り上げ、まだ青く残っている痣を見せてくれた。先生はまるで他人の体を見せているかのように、日本で講演を終えて降りる途中、転んでしまい、叫ぶこともできずに横たわっていたが、たまたま通りかかりの人がいなかったらそのまま起きあがれなかったらと言われた。

「私一人では何もできないので、だんだんその時が近づいて来ているんでしょうね」

と、確かそう言っていた。彼はまた愉快そうに笑った。

私は重さと軽さの境界がなくなった河先生の笑顔を思い起こしながら、寄付文化というものの存在自体が希薄な韓国社会で、誰かの真心を確認し寄付を決定したなら、当たり前のように財団を作って、いくらも手を掛けずにできたはずのことを、一人で送り状を作り、一々梱包をし、玄海灘を越えて美術品を送ってきた、生涯を「在日」として日本で生きてきたある男性について、一抹の疑念を抱いているであろう人々へ、改めて一言申し上げる気持ちで、鴨が水をはじくように懸念を捨てて書かせていただきたい。

河先生は受けた恩と恩返しに執着した観念的な人間である

幼い弟を背負って授業を受けなければならなかった貧しい小学校5年生の在日少年、彼はそんな自身に恥ずかしげもなく自信を与えてくれた小学校の鈴木重憲先生を生涯尊敬し、あらゆる方法で恩返しをしながら生きてきた。彼の人生の中で、鈴木先生のような恩人は数え切れないほどいる。

浅川兄弟や、「両手に硬貨を持っていると転んだ時に怪我をする。片手は必ず空っぽにしておかねばならない」と教えてくれたある老僧がそうであった。また、「青春とは人生のある時期をいうのではなく、心構えである」というサミュエル・ウルマン (Samuel Ullman) の言葉も、彼の古い手帳に色あせた文字で残っている心の師であった。

彼はまた、人だけを師匠とは思わない。彼を育ててくれた日本社会、そして在日韓国社会、顔も知らない祖父母、たった一度しかない人生も彼に恩を与え、恩返しをすべき対象である。彼は目に見えない恩とその純粋な負債意識で生きてきた男である。これは河先生を理解する上で非常に重要なキーワードであり、彼と韓国文化と社会に何らかのギャップがあるとすれば、おそらくこれだろう。

彼がすでにいくつかの文章で「恩返しと感謝」「祈りと願い」など、やや儀礼的に見える表現を多く使っているが、欠かすことのできない彼の核心である。例えば、光州仲外公園ビエンナーレ館と市立美術館を繋ぐ道に、彼の寄贈を記念する「河正雄路」と名

付けた碑が建てられた時、彼は決して謙虚な姿勢を崩さず心から喜んだ。なぜなら、彼がやっていることに対する故国の人々の感応の表れである以前に、自身の恩返しを引き起こした連鎖反応としての確かな感謝であり、自身が受けた恩恵の種が自身を通して韓国に伝わり、その芽を出し、再び新しい種になるからである。これをやや善的な韓国式儒教社会ではどう受け止めればいいのか、その矛盾をどう説明すればいいのかよくわからない。それでも私はそういわざるを得ない。

先生にとって世界とは、心と心が困陀羅網で繋がっているものである数年前、先生は大きな手術を受け、生死をさまよわれた。先生が辛うじて奇跡的に回復した頃、夢である人を見た。彼は日本のある田舎のこけし職人だったのだが、数十年前の旅行中に偶然立ち寄ったその職人の工房でこけしを見て収集したが、その人が夢に現れたのだ。先生はその夢から何らかの暗示を感じ、回復するやいなや、周囲の反対を押し切って記憶を辿りその小さなこけし工房を訪ねた。驚いたことに、その職人の店の一角には、新聞記事から切り抜いた先生の写真が額縁に

掛けられ、その前に小さな祭壇が作られていた。その職人は、自身の作品を認めてくれたその日から数十年間、一日も欠かさず先生の健康を切実に祈っていたのである。先生とすでに高齢になった職人は、お互いに無言で手を取り合って涙を流したそうだ。（岩手県北上市の鬼剣舞こけし工人菅原信治氏のこと）

かの有名な夏目漱石の「心」という小説のように、日本文化における心は、個人的な感情の独断と、他者との差別あるいは対立としての心とは異なる意味を持つ。その心は皆が共有する共通の性質であり、また、具体的に作用し互いに共鳴する一種の物質性を帯びているという念に基づいている。こけし職人との再会といったもっともらしい話だけではない。河先生は韓国に立ち寄って宿を出る時にも、ベッドカバーを自らきれいに整えるのだそうだ。周りがそれを阻むのは愚かなことである。それは掃除する人に旅行者の気持ちを伝えようとしてされているからである。

同様に、コレクターとしての河正雄の心と、彼のコレクションを鑑賞する観客、あるいはコレクションを収集・研究する機関の

心と、韓国社会の心が今どのように繋がっているのだろうか。この不合理に思える空想的な問題意識を、やはり私は言わざるを得ない。

十数年前、河先生と光州忠路郵便局の前を通りかかった時だった。郵便局の前には、ブンバの服を着て騒々しくおもちゃやお土産などをリアカーに積んで商売をしている60代前半の男がいた。私たち一行は、流行りのおもちゃを一つ手に取って値段を尋ね、先生も好奇心を持って見物してから再び歩き出すと、その男がいきなり私の肘を掴んだ。振り向くと、彼は静かに「あの方は何の仕事をしている人ですか？」と尋ねてきた。私は唐突な質問に答えずにいると、「私がこの商売を何十年もして何万人もの人を見たけど、あの方の笑顔は普通じゃない、あの方の人生がすべて垣間見えるようですね」と言った。私は彼の言葉に、ふと河先生がよく使うある禅語録の一節、「百花春至爲誰開（人は花である。多くの花は誰のために咲くのか？）」を思い出した。それは、お互いに因果応報であり、恵みを与え、受け取り、また与える。お互いを、そして万人を映す鏡である困陀羅網の花であると、やや大げさ

に言えるかもしれない。

だから私はいつか先生が、「おそろく50年後には韓国社会が自分を理解できるようになるだろう」と言ったことに異議を唱えたい。「先生、違います。お互いがお互いを照らし合わせるのに時間の隔たりはありません。すべてはすでに始まっています」と。私たちみんながその花を見る者であり、私たちみんながまたその花である。世界は一輪の花！こうしてこの文章を締めくくるしかない、この不可抗力もそれである。

河先生のご健康を心よりお祈り申し上げます。

## 世界で最も尊敬する二人の父

李根焄

光州FC市民プロサッカー団経営本部長。元  
KBS韓国放送放送文化事業局長

私には世界で最も尊敬する父親が2人い

る。1人目は、私の人生の出発点であり、光（希望）をプレゼントしてくれた実の父イム・ユンヨン氏だ。2人目は、私に人生の知恵を教えてくださいました東江河正雄先生である。

私と河正雄先生の御縁は、河正雄先生の寄贈文化を紹介するためにKBSが制作したドキュメンタリー「一番の花」の撮影準備から始まった。2007年3月、河正雄先生に日本の川口市の自宅で初めてお会いしたが、その時、河正雄先生の第一印象は私の実父によく似ていた。実父は1927年生まれ、河正雄先生は1939年生まれ、私は1963年生まれで、共に卯年であった。

その時の縁が今まで続いており、今でも実父のようにお慕いしている。河正雄先生が光州に来られると迎えに行き、実子のようにお世話をさせていただいている。急ぎの重要なスケジュールがない限り、河正雄先生のガイド役もしているが、このような関りの中で起きたささやかで面白いエピソードもある。

そのうちの一つは霊岩郡立河正雄美術館を訪問した日のエピソードである。先生に会うために霊岩郡立河正雄美術館に立ち寄

ると奥様だけがいらっしやり、先生はお疲れのため月出山観光ホテルのサウナに居られると言うので、雨の中、先生を迎えに行くためにホテルへ移動した。

サウナのフロントに「父を迎えに来ました」と言うと、名前を伝える前に「河正雄先生ですね、お父様によく似ていらっしやいますね。お父様は韓国語がお苦手ですが、息子さんは韓国語がとてもお上手ですね」と言われ、しばらく笑った記憶がある。

最近でも、知らない人は私が先生の実の息子だと勘違いする事がある。このような素晴らしい方が私の父であることを誇りに思わずにはいられない。亡くなった先祖も私たちを見たら、本当に似ていると喜んでくれると思う。このように先生と一緒に笑った思い出は今でも私にとって大切な宝物だ。

河正雄先生に川口市のお宅で初めて会った日も忘れられない思い出である。玄關の入り口に印象的な絵が掛かっていたが、先生は絵を見ながら目を細め、両手を合わせて合掌していた。祈りを捧げていたのである。

その絵は「盲人の群」という日本の作家、

中川伊作氏(1899~2000)の作品である。先生はこの絵を詳しく説明してくれた。一本橋を渡っている5人の人物はすべて盲人だ。5人の盲人はそれぞれ象徴的な意味を含んでいるが、河正雄先生は「それぞれが象徴する意味の一つが、私が見習いたい人間の見本です」と言われた。

先頭にいる盲人は彼らのリーダーである。リーダーの足は橋の端ギリギリにかかっている。この状況でリーダーが一步でも足を踏み外すと、後ろに続く人たちがすべてが危険にさらされてしまう。これは、組織においてリーダーの役割がいかに重要であることを示しているのである。

2人目の盲人は高下駄を履いていて、格好良さをアピールしている。真夜中に一本橋を渡らなければならない慎重な状況なのに、下駄を履いた姿が危うく見える。これは状況と身のほどを考慮して適切な行動を取るといふ美徳を想起させるものである。

3人目と4人目の盲人をじっくり観察してみよう。4人目の盲人は背中が曲がり、体が不自由そうだ。一方、3人目の盲人は4人目の盲人に比べて健康的な印象を与える。この2人は、どちらも盲人であるという点

で同じ不便さを感じているはずである。それなのに、3人目の盲人は、より不自由な4人目の盲人の手を握って、一本橋を一緒に渡っている。

自分の体を支えるのも大変な中、不自由さを乗り越えて、自分よりもっと体の不自由な他人を思いやる姿は実に美しいものだ。これは自分より困難な状況にある人を助けることにより、「自分より困難な人がいたら助けなさい」という価値を伝える内容である。

最後に5人目の盲人が伝えるメッセージは「思いやり」である。絵にあるように、最後の盲人は提灯を持って進んでいる。盲人は前が見えないので、提灯は無意味に見えるかもしれない。しかし、彼らは他人への配慮から提灯を灯しているのである。一本橋を渡るために後続の人々が危険を感知し、気をつけるように導くための細やかな配慮だ。この人たちが盲人でなかったなら、提灯を持った人が一番前で同行者の道標になっていたのではなからうか。

この絵に出会って以来、私はこの作品を玄関の入り口に飾って、出かける際に眺めながら、絵の中の主人公のように行動しよ

うと心に誓っている。また、この作品に大変感動したため、絵が伝えるメッセージが周りの人にも届くことを願って、この作品を私の大切な人たちにもプレゼントしている。この絵を贈る私の心、また絵を説明してくださった河正雄先生の心、そして絵に込められたメッセージが、大切な人たちにも伝わればと思う。

—恩を忘れるべからず—

河正雄先生は、幼い頃、大阪から一番雪が多く、厳しい寒さで有名な秋田県に引っ越して、大変な幼少期を過ごされた。家が貧しく、藁を布団にして寝て、厳しい寒さの中、短パンで生活されたそう。先生は、本を買って読むことは夢にも思わなかったそうである。その当時、町には近くに図書館もなく、唯一、本に触れられる所が本屋だったので、本屋で店長の目を盗んでこっそり本を読んでいたそうだが、幸いにも店の主人はそれを見ない振りをしてくれたため、先生は心の底からずっと感謝していたそう。

その後、時間が経ち、先生が事業で成功されたとき、その書店に立ち寄り5千冊の本を買って母校に寄付されたという話を聞い

て、涙が溢れた記憶がある。先生は人生の成功を収めた後も、受けた恩に報いるため再び本を通して感謝の思いを伝えたのである。私は生きていく中で恩を受けたなら、受けた分だけ返さなければならぬと思う。現在の私はまだ未熟であるが、これからももっと努力して正義を守りながら生きていき、父である河正雄先生のように受けた恩を返す人生を送ろうと決意している。大切なことを教えてくださった父に感謝する。

—宝物を両手で持つてはいけない—

ある日、河正雄先生と一緒に食事をしている時、先生がカップを手に持ちながら「片手にカップを持ち、もう片方の手は空けておけ」と言われた。両手に宝物を持って道を歩いていると、転んで大きな怪我をする可能性がある。片手は空けておくのが望ましいという話だった。そうすれば、転んでも片手は体を守り、片手は宝物を守ることができるので、体も宝物も守れるということだった。

また、より大きな宝物がやってくるときは、空っぽの手でそれを受け止め、もう片方の手はやはり空けておくのが良いと言われ

た。これは、強欲になるなという教訓であった。

河正雄先生のこの賢明な教えを実践するためには、大きな努力と忍耐が必要であることを知っているのも、難しくても最善を尽くすつもりである。河正雄先生の教えに改めて感謝し、この賢明な話を大切に記憶し実践していきたい。

—京都現代美術館で全和風(1909～1996)画伯に出会う—

祈りの美術で有名な全和風先生の作品「3・1万歳運動」を日本の京都市美術館で鑑賞できた。河正雄先生は韓国に多くの作品を寄贈されたが、日本の現代美術館の学芸員たちのように先生を歓迎する姿を韓国では見られなかった。京都市美術館の関係者たちは、心から温かく私たちをもてなしてくれた。

彼らのもてなしぶりに、最初は河正雄先生が韓国に寄贈された作品以上に多くの作品を寄贈されたのではないかと思った。そこで「先生はここに多くの作品を寄贈されたのですか」と尋ねたところ、1点の作品だけを寄贈したと答えられた。

そして、私が見たかった作品、全和風先生の「3・1万歳運動」を題材とした「ある日の夢・銃殺」を見せるために、収蔵庫から学芸員たちが作品を取り出す様子を見て、私は再び感銘を受けた。

学芸員たちは、非常に慎重な姿勢で作品を扱っていた。彼らは先生が寄贈してくださった作品を大切に保管し、その作品を見せるために最善を尽くしていたのである。慎重に絵を持ち上げ、一枚一枚ゆっくり解いて見せてくれたのだが、その姿は本当に素晴らしく、感動的であった。

作品自体だけでも心に響いたが、作品は3・1運動の時、日本軍が朝鮮人を銃殺して絞首刑にするシーンを表現していた。その感動を胸に抱きながら、先生に質問した。

「この作品は韓国にあるべき作品ですが、なぜここに寄贈されたのですか」と聞くと河正雄先生はしばしため息をつき、日本人が韓国に犯した事を知る必要があるのでは、ここに寄贈したと言われた。

先生は韓国でなく日本で生まれ、日本式の教育しか受けていないにもかかわらず、歴史に対する深い理解と責任感で、韓国と日本の歴史に関連する問題を知らせようと

したのである。どうやってこのような考えを持たれたのかと思うと、私自身が恥ずかしくなった。先生が光州市立美術館に寄贈された作品一点一点にもそれぞれのストーリーがあるはずである。寄贈された作品一点一点ごとに研究が必要である。

—視覚障害者福祉会館で光を見る—

河正雄先生の顔を一度も見ることがない視覚障害者を見て、私も目が開けた。彼らとの縁は河正雄先生を通して聞くことができた。

当時、先生は韓国に来て体が疲れていたもので、ホテルでマッサージ師を呼んだところ、後に視覚障害者福祉会館の初代会長になる黄英雄という方が来てマッサージをしてくれたそうだ。その時、先生が「あなた方に一番必要なものは何ですか」という質問に「視覚障害者の福祉会館が必要です」という答えが返ってきたそうだ。

その後、河正雄先生からの資金の寄付で視覚障害者福祉会館の用地購入から建設まで行われ、今の視覚障害者福祉会館が建立された。その後も河正雄先生は視覚障害者福祉会館のために絶え間なく尽力されたの

である。

先生の日本の自宅と一緒にお茶を飲んでいる時、光州市視覚障害者福祉会館の会長との電話の内容を聞くことができた。電話の内容は、視覚障害者福祉会館の駐車場が必要なので、助けてほしいという内容であった。6千万ウォンという現金が必要との言葉を聞いて、「200万ウォンを自分たちで集めることが出来たら支援しましょう」と約束して始まった事業であった。

しかし私は先生1人で十分に全額を支援できるのに、なぜそうしたのか不思議に思い聞いてみた。すると、先生は「私が永遠に生きていくわけではないのです。私が去った後、この人たちが誰に頼ることができませんか。だから、自立する力をもっと育てあげたいと思っていますのです」と言われた。

河正雄先生は自分の資産を寄付して視覚障害者福祉会館を建立し、これによって視覚障害者が自立できる環境を造成しようと考えた。このような河正雄先生の洞察と知恵と人情的な温かさが高貴な心は、私たち皆に大きな慰めと勇気を与えてくれたのである。

私はこのような姿勢を持つ河正雄先生を尊敬し、大好きになった。そして先生の教えに従うことは、私の人生で最も重要なことの一つになった。このように素晴らしい河正雄先生が傍にいて実の父親のようにお仕え出来ることに深く感謝している。

河正雄先生はいつも私たちの傍にいて、温かい精神と深い教えで、私たち皆に大きな慰めと感動を与えてくれるであろう。

河正雄先生、そして尹昌子夫人、未永く私たちの傍にいてください。お二人の健康と永遠の幸せを祈願します。

私は二人のお父さんがいて幸せです。  
愛しています。

## 河正雄という作品

放送作家

チェ・ミンイム

河正雄先生との縁を書こうと思った瞬間、

すぐにピ・チュンドウクの『縁』が思い浮かんだ。私自身が到底それだけ美しい文章を書くことができないことは最初から分かっていたが、抜け出せない網にかかったように『縁』の一節から抜け出せなかった。

『会いたいと思っても、一度も会えないこともあり』

生涯忘れられなくても会えずに生きていくこともある

朝子と僕は三度会った。三度目は会わなければよかった。』

私が結んだ縁もそうだった。懐かしくても一度会って会えなくなったり、季節ごとに思い出し、しばしば知らせを伝え聞きながら、会わずに暮らすこともあるからだ。河正雄先生もそうだった。私がいまにも人格が足りない者であるため、尊敬を胸に抱くことなく生きてきたが、私の痩せ細った心の菜園に初めて尊敬する大人として受け入れた方が、河正雄先生だった。

しかし、大きな思いとは裏腹に出会いを続けることはできなかった。河正雄先生と私は二度会ったのみである。二度というのは、出会いの回数ではなく、象徴的な出会いが二度という意味だ。

河正雄先生に初めて会ったのは、今から15年前の2008年だ。KBS光州放送総局が作る河正雄コレクション関連のドキュメンタリーの作家を担当することになったのだ。当時、私は10年に満たない9年目のフリーランサーの放送作家で、32才になったが、世渡りも仕事も依然として疑問符だらけであった。放送番組、特にドキュメンタリーを作ることに夢中になっていたが、この不安定で未来が見えない仕事をなぜするのか、説明する術がなかった。恋に落ちたが、なぜ恋をするのか、何に恋しているのか、そんな自分でも上手く言えないようなままだった。

そして私はその年の1月、ドキュメンタリーの主人公と制作陣という縁で河正雄先生と初めて対面することになった。制作チームが河正雄先生に会って挨拶をする場であり、以前から先生に憧れていたという中年のカメラ監督、いつも真面目な態度で接する40才前の担当プロデューサーだけでなく、河正雄先生に仕える他の先輩たちが一緒にいる場であった。

その場では、私が一番若かった。放送を20年以上経験した今なら巧みに会話をリード

し、話を引っ張っていくだろうが、当時は何故そんなに自分を幼いと思ったのか、先生に挨拶をした後、先生と先輩たちが話すのを黙って聞いてばかりいたのを覚えている。そして、その日の雰囲気は主賓の人柄に似ていたのか、終始、ひととき温かくほっこりした雰囲気だった。

まだ風が冷たかった冬のある日、私たちは一行は温かい豆腐鍋で昼食をとり、ドキュメンタリーを最後までよく作ろうと決意を固めながら席を立った。そして、豆腐鍋で温まった体とは反対に顔に当たる冷たい風を感じながら、河正雄先生をお見送りした。

その瞬間、私は私の人生で忘れられない言葉に出会った。次の日程のため先に行くが、いつかまた必ず会いましょうと私たちに優しい笑顔で別れをされた先生が突然私に尋ねられた。

「チェ先生、人間にとって一番大切なものは何だと思えますか？」

ああ、いきなり何の質問なんだろう？いつも真面目すぎると指摘されていた私にとって、あまりにも重い質問だった。

私はもしかして、彼のドキュメンタリーを作る作家に対するテストかと思ひ、口を

開くことができなかった。そんな私に河正雄先生は限りなく善良な笑みを浮かべながら自問自答された。

「品格」

突然の質問に頭が真っ白になって聞き取れない私に、先生はペンと紙を貸してくれと言われた。そして手帳の片隅に漢字を書いてくださった。「品格」である。先生は何も言わず、ただ微笑みながら、また今度会いましょうと私の冷たい手をしっかりと握られ離して去っていかれた。

38才という幼い作家にも、あまりにも自然に敬意を払う方、質問が攻撃ではなく助言になる方、そんな品格のある大人との出会い。私が河正雄先生を尊敬するようになった最初の瞬間であり「品格」という言葉が私の人生に入ってきた最初の日だった。

「品格」は、ドキュメンタリーを制作する中で私が「河正雄」という人間を理解するまで、道に迷わないようにしてくれた北極星であり、愚かな私が人生のカウンターパンチを受けるたびに最後まで耐えられるようにしてくれる

例え、それが失敗や損害をもたらしたとしても支柱だった。人間の品格とは何なの

か？ 何が儂い人間に品格を持たせるのか？ 宇宙の塵のような私が品格を持つて生きるためには何が必要なのか？ このように「河正雄先生の品格」が派生させた数え切れないほどの質問は、今でも私の人生に最も有用な質問であり、人生の最後の瞬間、私自身だけでも納得できる答えを持ちたい宿題でもある。

河正雄先生との二度目の出会いは、それから10年が過ぎた、2017年となり常設展示館が河正雄美術館という名前で再開し、初めて開催されたイベントだった。

開館した頃、私は河正雄美術館で常時、上映される河正雄先生の紹介映像を担当することになった。10年の間に先生の人生を扱ったエッセイも出てきて、先生がご自身の文章をまとめて出版した本も何冊も出版された。それだけ先生をよく知る多くの人が存在しているということだ。

そんな中で、河正雄先生の名前を冠した美術館で先生を紹介する映像を作る作家になったこと、それは私にとって本当に光栄なことだった。

こうした縁で私は先生にお会いするもう一つの機会を得たのだ。河正雄先生が公共

美術館に自分の分身ともいえる作品を寄贈した

長い年月が、ひよつとしたら、「光州市立美術館―河正雄美術館」という名前で一段落したからか。その日、会った先生は、80才という年齢にもかかわらず、青年のよううれしそうな表情で満面の笑みをされていた。人はみんな一輪一輪の大切な花であり、百花春至為誰開（あらゆる花は誰のために咲くのか）を座右の銘にしていた河正雄先生自身が桜のように明るく満開に咲いた日だった。

誰もが素晴らしいと称賛するが、誰も率先してできないこと。誰もが正しいと納得するけれど、その中にどんな思いが込められているのか、肝心なことは、ほとんど理解できなかったこと。

河正雄先生の美術品寄贈は、もしかしたらそんなことかもしれない。理解しないことにとどまらず、讒言し、妬み、嫉妬する人も多かったはずの紆余曲折の数年間、河正雄先生の答えはいつも同じだったのだ。15年前に私がドキュメンタリーを作った時も、様々なメディアにインタビューした時も、そして10年前に河正雄美術館の映像制作で

再び尋ねた時も、河正雄先生はただ笑って同じ言葉を語ってくれた。

「一人、一人、人類全体が全て花です。その花を、自分が存在感をもってこの社会のためにどんな花を咲かせてほしいか。集めた作品を寄贈することを理解できない人もいます。」

しかし、私のコレクションはこの社会から得たもので、私がコレクションをしただけですから当然のように社会に還元するのです。だからといって、物質的な欲を持つたということではありません。

知識のある人は知識で、画家は作品で、農業をする人は農業で社会に貢献し、無駄なものがないようにすれば、この社会は幸せではないかと思えます。」

花はいつ咲くのか？ また誰のために、何のために咲くのか？ その問いの答えを河正雄先生の天真爛漫な笑顔の花の中に見た。そしてその笑顔の中で、河正雄先生が私にくださった最初の言葉「品格」を思い出したのは、もしかしたら当然のことだったのだ。こうして河正雄先生との縁は終わったのだろうか。再び私を捕えたピ・チュンドウクの『縁』の一節を思い出してみる。

『会いたいと思っても、一度も会えないこともあり』

生涯忘れられなくても会えずに生きていくこともある

朝子と僕は三度会った。三度目は会わなければよかった。』

そうだ。人の縁は出会いから始まるが、その縁が人生にしっかりと浸透するためには、長い時間、心の中に抱く必要がある。私にとって河正雄先生はそんな方だ。15年前の出会いは私に「品格」という人生の羅針盤を与え、5年前の出会いは「人が花になる刹那」を目撃する、感激の瞬間を与えてくれた。

河正雄先生との二度の出会いが私の人生で長く強烈に残ることができたのは、15年という決して短くない年月の間に河正雄先生をゆっくと長く噛み締めることができたからだ。河正雄先生の痕跡が私の人生のあちこちに残っている。

光州市立美術館で曹良奎の『倉庫』に出会うとき、心が騒ぐたびに思い出す全和風の『弥勒菩薩』を見たいとき、文承根のぼんやりとした風景を思い浮かべるたびに、私は河正雄先生、そして在日のようにいつも世界の果てに立っているようなディアスポラ

たちに出会う。

ドン・マクリーンの『ヴィンセント』を聞いたときに、全財産で列車の切符を買ってゴッホ展覧会に駆けつけ、恍惚とした作品の前で画家の夢を抱いた貧しい高校生、少年河正雄を思い出す。「私の西洋美術巡礼」や『ディアスポラ紀行』などを書いた在日朝鮮人徐慶植先生の本を開くたびに、自分の苦しい人生を芸術、特に造形芸術で癒した河正雄先生の人生をより深く考えるようになる。そして、「どんなプログラムを作るのが好きですか」、「今まで作った作品の中で一番好きなのは何ですか」という質問に「歴史と人間と芸術が一緒にある物語です」と答えるたびに、そうして自分の仕事の方角性を考えるたびに、その出発点となった河正雄先生に出会うのだ。

今もなお、流浪中の高麗人の悲痛な物語、北へ行った伽耶琴三線の原流を追跡した作業、分断のイデオロギーを全身で経験したPO KIMとキム・ボヒョン作家の芸術世界を照らし出した私の大切な作品と当時の情熱は、すべて2008年の河正雄先生のドキュメンタリーから始まったものだからだ。河正雄先生が何の条件も無く寄贈した作

品が多くの人々の心の中でそれぞれの花を咲かせたように、河正雄先生の人生は、いや、河正雄という作品は私の人生の中でも瞬間ごとに、様々な姿で変容しながら花を咲かせている。まるで河正雄コレクションという名前をつけたあの永遠の芸術作品のように！

人が作品である

丁熙男

対談美術館館長。元光州教育大学教授

―作品河正雄―

出会いには偶然、縁は必然だと言っただろうか。私と河正雄先生との縁はかなり長い時間を遡る。その間、私は数え切れないほど多くの人、成功した人、素敵な人、偉い人に出会い、またすれ違っただろう。

しかし、今でも胸に残っていたり、電話がかかってくると嬉しくなり胸がときめいた

り、わざわざ会わなくても一緒にいるように感じる人が何人いるだろうか。偶然の縁だった河正雄先生との縁が必然のように感じられるのは何故だろうか。

それは、河正雄先生が多くの作品をあちこちに寄贈してくださったこと、他人には出来ない数々の善行と慧眼で世の中を包み込んでくださったこと、在日コリアンとして成功されたこと、思いやりの美学で他人を思いやり、分かち合いを実践されたことなど、数多くの理由があるにもかかわらず、私は全く別のところでその縁の糸口を探している。

ある年、日本にいる先生のお宅を訪れ、一緒に帰国することがあった。先生のお宅から飛行場まで電車を2〜3回以上乗り換えなければならなかったと記憶している。

先生はスーツケースと一人で持ち上げるには少し重たい四角い箱を持っておられた。私もスーツケースを持っていたので大変だったが、その箱を無理やり預かって空港まで運ぶのは大変だった。

空港に到着してから箱の中に壊れたり、破損の危険があり送れない物品なのかと訪ねてみた。しかし、先生の答えは実に意外だ

った。家から送ると1000ドルで、空港から送ると20ドルなので、せっかくだから、空港までの道のりが少し面倒でも、自分で持ってきたというのだ。私は一瞬、「80ドルで私まで苦労させるなんて」と思った。

私は今でも自分に問いかける。「お前ならできるのか？」と。私の答えは「できない」

である。それが高齢になるまで苦労と勤勉と節約で生きてきた先生の日常の姿である。

よく人々は私に尋ねる。河正雄先生がどれほど裕福なのか、どうやってその大金を稼いだのか、どれだけ寄付をしたのか、時価総額はいくらなのかなど。本当に世俗的な質問に接すると、むしろ河正雄先生に申し訳なく、心苦しくなる。

私は今でも河正雄先生を見ると、自然と頭が下がる。そして心の奥底に熱い感情が湧き上がってくるのを感じる。これが本当に尊敬と愛であることを感じ、また感謝するのである。どうか少しでも長く私たちの傍にいてほしいと祈らざるを得ない理由がある。

—人が作品である—

河正雄先生の人生と哲学を後世に伝える

ために、筆者は『人が作品である』という本を発刊した。

『人が作品だ』は創造・人格教育体験プログラムを提供するために全10巻で製作された本で、全10巻のうち第1巻から第7巻までが河正雄先生に関するテーマを扱っている。

第1巻は中川伊作（1899—2000）の作品『盲人の群れ』を題材に体験プログラムを構成した。最初に『盲人の群れ』の作品を紹介した。

中川伊作の木版画『盲人の群れ』は日本皇室にも所蔵されている作品で、5人の人が登場します。作家はピーテル・ブリューゲルの絵画作品を参考に、当時の日本の社会状況の中で自分が伝えたいことを木版画で制作したものです。

次に、作品を鑑賞し、感想を書いてみる。先ほど見た『盲人の群れ』に登場する5人の盲人を見て、どのような気持ちになったか話してみましよう。

『盲人の群れ』を鑑賞し、感想を書いた後、『盲人の群れ』のモチーフとなったオランダの画家ピーテル・ブリューゲル（Pieter Bruegel I, 1525—1569）の『盲人の寓話』を

鑑賞させる。

オランダの画家ピーテル・ブリューゲルが盲人たちをリアルに描いた作品です。絵の中には5人の盲人が登場する。この絵で盲人が盲人を導くと穴に落ちるという意味は、指導者が誤った統率をすると民衆が危険にさらされることを象徴している。

次に、『盲人の群れ』と『盲人の寓話』の作品を比較し、感想を述べる活動を行う。中川伊作の作品『盲人の群れ』とピーテル・ブリューゲルの『盲人の寓話』の作品を比較し、自分の感想を述べてみましょう。

作品を鑑賞し、感想を話した後、河正雄先生に『盲人の群れ』が持つ意味を提示する。

河正雄氏は、毎日『盲人の群れ』の作品を見て、自分の人生を振り返り、教養を養ってきたそうです。絵の中で橋を渡る5人は、それぞれの運命が一つの紐でつながっています。先頭に立つ盲人は、リーダーの統率力と自恵の必要性を暗示しています。

下駄を履いている2番目の盲人は虚栄心と誇示欲を象徴しています。3人目の盲人は病気の人を世話し、道を案内します。

最後の盲人が持っている提灯は実際に盲人には必要ありませんが、象徴的に私たち

に他人に対する配慮心を表現したものです。私たちはこの絵を通してリーダーのリーダーシップと人生に対する反省、そして他人に対する配慮心という教訓を得ることができそうです。

河正雄先生が『盲人の群れ』から得た教訓を学んだ後、河正雄先生の寄付精神について考える時間を持つ。

河正雄氏は、毎日家を出る前に『盲人の群れ』の作品を見て自分の素養を養い、社会と他人のために配慮することのできる召命意識を心に刻んできました。

非常に貴重な1万2千点余りの芸術品や資料を韓国の文化芸術の発展のために様々な機関に寄付することができたのも、大切な価値は多くの人と分かち合うことにより輝くものだと考えたからです。他人を思いやり、共に分かち合おうとする河正雄氏の寄付精神について考えてみましょう。

次の活動では、もし自分が画家なら、絵の中に登場する盲人たちの順番をどのように配置したいかを考えてみる。

次に、自分が考えた盲人の配置順を言って、その理由を説明する活動をする。

次に、先ほど自分が配置した順番で絵を

切り取って貼ってみて、お互いに比較しながら意見を出し合う絵から自分の好きな順番に盲人たちを切り貼りしてみましょう。自分の並べた順番が友達とどう違うかを見て、その理由を話し合みましょう。

30年後の自分の姿を想像しながら「未来の自分」を描き、未来の自分はどんな人なのか「説明する文」を簡単に書いてみましょう。全ての活動が終わったら、体験談を書いて、第1巻『盲人の群れ』の活動を終える。以上、第1巻「第一話：盲人の群れ」の教育活動でした。

第2巻は、こけし人形にまつわる話である。河正雄先生がこけし人形を買うことになる逸話を提示し、河正雄先生のメセナ（mecenas）精神の核心的な意味を体験を通して学ぶ活動で構成されている。

第3巻は長崎の柿の木の話である。長崎の柿の木は、1945年の原爆の被害の中で唯一生き残った生命体だという。このプログラムは、この柿の木を治療し、繁殖させて世界の子どもたちに配る「時間の蘇生・柿の木プロジェクト」を理解し、平和、生命、環境、人権などの重要性を認識する活動で構成されている。

第4巻は、日本の日光市東照宮のある建築物に刻まれている3匹の猿にまつわる物語である。3匹の猿が浮き彫りになっていて、人が生きていく上で悪いことは聞いても話しても見てはいけないという教えを伝える意味があるという。この猿の浮き彫りの意味を理解し、望ましい人間関係と処世術を教育する活動で構成されている。

第5巻は「未完の門」に関する話だ。「未完の門」は河正雄先生が設計し、彫刻家朴炳熙先生が鳩の彫像と組み合わせで設置した作品である。この作品は全羅南道霊岩郡立河正雄美術館と潭陽対談美術館に設置されている。このプログラムは、「学びの道は年齢と階層を越えて終わりが無い」という河正雄先生の教育哲学が込められた「未完の門」の意味を理解する様々な活動で構成されている。

第6巻は「心美一路、美しい心で一つの道を歩む」というテーマで行われる活動です。「心美一路」は河正雄先生の絵を朴炳熙先生が彫刻で具現化した作品である。このプログラムは、美しさに向かって一つの道を歩む人々の希望を表現した作品の意味を理解し、河正雄先生の人生遍歴と願いを込め

て、美しい心で団結し、和合して賢明な知恵を集めて力強く前進しなければならぬという意味を学ぶ活動で構成されている。

第7巻は「百花春至為誰開、全ての花は誰のために咲くのか」というテーマで活動するプログラムだ。河正雄先生のモットーは誠心と百花為誰開だという。このプログラムは、全ての花が誰かのために咲くのではなく、それ自体でただ美しく咲くように、人もそれ自体で尊く成長しなければならぬという意味を目覚めさせるための活動で構成されている。

筆者は10冊で構成された体験活動プログラムを「河正雄先生の人生と哲学が消えることなく後世に残され、人生の教訓になることを願う気持ち」で執筆した。

河正雄先生は美しい作品のような人生を生きてこられた。河正雄先生の人生と哲学が一つの作品である。

河正雄は作品である。

## 河正雄先生の寄贈哲学と教訓

任喜星

霊岩郡文化観光財団理事。霊岩郡立河正雄美術館館長歴任

初めての河正雄先生との出会いは、2004年の王仁文化祭特別展の霊岩陶器文化センターの展示を鑑賞された後、御自身が所蔵している中川伊作の南蛮焼と霊岩陶器の胎土である黄土の話がきっかけで一度、川口の家で調査に来てほしいと言われた。

その時、先生は自身のコレクションの南蛮焼について、コレクターとしての確かな寄贈哲学を持っておられた。当時、私は大きな感銘を受けたが、2年が過ぎてから、霊岩郡の寄贈依頼書と、陶器文化センターのナギムン所長とソン・テガプ学芸員とともに故金逸太郡守の親書を持って日本の河正雄先生のお宅を訪問した。

その親書には、「全ての人類が一緒に見て楽しめるようなことをしたい」という霊岩郡の美術館建設の意志が込められていた。

その内容を見て、必ず寄贈しなければという気持ちになったことを後日語ってください。

河正雄先生は、2006年12月21日、霊岩郡に千字文と論語、そして百済の先進文化を日本に伝えた王仁博士の故郷である霊岩郡の発展と文芸振興、日韓の友好親善に貢献するために河正雄コレクションを寄贈するという内容の寄贈書を送ってください。

そして2007年1月、寄贈書よりも多数の陶磁器と美術作品が霊岩郡に寄贈された。この時は霊岩陶磁器文化センターを再建しており、展示作品が必要だった時期であったため、公立博物館登録所蔵品の確保と軌を一にしていた。

河正雄先生は、美術館を建設する期間、日本の埼玉県からほぼ月1回以上、霊岩を訪問された。霊岩郡は開館準備のために美術館の隣にゲストハウスを建てた。それは美術館の建設において河正雄先生の協力と支援が必要だったからであり、寄贈者を礼遇するために建てられた。先生はゲストハウスに滞在している間、私に彫刻家の北村西望が書いた「水流月不動」という漢詩につい

て時々話してください。

流れる水の中で照らす月は動かさず一箇所だけを照らしているというメッセージとともに、なぜ自分が寄付をしながらこのような生活を送っているのか、そしてどのようなに生きることが価値のある人生なのか、多くの教訓を与えて下さった。

実際に、美術館の建設までの年月を振り返ってみると、霊岩郡は2006年4月の南蛮焼調査、2007年の美術館建設計画の策定と投資・融資審査、寄贈品の輸送などが順調に進んだ。

しかし、霊岩郡にとって公立美術館の建設は当時、大きな負担となる文化芸術プロジェクトだった。そんな霊岩郡の事情を知ってか、河正雄先生は霊岩を訪問するたびに手ぶらで来られず、直接寄贈美術品を持参することも多々あった。

私の記憶では、おそらくその回数は50回を超えるであろう。誰にも真似できないような素晴らしいことだと思う。日本の埼玉県から霊岩に来るには、明け方に家を出て一日中移動しなければならぬ。

今思えば、河正雄先生はその長い時間を費やして霊岩に到着する疲れを我慢して、

ただひたすら美術館の建設という使命感のみで耐えてこられたのではなからうか。これまで河正雄先生が霊岩郡に寄贈された美術品及び美術資料は2023年6月末現在、3回に亘って計4572件で、すべて無償で寄贈されたものだ。

しかし、多くの美術品と美術館建設のために惜しみなく支援してくれた河正雄先生に、私たちは消し去ることの出来ない大きな傷を与えてしまったことがある。全て過ぎ去ったことだと片付けることもできるが、私は最後まで礼を尽くせず、守れなかった申し訳なさがまだ胸の奥底に残っている。

ただ、いつも申し訳なく、感謝するばかりで、私が生きている間に、河正雄先生のメセナ活動がさらに輝くように努力したい。

河正雄先生は、自分の人生哲学とメセナ活動を通じて、人生の価値を大切にし、実践してきた方である。

美術館に在職時代、いつも話題にした明歴露堂堂「河正雄コレクションがすべての人のために花を咲かせるという確信を持って堂々と働きなさい」と言って勇気づけてくださったことに感謝し、そして今はお会いできない彫刻家の故朴炳熙教授

(元漢南大学美術教育科)は河正雄先生と最後まで美術館の仕事を共にし、「生命の循環」という作品を設置する際に「子供たちは河正雄美術館を守る兵隊であり、私たちが去った後も美術館をしっかり守ってくれるだろう」と言われた言葉と、その姿一つ一つが今でも目に焼き付いている。

今も未完成の河正雄美術館！ 今後、きちんとした寄贈美術品の管理と多様な展示活動で韓国美術の発展に貢献することを願って、最後に美術館建設を手伝ってください。すべての方と人生の道標となってくれた河正雄先生に両手を合わせて深く感謝を述べたい。

## 種を植える人

金姫娘

光州市立美術館分館河正雄美術館長

―はじめに―

河正雄名誉館長(以下河正雄と表記)と私の縁は、2001年の美術館入職と同時に始まったので、かなり長いといえる。その間、美術館あるいは光州と河正雄との間に様々なエピソードがあり、何について話そうかと悩んだ。その中で、河正雄の人生と美術品収集との間の因果関係、つまり河正雄という人について、河正雄コレクションの根底にある〈祈り〉の意味について深く理解するようになったのは、2013年の日本出張の時であった。ちょうどその年、寄贈者である河正雄という人と、彼の哲学を扱う展示である〈分かち合いの美学〉展を準備していた。

当時、河正雄とメデイチメディア出版社のキム・ヒョンジョン代表と編集者、中央日報のジョン・ジエスク記者、キム・ヒョンジョン作家、ジャーナリストの盧治煥、金熙秀文化財団の申景浩理事と事務局長などが同行し、4泊5日の日程を共にした。幼年期から高校まで過ごした秋田県、埼玉県日高市の聖天院と高麗神社、川口自宅、山梨県北杜市の清里別荘や浅川兄弟資料館、ポール・ラッシュ記念館など、河正雄の人生で最も重要な土地を巡り、彼が歩んできた道を集中

して調査する機会になった。当時、心に響いた記憶を回想しながら、河正雄について語ってみたいと思う。

### ―寄贈の目的―

普通、人は河正雄のことを美術品コレクターであり、1万2千点余りを寄贈した財力家としてだけ知っている傾向がある。私自身も最初は、当美術館の所蔵品の大半を寄贈したメセナ運動家くらいだと思っていた。しかし、美術品寄贈者として河正雄を限定するには、彼が生涯に渡って行ったことはとても大きく、あまりにも多い。

彼は20世紀初頭に、在日コリアンが経験した苦難の歴史を正し、苦痛を受けた人々を慰め、和解の道に昇華させることに生涯を捧げている。その使命を実践する道具として、時代を証言する美術作品を収集し、その歴史を知らせ、教育するために公立美術館に寄贈している。

河正雄コレクションに含まれている有名作家が、河正雄について「財閥だと思っていたが、後で知ってそうではなかったのが驚いた」と言ったことがある。河正雄が美術品を収集する理由は、裕福だからではな

く、転売のための投資目的でもない。彼は辛い歴史を記憶し、悔しい立場で生きてきた人々を慰め、二度と不幸な歴史が繰り返されないよう、さらに人類の幸せを祈るために美術品を収集して寄贈している。

―祈りの心―

秋田は河正雄が幼年期から高校卒業まで育った故郷である。人格形成に最も大きな影響を与えた時期を秋田で過ごした。日中戦争の中、1993年生まれの河正雄は秋田で工事現場の労働者として働いていた両親の元で育った。

山岳地帯の大きな湖がある秋田地域は、1936年に始まった〈東北振興計画〉の一環として多くの発電所が建設された。その中でも田沢湖と生保内発電所を結ぶ3本の導水路工事は、非常に困難な工事であり、そこで働いていた多くの朝鮮人が犠牲になった。機械がなかった時代に、素手で危険な工事に携わり、あらゆる重労働をし、命を落とす事故も多かった。

河正雄は幼い頃、その労働者らを目撃し、記憶している。大人になってから、田沢湖にいた魚と守護神のために建てられたとされ

る姫観音像が、実は朝鮮人労働者の慰霊碑だったことを明らかにする。これを朝日新聞等に報道し、朝鮮人労働者の名簿を探し出し、真相究明活動を続けている。

私が日本に行った際に、最も衝撃を受けたシーンがある。無縁の朝鮮人らの慰霊塔が建てられた埼玉県の聖天院を訪れたときだ。寺の仏堂には10センチほどの小さな位牌がたくさん祀られていたが、その一角で50センチほどある大きな位牌を発見した。そして仏壇の下には朝鮮人（強制徴用労働者、原爆犠牲者、戦争犠牲者）4500人余りの名前と出身地、労働した機関などが記録された過去帳が置かれていた。河正雄が北海道、鹿児島、長崎、沖縄などで収集した朝鮮人犠牲者の名簿であった。そして彼は志を同じくする在日コリアン1世の尹炳道と共に2000年から毎年慰霊祭を行っていた。今も毎年9月5日に慰霊祭を行っている。

2013年当時、国が進んでしななければならないことを、河正雄個人がしていたのだ。数年後、日本統治時代に強制徴用で日本に連れて行かれた労働者1万人余りの名簿を見つけたという大々的なニュースの報道

があった。彼が国家に代わって、どれほど素晴らしい仕事をしているのかを実感した。

このような過程は決して容易ではなかっただろう。河正雄は日本の官僚に何度も掛け合って助けてほしいと協力を依頼し、朝鮮人労働者の名簿を入手した。姫観音像の建立趣旨文が隠されていた寺である田沢寺にも何度も訪れ、その切実さと執念で建立趣旨文を手に入れた。

また、〈良い心の会〉を作って在日コリアンと地元の日本人と一緒に追悼活動をするようにし、茶谷十六など、地域の歴史学者と共にセミナーを開催し、学術的に体系化する作業を続けている。

―共に、継続的に―

河正雄は一生の間、実に多くのことをしてきたが、その活動の形に注目すべき点がある。彼がしてきたことは、ほとんど個人的なことではなく、公的な領域での仕事であった。そのため、彼は一人ではせず、多くの人々の意志を集め、共にする。どんなことでも一人でするのが一番楽なのは誰もが知っているだろう。また、これらの活動が一時的や単発的にとどまらず、継続的に拡大され

るよう設計する。何よりも正しいことや良いことをする時、粘り強く執拗に推し進める。その執拗さが結局、人々に感動と共感を与えている。

日本統治時代の朝鮮人労働者に対する真相究明活動や慰霊祭、そして清里銀河塾の顕彰行事がそうである。韓国・光州の視覚障害者協会設立の募金運動、また視覚障害者の当事者だけでなく、地域のアーティストまで志を合わせて共にしてきた。

そして、光州市立美術館への寄贈もまた20年以上、足りない部分を補う形で続けた。それゆえ、全和風、宋英玉、李禹換、郭仁植、文承根など多くの作家の全時代をまとめて、すべてのシリーズが揃えられ、光州市立美術館の所蔵品だけでも個展の開催が可能で、作家の全貌がうかがえる。

種を蒔くような意味のあることに多くの人が参加し、学び、共に続けていくことで伝播し、拡大させる。これを通して、周囲や社会、さらに人類が良い方向性に変わることを願っているのだと思う。

―感動を実践に―

私たちに感動と教訓を与えるストーリー

はたくさんある。特にノンフィクションの場合、共感と感動はさらに大きい。しかし、残念ながらそれを自分の人生に反映して学んだり、実践する人は極めて少ない。その中で自分自身を変化させ自分の体を健康にしたり、自己利益を追求することに熱心な場合はよくある。しかし公共の利益のために、自身の時間とお金と情熱を注ぎながら、偉大な人々が歩んできた道を辿るのは容易ではない。

河正雄は大なり小なり、受けた恩を記憶して返す人である。その上、精神的な教えでさえも思慮と考え、その教えを自分の人生の中で実践する人である。河正雄の別荘は北杜市清里にある。清里は日本統治時代、朝鮮総督府の森林庁に勤務し、朝鮮の森林造成に尽力し、朝鮮民芸品の優秀性を発掘した浅川兄弟の出生地である。また関東大震災の当時、日本に宜教師として来て太平洋戦争で追放されたが、戦争に負けた日本に再び訪れ、生涯奉仕したアメリカ人ポール・ラッシュが定着した地域である。彼らは自国より貧しい他の国に滞在し、その地の発展のために献身し、普遍的に人類を愛することを発揮した人物という共通点がある。

彼らの教えは河正雄に韓国と日本の架け橋の役割をさせ、国との境を越えた人類愛を実践する生き様をさせた。そして河正雄は彼らを顕彰し、その教えを広めようと先立っている。河正雄は清里に浅川兄弟資料館の建設と運営のために韓国の工芸品を寄贈し、韓国と日本、在日の青年を対象に浅川兄弟とポール・ラッシュの崇高な精神を教育する清里銀河塾を継続的に開催している。偉大な人から学んだ教訓を種にし、その精神を植えて育てていく人生、それを使命とし喜びとしているため、彼はいつも忙しく駆け回っている。価値を認め、影響を受け、再び影響を及ぼす、善のサイクルの中で人類が発展していくことを実践する人生である。

―明日は明日の太陽が昇る―

河正雄を見ると、なぜこんな大変なことをするのだろうか？ 尊敬に値するが、誰もが同じ心ではないがため、時々誤解を受けることもあり、その過程がとても大変そうに見える。

河正雄は貧しい家庭環境にもかかわらず、母親の決断で秋田工業高校に入学する。し

かし、単に学費の問題だけでなく、家から学校まで車で往復6時間かけて毎日登下校したという事実は非常に驚くばかりだ。

毎朝5時半に汽車に乗って登校するのは、並大抵の意思ではない。しかし彼は、汽車で毎日出会う身体障害者らを通して、体の健康のありがたみを知り、障害者の苦しい境遇を体験し、彼らを助けることの価値を悟る。苦勞して通った高校だからこそ、勉強にも絵にも、より一層力を尽くし、日々楽しい学生時代を過ごす。厳しい環境だが、今現在に忠実で最善を尽くす生活態度が、今の河正雄を作ったのだと思う。

河正雄に富をもたらした電機店の買収過程や、秋田〈祈りの美術館〉建設の挫折、1万点余りの作品を一箇所に寄贈したかったが、思い通りにならなかったことなど、彼の人生にも危機は常に存在していた。しかし、彼は危機のたびに次善の策として迅速な決断を下し、挫折するよりも、「明日はまた明日の太陽が昇るという考えで、もう一度やり直せばいい」と語る。その瞬間ごとに出会う人々の話に耳を傾け、細なことにも喜び、どんなことでもうまくいくというポジティブなマインドが彼の人生を導いているよう

だ。

河正雄美術館のアーカイブの中に河正雄が作った短歌がある。嬉しいことや悲しいこと、記憶すべきこと、感謝すべきことがある日に、その瞬間の感動と感情を残すため、彼が作った歌である。

自身の人生を楽しめる人、自身に与えられた使命が何であるのかを記録し思惟する人である。彼が私たちの時代に植えた種がうまく育ち、また誰かの種になることを願う。

### 霊岩郡立河正雄美術館・念願と祈りの種が芽生えたところ

ド・ヨンヒ

文筆家

紀元前2世紀前から人々が集まって住んでいた村であり、王仁博士、道詵国師、崔知夢など数多くの人物を輩出し、今もなおその伝統と歴史が息づく場所、全羅南道霊岩

郡にある鳩林村である。

この村には、在日同胞の実業家であり国際的な名声を持つコレクター「東江 河正雄」が寄贈した美術品4572点を資産として建立した「霊岩郡立 河正雄美術館」がある。美術館のロビーに入ると、町をぐるりとその懐に抱く月出山の全景が一望できる。

個人が寄贈した膨大な量のコレクションを扱っている美術館であるため、寄贈者の業績にスポットライトを照らすような少し権威的な形態の空間を想像したが、周囲の自然環境と村の雰囲気に合わせてL字型の構造の韓屋の屋根と単純な四角構造を組み合わせた建物で構成されている。

美術館の外部には愛らしい風景とともに様々な彫刻作品が設置されており、美術館の常設展示室と企画展示室、そして2022年にさらに開館された創作教育館の二つの展示室で活発に展示が行われている。

美術に興味がある人たちは、河正雄の名前を光州で先に聞いたことがあるかもしれない。光州広域市にも1993年から河正雄が光州市立美術館に寄贈してきた作品をベースに河正雄美術館が分館として設けられている。

河正雄は数多くの美術作品を光州市立美術館に寄贈しながらも、実際に父親の故郷であり彼自身も心の故郷としている霊岩郡には寄贈のきっかけを見つけれずいつも申し訳ない気持ちを抱いていたという。

そんな中、2007年から霊岩郡立陶器文化センターの造成をきっかけに幾度にも渡り作品を寄贈してきたし、今年3月追加771点の寄贈に至るまでトータルで4752点を寄贈したが、彼が光州市立美術館に寄贈した作品数に比べてなんと2千点以上多い数だという。

寄贈されたコレクションは「ジョアン・ミロ、マリー・ローランサン、マルク・シャガール、ジョルジュ・ルオー、サルバドール・ダリ」など海外の巨匠たちの作品から、「李禹煥、郭仁植、孫雅由、宋英玉、全和鳳」など、在日作家達を中心とした作品で構成されている。

彼が生涯にわたって収集してきた作品の数があまりにも多く多様で、自ずとどんな基準でコレクションを決めてきたのかが気になってくる。

「自信を持って言うが無分別な収集ではない。展示会でざっと目を通し他にはない

名作という風評だけを信じて衝動的に購入した作品は一点もない。胸が高鳴り、魂を揺さぶる作品だけを選別して収集してきたと自負する。」

河正雄の2016年のエッセイに記録された文章である。河正雄のコレクションに関して美術館関係者は、彼は直接作家に会ったりアトリエを訪問し、作家と会話を交わし自分の価値観と作家の世界観がどれだけ触れ合っているかを身をもって実感してから収集を決めてきたと言う。

一般の場合個人コレクションは単純な好みや投資価値を考慮して構成されることが多いが、河正雄の美術コレクションには、苦勞する作家たちへの応援とともに二つの祖国（日韓）と故郷に対する彼の想いが込められている。

特に韓国現代史の急激な変化により、あらゆる所で異邦人扱いを受け不当に犠牲になり疎外された在日韓国人たちの平穩、平等、癒しを盛り込んだ作品もまた彼のコレクションの大きな部分を占める。

霊岩郡立河正雄美術館の所蔵品の中にも、在日韓国人作家らに対する彼の応援と支持が込められた特別な作品がある。今は韓国

を越えて国際現代美術史で確かな地位を確立している李禹煥作家が、国内の大衆はもちろん美術愛好家の間で有名になる前から河正雄は彼の創作と展示をサポートした。

河正雄は1980年の雑誌「みずる」で李禹煥作家の作品に触れることになったが、東洋的な色彩と余白が与える造形美、哲学的な事由に夢中になった彼は、書店に電話を入れて500部余りの在庫を全て購入した。

李禹煥の作品が幼い頃彼の家の裏にあった寺に石だけぽん置いてある名のない朝鮮人の墓を思い出させ、自分にはそれが朝鮮人たちに対する「祈り」の作品として感じられたという後日談もある。このような縁を皮切りに6年後にして李禹煥作家と直接会うこととなり、彼がヨーロッパでの活動と創作のための環境作りに苦戦しているという言葉に河正雄は快く彼を支援することにした。

そうして河正雄は李禹煥の作品を集めることができたし、その結果霊岩郡立河正雄美術館でもコレクションには李禹煥作家の作品はもちろん、「河正雄先生へ。李禹煥」と記されてある李禹煥が河正雄に送った年

賀状まで観ることができ。

他にも河正雄は郭仁植、孫雅由、宋英玉、呉日、全和鳳など、在日作家たちを支援し、国内にその名前を知らせることに大きく貢献した。

河正雄のコレクションは、韓国近代史そして日韓両国の歴史的関係によってスポットライトに照らされることなく忘れられなくなった在日韓国朝鮮人の美術を我々の美術史に残して復元したという点でも高い評価を受ける。

「仏像の画家」として知られるほど多くの「仏像」連作シリーズを描いた全和鳳作家は、1950年代の日本の法隆寺で百済観音像を見て感動し、これにインスピレーションを得た作家は、厳しい朝鮮の歴史と異邦人として生きてきた人生の哀歓などを盛り込む作品などに取り入れた。全体的に穏やかな色彩と微かに浮かべた微笑みの特徴であるこのシリーズは河正雄の心を捕らえるには十分であった。

彼は「弥勒菩薩」を皮切りに全和鳳の作品を収集し、これにとどまらず1982年全和鳳作家の初の故国展「全和鳳 画業50年」展の心強い後援者として作家の人生で一番

意味深い瞬間を共にした。霊岩郡立河正雄美術館でも彼の作品を多数観覧することができる。

また、もう一つの特別な収蔵品として、伊丹潤が設計した「田沢湖祈りの美術館」の立面図を含めた設計図がある。河正雄は本来彼自身が収集した作品をベースに、強制的に水力発電所の工事に動員された朝鮮人たちの血と汗の滲んだ日本の田沢湖畔に祈りの美術館を設立しようとした。

この時、在日韓国人建築家ユ・ドンリョン（伊丹潤）に設計を要請することになり、彼の趣旨に同感したユ・ドンリョンはこれを積極的に協力することにして実際に設計を進めた。

しかし1990年代当時、急激な日韓関係の冷却で全ての計画は振り出しに戻ることになる。その後彼は光州市立美術館をはじめとする多くの場所に寄贈することで遺憾の気持ちを鎮め、更に広く大きな夢として展開した。霊岩郡立河正雄美術館の建立もまた彼のそのような念願の種がまた別の形で花開き結実したものである。

霊岩郡立河正雄美術館の関係者は、河正雄の故郷と作家たちへの愛情が実際に美術

館を運営して芸術界に寄与する上で大きな貢献になつていて、これを体感するという。

今は病状が思わしくなく韓国を頻繁に訪れることはできないが、今でもなお在日作家たちのニュースや記録をはじめとする資料など小さな資料までも丁寧に通してくれるという。

河正雄は今年の3月に美術館に追加で771件を寄贈した。現在霊岩郡立河正雄美術館は、在日作家の作品から韓国作家はもちろん海外作家の作品まで、3次コレクションの作品の一部を選定し、生涯美術作品を通じて芸術的幸福と感動を共有してきた河正雄の献身的な活動に焦点を当てた企画展「共有、幸福への道」を展示している。

今まで霊岩郡立河正雄美術館は河正雄のコレクションに基づいた紹介展を中心に行ってきたが、今後は招待展と企画展もより一層活発に進行し、同時代の作家たちとのコミュニケーションはもちろん、新進芸術家たちの創作を支援する活動を続けていくと明らかにした。

単純に一人の人物の名前を掲げて彼の業績を称える次元を超えて、作家たちの創作を支援することでメセナ精神の純粋な実践

者である河正雄の真の意志を引き継ぐ美術館に発展することを目標にした。

このような美術館の歩みを促進する意味で、霊岩に立ち寄る多くの人々に美術館のロビーに座って美しい月出山の四季も眺め、作品を通して消えそうになった我々の歴史と遺産を記憶し、芸術作品が与える喜びと幸せをしっかりと感じ取る時間を持つてみることをおすすめする。

(2023年月刊「韓屋」No.37より)

## 東江河正雄・韓国の近代歴史、その暗い記憶の破片を抱く

パク・ギヨン Chol、イ・ギヨン Gung

文筆家

東江河正雄作家は秋田で幼少時代を過ごした。学生時代は絵を描く才能があり好きであったが、家族の反対、そして在日韓国人と外国人に対する差別により、作家としての夢をあきらめ電機店を運営することにな

る。

彼は東京オリンピックを起点に経済的余裕を得て、彼自身のように作家を夢見るも貧困と差別で夢を諦めたり、苦勞して生きている在日韓国人作家を助けたいという思いを持つようになる。

彼が幼少時代を過ごした秋田は水力発電所と鉱山があり、強制労働に動員された朝鮮人が多かった。特に水力発電所の工事に多くの朝鮮人が動員されたが、秋田は寒く雪がたくさん降る地域で食べ物も不足し栄養失調や寒さに耐えられず、逃亡した挙句に死ぬ人が多かった。

彼の母親は、食べる物が豊富でなくても祭日や小さな慶事には料理をし、彼の近くにある墓所を訪問させた。そこで彼らの平安と冥福を祈った。そのように幼少時代から彼は韓国の歴史と日韓近代史で苦しい人生を生きてきた在日韓国人の人生を認識するようになる。

彼は何十年もかけて無名で活動していた隠れた在日韓国作家たちを後援し、彼らの作品を集めた。

彼の収集品には、在日韓国人に対する祈りと慰勞、そして彼らを記憶しようとする

気持ちが含まれている。

このような気持ちを込めて1990年初頭、彼は幼少時代を過ごした秋田の田沢湖畔に「祈りの美術館」の建設を推進した。土地を購入し設計図を作って美術館に置く美術品も集めた。

田沢湖町でも美術館の建立を歓迎した。田沢湖は有名な観光地で年間多くの観光客が訪れる場所であり、観光業的にはもちろん文化的にも地域を振興させることであつたからである。

しかしその頃日韓会談で、日本の強制労働問題と慰安婦、広島原爆の犠牲者に対する賠償問題が日韓関係において争点として浮上し、美術館の建設も瓦解するに至った。設計図はもちろん、集めた美術品は行き場を失うことになる。

その頃韓国では1992年に光州に公共美術館が建てられた。収蔵品と美術作品が足りなかったため厳しい状況に置かれていた光州は、美術品コレクターとして知られていた在日同胞の河正雄作家に協力を求めることになる。

その縁をきっかけに現在まで光州との縁は結ばれており、光州を皮切りに彼は韓国

の様々な地方都市から連絡を受けることになった。ソウルの国立現代美術館と市立美術館からも連絡があったが、ソウルは自分でなくとも十分な資本と寄贈者がいると思いい、地方都市の文化育成のために役割を担うことになる。

そうやって彼は82年度日本の京都市美術館を皮切りに日韓両国の10の都市に約1万2千余点の美術作品を寄贈した。

最近では秋田を離れて64年滞在した埼玉県立近代美術館にも170点余りの作品を寄贈することになり、日本国内でも天皇から感謝の紺綬褒章を受けるなど、60年余りにわたる在日韓国人作家たちに対する祈りと思いが多い人々に共感とインスピレーションを与えている。

彼が収集・寄贈した作品だけでも、孫雅由、洪成潭、姜連均、李禹煥、全和風、郭徳俊、郭仁植のような在日韓国人作家をはじめ、朴栖甫、金昌烈、呉承潤のような国内近代代表作家たちに至るまで様々である。過去の李禹煥作家の海外展示のために大金を快く出した逸話もよく知られている。

しかし最初からその価値を認められたわけではなかった。彼が80年度に初めて在日

韓国人作家の作品で展示を企画するまでは無視される傾向があったという。

90年代に入って光州に在日韓国人作家の作品を寄贈するまでは認知度や関心は高くなかったが、光州を皮切りに地方都市と積極的に縁を結び、2000年代に入って第3回光州ビエンナーレで在日韓国人作家たちの作品を中心とした「在日の人権展」の展示が行われた。彼はその瞬間は贈り物のようだったと記憶している。それまで収集した作品が花開き、韓国で利用され、良い評価を受けたのであるから。

彼は韓国近代史の裏にあった在日韓国人の歴史を彼らの作品を通じて記憶し、新しい世代に引き継いでいる。さらに彼は光州の近代歴史もまた記録遺産として価値を感じ、ひっそりと活動していた作家たちのアトリエを探し歩き作品を集めた。

当時それは単なる作品収集活動以上に強制的な制裁も受けることもある時代だったからである。そうやって5・18という激動の時代を経た作品もまた、彼と同じ意志と共感を持った人々が成し遂げた産物である。彼の人生は普通の美術品コレクターとは少し違う。絶えず苦悩し厳しいものであつ

た。しばらくは日本でも韓国でも完全に認められず、いつも警戒され差別されたりもした。しかし彼は、過ぎ去った時間に対して怒り失望していたなら今のような結果はなかっただろう、文化と歴史に対する見識を持ち、別にとやかく言わなくても時間が来れば分かるようになってくると言った。

彼は光州を通じて韓国の都市や美術館と縁を結び始めたが、その中でも全羅南道靈岩郡に多くの作品を寄贈した。

特に彼が収集した陶器のほとんどは靈岩郡にある。靈岩郡は彼の両親の故郷で、彼には第2の故郷であるという。

2012年に「靈岩郡立河正雄美術館」が開館し、靈岩上台浦公園から河正雄美術館までの1キロメートルが「河正雄路」に指定されている。これに続いて2022年は河正雄美術館創作教育館もオープンした。

20年前、当時郡守だった金逸太郡守が昔の中学校の敷地に陶器文化センター（現在の靈岩陶器博物館）を建設することを計画し、彼に作品の寄贈を要請した。

300点余りの陶磁器を寄贈したことで、博物館は3階建ての規模に設計が変更された。彼は先に寄贈の提案をしない。ただ要請

が来た際には全力で協力しようとしてきた。その後霊岩郡の熱心な意志に応じて河美術館創作教育館に至る。

その前までは霊岩郡には遺跡地以外は文化施設がほとんどないに等しかった。しかし地方都市として文化芸術の窓として生まれ変わろうとした霊岩郡の意志と努力が時代と歴史に先見を持った河正雄という人物と出会い、立派に表現された事例である。

光州市立美術館、霊岩郡立河正雄美術館は文化体育観光部主管全国優秀公立博物館にも選ばれ、河正雄が我々の歴史に送る祈りと慰労のメッセージが60年を超えて多くの人に伝えられている。

(2023年月刊「韓屋」No.37より)

## 愛と希望の歌

シン・ジョンムン

ラン弦楽四重奏団代表

2002年、光州市立交響楽団員だった私は、光州市立美術館で開かれた河正雄コレクシヨンの弦楽四重奏楽器寄贈式にヴィオラ奏者として参加し、河正雄先生に初めてお会いした。弦楽器製作の名人である陳昌鉉先生が弦楽四重奏楽器を河正雄に寄贈し、この4種の楽器は美しい外観と同じくらい美しい音で素晴らしいハーモニーを奏でた。

その時演奏した曲はドヴォルザークの弦楽四重奏曲「アメリカ」で、この曲はドヴォルザークが祖国チェコを離れて、アメリカで生活する時に感じた祖国への憧れを表現した曲で、河正雄先生と陳昌鉉先生にとっても意味のある曲であった。

寄贈式で陳昌鉉先生は演奏者である私に「この楽器を大事に使って、しっかり管理して欲しい」と言われ、私はそうすることを約束した。

陳昌鉉先生は1929年に慶尚北道の金泉市で生まれ、15歳の時に日本に渡り、貧困や差別などあらゆる逆境を乗り越えて独学で弦楽器製作の分野で世界的な名人になった方である。彼と河正雄先生は在日韓国文化芸術家協会の会員として東京で初めて

会った。

その後、河正雄先生の美術作品寄贈のニュースを知り、その崇高な意志に賛同し、祖国の若い青年たちに愛と希望と勇氣、そして夢を伝えたいという願いを込めて、2001年に光州号(第1ヴァイオリン)、2002年に大邱号(第2ヴァイオリン)、漢拏号(ヴィオラ)、白頭号(チェロ)を寄贈した。光州号と大邱号は東西の和合を、漢拏号と白頭号は南北統一の意味を込めた。

2010年、光州市交響楽団の東京招待公演で日本を訪れた際、私は陳昌鉉先生の工房を訪問した。調布市の小さなJIN工房には、世界の名演奏家と交流しながら撮った写真が壁に飾られていた。

また、楽器を製作するときを使う道具があり、ハングルで寸法などが書かれていたので理由を尋ねると、たまに日本人の来客が製作技術をメモしていくことがあるため、ハングルで表示しておいたそう一緒に笑った。陳昌鉉先生は私の楽器と弦を調整してください、自宅に招いてお茶をご馳走してください。

そして、オペラシティーホールで開かれた光州市交響楽団の演奏会にも来て、激励

し、ご自身の話が載っている日本の英語の教科書をプレゼントしてくださいました。遅くまで談笑し、新宿駅で電車に乗るために歩いている姿を見送ったのが先生との最後となった。

2012年、陳昌鉉先生の訃報を聞き、光州市立美術館と協議して追悼音楽会を準備した。第12回河正雄青年作家招待“光”展の開幕式で追悼音楽会「塀の下に咲く鳳仙花」を、寄贈された楽器を使って演奏した。演奏は「ラン弦楽四重奏団」が担当し、演奏曲はホン・ナンパの「鳳仙花」とドヴォルザークの弦楽四重奏曲「アメリカ」だった。陳昌鉉先生は彼の著書「天上のヴァイオリン」で鳳仙花に対する思いをこう表現した。

「鳳仙花」は私たちが在外韓国人にとって単なる歌以上の存在である。それはヴァイオリンで表現すると、外側の板と内側の板を繋いで共鳴させてくれる魂主のようなものだ。魂主はヴァイオリンの魂である。外側が外国、内側の板が祖国なら、我々の自己を表現する魂主が（鳳仙花）である。

追悼演奏会に参加された河正雄先生と尹昌子夫人、そして陳昌鉉先生と李南伊夫人がとても感激し、演奏会の意義を高めてく

れた。

その後、「ラン弦楽四重奏」は毎年河正雄青年作家招待“光”展（以下、“光”展と表記）の開幕式で寄贈された楽器を使って演奏を行った。「鳳仙花」は常に演奏する定番のレパートリーとなり、毎年河正雄青年作家招待“光”展と寄贈された精神に合った曲を編曲して演奏した。

ソウルに上京した兄を懐かしむ童謡「兄さんへの想い（2年2）」、幼少期の故郷の赤とんぼを思い出しながら姉を懐かしむ日本の童謡「赤とんぼ」、ケンタッキーの故郷を懐かしむアメリカの民謡「ケンタッキー・オールドハウス」、故郷と郷愁を歌った日本と韓国の代表曲「荒城の月」と「故郷の春」をメドレーで編曲した曲（河正雄先生喜寿献呈曲）などである。河正雄先生は演奏曲を聴くたびに喜び、自分が参加する光州市視覚障害者協会の行事などでも演奏を依頼された。

2022年陳昌鉉先生の10周年を迎え、光州市立美術館主催で「河正雄コレクション弦楽器寄贈者 故陳昌鉉先生10周年追悼音楽会「天上のヴァイオリン」を開催した。曲目は2002年の楽器の寄贈式以降に演

奏された曲と2012年に日本で開かれた追悼音楽会で演奏された「鳳仙花」だった。この曲は、陳昌鉉先生が在日コリアン音楽家チェ・ドンオク（東玉）さんに編曲を依頼して創作されたヴァイオリン二重奏曲で、深い哀愁を帯びている曲で、李南伊夫人が「ラン弦楽四重奏団」に楽譜を寄贈されたものだ。

これまで光州市立美術館と一緒に開催した「光」展の演奏を通して、私と「ラン弦楽四重奏団」は名匠の温もりが残る楽器を直接演奏し、河正雄名誉館長の崇高なメセナ（文化芸術支援）精神に音楽で共にできたことに感謝し、演奏家として大きなやりがいを感じる時間だった。今も「光」展が開幕すると、青年作家たちの作品と共に「河正雄コレクション弦楽四重奏楽器」が展示される。

その楽器を眺めながら、陳昌鉉先生と河正雄先生の祖国愛と芸術愛の貴い意思を思い起こす。

## 河正雄、音楽に込めて

イ・スンギユ

作曲家

2018年、河正雄美術館の金姫娘館長との出会いがあった。金館長が私が行う音楽会に来られ、会話の中で河正雄先生についての話をちらつとしてくださった。光州が故郷である私にとって、河正雄先生の存在は驚きと衝撃に迫った。普通だったら理解できない愛情の深さと献身される理由を知りたいと思った。

翌年の夏、河正雄美術館を訪れ、河正雄先生についてもっと知りたいと金館長に助けを求めた。金館長は快く教えてくださり、自叙伝や関連書籍などを提供してくださった。私は数日の間集中して河正雄先生の一代記とドキュメンタリーを耽読し、芸術的なインスピレーションを受けるようになった。

在日コリアンとしての辛かった人生と痛み、そしてそれを乗り越えるための絶え間ない努力。これらすべてが私の人生に大き

な教訓となった。特に「美術を媒介として個人を救い、すべての抑圧と貧困がなくなり、愛と平和が訪れることを祈る。」というメッセージに大きな感銘を受けた。

このようなメッセージとインスピレーションを通して、ピアノトリオ《ディアスポラ、三つの悲しい歌》を2020年に作曲した。この曲は全3楽章で構成されている。在日コリアンとしての生涯と慰めの意味と共に、在日コリアンの生涯を照らすだけでなく、差別という痛みを経験した人すべてに、慰めを与える音楽になればという願いを込めた。

この曲を作曲するのは事実、簡単ではなかった。河正雄という人間の生涯と哲学、人生のストーリーを学び、彼が歩んできた旅路と在日コリアンが経験した歴史的な波風を、曲に込めるために最善を尽くした。

三つの楽章はそれぞれ特色のあるストーリーを配分した。「証言、鎮魂、慰め」はディアスポラを象徴するキーワードであり、それに沿って背景とストーリー、それに合った曲を作曲した。

### 第1楽章…証言

ピアノは鍵盤で演奏せず、手のひらでピアノの弦を弾き、破壊的に憂鬱な現実を演奏し、ヴァイオリンとチェロは一つの旋律というよりも、一つの形と雰囲気として演奏する。力なく、とぼとぼと歩く後ろ姿を連想させる曲として、時代と人間の生を記録している「歴史的証言」。戦争や理念によって分かれてしまった生を音で表現した。

### 第2楽章…鎮魂

日本で暮らし、強いられた差別や痛みをどのように表現するか頭を抱えた。叙情的な旋律が全体を支配して次第に発展し、彼らの痛みの声を代弁している。鎮魂の意味は、死者の魂を慰め、安らかに眠らせるという意味として、歴史の渦の中で惜しくも犠牲になった人々を悼むレクイエムである。

### 第3楽章…慰め

愛と平和を目ざして送るメッセージである「幸福」、美しく温かいぬくもりを抱いた芸術作品は、人間の心と精神を満たし、魂を浄化させる。芸術作品は、いかなる修飾や説明なしに万人を共感させ、幸せと余裕、生の喜びを感じさせる力がある。ハ・ジョンウン

先生の究極の目標でもある人類の愛と平和の実現のためのメッセージである。(注1)

この曲は2020年12月17日の第5回イ・スンギョ作曲発表会で初演され、毎年サロンコンサートで演奏している。また、2023年9月5日に河正雄美術館で「ディアスポラ音楽会 [Who am I? ]」というテーマで光州市民に発表する時間を送った。

どれだけたくさんの方が来られるか心配だったが、展示室を埋めつくすほど多くの方が訪れた。河正雄の生涯と哲学にインスピレーションを受けて作曲した曲を、河正雄美術館で発表することができ、感慨深い思いでいっぱいだった。

ある観客は、言葉にできない感動と慰めに大きな感銘を受けて涙を流されたり、曲を通して「在日コリアンの苦しみを深く理解できた」という方もいた。私自身も演奏の途中で涙ぐむほど悲しい曲であるが、深みがあつて慰められる曲である。

ディアスポラ

ディアスポラ……どちらにも届せない悲しい民族の現実だと思う。先にピアノトリ

オ「ディアスポラ、二つの悲しい歌」の曲で表現したように、現代人の心もまたディアスポラの状態であると思う。韓国はOECD国家のうち、高齢者貧困率1位、自殺率1位、暮らしの満足度はほぼ最下位に近い。肉体は韓国にあるが、私たちの精神と心はただあてもなく漂う霧のようで、道標のない船のように、ただ彷徨いと不安の連続である。

このような憂鬱な現実の中で、音楽を通して各自が抱える痛みと傷を発見し、共感と癒しを得てほしい。何よりも自分のものを分け与え、人を助けるハ・ジョンウン先生の哲学が音楽を通して多くの人に伝わってほしい。

※注1…全国市・道立美術館ネットワーク  
河正雄コレクション特選展「祈りの美術」、図録26ページ、金姫娘 文引用(2013、光州市立美術館)〈全国市・道立美術館ネットワーク河正雄コレクション特選展「祈りの美術」、図録26ページ、金姫娘文引用(2013、光州市立美術館)

光州のあしながおじさん

イ・ヨンギョ

無等日報新聞製作局長。元全羅南道日報編集局長

記者という職業柄、多くの人に会った。ほとんどが取材目的で始まったが、関心の領域が広がるにつれ、交流する人とその活動の幅も広がった。だからといって、知り合った人々と取材源の領域を超え、社会生活でお互いに心を開いて交流する関係まで発展するのは容易ではない。

国外に居住している場合はなおさらだ。そのため、いくら関心の領域を広げても、継続して交流の幅を広げていくことが思ったほど容易ではないのも事実だ。

それでも、特別な縁はないが、一度くらいは名前を思い出し、「最近どうしているだろう」と気になる人がいる。霊岩出身の在日コリアンとして、光州市立美術館など光州・全南圏をはじめ、全国の多くの機関にこれまで収集した美術作品を惜しみなく寄贈して

きた河正雄光州市立美術館名誉館長もその一人だ。

河正雄名誉館長とのご縁は1993年7月、私がニュース記者としていた時分からだ。全南日報で記者生活を始めてまだ2年しか経っていない時だった。在日コリアンである彼が生涯集めた作品のうち212点を光州市立美術館に寄贈するというニュースの主人公だった。

美術に関心がある新米記者にとってこのニュースはセンセーショナルだった。靈岩、在日コリアン、画家を夢見た若い頃、貧困、民族差別、自力成家、作品収集、作品寄贈などの言葉が自然に連想された。それぞれの言葉を繋げると一つの文章になり、涙腺を刺激するほどの感銘を受けた。私に深い印象を与えてくれた河正雄名誉館長との最初の御縁は間接的なものだったが、深い感動を覚えた。

当時、地方ではメセナの活動が活発でなく、光州・全南の代表的な公共美術館として開館してわずか1年しか経っていない、光州市立美術館の作品コレクションの乏しい現状の中で、ピカソ、モネなど教科書で見た有名画家の作品は、私だけでなく、全国の美

術界を沸かせるビッグな素材であった。

歳月が経ち、2003年に文化部美術担当の発令を受け、河正雄名誉館長と二度目となる間接的な出会いがあった。80〜90年代の経済成長を背景に、日本ではゴッホ、ピカソなど海外の有名作家の作品を購入することが活発だった。

当時、日本は世界の美術市場を主導し、ほとんどの地域の美術館がピカソなど有名画家の作品を購入して展示していた。ちょうど韓国も盧武鉉政権の発足とともに「文化で食べていける」を旗印として光州文化首都を標榜したため、この年、地域文化コンテントで活性化された日本の地域美術館を、ベンチマーキングする企画取材で日本出張に行った。出張中に然、東京で光州市立美術館の関係者に会ったところ、「河正雄氏が光州市立美術館に3回目の作品寄贈の意思を表明し、その手続きを検討するために日本に来た」と言われた。

彼らと別れて宿に戻り、記事を作成して会社に送稿し、特別報道した記憶が新しい。河正雄名誉館長がその年7月、1187点を光州市立美術館に寄贈されたおかげで、コレクションは充実した。私と河正雄名誉

館長との2度目の間接的な出会いは、私が記事を書いて彼の作品寄贈の推進状況を伝えたため、なんとも特別な感覚があった。

河正雄名誉館長に間接的に出会って以来、10年ぶりに実現した彼との初対面は、とても緊張しわくわくした。河正雄名誉館長が夕食の席を設けてくださり、私と食事をしながら生きてこられた路程、芸術哲学などを詳しく話してくださった。彼のことを知る貴重な時間になったと記憶している。韓国語は少しぎこちなかったが、状況に合った適切な言葉で話す河正雄名誉館長の姿は真剣で、かつ情熱的で、私は十分にチャレンジ精神を刺激させられた。会社の担当業務で美術分野から離れているにもかかわらず、河正雄名誉館長の多大な寄付と活発な活動は地域文化を充実させ、私はその文化指数の向上に幸せを感じた。光州を越えてソウル、釜山、大田など全国の美術館や博物館にとどまらず、大学に至るまで、彼の愛の対象は大きく広がった。

彼がこれまで韓国に寄贈した作品は1万2000点余りに達する。とりわけ光州市立美術館に1993年から8回にわたって寄贈された2603点の河正雄コレクション

ンは、地域の公共美術館や国立現代美術館にコンテンツの面で量的にも質的にも劣らないほど、威信を高めるコンテンツだった。

ピカソやシャガールなど海外の有名作家だけでなく、李禹煥、全和鳳、郭仁植など在日本同胞の作品、韓国モダンビズムの代表作家朴栖甫、金昌烈、金丘林などの作品は、光州市立美術館の所蔵品レベルを引き上げるコレクションとして位置づけられている。このように光州市立美術館が河正雄コレクションにより対外的な地位が高まっているように、他地域の美術館や大学においても彼の愛のプレゼントに対する喜びと自負心はひとしおであろう。

老巨樹が村の人々を雨から守り、暑には日陰を作り、四季折々に惜しみなく恵みを与えるように、河正雄名誉館長の活動は善なる影響力を放つあしながおじさんのように感じられた。日本で在日という冷遇と差別を乗り越え、懸命に生きてきた彼だからこそ、その寄付がより心に響く。

人々はみんな知っている。自分の手に握ったものを他人に無償で与えるということがどれほど難しいことか……。99坪の田んぼを持っているお金持ちが、貧しい人が持

っている1坪をどうかして奪って100坪を作る」という世間の言葉は、まさに人の心理を表している。

画家が夢だった彼が、生涯に渡って集めた自身の分身のような作品を快く手放すのは容易ではなかっただろうし、作品購入に注ぎ込んだお金だけでも決して少なくない金額だったはずだ。だからこそ、彼が提示した作品寄贈の条件には非常に厳しい条項があっただろうと思われる。

これらは自らの子供のように愛する作品を寄付するため、しっかりと管理して市民に永遠に共有されることを願う切実さによるものだと解釈できる。

しかし、河正雄名誉館長のこのような活動は地域社会で誤解を生み、嫉妬と妬みまで加わって彼を苦しめた。そんな中、コロナ禍まで重なり、河正雄名誉館長も光州への足が遠のかざるを得なかった。地域社会の歪んだ視線に傷ついて韓国を訪れないのではないかと心配になり、彼のニュースと近況が気になった。

そんな中、2022年11月に全く見覚えのない国際電話がかかってきた。最近では海外から変な電話がよくかかってくるので、

二度とも電話に出なかった。ところが、光州市立美術館の金姫娘河正雄美術館館長が電話をかけてきて、「河正雄名誉館長が貴方に二度も電話をかけられたのだが、受けなかったというので電話した。是非出て欲しい」という内容だった。

紆余曲折を経て繋がった電話で、受話器の向こうから聞こえてくる河正雄名誉館長の声には、嬉しさと光州を愛する心、悔しさがそのまま表れていた。そして、「数ヶ月後に光州に行くので、ぜひ会いましょう」と懇願された。そうして2023年3月、河正雄名誉館長と光州で再会した。

私は32年間勤務した全南日報を定年退職し、他の利益団体で勤務していたため、自由にたくさんの話をした。尹昌子夫人、長女と一緒に久しぶりに光州を訪れた河正雄名誉館長も、弾丸のように流れる歳月を避けられないように、随分と衰弱し疲れていた。

外見はあまり変わっておらず、つぶらな瞳と「記者さん」という優しさは全く変わっていないかった。しかし、ここ数年、光州と断絶した状況について語られる時には、悲しみと彼の心を理解されないという悔しさが伝わってきた。そのためか、光州を深く愛し

たごとく、彼の心の傷も深いようでとても気の毒だった。

彼を取り巻く数々の誤解や憶測には興味がない。文化を愛するメッセンジャーとして、地域文化のあしながおじさんとしてだけ記憶したい。これからもご健康で豊かさを提供する、地域を越えて韓国美術界の大家として良い影響を与える人として記憶されることを願うばかりだ。

個人的に見ても、河正雄名誉館長が光州と韓国の文化発展に与えた功績はあまりにも大きい。彼が生涯収集した作品を惜しもなく地域のために寄贈したことについては、ほかの視点や視線を取り払って見ていただきたい。彼が私たちの地域に与えた良い影響に感謝し、もし不足な点があるなら、お互いに補い合ってほしいと思う。彼は間違いなく称賛されるべき文化人である。

去年の3月、私が差し出した名刺に何かを丁寧に書いておられた姿が目につかぶ。5年後、10年後も河正雄名誉館長に名刺をお渡しするとき、熱心に書き込まれるであろう姿が想像される。河正雄名誉館長のご健康とご平安を心からお祈り申し上げる次第である。



河正雄「たくさんの方が私と一緒にいて、私は幸せな人です」

《河正雄名誉館長を追憶する本を発刊、贈呈式を行う／安敏錫国会議員、月佑、金甲柱ら出席 結婚60周年を祝して「因縁資本」発行》

光州市立美術館の名誉館長である河正雄氏は裕福な人物だ。日本で同胞として、涙と汗を流して稼いだお金、つまり資本を、日本人の嫉妬と冷遇を前にして、無形の絆をつくりだした。

1939年に大阪府で生まれた河正雄名誉館長は、日本での差別を乗り越えて収集した在日韓国人画家の作品を含む、海外の著名な芸術家の絵画、陶芸、書籍1万2千余点を、1993年に光州市立美術館に寄贈し、その後、朝鮮大学や釜山市立美術館等に寄贈しました。この種の取引は、常識的には赤字ビジネスです。ビジネスマンとして成功し、経営分析が早いので、掘り出し物かと聞くと「地上に天国が見えるみたい」と子供

のように笑う。

3日午後遅く、光州教育大学仲外潤学館の1階で贈呈式がありました。

本書は、韓国メセナ運動の先駆者であり、障害者をはじめとする社会貢献活動家であり、日本の強制動員の犠牲者への補償や略奪された文化財の返還を誰よりも祖国を愛した河正雄氏の生涯と哲学に憧れる人々のエッセイ集である。

日本から17名、韓国から24名が参加した。この日、教育大学仲外潤学館1階の小さな会場は、彼との大切な関係を想う多くの人で埋め尽くされた。

3月に初めて出版を提案した安敏錫国会議員、日本の略奪文化財返還運動を行った月佑氏、光州盲人協会前会長の金甲柱氏、程己柱ヘツテ・タイガース会長、朴容九光州市ゴムドリボランティア委員会委員長、林根焄光州FC運営部長、姜連均元光州市美術館館長らが出席し、河正雄名誉館長との貴重な関係を分かち合った。

特に今年は、尹昌子夫人と結婚して60年になる河正雄名誉館長が、この日、河正雄名誉館長のゆかりの著作をまとめた書籍の贈呈式が行われ、特別な感慨を抱いた。

イベント中、河正雄名誉館長はいつも笑顔で、感極まっているかのよう目目を閉じていた。黒のスーツに黄色のネクタイ姿で登場した河正雄名誉館長は、尹昌子夫人と共に贈呈式に出席した来賓一人一人と記念撮影やサインを交わす。

6年前の大手術で体調が悪くなっていたにもかかわらず、本人曰く「私の顔」を見に来てくれたゲストに全力で応えた。特に、河正雄名誉館長と光州との関係において貴重な人物とされる朴容九光州広域市ゴムドリ奉仕会会長に特に関心を示した。

河正雄名誉館長は、1980年に光州で視覚障害者と面会し、1989年には韓国初の盲人協会の民間設立を支援しました。河正雄名誉館長が若い頃、栄養失調で失明した苦悩は、視覚障害者への並々ならぬ関心と愛情に表れています。

イベントを企画した光州教育大学の許乘準総長は「資本主義社会で一番価値の高い資本で作品を買い、作品でたくさんの人と出会った。結局、人間関係の資本は「彼と共にあった」とし、「人生の主人として大切な人々と出会い彼らを通して悟りを得た。その悟りとどまらず、実践した」と語った。

また月佑中央僧伽大学校総長と安敏錫国会議員は、日本が略奪した文化財返還運動の絆と記憶を河正雄名誉館長と共有しました。

京畿道烏山を選挙区とする安敏錫国会議員は「秋なので地元活動が多いが、ここに来るには1万票くらい失うと思う」と冗談交じりに語った。安敏錫国会議員は「私は10年前の日本の略奪文化財返還運動から河正雄名誉館長に同行している。初めて会ったとき、三つのアドバイスをくれて、私を成長させてくれました」

贈呈式には、普段心に抱いているストーリーを携えて訪れた河正雄名誉館長。「1973年、私は46年ぶりに両親と韓国を訪れ、両親の故郷とのつながりを持ちました。当時、韓国のGDPは世界でも有数の貧しさだったので、国のためにできることをやろうと思ったのです」

墓碑銘が『善行と美の伝達』であることを明かした河正雄名誉館長は「鶴亭・李敦興先生は私の人生を振り返りながら、この言葉を残してくれた」とし、「私は悟りや解脱を成し遂げたことはなく、ただ一生懸命に人生を生きてきた。私は特別に高等教育を受

けたことがないので、社会そのものが学ぶべき大学だという考えで世の中を歩いてきただけであり、一日一日のあらゆる段階から学んできました」と語り、会場は静寂に包まれた。

今年、尹昌子さんとの結婚60周年を迎えた河正雄名誉館長は「10月1日、私の子供と孫たちで結婚60周年を祝うダイヤモンド婚のお祝いをした」とし、「その時、牧師から、病気のときも健康なときも妻を愛すると誓うかと聞かれ、『すぐに誓います』と答えた」と話した。

「これは、夫婦が一緒に忍耐し続けるという新しい誓いです。なぜなら、忍耐は幸福の万能薬だからです。忍耐を積み重ねた一日の歩みが河正雄であり、我が国の姿だと思っています。石は磨かないと輝きません。光が当たるとダイヤモンドになり、増幅されて反射して戻ってきます。故郷と祖国に光を当てようではありませんか」

祖国の果てしない発展のために、人生を惜しみなく捧げた「あしながおじさん」の希望が、秋の夜に深く響き渡った。

(2023年11月5日 無等日報 イ・ヨンギユ)

## 河正雄恩師と永遠に輝く一途な物語

朴容九

(社)光州広域市ゴムドゥリ奉仕会会長。(社)光州広域市社会福祉用務支援センター代表理事長

―河正雄恩師との出会い―

河正雄先生とのご縁は、今から40年前、光州市の視覚障害者の居場所づくりのために光州を訪問された時に始まった。私は当時、視覚障害者の移動をお手伝いするタクシーの運転手をしていた。恩師が講演の後、視覚障害者と私の運転するタクシーに乗ったのがご縁になり、それから40年余り、障害者の移動をお手伝いしながらさまざまな社会福祉のお使いサービスが続いている。

私のボランティア活動の根底には家族の献身的な協力と河正雄先生の珠玉のような言葉がある。私が運営している(社)光州広域市ゴムドゥリ奉仕会と(社)光州広域市社会福祉用務支援センターの最大の恩人である河正雄理事長を私は恩師と呼んで自慢

している。

私は1984年に視覚障害者である黄英雄氏を乗せて運転ボランティアをした。ボランティア活動をしているときに在日韓国人の河正雄先生に出会った。それは、視覚障害者である黄英雄氏が河正雄先生に光州市視覚障害者協会の運営について協力を求めている場面だった。河正雄先生は、たまたまボランティアしている私に誰かと尋ねられた。私は「朴容九です」と答え、私がボランティア活動をしようになったきっかけをお話しすることになったのだ。

―切実な祈りを実践しようとしたボラン  
ティア活動―

私は、小学校在学中の10歳の時、突然下半身が麻痺し、私と両親は絶望した。両親は私を貨物トラックに乗せて、光州にある全南大学病院に入院させた。15日間、全南大学病院に入院して治療を受けたが、病名は分からなかった。その後、再び田舎に帰郷し、7年余り障害者となり、家で療養しながら多くの苦しみを経験した。

長患いに苦しみながらこんなことを考えた。「病気を治してくださいなら、私と同じ

ように歩けず、目が見えない障害者の方々のために、一生心身を尽くして助けて生きていきます。どうか病気を治してください」と、毎日切実に祈った。また、母は誰も使っていない村の共同井戸を見つけ、7年余りの間、雨が降ろうと雪が降ろうと浄化水を家に汲んで来て、「どうかうちの息子を治して、万人に必要な人になれるようにしてください」と切実に祈り続けた。

6年以上治療したが病勢がよくなる気配がなく、障害者として生きていたある日、父の友人が「とても霊験あらたかな漢方医がいて、あなたの息子のように歩けない人を中国でもたくさん治したよ」と、その漢方医に私を一度診てもらおうことを薦めた。

その漢方医は私を見て、「まだ10年も経っていないから、2年ほど治療すれば病気を治せるだろう」と言い、4日に1回治療するようにと言われた。それ以来、その方が運営する靈光郡にある漢方医院で2年以上治療を受けた。

2年以上、両親と姉は4日間隔で雨が降ろうと雪が降ろうと4キロメートルも隔てた距離を、私を担いで漢方医院に通った。漢方医院に到着して私を降ろすと、両親と姉

の背中汗でびしょ濡れになっていたそうだ。

そんなある日、母が私を背負って行く途中、牛車を引く男性に出会った。牛車には3俵の米が積まれていた。父は男性に「うちの子が下半身不随なので担いで行かなくてはいけないのですが、同じ道なのでちよつと乗せてもらえないでしょうか」とお願いした。しかし、その牛車の男性は「私も忙しいです」と言いながらそのまま行ってしまった。

私は母の背中に担がれてその光景を目の当たりにし、「障害者の移動権が切実だ」と思った。もし治ったら、大人になってどんな仕事であれ、障害者を助けるために心身を尽くすことを誓った。

そうして家族の献身的な助けと霊験あらたかな漢方医との出会いによって、2年余り治療を受けながら次第に快方に向かった。私と母の切実な祈りと優れた漢方医の診療のおかげで、苦難の末に再び健康を取り戻し、第2の人生を再スタートすることになった。

私は健康を取り戻した後、1965年に光州に上京して苦勞の末、職を見つけた。そ

んな中、母の切実な祈りである「どうかうちの息子を治して、万人が必要とする人になれるようにしてください」という美しい約束を守るために、仕事を辞めて一人で、1968年に全国で初めてボランテニア活動を始め、ボランテニアという言葉が全国に広めた。

70年、80年代までは、車も珍しく、経済も厳しい時代で、物乞いをする人も多かった。そんな時代に、障害者を無料で車に乗せてあげるのは誰も想像すらせず、ボランテニアという言葉自体がなかった時代であった。

目が見えない、あるいは手足が不自由なために、どこか行きたい場所があったり、どうしてもしなければならぬことがあっても、思うように行動できない障害者の苦しみを経験したことのない人は理解できないだろう。

私が障害者になり、その苦痛を直接肌で感じたからこそ、ボランテニア活動を始めることになり、経験したことのない人にとってはとても難しいことだろうと思ったので、一人で始めたのだった。

―河正雄恩師のアドバイスと妻のサポート―  
私がなぜ障害者ボランテニア活動をするようになったのかという話を聞いた後、河正雄先生は私の人生を変えるようなお言葉をくださった。

「私も今いいことを少しやっています、これからもっともっとやろうと思っています。朴容九先生も若い年齢で障害者になった後、苦勞の末に回復し、その約束を守るためにボランテニア活動を始めたので、中断せずに続けてください。そうして徳を一番多く積む人として認められれば、韓国で一番のお金持ちになるでしょう。いや世界で一番のお金持ちになるでしょう。そして、いいことを一生続けられれば、いいことで大きく成功することでしょう」

当時、しばしば辛いこともあったので、一途な気持ちで生涯ボランテニア活動をするようにという激励のお言葉は力になって私の心に響いた。

そうして私は10年以上にわたり、雨が降ろうと雪が降ろうと、障害者に移動の手助け、交通便の提供と社会福祉のお使いサービス活動を一人で行った。

その後、一人では限界を感じ、団体を作ってボランティア活動をすれば多くの方に恩恵を与えることができると考えた。私は40年以上前に団体を結成し、「ゴムドゥリ奉仕会」会員755人と「社会福祉用務支援センター」会員865人余りと共に障害者のためにボランティア活動をしている。

そして、私の妻ムン・ヤンレ夫人にも「ボランティア活動を中断しないで続けていけ」という河正雄先生の言葉を伝えた。恩師の言葉を実践するために、私たち夫婦はどんなに困難なことが起こってもそれを克服し、障害者のために心身を尽くしていいことを一生していこうと決心した。

ところが、ボランティア団体の運営費及び管理費、車両15台の保険料、燃料費、事務所運営費、運転手の給料、その他の運営費などを賄うのはとても大変だった。私は妻に、もう運営費がないので団体運営を中止しなければならぬと話した。

すると妻は大声で怒り、「あなたも障害者だったのに、そんなことを言うのですか？河正雄先生が『せっかく始めたのだから、一生障害者にボランティア活動をすれば、この世で一番徳を積んだ人になり、徳を多く

積みあげこの世で一番のお金持ちになり、いいことを一生やればそのことで大きく成功するだろう』と、珠玉のようなお言葉をくださったとあなたが言ったじゃないですか。

だからどんなに困難があっても善行を中断しないで続けてください。私が悪いことだけはしないでお金を稼ぎます。その収入であなたが善行、ボランティア活動を一生できるように面倒を見てあげるので、先生の珠玉のようなお言葉を実践して、将来善行により大成功する人になりましょう」と言った。

そうして私は河正雄先生のお言葉を実践するために、ボランティア団体を中断することなく続けることができた。

それ以来、私の妻は27年間、銭湯の従業員として働いた。そのうち肩を痛め退職した後、食堂で5年間、工場で3年間勤務した。ムン・ヤンレ夫人は、その苦勞して稼いだ収入の数億ウォンを私が運営するボランティア団体の運営費に使うように後押ししてくれた。妻は家事だけでなく、私がボランティア活動を続けることができるようにサポートしてくれた。妻への感謝の気持ちは言葉に言い表すことができないほどである。

裕福な家に生まれた妻は、私と母の切実な祈り、そして河正雄先生のお言葉を実践できるように、生涯、私の後ろ盾をしてくれたのだが、嫌がるどころか夫の仕事を誇りに思ってくれている。私が55年間ボランティア活動を中断することなく続けることができたのは、妻と河正雄先生のおかげである。

また、私の妻は運営費の支援だけでなく、障害者団体のさまざまな行事に大型バスの無償支援と障害者の移動のために尽力した。そして、行事の開始から終了まで100人以上のボランティアを支援し、会場案内、障害者ヘルパー、弁当配膳、ゴミ収集処理、飲食物ゴミ収集処理、駐車場案内、行事受賞者ヘルパー、障害者輸送など、障害者会員と障害者団体からも深い尊敬と愛を受けている。

―世界一の金持ちになる―

金大中政権時代の大統領任期を終える時期であった2002年度に、全国で良いことを一番長く、一番多くした人が選定された。保健福祉部と青瓦台、行政安全部など合計9人が全国16の市を暗行訪問して調査し、審議を行った。

現金で寄付した場合、年末調整の恵沢があるため、現金寄付者は除外するという方針だった。暗行調査により学歴、地縁、さらには本人にも知らされない中、厳格な手続きにより160人を選定し、青瓦台に招待した。そして、その中で最も長く、最も多くのボランティアをした人をボランティア王に選定したのである。幸いにも私は韓国ボランティア王に選ばれた。

「一生良いことを続けられれば、韓国一、世界一のお金持ちになるでしょう。どんなに困難なことがあってもボランティアを中断しないで続けなさい」という、1984年に河正雄先生がくださったお言葉を実践したおかげだと思ふ。途中で困難なこともあったが、河正雄先生のお言葉が誓いとなって生涯ボランティア活動を続けるようになった、と金大中大統領にもお伝えした。

そう申し上げると、金大中大統領とイ・ヒホ夫人、また一緒に同席された大臣、以下選定委員9名全員が「河正雄先生、おめでとございます。パク・ヨング会長、おめでとございます」と言われ、祝福の拍手を送ってくださいました。私は河正雄先生を思いながら涙を流し、「先生、ありがとうございます」

ありがとうございます。これからも変わらない気持ちで先生の珠玉のようなお言葉を心に刻みます。一生疎外され困難な隣人と障害者の目や足となり、永遠に障害者のお使い係となっていきます」と大統領夫妻の前で誓い、再び大きな拍手を受けた。

その後、2018年「光古都光州愛障害者とボランティア一心大祝祭」行事に河正雄先生が出席してくださった。当時、大きな手術の後で出席が難しかったにもかかわらず、応援のために駆けつけていただき、本当に申し訳なく、感謝している。

私と妻はマラソンのような長い人生の路程で河正雄先生に出会い、韓国で最高のボランティア王になることができた。万歳を唄った。恩師は、祝辞で「朴容九会長とムン・ヤンレ女史は韓国で徳を一番多く積んだ人であり、韓国と、さらには世界で一番のお金持ちになった」と言われ、「世界に一人しかいない弟子がこのようにお金持ちになったのだから、ご飯を食べなくてもお腹がいっぱいになる」とおっしゃった。

私と妻がボランティア活動を始めて40周年になる年に、恩師をご招待して功労牌をお渡しし、今後も共に活発にボランティア

活動をしていこうと話した。

――40年以上にわたる美しい同行――

2018年10月20日、私は忠路にある松下日本食店で、久しぶりに河正雄先生と尹昌子夫人、そして体調があまり優れない英雄光州市視覚障害者協会初代会長に会うことができた。

その場合は、皆がとても明るい姿で本当に笑顔が咲き乱れていた。河正雄先生は、「40年の時を経て私たちが結実を結ぶ場であり、朴容九会長が雨が降ろうと雪が降ろうとボランティア活動を続けて、韓国で一番良いことを一番多く、一番長い間した人としてボランティア王に選ばれるまでの過程は、私がひとこと言ったことを朴容九会長が実践してくれたので、今日の朴容九が誕生し、大金持ちになった」と話してくれた。

その瞬間、私は言葉にならないほど嬉しく幸せであった。私は河正雄先生と尹昌子夫人に「ありがとうございます、ありがとうございます」とお礼を言った。また、「先生、これからも残りの人生、良いこと、ボランティア活動をもっと頑張つて、世界で一番のお金持ちになるような弟子になります」と

誓いながら、「今日の喜びと栄光を恩師にお返しします」と申し上げた。

黄英雄会長は「河正雄先生がそのような珠玉のようなお言葉をくださったなら、生涯変わらない心を持つことができなかつただろうし、今日の朴容九会長はいなかつただろう」と言いながら、とても幸せそうに話された。その後、昼食を共にしながら、多くの激励とこれからの発展の方向性、そして今後の健康と幸せについて話した。

食事を終えた後、私は黄英雄会長を背負って車にお連れした。車に向かう間、黄英雄会長は恩師に「河正雄先生、これまでいただいたたくさんのご恩に感謝申し上げます。私、黄英雄に多くの力と勇気を与えてくださり、発展と幸せを与えてくださいました。あの世に行っても河正雄先生を忘れないでしようし、河正雄先生と尹昌子夫人をお守りします。いつもご健康で幸せでありますように」と言われた。黄英雄会長は、亡くなる前に最後の挨拶をされたようだった。

私も河正雄先生ご夫妻と別れながら、「先生、これからお元気で万事順調であることを祈ります。奥様もお元気で、残りの人生、恩師と一緒に快適で幸せな日々をお過ごし

ください。これまで、弟子の朴容九に地球よりも大きなプレゼントをくださり、そのプレゼントのおかげで韓国一の大金持ちになりました。これからももっと良いボランティア活動を活発にできるよう努力します」とご挨拶した。

恩師ご夫妻のご健康とご幸福を祈りながら、世界に一人だけの弟子朴容九がお捧げします。

### 河正雄先生との出会いを思いながら

月 佑

道岬寺・大興寺住職歴任。中央僧伽大学校総長。ソウル特別市。

20年ほど前、道岬寺の住職を務めていたころ、在日コリアン2世の河正雄先生に初めてお会いしました。河先生は既に1970年代後半、道岬寺の前庭の石灯籠仏寺をきつかけに、霊岩とそのほかの多くの場所

に仏寺と文化財を寄付していらつしやいました。

河先生は郷土愛もこの上なかつたですが、若い青年たちの歴史認識の鼓吹と文化芸術に対する愛情で、韓国の多くの美術館に作品の寄贈とコレクションの展示を活発に行っているそうです。

日本の先生の御自宅に招かれて訪問した際、奥様と共に文章と絵に卓越した腕前で、直接作品活動をするお姿を拝見し、改めて驚かざるを得ませんでした。お二人の作品から無邪気で澄んだ純粹さが感じられたのは、おそらくお二人に共通の芸術家の魂がそのまま染み込んでいるからではと思いい、とても素晴らしかったです。

これまでコツコツと集めてこられた李垠（イ・ウン）殿下の妻である李方子（り・まさこ）皇后の遺品を、ソウル古宮国立博物館に展示と共に寄贈されるお姿を拝見しました。国への愛情を超え、歴史認識について、まさにこの時代の先駆者らしい人格者の一面が見られ、深く印象に残りました。

今年4月、御高齢のお体で霊巖王仁祭りに家族全員で参加されるお姿を拝見し、これからもますます韓国の文化芸術の拡大す

るために、御健康で末長く見守っていただければ幸いです。

祖国の文化を愛するメセナ精神が長く  
記憶されることを願う

キム・オクジョ

KB S 光州放送先任記者。前光南日報編集局長。前光州ビエンナーレ事務処長

— 新人美術記者にスクープを与えたニュースメーカー —

河正雄光州市立美術館名誉館長との出会いは、今からちょうど30年前のことだ。まず、河館長は当時、新人記者の私に次々とスクープを握らせてくれたニュースの人物である。まだ記者になってわずか2年ほどの、世間知らずに走り回っていた時代に、彼の縁が始まった。

1993年7月の初めだった。故林炳星画伯を訪ねたところ、驚くべき話を聞いた。

イム画伯は光州芸術総会長の任期を終え、「呉之湖美術文化協議会」を結成して活動中だった。この団体には林炳星画伯をはじめ、キム・フンナム、曹奎逸、黄栄性、呉承潤、キム・ジュソン氏など、その当時、地域の美術界を牛耳った有名画家たちが参加し、東区錦洞に拠点を置いていた。

当時林炳星画伯は、光州市立美術館の開館にも地域のアーティストを代表して重要な役割を果たしていたようだ。1992年8月、光州市立美術館が開館した後、光州市立美術館運営委員長という非常勤職員を務めていたことを覚えている。

初代美術館長は、光州市から出向を受けた行政職公務員（5級事務官）の車鍾甲館長だった。車鍾甲館長は美術に詳しい専門家ではなかったが、非常に誠実な公務員で、地域の美術家をよくサポートし、業務にも忠実であった。

私は林炳星画伯に会うと、いつも記事のネタが次々と出てくることに惹かれていた。その日も林画伯に会い、「呉之湖美術文化会」の活動など、美術界の話聞いてみると、「車館長が日本に出張に行った」という話を聞いた。そしてある学芸員から、開館1周

年記念企画展を準備中だという話を聞いていたので、何か大きな規模の国際展を推進しているのではないかと耳を傾けていた。

その時から私の頭の中には（光州市立美術館開館1周年記念特別展）の記事を、他の記者よりも先に取材して書きたいという思いがわいてきた。

実は私は美術記者を初めて担当し、これといって目を引くトップニュースを書けずにいた。後にわかったことだが、文化部記者は様々な分野の多くの画家や作家、芸術家との人脈の中でニュースが作られ、企画されることを知らず、ただひたすら一生懸命回っていかれば良いと思っていたようだ。

そういう面では、林炳星画伯や呉承潤画伯、車鍾甲館長、さらに河正雄名誉館長は、私が（美術記者キム・オクジョ）として成長する大きな助けになった方々だと思う。

とにかく、林炳星画伯など呉之湖美術文化協議会の参加者を中心に、光州市立美術館の開館1周年関連事業が水面下で推進中であるのを直感した。それに関する話をする中で、車鍾甲館長が日本出張から戻ったら、重要な話をするだろうという話を聞いた。

その足で私は美術館に寄った。現在の雲岩洞文化芸術会館の左側に、駐車場を拡張して増築した建物にあった光州市立美術館を訪れ、徐係長から明日車鍾甲館長が戻って来るという話を聞いた。そうして始まった取材は3〜4日間続き、「日本からただ作品を持ち込んで展示するレベルではなく、世界的に有名な作家の作品を大量に寄贈する」という事実まで近づけた。

車鍾甲館長など美術館側は「市長の決断が出るまで記事を書いてはいけない」とあくまでも取材に消極的であった。それでも教えてくれたのは、「在日コリアン事業家河正雄氏の所蔵品の寄贈」ということで、その内容や規模、日程などを口止めするのに精一杯であった。

私は一度把握した内容を、師であったナム・ソンスク次長(元光州毎日新聞社社長)に報告し、記事の一報を書いた。その間に聞いた話をまとめ、さらにフアクトチェックを行い、1993年7月10日土曜日付けの光州毎日8面(文化面)のトップ記事として、「世界有名美術品の寄贈に大きな関心」という題目のもとで最初の記事を報道した。ここに「来月開館1周年の光州市立美術館、

全羅南道出身在日コリアン、河正雄氏が所蔵する、李禹煥氏の100号作品など百点余りを12日現地船積み、23日頃光州到着・公開」という副題を付け、「特ダネ記事」として世間に知られた。河正雄館長の所蔵美術作品の1次寄贈の始まりを告げることとなった。

世界的な美術作品を相次いで光州に寄贈

美術作品の寄贈は今も大きな話題であり、世間の関心事であるよりほかない。当然、ソウル地方新聞や放送、中央のメディアまで私の記事を受け、続けて報道したのはもちろんである。こうして最初の記事が出た後、7月21日、光州市庁に当時姜英奇光州市長と河正雄館長などが出席した中で、〈河正雄美術作品寄贈証書伝達式〉が開催された。これらの内容は7月22日付けの光州毎日新聞に、やはりトップ記事として報道された。

この記事によると、「河正雄氏は世界有数の美術作品212点を光州市に寄贈し、光州市は光州市立美術館2階に常設展示館〈河正雄コレクション〉を設けて展示し、文化芸術に対する〈メセナ精神〉を伝える方針」

とあった。

特にこの記事を通して、「在日コリアン2、3世が生きてきた痕跡とイデオロギーの陰に隠された作品の再照明、国内ではまだ馴染みない文化芸術支援運動である〈メセナ精神〉の波及に口火を切るきっかけとして評価される」という意味付けにもなった。

こうして河正雄名誉館長が寄贈した作品は、その年8月6日に光州市立美術館に到着し、取材陣に公開され、いわゆる〈河正雄スクープ〉が続くことになった。その時入ってきた作品は、郭徳俊、文承根、全和鳳、李禹煥、宋英玉、郭仁植など、日本の現代美術はもちろん、20世紀世界現代美術の一線を画す日コリアン作家が網羅され、世間を驚かせた。その当時の記事の中で、公開作品の価格が100億ウォン程と推定されたので、30年経った今は数千億ウォン相当に価値が上がっていることだろう。

その年の10月8日に、河正雄名誉館長は光州市から〈名誉市民証〉を受けた。この時私は河正雄名誉館長に、祖国である光州に20年以上収集した美術品を寄贈した理由と意味について、特別寄稿を依頼した。

〈名作は、個人が所有せず、楽しみを共有

すべき」というタイトルの寄稿文を掲載し、河正雄名誉館長が直接、所蔵美術品の寄贈の意図と意味などを世間に伝えた。

10月10日付けの新聞に掲載された寄稿文で、河正雄名誉館長は次のように述べた。

「両親が故郷を懐かしむ言葉を聞かされた時に、祖国のため貢献するメセナ活動を誓うようになった。それで全羅南道盲人福祉会館建設基金募金チャリティー展を開くことになった。画家としての夢よりもコレクターになろうと決めた私は、20年以上に渡って買い集めた美術品を日本の秋田県「田沢湖祈りの美術館」の建設計画に合わせて所蔵しようと思っていた。

この時、ちょうど祖国の光州市立美術館が開館したというニュースを知った。しかし、所蔵品が数十点しかないだけでなく、学芸員なども足りないことに衝撃を受けた。仏を作って魂を入れていなかったのだ。これほどの規模なら数千点は所蔵するべきだ。両親の故郷へ恩返しをし、コレクターとしての夢を実現した光州市立美術館の美術品寄贈をきっかけとして、私は祖国と光州市民に感謝する。絵には社会的な役割がある。名作は公開し、多くの人に教訓と楽しみを

与えなければという美術文化の原則が、メセナ活動をする私の考えである。」再度読み返しても、河正雄名誉館長の美術品コレクターとしての偉大な哲学と精神に感心するばかりである。

その後、1999年4月14日、日本の河正雄名誉館長の居住地で第2次贈与契約書を締結し、5月に460点の作品が光州市立美術館に第2次として寄贈された。ベンシヤンやマリローランサン、ホアン・ミロ、ブルース・ステイルマン、アンディ・ウォーホル、ピカン、シャガール、ジェスパー・ジョーンズ、ヘンリー・ムーア、ピュッフェなど世界的な作家の作品が網羅され、大きな反響を呼んだ。

続いて2003年7月21日、第3次として1182点を光州市に寄贈し、当初の目標であった1000点をはるかに上回る作品を寄贈した。このような功績により、河正雄名誉館長は朝鮮大学デザイン大学院から名誉美術学博士学位を授与された。このようないずれの過程を、私は記者として間近で目撃し、取材・報道する幸運に恵まれた。

その「寄贈作品」の記事を導火線として、河正雄名誉館長に関連する記事を先取りす

るよう、連続的に記事を書けた。美術記者として河正雄の取材はなんと20年以上続いた。――〈湖南初の西洋画家〉キム・ホンシク画伯の発掘支援――

それだけでなく河正雄館長は、私が美術専門記者になる勉強と研究にも手助けしてくれた。後に大学院で美術史と美術理論を専攻し、論文を書く際にも、河正雄名誉館長は決定的な道標となってくれた。今でもありがたい限りである。

1998年と1999年に横浜トリエンナーレと日韓美術交流展の取材の際に日本を訪れた。ちょうど展示会場にいた河正雄名誉館長は私を見るなり、イベントが終わった後、「自宅に案内してくれた。東京近郊の小さな都市の河正雄名誉館長の家で一泊することになった。私はそこで河正雄名誉館長の〈偉大で聖なる芸術を愛する精神〉を確認した。

彼の家は2階建ての家で、1階のリビングには様々な美術品が飾られていた。朝リビングに出ると、河正雄名誉館長は大きな絵の前で両手を合わせて祈るように頭を下げて制作をしていた。後で「何の絵なのか？」

と尋ねると、自分が育った（故郷の森を描いた絵）と答えた。毎朝その絵に向かって、先祖と故郷の幸運と福を祈りながら一日を始めるとも言っていた。

彼は「この故郷の絵を一番よく見えるところに（祀っておいて）祈る気持ちで眺めている」と言った。彼は絵を十字架や仏像レベルの崇拜の対象として捉え、（絵を祀っておく）と表現していた。ここで河正雄名誉館長のメセナ精神と芸術観、哲学が垣間見ることができた。

それだけでなかった。玄関の扉の上には、中川伊作の木版画（盲目の群）がかけられていた。この作品は、目の見えない人らが提灯を持ち、とだえた橋の上を前の人にそって歩く危うい姿を描いた絵である。

前の人、つまり先輩や指導者、リーダーの役割がいかに重要であるかを思い知らされる内容だ。同時に、俗に一寸先は闇の世だという人生の道を生きる現代人に、たしなめる教訓的な絵としてよく通用する。

つまり、河正雄名誉館長は毎日出勤する際、この絵を見て自分自身を整え、決意を固め、家長として、会社の社長として、団体の代表として、自分の役割と責任の重要性を

誓いながら出発するのである。これも大きな感動を与えるきっかけとなった。

そして1998年、私が全南大学大学院修士課程に入学し、卒業論文を準備する過程でも、河正雄名誉館長の大きな助けを得た。当時、指導教授のイ・テホ教授から「麗水出身のキム・ホンシク画家」を発掘して論文に書いてみるという「いだらう」と言われ、資料収集と研究を始めた時だった。すでに亡くなった作家である上に、国内で活動した記録が見つからなかった。

私は日本訪問の機会を利用して、東京美術学校（現東京芸術大学）を訪ねることにした。その時、河正雄館長はすべてのスケジュールを延期して私と同行してくれた。東京芸術大学に面識のある教授に連絡し、担当職員を紹介してくれた。この職員は私が帰国した後、東京郊外にある東大美術館の資料室をくまなく調べ、キム・ホンシク画伯の東京芸術大学在学時の学籍簿と指導教授の藤島武二の作品集、卒業前の画集、美術大学同窓会名簿、朝鮮人留学生資料などを国際郵便で3回にわたって送ってくれた。

そうして（全南地域初の西洋画家キム・ホンシク）を発掘し、修士論文を無事に書き上

げた。河正雄名誉館長は私が美術記者として、学ぶ大学院生として、故郷の霊岩の後輩として、本当に多くの励ましと指導をしてくださった方である。

光州を訪れる時はいつも雲岩岩洞のシテイヒルホテルに泊まり、夜遅くまで話に花を咲かせた記憶がはつきりしている。自身の美術品の寄贈と光州市立美術館の運営方法、名誉館長の役割、長崎柿の木プロジェクト、河正雄青年作家招待展、光州ビエンナー、広報大使の役割、朝鮮大学校大学院の名誉博士号授与、霊岩郡立河正雄美術館の開館、韓国作家の作品収集過程にまつわる隠された話など、他の人が知らない多くの事情と真実を共有した。

改めて、人間河正雄を考えると、光州だけでなく韓国現代美術運動の隠れた功労者である。河正雄名誉館長が注ぎ込んだ物心両面の真心と情熱があったからこそ可能な多くのことが世の中に十分に知られるようになった。もちろん、河正雄名誉館長は誰かによく見せようとしなかった。自身のメセナ精神を実践するのに最善を尽くしていたと理解したい。

河正雄館長の祖国の文化を愛するメセナ

精神が長く記憶されることを願う。

## 私のメンター、河正雄

安敏錫

第5選国會議員

私は10年前に略奪文化財の返還という貴重な仕事で河正雄先生にお会いした。筆笥の奥深くに隠しておいた宝石を取り出すような気持ちで、私のメンターである河正雄先生とのご縁についてお話ししようと思う。

—2013年 巨人との出会い—

私は略奪文化財の返還に関心が高い。文化庁によると、全世界の略奪文化財15万点余りのうち半分が日本にある。ほとんどが日本統治時代に略奪された文化財である。10年前、日本の略奪文化財の返還を手伝ってもらったために在日同胞の方に会うことになり、それが河正雄先生であった。そして河

正雄先生をお迎えして文化財を探す韓民族ネットワークを作った。略奪文化財返運動は後世に伝えるべき民族運動なので、私たちは石橋を架ける気持ちで団体を一緒に発足させた。先生とのご縁はこうして始まった。

先生の第一印象は外柔内剛タイプのご年配で、奥様を尊重する愛妻家のように見えた。初めて会った日、当時、野党3選議員として朴槿恵政権と激しく戦っていた私に、先生は三つのお願いをされた。

第一に、怒らないこと。怒っても解決にはならないばかりか、怒ると自分の人格に傷がつくので、絶対に怒らないようにとのことだった。実際、河正雄先生は奥様にも一度も怒らず、誰に対しても怒らなかった。怒りを我慢するのは難しいことである。特に私は不義を見ると我慢できない気質で、怒りっぽい性格であるため、既得権益の横暴、裕福な有力者たちが傲慢に振る舞うと、本能的に怒りが込み上げて声を上げることがよくあった。しかし、河正雄先生と出会って以来、ほとんど怒ることはなくなった。怒りが湧く時は先生のことを思い出し、先生との約束を守ろうと努力した。これからもそう

するつもりである。私の怒りを鎮め、落ち着いた冷徹な政治家に生まれ変わるように導いてくださった河正雄先生は、私にとって巨人である。

第二に、人の悪口を言わないこと。人の悪口を言うことと必ずその人の耳に入り、怒りを言うことになるものであるし、人の悪口を言うのは愚かなことなので、絶対に悪口を言わないようにと諭された。人は2人以上集まると悪口を言う習性があるので、悪口を言わずに生きるのはなかなか難しいことである。

私も同じである。政治をしていると裏切られることがよくあるが、つい罵声が出る。昨年私の補佐官出身の1人が裏切った時は罵声を上げた。また、私に自ら覚書まで書いて忠誠を誓った者が、ナイフを突きつけて裏切った時も罵声を上げた。

そんな時は、先生との約束を思い出しながら我慢して耐えながら自分自身をコントロールした。先生がいなかったら、他人を罵りながら自分自身の人生を無謀に過ごしたであろう。簡単ではないが、これからも他人を罵らずに生きていこうと思う。巨人との約束を守ろうと思う。

第三に、訴えないこと。他人を訴えることは根柢を買うことになるので、腹いせに訴えたりしないようにと言われた。政治家として生きていると、先生の言葉に従うのは簡単なことではない。

政治は言葉による戦争だが、悔しいことが多く、相手を排除したい欲求を感じることもある。特に、虚の事実で私と家族が苦痛を受けると、訴えたい衝動と誘惑を感じるようになる。チェ・スンシル氏が私を何度も名誉棄損で訴え、チョン・ユラ氏にまで訴えられたが、私が訴えなかった理由は、先生との約束を守るためであった。

罪は憎むが人は憎まないという先生の忠告を胸に刻んでいた。また、「国民の力（政党名）」が、私の息子が高校時代に校内暴力の加害者だったと虚の事実を主張したが、訴えなかった。政治家は裏切りと恨みを食べて育つと言うが、それでも訴えなければならぬ時がある。

やられっぱなしでは、臆病で滑稽に見えるだけでなく、事実を認める形になるかもしれないのである。それでも先生との約束通り、告訴を控えて政治をしている。真実が勝つという信念を先生が与えてくれたので、

いつも感謝している。人生は試練の連続だから、あまり傷つかないようにという言葉も心に留めている。

河正雄先生に出会ってから10年間、私は先生との約束を守ろうと努力したおかげで、嵐のような50代を無事に過ごした。私が河正雄先生に出会えたのは人生の幸運であった。まめにお会いすることはできないが、私の心の中の巨人として位置づけられている。政治は盧武鉉のように、人生は河正雄のように生きようと努力している。

—2023年 巨人の再発見—

今年、思いがけず河正雄先生のお宅を訪問する機会があった。

私が日本の佐渡鋦山のユネスコ世界遺産登録推進を阻止するために議員たちと東京を訪問した今年の3・1節の夜、河正雄先生は私たち一行をご自宅に招待してくださいました。東京都心から1時間ほどかかる川口市だったが、私たちからするとソウルから水原市くらいの距離だったと思う。質素に暮らしているとは聞いていたが、河正雄先生が40数年間住んでいる家は普通の日本人の平凡な一軒家で驚いた。他人と共同体のた

めに惜しみなくすべてを施しながら、先生は平凡そのものの生活をして来られたのである。

その日、先生は私たち一行を歓待して下さり、先生の行きつけのレストランで豪華な夕食を御馳走してくださいました。その時新たに知った事実は、先生が昔、朝鮮人強制動員犠牲者の追悼事業を行っていたことだった。

日本各地を回り、犠牲者の記録と遺骨を探し、墓石を建てる事をすでに数十年前から行っていた先駆者であった。河正雄先生は40歳になった1979年、朴正熙政権末期から強制動員犠牲者追悼事業を行い、日韓当局から監視の対象になった。全斗煥政権は彼をブラックリストに載せるほどの監視対象者として、彼の一手一投足は情報当局に報告されていた。

彼はおそらく日本の強制動員の真実を知らせる運動の第1世代だったようである。当局の監視を受けながらも孤独に強制動員犠牲者を探し、追悼した彼の不屈の意志に改めて敬意を表す。いつも誰もやらなかったが、誰かがすべきことを自身の信念と意志でやり遂げた不屈の義人である。

—視覚障害者学校を設立する—

私は今年新しい目標を決めた。京畿道に視覚障害児のための学校を設立することだ。私が尊敬する水原市の牧師が、京畿道にだけ視覚障害者学校がないので、教育委員会に所属する私に推進を勧めたことから始まった。正祖大王が障害者と老人、子供たちを愛し、彼らのために選政を施したように、政治家が障害者のために特別な使命を担うことはありがたいことである。

視覚障害者特殊学校の設立を推進し、河正雄先生の視覚障害者愛の精神を胸に刻んだ。私が視覚障害者のための学校設立のために努力しているのも、光州の視覚障害者のゴッドファーザーと呼ばれるほど、目の見えない人たちへの愛情を実践した先生の善い影響力のおかげである。先生の弱者を愛する高貴な心を受け止め、京畿道視覚障害者学校の設立を必ず実現する。

—私が出会った聖人 (Saint) —

河正雄先生は聖人 (Saint) と呼ぶに値する方である。彼は平和主義者であり、民族主義者である。昨春、光州市立美術館の第23回河正雄青年作家招待“光”展の開会式で

私は彼をこう評価した。日本で生まれ、日本で暮らしながら朝鮮人として受けた差別と迫害は想像を超えるものだった。

しかし、彼は一度も日本に対する憎しみや怒りを抱くことなく、両国の平和を願い、文化交流を通じて架け橋の役割を果たそうと献身した。

また、彼は民族主義者である。自分の全財産を祖国に寄付し、生涯集めた作品を喜んで祖国に寄付した彼の民族愛と実践は、いくら称賛しても過言ではない。

このようなことをしておきながら、恥ずかしがらない謙虚さがさらに感動的である。煉瓦1枚寄付しても名を誇ろうとする大部分の人に比べ、すべてを祖国に捧げても表に出さない謙虚さは聖人の境地でなければ不可能である。彼は聖人と呼ばれても遜色ない方だ。

特に河正雄先生の傍らで支持し、応援し、励ましを惜しまない奥様は生きた仏様のようである。

お二人が長くお元気で私たちの時代の師匠として残ってくださいることを祈願する。敬愛し、尊敬する、私のメンター、河正雄先生！

# おわりに

## 叙勲・紺綬褒章を賜る

— 埼玉県立近代美術館へ美術作品寄贈  
に至った経緯と期待 —

河正雄

私は1939年に東大阪で生まれ、生後間もなく秋田に居住し19歳まで暮らした。秋田工業高校卒業後、1959年より埼玉県川口市に住むようになり、2023年で64年になる。

1960年代から美術作品や資料などをコレクションしたものを、1980年代から韓国の美術館等や日本の美術館等に1万2千余点を以下の通り寄贈して来た。

《美術作品及び関連資料等の寄贈目録 1983年10月15日〜2023年6月1日》

### 【日本】

京都市美術館 油絵 1点  
秋田仙北市立生保内小学校 彫刻 1点  
秋田仙北市立生保内中学校 彫刻 1点  
秋田県立秋田工業高等学校 彫刻 1点  
仙北市立角館町平福記念美術館 作品116点  
仙北市立田沢湖図書館 作品67点  
埼玉県立近代美術館 作品178点 資料1点  
計179点  
国立歴史民俗博物館 資料4冊(547点)  
山梨県北杜市立浅川兄弟資料館 作品72点  
駐日韓国大使館 作品4点

### 【韓国】

光州市立美術館 作品2603点  
朝鮮大学校美術大学 作品350点  
釜山市立美術館 作品441点  
浦項市立美術館 作品2196点  
大邱美術館 作品58点  
済州道立美術館 作品56点  
大田市立美術館 作品239点  
全北道立美術館 作品255点  
国立古宮博物館 作品・資料 691点  
淑明女子大学校博物館 作品・資料 971点  
対談(テダム)美術館 作品 117点

霊岩郡立河正雄美術館 作品3801点 作品  
771点 計4572点  
大韓民国歴史博物館 資料4冊(547点) 複  
写資料

コレクションの中でも在日作家孫雅由の作品数は一番多く、上記各美術館等へ分けて寄贈してきた。孫雅由の小作品版画、ドローイングなどは特に愛着があったので長年所蔵していたものである。

在日の人生を振り返ると最も長く暮らした埼玉県への寄贈が抜けていた。私の人生に於ける終活の想いから、報恩の想いを込め2021年11月11日に孫雅由版画57点、ドローイング119点、資料1点、郭徳俊版画1点、文承根版画1点、計179点を埼玉県立近代美術館へ寄贈するに至った。

2022年3月10日、埼玉県立近代美術館平野到学芸主幹より「御寄贈いただいた作品(孫雅由、郭徳俊、文承根 計179点)の評価額が500万円を超えると試算しており、国の紺綬褒章の候補者として申請させていただきます」というメールが届いた。

2023年5月30日、「3月25日付で叙勲の紺綬褒章が国から届きました。普通は1年以内に叙勲が決まる訳だが、河さんの場合は韓国への照会などもあったようでした。」との連絡をいただいた。

私は「貴美術館に寄贈していただいた叙勲ですので、美術館長室で建島哲館長よりお受け出来れば光栄です。在日や韓国・朝鮮人や外国籍の方が日本で活躍し、日本を第二の故郷、祖国と思つてグローバル社会の構築に寄与貢献することを認められたのは光栄であり、励みになる。個人の事柄でもあるが、これは公的な事柄でもあると思うのです。」と返答した。

追つて6月9日午後3時に館長室での授与式が執り行われるとの通知があつた。授章の際に頂いた建島館長のコメントである。

孫雅由の177点の作品に加え、文承根、郭徳俊の作品をご寄贈いただいたことは、1970年代以降の現代美術の収集に力を入れてきた当館にとつて、たいへんありがたい限りです。

特にまとめてご寄贈をいただいた孫雅由の版画、素描は小品とはいえ、どれも魅力的な作品です。ご寄贈いただいた翌年度には、早速、常設展の小コーナーで特集展示を行いました。おかげ様で素晴らしい展示になりました。今後、様々な方たちで展示活用していきたいと考えています。

河さんは、長年にわたり在日韓国人アーティストを支援し、情熱を持つ膨大な作品をコレクションされてきました。李禹煥をはじめ多くの在日韓国人アーティストが、河さんによつて支えられ、勇気づけられてきたはずですが、また、それまでは全貌が把握されていなかった在日韓国人アーティストの活動の幅の広さと重要性を、多く人たちが改めて認識することになりました。今回の紺綬褒章受賞は当館への作品の寄贈が対象になってはいますが、河さんのこれまでの業績やたゆまぬ熱意と決して無関係ではないと思います。河さんは川口市にお住まいなので、埼玉県在住の美術コレクターとして、これからも引き続き当館をご支援いた

できれば幸いです。

韓日の公立美術館等に、在日作家らの作品コレクションを寄贈出来る事は慶事である。特に在日作家の存在と、在日の文化から生まれた美術作品が記録、記憶される。美術遺産となり守られることになったのは大きな喜びである。

しかし川口市にはいまだに美術館がない。初めて川口市美術展が開催されたのは1973年で、その時に出品した油絵が奨励賞を受けた。それ以来、美術家協会会員として席を温め文化芸術都市としての発展を期待して来た。

長い間抱いて来た川口市に美術館があればという祈念が、いよいよ実現する。お世話になった川口市にも美術作品の寄贈を夢見た、その日が来るのを私は待ち焦がれている。

## 浅川伯教・巧兄弟記念公園竣工を祝う

河正雄

2021年6月、上村英司山梨県北杜（ほくと）市長と偶然に二人だけで会話を交わす機会があった。

その時上村市長は、「2023年は韓国抱川市との姉妹都市交流20周年になる。市長就任後、初めての抱川市を表敬訪問する予定である。」と語った。

私は「八ヶ岳やまびこホールと浅川兄弟資料館前の敷地を整備して浅川兄弟を顕彰する記念公園が出来れば聖地と成り得る。きっと抱川市との良き記念行事となるでしょう。計画されるならば庭石と石像を寄贈しましょう。」と絵を描いて提言した。

富士山が正面、西側には南アルプスの山並、東側には秩父の山並、三つの国立公園が一望に展望されるパノラマの景勝地で、得も言われぬ適地であったからだ。

間もなく北杜市教育委員会と偲ぶ会から図面が提示され、具体化、実現の運びとなったのは必然性と時期が熟したからだと思う。

こうして浅川伯教・巧兄弟の生誕地に北杜市が浅川兄弟の功績を讃える浅川兄弟記念公園が竣工した。

2021年に私が建立寄贈した兄弟の顕彰碑周辺を芝に張り替え、忘憂里の巧の墓にある碑のレプリカを設置、整備したものだ。

2023年8月6日には白永鉉抱川市長等の訪問団14名、金玉彩駐横浜韓国総領事等多くの来賓を迎え八ヶ岳やまびこホールで竣工式が挙行された。加藤寿北杜市教育部長が経過報告された。

本年が北杜市と抱川市との姉妹都市結縁の締結から20年の節目であることから、記念事業を検討する中、両市の交流のきっかけとなった浅川兄弟の精神を顕彰し、両市の末永い友好の象徴となる記念公園を整備することといたしました。

折しも、河正雄様から、記念公園の整備に活用してほしいと、庭石や石造物を寄贈したい旨のお話がありました。また、庭石の一つについては、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会が公園の銘を刻印

したうえで寄贈いただけることとなり、4月正式に寄贈の申し出をいただきました。

本市としましては、河様、偲ぶ会の皆さまからのお申し出を有難くお受けし、寄贈いただいた石等を活用しながら5月より公園の整備工事を行ってまいりました。7月末に無事完成をし、本日竣工式を開催する運びとなったところでございます。

感無量の私は、慶祝と感謝の言葉を述べて喜びを共有した。

本日は北杜市と韓国抱川市との姉妹都市交流20周年記念事業としての、浅川伯教・巧兄弟記念公園の設立竣工、誠におめでとございます。祖国・韓国抱川市の皆様の北杜市訪問を心より歓迎申し上げます。

このような席に招待され、ご挨拶出来すことを光栄に思います。今から65年前、私が秋田工業高校3年の時、安倍能成著『青丘雜記』の一文で浅川巧の追悼文を読み、心に刻みました。それ

は「露堂堂」という霊言(ことだま)でした。それから10年たち、「露堂堂」と生きる深い意味を知りました。

以来、浅川兄弟への敬愛と感謝、あこがれを抱いて在日を生きて来ました。日韓で初めて1995年、浅川巧没後64年祭を忘憂里墓地で執り行い、ソウルのロッテホテルでの追悼式で追悼致しました。

その時発足した偲ぶ会に参加し、資料館の設立、私塾清里銀河塾開校、映画『白磁の人』制作等に関与。2021年には浅川巧生誕130年没後90年を記念して「敬愛と感謝を込めて」「露堂堂」の碑文を刻み、浅川兄弟の生誕地に顕彰碑を建立出来ましたことは、私の大きな喜びでありました。

この度の抱川市との20周年記念行事の話を上村英司市長様から聞いたのは、その顕彰碑建立の時であります。その後、記念公園計画を市と偲ぶ会から図面を示され、その計画が具現されますよう、私は別荘にある庭石12個と石造物(濟州道産)の寄贈を致しました。

市と偲ぶ会は寄贈庭石の一つを活用、

碑文とし、「浅川伯教・巧兄弟記念公園」と刻み建立されました。その先見性と創造性、意欲と実行力に感嘆、感激致しました。

また、本日記念公園竣工を記念して、浅川巧先生が養苗開発しました、ゆかりの朝鮮五葉松の苗木を植樹致します。

実は十数年前、山びこホール玄関先に日韓友好親善を祈念し、植樹を致しましたが枯れてしまいました。木が枯れることを想定していた、清里銀河塾で学んだ在日の辛昌錫氏が実生(みしよ)の種を届けて下さり、別荘の庭に蒔き2、3年経って芽が出た時には万歳致しました。その苗を比奈田善彦資料館館長に委ね、その後10年近い歲月をかけ育てあげた苗木です。

大きく育って、末は名木大木となつて日韓の友好親善を見守り、我々に幸を、エールを贈って下さるものと頼もしく思う次第です。

これまでの多くの行程、営みこそが浅川兄弟の遺徳、恩徳であり、今を生きる我々への教えであり、「露堂堂」と生きる証であると思います。感謝に耐え

ません。

これを機に、日韓の友好と親善、国際交流が一層推進されて、この公園が日韓のゆるぎない絆となりますよう、そして北杜市と抱川市の発展を幸多かれと祈念します。

## 感謝の言葉

河正雄

秋晴れの10月13日、坂東33ヶ所観音霊場第18番札所日光中禅寺湖畔の中禅寺立木観音を参拝し、灯明を上げ回向供養をした。一刀彫の千手観音像にはパワーと靈力を感じ心が揺り動かされた。

何げなく寺の貼り紙を見ると、運勢厄年の知らせであった。昭和14（1939）年の記述があり、今年が私の厄年であることを初めて知った。意図もせず厄払いの参拝になったことは幸いである。

今年2月、韓国文化院にて河正雄コレクション「江上越・河明求」展開催、3月に霊岩郡立河正雄美術館に美術品771点を第3次寄贈、第23回2023河正雄青年作家招待“光”展開催、6月には故郷秋田の方々が紺綬褒章受章祝いをして下さった。

そして8月、北杜市の浅川伯教・巧兄弟記念公園に公園碑寄贈、10月には子や孫らが妻尹昌子との結婚60周年（ダイヤモンド婚）の祝いを受け、そして11月3日には国立光

州教育大学校にて韓国の方々、私の7回目となる卯年年男の祝いとして交友録出版記念会を開き贈呈して下さるといふ具合に、今年を無事恙無く過ごして来たことを喜びます。

そしてこの度、「善盡美盡」の出版となり、今年の厄を祓って下さった執筆者及び、御厚情頂いた皆様のお祈りのおかげと感謝を込め、本書をお贈りします。御縁を共感共有して頂ければ幸いです。

画家孫雅由（1949年—2002年）の奥様桜井和子さんが「善盡美盡」の書を読んで「団子食えば 串刺さる 鯛食えば 骨刺さる」との読後感が届いた。辛酸を知る人の言葉である。

2023年11月3日、国立光州教育大学校で私の7回目の卯年年男の祝いを兼ねた河正雄主義「因縁遺産」の出版記念会に招待され訪韓した。

その記念会で述べた挨拶を紹介する。

感無量という言葉をこれまで2、3回述べて来ました。今日ほど熱く感無量であるのは一重に皆様のおかげであります。感謝の言葉の原稿を書いて準

備して来ました。この席におられる朴容九氏の御姿を拝見し、その感慨を先に述べます。

80年代、タクシー運転手をしていた朴氏は、私が光州視覚障害者を支援していた姿を見て「私みたいな者でも奉仕活動が出来るのでしょうか？」と語りかけて来たのが出会いである。

知恵と、特に心があれば出来ること。奉仕することは誰でもしてよい。奉仕は楽しいし幸せを呼ぶ。地域の人々が支え合い助け合うのが奉仕の基本である、と励ました。

彼は光州市の障害者を助ける事業に取りかかり、今や韓国の奉仕王になった方です。朴氏は私の激励を恩師の教えと讃えてくれるが、私は彼に激励以外、何一つ支援をしたこともなく、彼も何一つ私に求めたものはありません。彼の奉仕は、彼の献身と真心で磨かれ、実を結んだことを私は喜んでおります。皆様と共に喜びたく、僭越ではありませんが御紹介致しました。

本日は「善盡美盡」メセナの実践―河正雄の人生と哲学の縁を綴った「因縁

資本」の出版記念会を開き本を贈呈して下さったこと、私との縁の絆を執筆者を始めとする諸先生方が御出席、御祝い下さったことに深甚なる感謝を申し上げます。

今年3月27日、光州市立美術館分館河正雄美術館での第23回河正雄青年作家招待「光」展開催のため光州を訪問し、姜琪正市長を表敬訪問し午餐を共に致しました。

その席に同席された安敏錫第5選国会議員様が、「河正雄氏が今年はめでたい7回目の卯年の年男であること、今年11月3日の誕生日には『因縁資本』の交友録を出版贈呈し祝いたい」と提言されました。

私は1974年、46年ぶりに帰郷する父母と共に訪韓しました。父母の故郷が祖国との縁を繋いでくれました。父は生涯一度きりの帰郷となり、1975年に亡くなり、来年では50回忌の歳月が流れました。

その時、韓国のGDPは世界最低ランクの貧困国でした。そのような状況と現実から自分の出来る事を国のため

に尽したいと決心し歩んで参りました。中学3年生の時、担任の松本正典先生が「世のため人のために働きなさい」と通信簿に書いて励ましてくれていたからです。

今や韓国は世界上位に入る国となり、経済的にも文化的にも世界の奇跡を作る先進国となりました。私が決意した原点が実り誇りに思います。

国がなく故郷のない日本で生まれ、この世の地獄を沢山見て来ました。幸せは天国があると教わり生きて来ました。我々の叡智と献身と努力が実り、天国がこの地上にあることを実感出来たことは幸せです。

そして許乘準総長より3月31日の国立光州教育大学校開校100周年の記念式典に招待され、許乘準総長との出会いとなり、本日の慶事に至りました。

この度の出版、そして本会開催にあたり執筆者を始めとする関係者の皆様には物心両面の支援と協力があつたこと、その労苦に対して慰労と感謝申し上げます。私と縁を結んだ諸先生方の執筆により、各々の人生の営みが露

堂堂と表されました。読者は時代を共に労苦を超えた人生の冥利に尽きる喜びを共感共有されるでしょう。

文は人なりと申します。知性豊かに真実が著されております。情の表現が豊かであり、美しい心が花のようです。その善の意志には理想の善があり、靈魂が清まり鎮まります。

私の墓標は「善盡美盡」です。鶴亭李敦興（1947年—2020年）先生が私の生き様を評し、この言葉を遺してくれました。

許乘準総長は「河正雄が因縁を通じ悟りを得て、仏の生を生きただけに私達も河正雄を通じ悟りを得て、その道を歩いて行かねばならない。」と祝辞され著されました。

私は生身の人間であつて仏ではありません。悟りや解脱などすることなく未熟で必死に今を生きて来ただけです。特別な学問を受けたこともないので、世界が社会が私の学ぶ大学だと「一日一歩一善」を心に刻んで、学び歩んで来たに過ぎません。

10月1日には子と孫たちが妻尹昌子

女史との結婚60周年となるダイヤモンド婚の祝いを催してくれました。セレモニーで牧師様が「病める時も、健やかなる時も妻を愛することを誓いますか」と問われ「誓います」と答えました。それは「夫婦共々これからも忍耐します」という新たな宣誓でありました。忍耐こそ幸せの秘薬であったからです。

忍耐を重ねた一日一歩一善の営みが河正雄であり、我が祖国の姿であると思います。この世に、地上の天国を見た、創ったという喜びは人生の冥利です。

忍耐の知恵、日々の研鑽を務め国際人として祖国を誇り、光り輝かしているようではありませんか。玉は磨いてこそ輝きます。光を当てればダイヤモンドとなって増幅し反射して自分に帰るのです。故郷に祖国に光を当て、輝かせましょう。

皆々様の益々の輝きと幸せを祈念し、私の感謝の言葉と致します。ありがとうございました。

## あとがき

河正雄

2013年3月27日、光州市立美術館分館河正雄美術館での第23回河正雄青年作家招待“光”展開催テーブルカッタのため訪韓し、姜琪正光州広域市長を表敬訪問し午餐を共にした。

その席に同席された安敏錫5選国会議員が、「今年は卯年。河正雄名誉館長7回目めでたい年男なので、誕生日の11月3日には祝いたい。韓国側は光州広域市長と許乘準国立光州教育大学校総長と私が発起人となって原稿を依頼するので、日本側の交友人達のエッセイは河名誉館長が集めて許総長宛に送って欲しい。」と発声された。戸惑いもあったが、その想いに感謝した。

日本に帰宅して5月25日原稿締め切りで友人、知人に原稿依頼したところ、23名から玉稿を頂いた。恩師の鈴木重憲先生からも届き、感ひとしおであった。

そして以前から私の手元に保管されていた韓国側人士の原稿14人分があったので、

それらもまとめて送ることとした。思いがけぬ進展となったが、韓国側の配慮や恩情に甘え許総長宛に送り届けることが出来て安堵した。

まとめて、それらの原稿を読むと目が潤み、自然と涙が流れた。各界各層に跨る方々の友情、長い歳月の交友録である。人生を共にした共感と感動が著され鮮明に過去を回顧することが出来る。我が身を振り返ることで鮮明な記憶が甦り、感謝と敬愛の心が満ちて来た。

これらは韓国側からのオーダーであったので、交遊録の編集に携わることが出来ず、進展を見守る立場であった。

私の依頼で原稿を届けて下さった人士には、日本語版の記録を記念として、それらの原稿を残すべきと思いついて本書「善盡美盡」の発刊に至った。

表題の書は2015年、鶴亭・李敦興（1947―2020年）先生が私の人生哲学を込めて書いて下さったものである。

編集にあたっては猛暑の中、意を汲んで下さった埼玉新聞社の菊地正志氏が汗を流して取り組んで下さった。その誠意と援助に心から御礼申し上げたい。

こうして私は実りある晩節を迎えることとなった。全て皆々様のおかげである。皆々様それぞれの人生と共に回顧出来ることは幸せの極みである。しみじみと澄んだ心境で人生の妙味を味わっている。

2023年初秋

―再版にあたり―

2023年11月3日、「善盡美盡」の発刊と同日に韓国では「因縁資本」が出版された。この度「善盡美盡」の校正を行い、「因縁資本」に著述された玉稿を「IV 冬柏花」に、新規で加えた玉稿を「II 野菊」の項に纏め再版に至った。

当初、「善盡美盡」は20編による企画から始まったが、再版にあたり55名58編を収めることとなった。交友録を超える哲学的、宗教的、教育的な内容となり道理道義の書となった。各界各位の皆々様の執筆は時代を証言し共に生きた記憶の集約となった。

知性豊かに真実が語られ、善の情の実録が花園となり、天国となった。靈魂の交流史、日韓の交流史、交遊録となったことを共感共有し慶びたい。

2023年晩秋

私塾清里銀河塾

## 善盡美盡 一河正雄との交友録一

2023年11月 3日第1版

2023年12月 10日第2版（増補版）

編著・発行 河 正雄

〒333-0815 川口市北原台 1-24-31

Tel 048-295-5267 Fax 048-297-3201

E-mail:j.ha.inori@key.ocn.ne.jp

<https://www.ha-jw.com/>

制 作 菊地 正志

印刷製本 株式会社 双信舎印刷

非売品



河正雄の LINE

【表紙】 揮毫：鶴亭 李敦興(1947-2020) / 写真：壺岩・王仁公園の角館枝垂桜（撮影：朴哲 2022）

【裏表紙】河正雄作「五元」（油絵 2010）



— 河正雄との交友録 —  
善 盡 美 盡  
私塾 清里 銀河塾